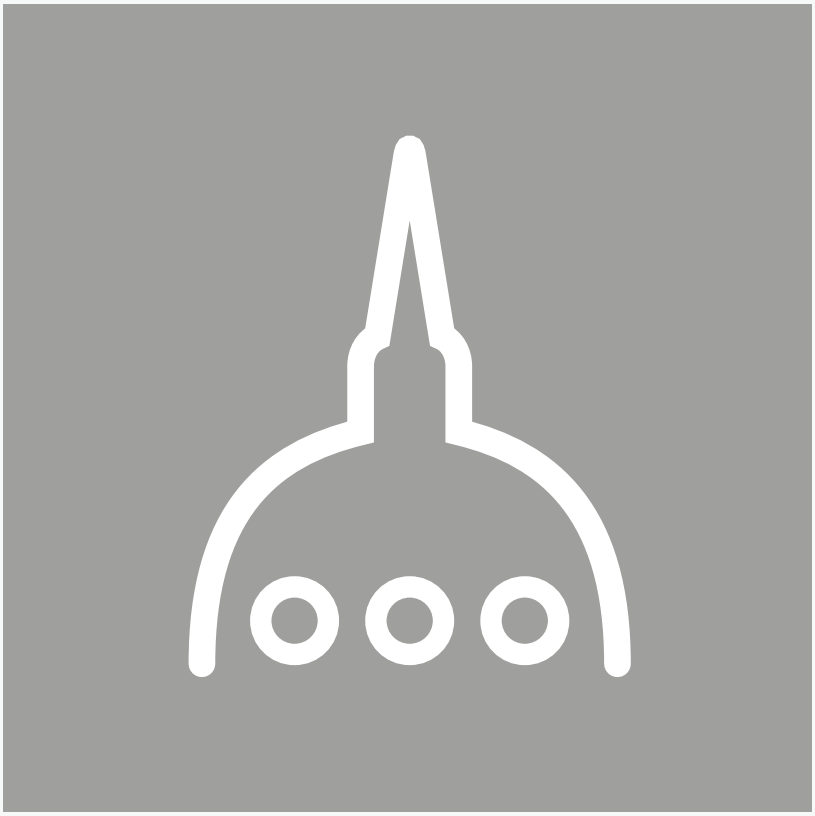


神奈川県立博物館・神奈川県立歴史博物館

50年のあゆみ

神奈川県立歴史博物館　馬車道玄関側［2015年］

創建当初の横浜正金銀行本店［1904年頃］

関東大震災復旧後の横浜正金銀行本店［昭和戦前期］

開館まもない頃の神奈川県立博物館［馬車道側・1969年頃］

開館まもない頃の神奈川県立博物館［正面玄関・1967年10月］

神奈川県立博物館　考古展示室

神奈川県立博物館　特別展示室

神奈川県立博物館　民俗展示室

神奈川県立博物館　分類展示室（動物）

神奈川県立歴史博物館　総合テーマ展示室［テーマ１］

神奈川県立歴史博物館　総合テーマ展示室［テーマ２］

神奈川県立歴史博物館　総合テーマ展示室［テーマ３］

神奈川県立歴史博物館　総合テーマ展示室［テーマ４］

神奈川県立歴史博物館　総合テーマ展示室［テーマ５］

神奈川県立歴史博物館　総合テーマ展示室［テーマ５］

神奈川県立博物館　標本鑑定会［1970年］

神奈川県立歴史博物館　子ども博物館教室［2013年］

神奈川県立歴史博物館　無料観覧日のドーム公開［2015年］

神奈川県立博物館・神奈川県立歴史博物館

50年のあゆみ

開館 50 周年によせて

港町横浜の馬車道に、神奈川県立博物館が 1967 年 3 月に開館してから 50 年、実に半世紀というときが流れました。開館以来、500 万人を超える方々にご来館いただきました。博物館を愛し、その活動にご支援をいただきました、すべての皆様に心から感謝申し上げます。

県立博物館は、開館当時、都道府県立の総合博物館の先駆的な存在で、その後、全国各地で開館した博物館の手本とされました。博物館の建物は、国指定重要文化財であり、世界三大為替銀行としてその名を馳せた旧横浜正金銀行本店本館を活用しており、いまでは「エースのドーム」の愛称で、神奈川県庁本庁舎（「キングの塔」）とともに、訪れる多くの方々を魅了しています。

1995 年には、自然史部門が小田原市入生田に新しく誕生した生命の星・地球博物館に移され、「エースのドーム」は、人文部門に特化した歴史博物館として再出発しました。以後、他館にはない独創的な展覧会を開催し今日に至っています。また、県内の博物館等が加盟する「神奈川県博物館協会」の中核的な存在として、地域における博物館活動の振興や学術文化の進展にあたってきました。

2016 年 5 月から約 2 年間休館し、空調設備等の改修工事を行っていますが、本年 4 月にはリニューアルオープンし、新たな一歩を踏み出す予定です。

また、歴史博物館は、50 年の節目をきっかけに、基本テーマ「かながわの文化と歴史」を改めて振り返り、今後はこれを基軸としながらも神奈川の枠に捉われない広い視野を持った活動を、より一層精力的に展開し、人々をひきつけるマグネット力のある博物館となるよう、尽力してまいります。

さらに、人生 100 歳時代における生涯学習を支える社会教育施設として、横浜の馬車道から世界へ、神奈川県の魅力の発信に取り組んでまいりますので、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2018 年 3 月

神奈川県知事　黒岩祐治

ごあいさつ

神奈川県教育委員会では、歴史博物館をはじめ、生命の星・地球博物館、近代美術館及び金沢文庫など、先駆的で特色のある社会教育施設を運営しており、展覧会や講座の開催などを通じて、「人生 100 歳時代」に向け、県民の皆様の学びの機会の充実に資する様々な活動を展開しております。

これらの社会教育施設の中にあって、歴史博物館は、県立博物館として開館以来、半世紀に亘り、「かながわの文化と歴史」を総合的に扱う唯一の博物館として、古代から現代まで、人々の生活や信仰、政治経済の変化、外来文化の影響などの様々な歴史的視点で常設展示等を行うとともに、学芸員の研究成果などをもとに特別展なども開催してきました。

一方で、歴史博物館をはじめ県立の社会教育施設には、文化財や美術・工芸品など、先人が遺してくれた貴重な文化的資産を適正に保存・管理し、県民共有の資産として、次世代へ引き継ぐといった重大な責務があります。

こうした責務を引き続き果たしていくため、2016 年 5 月から約 2 年間の休館期間を設け、老朽化に対応した空調設備等改修工事を実施しました。

休館により利用者の皆様に大変ご不便をおかけしたところですが、この間、歴史博物館の学芸員が県内の学校を訪問し、自らの研究分野の専門知識をわかりやすく講義する「出張講座」や、県民の方を対象とした「県博講座」を実施いたしました。このように学芸員が県民の皆様と直接お話しする機会を増すことで、学芸員の活動を御理解いただくとともに、より多くの方が郷土の歴史や文化に関心を持ち、再開館後の歴史博物館を訪れるきっかけになればと願っています。

今後は、こうした取組に加え、これまで収集してきた貴重な文化的資産を活用し、子どもから高齢者まで、幅広い年齢層の県民をはじめ、県外からの観光客や本県を訪れる外国の方々にも、神奈川県の歴史や文化への理解をより一層深めていただけるよう、さらに積極的に展示等を行ってまいります。

この冊子により、神奈川県博 50 年の活動を振り返るとともに、次の 50 年に向けて、県民のみならず国内外からの来館者にとって、「親しみやすく、再び訪れたくなるような博物館」を目指してまいりますので、今後の歴史博物館にどうぞ御期待ください。

2018 年 3 月

神奈川県教育委員会教育長　桐谷次郎

ごあいさつ

神奈川県立歴史博物館は、1967年3月に開館した総合博物館であった神奈川県立博物館を前身とし、1995年3月に開館いたしました。自然史部門は、小田原市入生田に移転し神奈川県立生命の星・地球博物館として同じく1995年3月に新規開館しております。2017年3月には両館の前身である県立博物館開館から50周年という節目を迎えました。これまで博物館の活動にご支援、ご尽力を賜りました皆様に、心から感謝申し上げます。

歴史博物館では、「かながわの文化と歴史」を総合的に扱う博物館として、県内市町村の社寺、個人宅等に調査に出向き、現地で遭遇した資料の研究を行い、そして展覧会というかたちで成果を公表してまいりました。展覧会事業と並行して、関連する講座やイベントも開講しておりますが、これらの事業の計画･準備･実施には、学芸部門のみならず管理部門、教育普及部門の職員の尽力があることはいうまでもございません。

こういった博物館活動の足跡を記録するべく、この度『神奈川県立博物館 神奈川県立歴史博物館 50年のあゆみ』をまとめました。この記念誌が、60年、70年、そして100周年の節目には先ず参照される書物となれば幸甚に存じます。

わたしが県立博物館に着任した当時はチラシやポスターなどすべて手作業で作成しておりましたが、現在ではパソコンでのデータ作成、入稿へと移り変わっております。展示面でもコンピュータの技術を効果的に活用した展示が行われつつありますが、やはり実物資料の持つ力は何物にも代えがたいと感じております。ぜひ博物館に足をお運びいただき、悠久の歴史を物語る資料たちに出逢っていただきたく存じます。今後とも、皆様の変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申しあげます。

2018年3月

神奈川県立歴史博物館館長　薄井和男

目次

開館 50 周年によせて　神奈川県知事　黒岩祐治
ごあいさつ　神奈川県教育委員会教育長　桐谷次郎
ごあいさつ　神奈川県立歴史博物館館長　薄井和男

建物を引き継ぐ ―銀行から博物館へ ―― 017
銀行時代 ―横浜正金銀行と東京銀行
銀行から博物館へ ―神奈川県立博物館
人文系博物館として ―神奈川県立歴史博物館

それぞれの 50 年 ―― 029
学芸部
企画情報部企画普及課
企画情報部情報資料課
管理課
神奈川県博物館協会
神奈川県文化財協会

［コラム］神奈川県博開館 50 周年記念プロジェクト ―― 056

県博回想録 ―― 057
神奈川県立博物館が文部省指定の科学研究費指定機関に認定されるまで　松島義章
広い視野の博物館を目指して　清水眞澄
「職人の道具」の思い出　長田 平
博物館の写真　井上久美子
学芸員の思い出　鈴木通大
すぎこしかた　岩壁義光
寄託資料の平本家文書　鈴木良明
県立博物館から、生命の星・地球博物館と歴史博物館へ　平田大二
県博の二十一年　相澤正彦
夢に出てくる部屋　塩澤寛樹
神奈川県立博物館から神奈川県立歴史博物館へ　山地 純
机のなかった新採用時代　新井田秀一
立体資料収集の苦労話　國 雄行
博物館再編整備事業とその思い出　福田美子
奇跡の博物館　佐藤登美子
私の 9 年間　西川杏太郎
館長がやってきた　鈴木尚遠

［特別企画］歴代学芸部長座談会 ―― 070
八幡義信・川口徳治朗・薄井和男・寺嵜弘康・天野 勇

展覧会全記録 1967-2016 ―――― 081

［コラム］2016 年～ 2017 年に実施した空調設備改修工事について ―――― 118

資料 ―――― 119

沿革
全国の都道府県立博物館等 設立年
年間観覧者数の推移
組織の変遷
歴代職員一覧
『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』目録
資料目録・調査報告・資料集成・総合研究報告等 目録
科学研究費による調査研究事業一覧
建物利用の変遷

凡例

○ 本書は、神奈川県立博物館の開館から 50 周年を迎えたのを記念し、その人文部門の後身館である神奈川県立歴史博物館が刊行するものである。

○ 本書の刊行を含む神奈川県博開館 50 周年記念プロジェクトは千葉毅、神野祐太、新井裕美、橋本遼太、武田周一郎が担当した。

○ 本書の編集は神野、千葉が行った。

○ 本書のブックデザイン・DTP 編集は千葉が行った。

○ 本書の掲載写真は当館の写真技師（中野萬年、井上久美子、岸山浩之）および職員の撮影による。

○ 文体や年代表記等については編集で統一したが、「それぞれの 50 年」「県博回想録」においては、執筆者の意向を優先し統一していない箇所もある。

○「県博回想録」掲載順は、当館への着任順とした。

○「沿革」は、「博物館のあゆみ」（『神奈川県立博物館 20 年のあゆみ』所収）、「30 年のあゆみ」（『神奈川県立（歴史）博物館 30 年のあゆみ』所収）および当館年報等を主に参照し、事項を年代順に並べ、追加・訂正した。

○「全国の都道府県立博物館等設立年」は、全国の都道府県立博物館に加え、国立博物館、都道府県立の博物館が設立されていない自治体については主要な市立等の博物館を記載した。なお、人文系、自然系およびその総合博物館を対象とし、美術館や動物園、植物園等は除外した。

○「歴代職員一覧」は、『神奈川県庁職員録』、「職員年度別在籍一覧表」（『20 年のあゆみ』所収）および当館年報を参照し作成した。なお、関係者への聴取調査結果を反映した部分もある。

○「『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』目録」は、2018 年 3 月までに発行された 1 号から 44 号を対象とし、掲載された論考の執筆者、タイトルを掲げた。タイトルについて、表紙記載と各記事ページの筆頭記載とで異なるものは、後者を記した。

○「資料目録・調査報告・資料集成・総合研究報告等目録」は、特別展等の展覧会図録および『神奈川県立歴史博物館だより』、年報を除いた神奈川県立博物館および神奈川県立歴史博物館が発行した刊行物を掲げたものである。同一シリーズであるものは、先頭にシリーズ名を掲げ、各号ごとにタイトルと発行年月を記した。

○「建物利用の変遷」の掲載図は、以下の文献より作成した。

横浜正金銀行竣工時：「横浜正金銀行建築要覧」『建築雑誌』第 221 号、1905 年

東京銀行・博物館準備事務室時：「東京銀行平面図（1964 年製図）」へ博物館準備事務室の使用箇所が手書き追記された青焼き図面

県立博物館開館時・県立歴史博物館開館時：『20 年のあゆみ』、『30 年のあゆみ』、当館年報等

県立博物館

絵葉書　横浜馬車道通（明治時代末期ごろ）

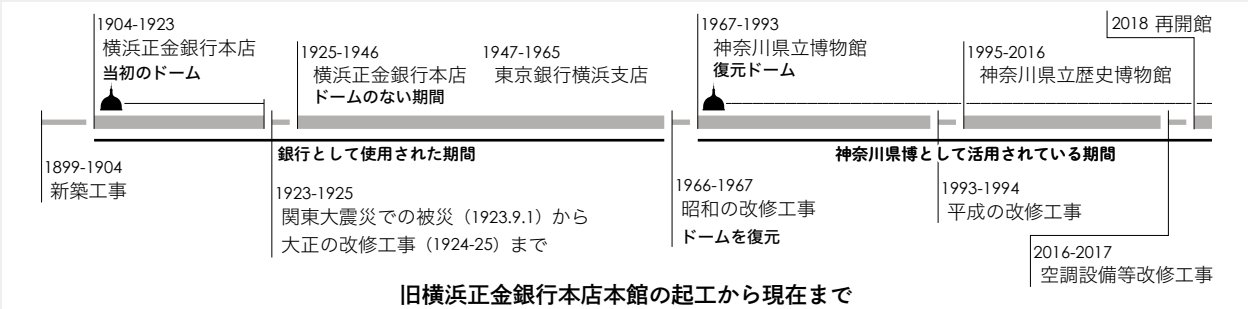
銀行時代——横浜正金銀行と東京銀行

神奈川県博の建物

現在、当館の建物（旧館）として保存活用されている重要文化財「旧横浜正金銀行本店本館」。神奈川県博が所蔵する最も大きな資料と見なすこともできるこの建物は、1904年に竣工した国際貿易港横浜の発展と密接な関係を有する歴史的建造物で、関東大震災や横浜大空襲をくぐり抜けた横浜の近現代史の生き証人とも言える存在である。

その当館旧館建物の建設着工から現在までの約120年におよぶ歴史を示した次ページのグラフを見ると、この建物の歩んできた歴史は、大きくは本来の用途である銀行として使用された時期と、転用され神奈川県博として活用されている時期に分けることができる。博物館として活用されてきた年月は、銀行だった年月に徐々に近づきつつあり、すでに「横浜正金銀行本店」だった年月を上回る歴史を積み重ねている。また、建物の外観も、神奈川県立博物館への改修工事で復元されたドームが据えられている時期が最も長期におよんでいるのである。この建物の重要文化財としての指定名称「旧横浜正金銀行本店本館」が変わることはないが、今後はこの建物を見た時に真っ先に神奈川県博の建物だと認識する人がどんどん増えていくであろう。この建物の現在の「住人」としては、そのような認識が広がるよう活動していきたいと考えているところである。さらにグラフからは、新築工事と関東大震災からの復旧工事（大正の改修工事）、神奈川県立博物館への改修工事（昭和の改修工事）、県立博物館から県立歴史博物館への改修工事（平成の改修工事）、そして2016年から2017年に実施した空調設備の改修工事の各期間が、建物の歴史の中で一定の比重を占めていることなど

左・正面玄関の現況　アーチ上部のメダリオン飾りの中心部に横浜正金銀行の行章が刻まれており、この建物がかつて正金銀行であったことを現在でも示している（2017 年撮影）　**右**・絵葉書　大正 12.9.1　横浜大震災実況　横浜正金銀行惨状



旧横浜正金銀行本店本館の起工から現在まで

も確認することができる。建物の用途を変え、必要な改修を加えつつ使い続けられてきたこの建物を、神奈川県博はこれからも大切にしていきたいと考えている。

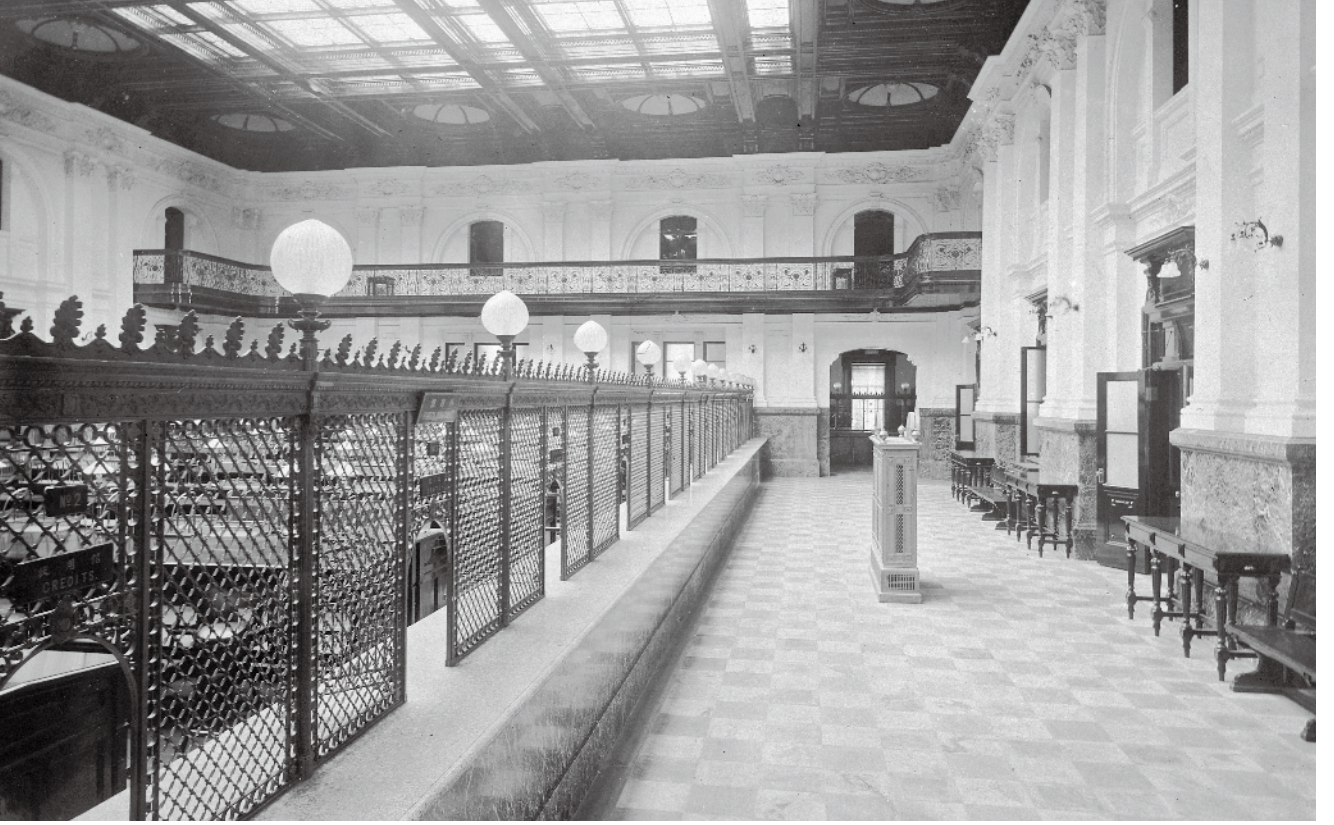
竣工当時の建物と関東大震災

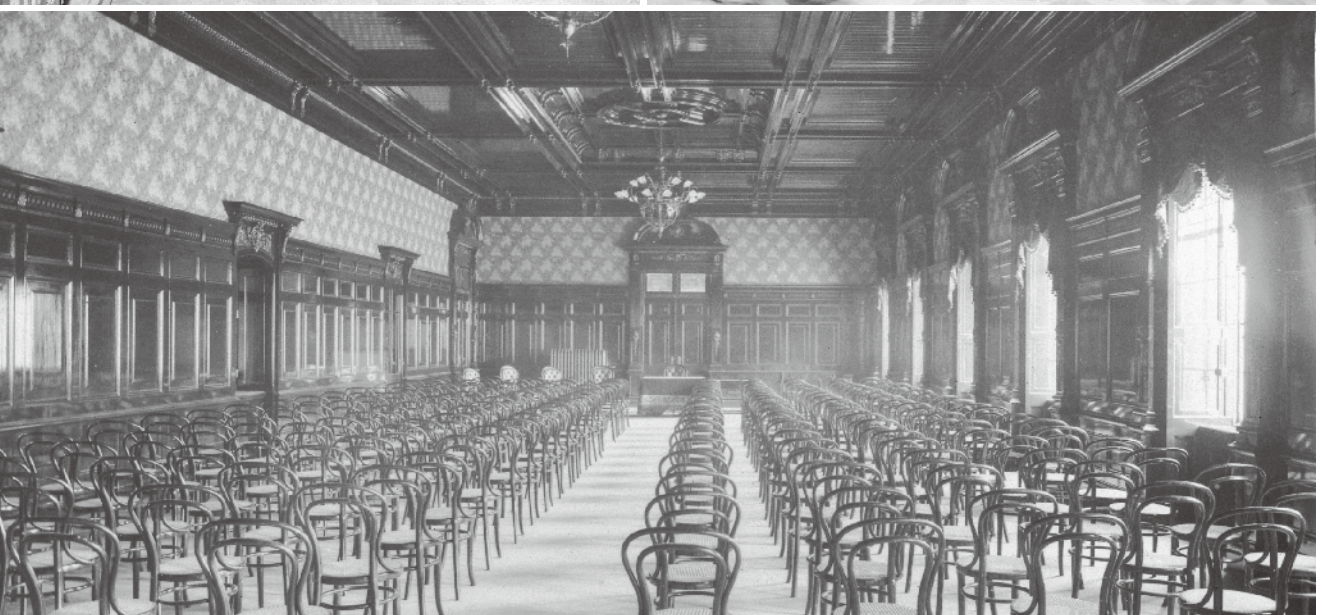
横浜正金銀行本店本館は、1904 年 7 月に竣工した（8 月 8 日新築落成式）。設計者は、明治建築界を代表する日本人建築家のひとりであった妻木頼黄（つまきよりなか）（1859 ～ 1916）で、その代表作に位置づけられる。地上 3 階地下 1 階建ての建物の外壁には茨城県産花崗岩と岡山県産花崗岩「北木石」、および神奈川県産のデイサイトである「白丁場石」が使用され、一見すると石造建築に見えるが、躯体の主要な部分は煉瓦造で、その煉瓦壁中には妻木が自身設計の建築で多用した鉄筋煉瓦構法（てっきんれんがこうほう）による補強用鉄材が使用されているため、その構造を正確に表現すると「補強煉瓦造・石造」となる。馬車道・南仲通・弁天通に面した建物の三面に密に配されたコリント式の大オーダーと、正面に据えられた巨大なドームで、ネオ・バロック様式とされる威厳ある外観を構成している。その軒高は約 16.5 メートル、尖塔部分を含むドームまでの高さは約 35.7 メートルに達する。

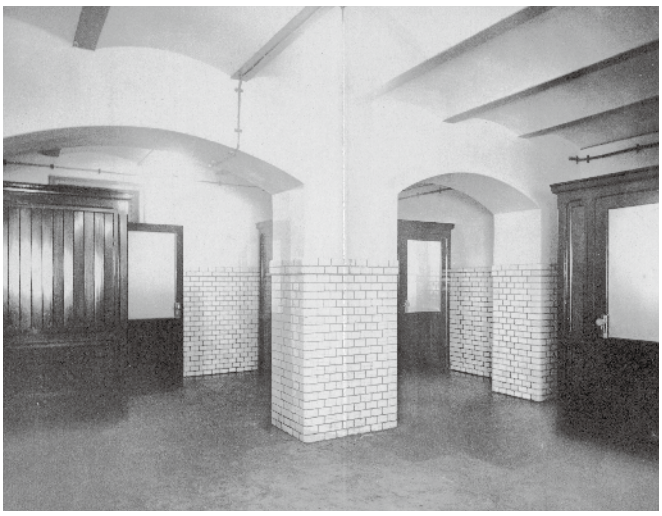
また、現在は神奈川県博が所蔵している建物の竣工写真を見てみると、主要室のうち 1 階の第一営業室はコリント式の列柱に囲まれた吹き抜けの構造で、天井に明かり採りの天窓が設けられ、2 階の一部に廻廊を持つ典型的な銀行営業室として造られていた。一方で、2 階の中央客室には和風意匠が用いられるなど、最新の設備を導入しつつそれぞれに特徴的な構成となっていた。

しかしながら、上に示したグラフにもあるように、この建物が創建時の姿をとどめていたのは 1923 年 9 月 1 日までの非常に短い期間であった。同日に発災した関東大震災により、建物は地階を除く 1 階から 3 階までのほぼすべての内装と屋上のドームを焼失する。大正の改修工事が実施され、以後も戦前は横浜正金銀行本店、戦後は東京銀行横浜支店として使用されるが、外観のシンボルであるドームが復元されることはなかったのである。

（丹治雄一・主任学芸員）


GREDITS





1		5	
2	3	6	7
4			

1 横浜正金銀行本店本館竣工写真　第一営業室
室内に柱がない開放的な吹き抜け空間で、壁面にはコリント式の列柱が配される。現在の屋根はこの写真より高い位置にあり、1階は特別展示室、2階と3階は床を増設して常設展示室として使用されている。

2 同上　中央客室（貴賓室）　3 同上　頭取室

4 同上　会議室（総会室）
主要室のうち中央客室では、照明や天井まわりに組物をイメージさせる和風意匠が見られるなど、各室とも魅力的な構成であったことがわかる。1〜4の内装はすべて関東大震災で焼失しており、2と3は現在は博物館の執務室となっている。4は常設展示室横浜正金銀行コーナーなどにあたる。なお、4に見られる内装は博物館地下講堂の現在の内装にそのイメージが継承されている。

5 旧改銀場（金庫室）現況（2017年撮影）

6 横浜正金銀行本店本館竣工写真　預ヶ品出納取扱室

7 旧預ヶ品出納取扱室現況（2017年撮影）
関東大震災で焼失を免れた地階は、創建当時の内装と建具が残存する建物内部で最も建築史的価値が高い空間である。銀行時代にはおもに金庫室として使用されており、竣工写真6とほぼ同じアングルで撮影された写真7を比較すると、創建当時のよく保存されていることがわかる。

※ 平面図は147〜150頁を参照。

開館時の県立博物館と馬車道に掲げられた横断幕（1967）

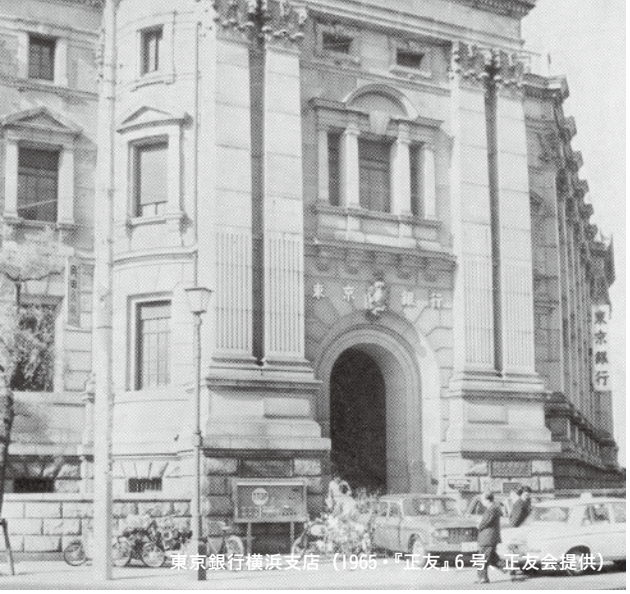
銀行から博物館へ——神奈川県立博物館

危機と期待

銀行として使われていたこの建物が博物館となったのは 1967 年 3 月のことで、そのきっかけは危機感にあった。開館に先立つ 1960 年 11 月に横浜で開催された第 8 回全国博物館大会を契機として、文化財の散逸に対する危惧から県立博物館設立の要望が高まったのである。時は正に高度経済成長期の只中にあり、大規模な開発や生活様式の変化による文化財の危機が顕在化していた。すると翌年 6 月、神奈川県文化財協会や神奈川県博物館協会といった県内の団体から県立博物館の設立についての請願が提出された。県議会での請願の採択を受けて神奈川県は博物館研究調査委員会を設け、1963 年 6 月には博物館準備事務室が設置された。

戦後、神奈川県では内山岩太郎知事のもとで、県立近代美術館（1951 年）、県立図書館・県立音楽堂（1954 年）、県立青少年センター（1962 年）といった文化施設が設置されていた。新しい博物館にも大きな期待が寄せられ、その場所として候補になったのが馬車道の東京銀行横浜支店であった。旧横浜正金銀行本店本館として竣工したこの建物こそが、神奈川の文化を発信する拠点に好適と目されたのである。そして 1964 年 8 月には、県と東京銀行の間で土地と建物の売買契約が締結された。

1966 年 3 月から始まった工事では新館の増築等といった大規模な改修が施されるとともに、関東大震災によって失われた屋上ドームが復元された。建物が博物館として新たなスタートを切るにあたって、再びシンボルが必要とされたのである。改修工事は 1967 年 2 月に竣工し、県立博物館は 3 月 20 日に開館を迎えた。この建物は横浜正金銀行本店、東京銀行横浜支店、神奈川県立博物館、そして神奈川県立歴史博物館と、看板を架け替えながら馬車道で歴史を重ねて今に至っているのである。



東京銀行横浜支店（1965・『正友』6号、正友会提供）

開館時の内覧会でジオラマをみる内山岩太郎知事（1967）

開館当時の丹波コレクション浮世絵陳列場（1967）

特別展「日本のカニ・世界のカニ」の開会式（1969）

先駆的な活動

開館した県立博物館は都道府県立の総合博物館として先駆的な存在であった。人文系部門は歴史・美術・考古・民俗、自然系部門は動物・植物・地学・古生物の各分野から構成され、それぞれで積極的な活動が展開された。博物館活動の根幹を支えるのが収蔵資料である。多くのご協力を得て浮世絵の丹波コレクション（約 6,400 点）や、カニ類標本の酒井コレクション（約 9,000 点）、植物標本の大場コレクション（約 6,000 点）などの特色ある資料群が収集された。

各分野の学芸員は豊富な資料をもとに調査研究活動を行うとともに、考古分野の発掘調査や民俗分野の調査、美術（彫刻）分野の自治体史調査等のように館外での活動も継続的に実施された。また 1979 年に当館学芸員の呼び掛けによって発足した神奈川県植物誌調査会が『神奈川県植物誌』（1988 年）を刊行するなど、神奈川県の学術研究における中心的機能を担った。

常設展示では国内で初めて本格的にジオラマやレプリカを活用し、室内に復元民家を配置するなど、その先駆的な試みは後に各地の博物館でも採用されるようになった。また東京銀行や正友会のご協力によって設置された正金銀行展示資料室も、他に類を見ない特色の一つであった。

このように先駆的な活動を展開する一方で、施設の老朽化と収蔵スペースの狭隘化に直面し、かつ社会の変化に伴い多様なニーズが高まるなど、21 世紀に向かって新しい博物館像が求められるようになっていった。そこで、自然系部門を分離独立させて県立博物館を人文系博物館として再編整備する計画が取りまとめられたのである。

（武田周一郎・学芸員）

294

採択 36.6.26

県立博物館建設とその準備のための調査機関緊急設置について陳情

博物館はその国、その地方文化を象徴する代表的施設であるばかりでなく、人文、自然の諸科学の体系的知識の源泉であり、国民高度の教養はこの施設を通じて培われることはいうまでもありません。而して、文化、学術、教育等に関係している人々の間には夙に県立総合博物館（General Museum）の建設を要望し、別項に示す如き、その必要性を切実に訴えております。既に欧、米等の近代国家にあつては、中央都市、地方都市を問わず、多くの貴重な資料を保有し、研究、教育普及活動の設備機能を備えた壮麗な博物館を設けて、大学に比肩する研究上の権威を保持し、国民文化の拠点となり、国民的誇りとしていることは周知の通りであります。

顧みますに、わが神奈川県は、都臨の絶好な位置を占め、産業、貿易、観光、内外交通の要衝をなし、海外よりの学術、調査、親光等の旅行者は年を逐つて多く、文化的接触、交歓は益々広く且つ深きを加えております。一面県内事情を見るに、道路や鉄道の発展と共に、大規模な団地住宅の地方発展及び人口の急増、大工場の地方誘致、海岸線の埋立等により、郷土神奈川の様相は急激に変貌しつゝあります。この過程にあつて、古きもの、新しきものに拘らず、埋蔵文化財は散佚し、自然保護の対象となる生物の滅失するもの多く、加うるに生活形式の急激な変遷によつて地方民俗資料の流亡散佚するもの日々おびたゞしきものがあります。是等の収集保存の問題は焦眉の急務であります。又本県は中世の政治文化の拠点たる鎌倉をもち、政治史、文化史を通じて多くの歴史遺跡を擁し、之等の保存と学問的開発、普及も懸つて本県の責任であり、郷

1			4
			5
2	3		6
			7

1 桜木町駅のホームからのぞむドーム（1960 年代後半）
2 神奈川県博物館協会による博物館建設の陳情書（1961）
3 国指定重要文化財の碑を設置する（1969）
4 草創期の博物館を支えた職員（1973）
5 特別展「地図のさまざま」の講座（1974）
6 講座「開港関係史跡めぐり」（1980）
7 再編時の改修工事（1994）

県立歴史博物館開館時の様子

人文系博物館として——神奈川県立歴史博物館

かながわの文化と歴史

県立博物館は 1993 年 3 月から再編に伴う改修工事の準備のために休館期間に入った。そして建物を引き継いだ人文系部門は歴史博物館として、自然系部門は小田原市入生田で生命の星・地球博物館として、1995 年 3 月に新たなスタートを切ったのである。歴史博物館へと看板を改めた建物は、リニューアル工事に際して旧横浜正金銀行本店本館の内装を一部復元し、1 階にコレクション展示室を設置するなどの改修が実施された。また、ミュージアムライブラリーが新設され、レファレンス業務や所蔵資料の画像貸出等を通じて利用者のニーズに対応する窓口として機能している。

前身の県立博物館時代を含めて多岐にわたる活動は「それぞれの 50 年」の章を参照されたいが、ここでは通底する特徴を示しておこう。

まず、歴史博物館は活動の基本テーマを「かながわの文化と歴史」、また展示テーマを「文化の交流と変容」と定め、これに基づいて常設展示を 5 つの時代区分によって構成している。ここで留意すべきは、再編時の提言で掲げられた「日本・世界の中の神奈川を考える」というサブテーマである。鎌倉・小田原・横浜といった歴史的な背景をもつ大都市を内包した神奈川県は、日本・世界といった大きなスケールでその特徴を理解しなければならない。そのことに自覚的に取り組んできたのが、神奈川県博であった。

また、考古・美術・歴史・民俗を専門とする学芸員が分野を超えて連携するのが、県立博物館時代から続く姿勢である。近年では生命の星・地球博物館との共同研究に基づく展示等も実施されていて、新たな展開が企図されている。

次の半世紀に向けて

県立博物館の開館から半世紀、そして歴史博物館として四半世紀近くが経過した現在、博物館は数々の課題に直面している。とりわけ歴史的建造物を利用していることは当館の大きな魅力である一方で、そこに起因する問題も多岐にわたる。銀行として建てられたこの建物は、用途を変えるにあたって必要な改修を加えながら使い続けられてきたのであり、今後、博物館として活用される年月を重ねていくに際して、状況に応じた細やかな対処が欠かせない。

なかでも収蔵庫と書庫の狭隘化は深刻であり、多大なご支援によって蓄積されてきた文化財を未来へ継承するとともに、絶えず資料の収集を続けるために、収蔵スペースの拡大が求められている。あわせて館内設備の更新も喫緊の課題である。空調設備は文化財を適切に保存し、来館者に快適な環境を提供する上で必須であり、2016 年 6 月から約 2 年間の休館期間を設けて改修工事が実施できた。その一方で、兼ねてから懸案となっている展示のリニューアルは実現していない。さらに大規模な地震や、近年頻発する集中豪雨等の災害対策にも直面している。

翻れば、神奈川県博の起点には危機と期待とがあった。県立博物館の開館から 50 年、そして建物の竣工から 100 年以上。この場所に寄せられてきた多くの人たちの思いを次の世代につなげながら、日本・世界の中の神奈川を考え、発信してゆくこと。次の半世紀が始まる転換点に立つ今、そこにあるのは課題だけでなく大きな期待でもある。

（武田周一郎・学芸員）

県立歴史博物館開館時の内覧会（1995）

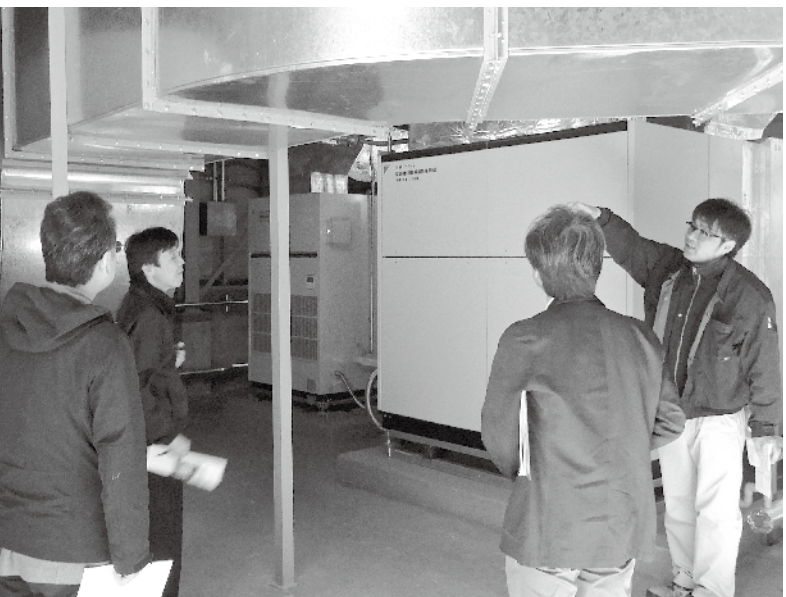
眞葛焼を前に（2013）

テーマ 2 中世展示室で
観覧者を迎える鎌倉模型（2015）

無料開館日を終えて全員集合（2015）

1 2 3 4 5

1 改修工事中の博物館とクレーン（2016）
2 天井裏の配管が博物館を支える（2017）
3 休館中の講座で受講者と（2016）
4 工事後の機器説明会（2018）
5 新設された機器が温湿度を示す（2018）



原始・古代――考古

県博の考古学創設期　神奈川県立博物館準備室が創設された1960年代、開発に伴う発掘調査は全国でも未だ少なく埋蔵文化財センターのような専門組織も存在していなかった。神奈川県域では、県教育委員会（文化財専門委員）や大学、地元の在野考古学研究者らによる学術調査が実施されていたが、いずれも小規模であり、また調査成果公開が可能な場も少なかった。

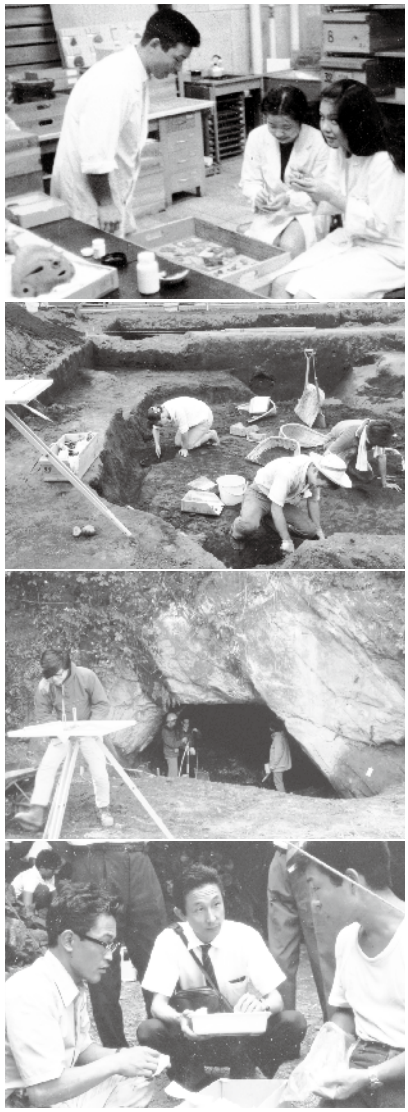
当館の考古分野は、そのような中で活動をスタートした。県教育委員会文化財保護課から異動した神澤勇一、新たに博物館へ採用された川口徳治朗がその任に当たった。三浦半島を中心に精力的な調査を継続していた赤星直忠も嘱託として一時期当館に所属し、考古分野の創設に尽力した。

県博の考古資料コレクション　最初は手元に資料がない。展示にしても調査研究にしても、まずは資料の充実が必要である。そのため開館前後には県内各地のコレクターや在野研究者から多く資料を購入し、寄贈も積極的に受け入れることで考古資料の充実を図ることになった。そのため当館の考古資料には購入資料、寄贈資料が多い。そしてそれは当館考古資料コレクションの特徴でもある。

考古学の研究においては、モノそのものから得られる情報はもちろんだが、それにも増してそれらが出土した状況が重視される。しかし、古美術市場に出品される考古資料やコレクターの所蔵する資料の多くは表面採集品であり、出土状況に関する情報が欠落していることがほとんどである。出土地が明確でないことも多く、それらを用いて研究することには自ずと限界がある。そのため今日では公立博物館でそうした考古資料を積極的に購入することは極めて少ない。行政による埋蔵文化財（文化財保護法で定義された用語で、文化財のうち地中に埋蔵されているものを示す。いわゆる遺跡や遺構、遺物）保護の体制が整うようになってから設立された博物館が扱う考古資料の中心は、各自治体等による発掘調査で出土した資料であることが圧倒的に多い。それに対し、当館の所蔵する考古資料に購入資料、寄贈資料が多いということは、当館がそういった埋蔵文化財保護体制が確立される以前に設立された博物館であることを端的に示しているのである。

今、1960、70年代に購入、寄贈された資料を改めて眺めるとき、確かに出土情報の少なさ故に今日の研究に組込みづらいものがあることは否めない。しかしこういった資料の存在が、今日の文化財保護体制が確立してくる過程の中で確実に考古学研究を支えていたのであり、それに光を当て、再評価していくこともこれからの当館考古分野の一つの役割とも言える。

県博考古学と発掘調査　開館から20年程の間、考古分野では学術発掘調査を実施していた。不足していた館蔵資料の充実や県内各地の地域研究を推進することが意図された。いずれも小規模なものではあったが、成果はそうではなかった。特に三浦市間口洞窟での発掘調査では卜骨や卜甲をはじめとする多様な骨角器や貝製品が出土し、学界の注目を集めた（p.85のテーマ展「海蝕洞窟遺跡」の「担当者から一言」も参照されたい）。横浜市梶山



［上から］
○ 考古資料整理室にて（左端が川口）（1971）
○ 横浜市梶山遺跡の発掘調査（1968）
○ 三浦市間口洞窟遺跡の発掘調査（1971）
○ 三浦市間口洞窟遺跡にて（左から神澤・小池経理課長・川口）（1971）

遺跡から出土した縄文時代中期の深鉢形土器は、当該期土器の編年や系譜の研究における重要な資料の一つとされ、これを基準とした「梶山類型」という名称も研究者間で用いられている。

発掘調査は1967年から1986年の間に8遺跡で19回行われ『神奈川県立博物館発掘調査報告書』にそれらの概要が掲載されている。しかし、いずれも部分的な報告に留まっており、詳細な整理分析は今後の課題である。

研究基盤の整備 ―『考古資料集成』の刊行―　考古学の研究では資料の実測図が多用されるが、1960、70年代には考古刊行物自体が少なく、遺物の情報も文章による記載のみであることも多かった。記載された資料がどのようなものかを知るには各自が所蔵者を訪ねるしかなかったのである。

『神奈川県考古資料集成』(1969年～1973年)はそのような状況に鑑み、研究の便宜を図るために企図、刊行された。神奈川県域で出土した縄文時代、弥生時代、古墳時代の土器について、当時知られていた主な資料を集成し、実測図を作成、掲載した。これは画期的な試みだった。これを見れば当時知られていた主要な資料を同一基準で作図された実測図によって把握することができた。実際、刊行後には多くの研究で参照され、研究の深化に寄与した。

考古分野の研究と展示　神澤勇一は弥生土器の研究が専門だったが、博物館での発掘調査(特に間口洞窟の調査)以来、海蝕洞窟遺跡や卜骨の研究に傾倒し、国内の出土卜骨研究の端緒をなした。川口徳治朗も同様に博物館での発掘調査出土品を基礎資料とした縄文時代貝塚や貝製品の研究を継続した。テーマ展、コレクション展等でその成果は逐次公開された。神澤の後任として県立埋蔵文化財センターから異動した國平健三は古代遺跡の出土品(特に寺院瓦)の研究を行い、その成果は特別展「瓦が語る ―かながわの古代寺院―」(2008年)等で披露された。最近では、県博の発掘調査を概観したコレクション展「KEN・PAKU(県博)発掘クロニクル」(2012年、近野正幸(ちかの)が担当)や太平洋戦争期の戦争遺跡を扱った特別展「陸(おか)にあがった海軍」(2014年、千葉毅が担当)などを開催しているほか、県教育委員会との共催による「かながわの遺跡展」も継続的に開催している(2009年～)。

いまとこれから　神奈川県博が開館した頃から考古学や埋蔵文化財を取り巻く環境は大きく変貌した。バブル期が到来し大規模な発掘調査が増えると、当館がその初期において目指した資料収集の規模とは比較にならないほど膨大な量の遺物や考古学情報が急速に蓄積されるようになった。実測図や写真が掲載された発掘調査報告書が多数刊行され、出土資料は各自治体等が管理、閲覧等に対応し利便性は格段に上がった。それに伴い、当館の発掘調査は下火となり、また資料集成刊行の必要性も下がっていった。

バブル期のような開発は減少したものの、現在でも県域では新東名高速道路建設をはじめとする大規模な開発が継続している。それらに伴い遺跡の発掘調査も多く実施され、日々膨大な考古学情報が蓄積されている。今後の当館考古分野では、これまでの活動で得てきた資料や情報の今日的な視点での再整理、公開に加え、県内外で多く蓄積されてきた近年の開発に伴う出土資料を関係諸機関と連携しながら活用し、多様な博物館利用者のニーズに応えていくことがますます重要となろう。　(千葉毅・学芸員)

[上から]

○「梶山類型」の基準とされた横浜市梶山遺跡出土の縄文土器

○「重要文化財―かながわ考古展―」開催(2003)

○「瓦が語る」開催(2008)

○「陸にあがった海軍」開催(2014)

○開館前後に寄贈された横浜市十王堂免遺跡採集の縄文土器を再整理、報告(2016)

中世——歴史

モノを通じて歴史を語る　中世歴史部門は、八幡義信氏（元学芸部長）が1969年に、鳥居和郎氏が1982年に加わってかたちづくられてきた。県立博物館時代には、人文系、自然系が併存する総合博物館であったから、担当は細分化されておらず、国立博物館の伝統を反映した美術史的歴史展示を基本的姿勢にしていたと推察する。この姿勢は、県立歴史博物館として再開館後も引き継がれ、他館ではよく見かける年表的通史展示は行わない。むしろ、美術史スタッフとの協業を特徴としているのである。

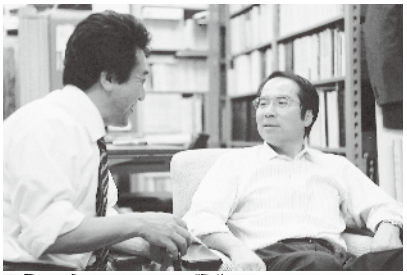
かながわの歴史は日本の歴史　鎌倉や小田原を擁する県博の中世・歴史は、地域の歴史であるのみならず日本の歴史そのものである。それだけに担当者の責任は重い。幕末開港期の横浜にもあてはまるが、地域博物館という意識で仕事をしていてはダメなのだなと常に考えさせられた。鎌倉は京都や諸国に、小田原北条氏は織豊政権に対峙するものとして意識され、相対化される。横浜が開港場として世界と向き合っていたのと同様である。県博での歴史展示は、外の世界との対比において行われるべきで、地域の殻に閉じこもっていては何も見えてこないのである。

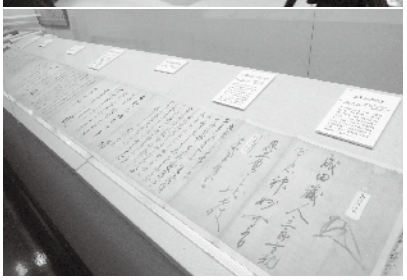
大きなスケールの展示　このことは、八幡氏による「日本の民窯 ―暮らしのやきもの―」展（1978）、「源頼朝とゆかりの寺社の名宝」展（1999）などを回顧すれば、その広がりと奥行きに気づかされ、鳥居氏による「後北条氏と東国文化」展（1989）、「変わり兜 ―戦国の奇想天外―」展（2002）などでは歴史、美術といった枠にとらわれない総体的歴史復元を通じて、中央と地方との文化伝播の関係が示された。日本史の中のかながわを、大きなスケールで、モノを通じて魅せていくというのが県博スタイルといっても過言ではない。

伝統に学ぶ　この県博伝統の展示スタイルをいかほど具現できたかは諸兄のご判断に任せるが、近年の展示では「聖地への憧れ ―中世東国の熊野信仰―」展（2005）、「鎌倉の日蓮聖人 ―中世人の信仰世界―」展（2009）などで、かながわと中央との関係について、宗教世界を切り口として展示した。信仰の歴史を、モノをして語らしめ、総体として復元したのである。歴史と美術とのマージナルな領域を開拓するという点では、同室の永井晋氏とともに「こもんじょざんまい」展（2013）を実施した。

中世歴史展示のこれから　中世史はこの20年を見ても大きく進歩している。常設展示される源頼朝坐像は、今や“伝”とするのが共通認識。申請取り下げ中の世界遺産「武家の古都・鎌倉」は、県が本気なら展示を通じてもっとアピールすべきであろう。鎌倉幕府滅亡後のいわゆる鎌倉府についての展示は現状皆無に近い。小田原城内御用米曲輪の発掘で、戦国大名北条氏にまつわる新事実が次々と明らかになっている。利用者はこういう最新の事情を、もっと見たい、知りたいと期待して来館するはずで、最新成果を反映した展示リニューアルへの期待は高い。なぜって、県博の中世史は日本の中世史なのだから。

（古川元也・2000年～2017年（主任）学芸員）





［上から］

○ 中世資料整理室でしばしばくり広げられた白熱の議論。美術・相澤正彦（左）と歴史・鳥居和郎（右）（2002）

○ 田の畦に立つ板碑の輸送作業。抱えているのは現薄井館長（2005）

○ 本土寺（千葉県松戸市）の日蓮聖人大曼荼羅を撮影する（2009）

○“こもんじょ”ばかりが特別展示室を埋めつくした（2013）

中世――美術

一からの歩み　県立博物館開館当時、中世美術を総体として捉えるに足りる「コレクション」があったとは言えないだろう。新しくスタートする公立博物館に共通することだが、寺社や旧家伝来の資料群のような伝世の強固な「コレクション」の基盤を持たないところから、県博中世美術分野の歩みが始まった。その歩みは、県博が研究の場とする神奈川の文化と歴史を、広く、深く探求するために不可欠な資料―作品を、学芸員の〈眼〉で見いだしていく不断の歩みとなって今日まで続いている。

見抜き、見据える〈眼〉　作品―モノそのものを研究対象とする美術分野では特に、モノを見抜く〈眼〉、その可能性を見据える〈眼〉が、学芸員の仕事を支えている。県博の中世美術分野では、確かな〈眼〉に支えられた作品との出会いが、コレクションの形成と作品研究を前進させてきた。清水眞澄氏と「観音菩薩遊戯坐像」、梅沢恵氏と光明寺蔵「夢窓疎石像」など、一つ一つの作品との出会いが、神奈川ひいては東国の仏教美術や宋風文化を考察する、ダイナミックな研究へと育っていっている。

育てる〈眼〉　長い時間をかけて多くの作品と出会い、作品と作品をつなぎ、中世美術の諸相を明らかにしていく仕事もまた、中世美術分野の強みである。中島亮一氏、相澤正彦氏による関東水墨画の研究は東国の文化を語る語彙を豊かにしてきたし、薄井和男（現館長）が井上久美子氏（元写真技師）らとともに携わってきた時宗文化財調査は多くの資料と作品を見いだし時宗研究の基礎を形作ってきた。「関東水墨画の200年」（1998）、「遊行の美術」（1985）から「国宝一遍聖絵」（2015）まで数度にわたる時宗をテーマとした特別展は、作品との出会いを育ててきた〈眼〉によって実現した場である。

広がる〈眼〉　中世美術分野はそれのみで存在できているのではない。同じ資料整理室で過ごす中世歴史分野との協業は、美術分野に常に刺激を与えてきた。時代区分や分野を越えて取り組む仕事では、それぞれを専門とする同僚との対話の中に多くの発見を得てきた。「天狗推参！」（2010）、「再発見！鎌倉の中世」、「観光地鎌倉と鎌倉彫」（2012）は、歴史博物館の美術分野がなしうる仕事を問う機会となり、佐々木登美子氏による「横浜・東京 ―明治の輸出陶磁器」は横田洋一氏（近代美術）以来の研究を進め近代工芸という新たなテーマを県博に根付かせた。

ともに眼ざすものの先に　いつの時代にも必ず世代交代の時があり、中世美術は今、その時を迎えている。資料整理室での日常、作品調査やモノを取り扱う場、展覧会の集荷返却の道のり、あるいは借用先での緊張感の中で、ベテランから若手へ、モノを見る〈眼〉を確かに受け継いでいきたい。作品と向き合う地道で着実な姿勢、作品の可能性と魅力に思い入れる情熱、それらを、より視野の広い問題意識へと引き上げる前のめりな野心も、ともに。それらをともに眼ざす先に、神奈川県博の中世美術の未来を紡いでいきたい。

（小井川 理・学芸員）

［上から］

○ 保木薬師堂には、毎年9月の法要にあわせて、博物館でお預かりする御本尊の里帰りに彫刻担当が付き添う。清水眞澄氏以来、学芸員三代で受け継ぐ伝統（2010）

○ 展示作業は〈眼〉と〈手〉で作品と向き合う場（2013）

○ 作品修理に立ち会う橋本遼太。作品の未来を判断する、その責任の重さを身に刻む（2017）

○ 彫刻の梱包をする薄井和男（右）、神野祐太。技術は確かに伝えられる（2016）

近世――歴史

再編整備のときに展示テーマを「近世の街道と庶民文化」とした。江戸に隣接し、江戸時代最大の幹線であった東海道が東西に貫くという地域特性に着目した設定で、古文書・浮世絵・地図等の史料により、街道や旅の様子、地域の村と人々の暮し、庶民信仰や名所巡りなど、近世神奈川の特色を紹介している。

資料収集もこのテーマに沿って進めてきた。その結果、東海道を描いた街道絵図や、名所鎌倉の観光案内地図である鎌倉絵図を核とする地図・絵地図類、江戸時代の旅の案内書である「道中記」類などが比較的充実したコレクションとなっている。

過去に実施した特別展では、まず、所蔵資料の特性を踏まえて常設展示のコンセプトを深化・発展させたテーマでの展示を行ってきた。「近世武相名所めぐり ―浮世絵・絵図・名所記にみる江戸庶民の楽しみ―」(1991)は名所巡りの好適地であった神奈川県域を紹介するとともに、名所巡りが文化、芸術、信仰などへ及ぼした影響を明らかにした。「江戸時代の東海道」(2001)は県博協加盟館等で開催した「東海道宿駅制度四百年記念展」に協力連携した企画で、描かれた資料から近世東海道の持っていた豊かな文化性を紹介した。「江戸時代かながわの旅 ―「道中記」の世界―」(2013)では旅の盛行に伴って数多く出版された多種多様な道中記を紹介しつつ、浮世絵なども多用して江戸時代のかながわへの旅を案内した。この企画は、近世美術担当者が主催し、歴史担当者が協力して、外部の研究者(鎌倉国宝館・横浜市歴史博物館・太田記念美術館)の参加も得て実施した総合研究「『道中記』の研究」(2006～2010)の成果を反映したものでもある。

地域の歴史を掘り起こすという視点から企画したものが「富士山大噴火 ―宝永の「砂降り」と神奈川―」(2006)である。地域災害史の観点から富士山宝永噴火による神奈川県域の被災と復興に焦点を当たもので、古文書をはじめとして、地域に残された関連史料を丹念に捜し集めて紹介した。前三者とは傾向の異なるテーマだが、このような視点は今後も重視してゆきたいと考えている。

最後に古文書のことについて一言。江戸時代の地域を語るうえで必須のアイテムなのだが、色目のないモノトーンで、多くの方は書かれている文字が読めない。なので展示してもほとんどスルーされる。展示映えしないけれども不可欠な古文書をいかにして「面白く」展示するか、大きな課題である。加えてこの分野の収蔵資料は必ずしも十分とは云えず、その充実を図りたいところだが、簡単ではない。近時、ボリュームのある坂本家文書の寄贈をうけたところであるが、江戸時代の古文書を豊富に保管している県公文書館の協力を求めることなども模索したいと考えている。今、県博は世代交代が進んでいる。近世部門も若い世代に多くを託したいと思う。

(古宮雅明・専門員)

[上から]

○『関八州大絵図』大きすぎてこれまで展示できなかった。再開後は展示台が整い展示できる。

○『富士山噴火絵図』「富士山大噴火」展で展示した新出史料。その縁で購入。

○歴史担当の学芸員2名。

近世――美術

県博近世美術作品の核はなんといっても約6,200点を数える浮世絵・丹波コレクションである。横浜の貿易商であった丹波恒夫氏（1881～1971）は名品ばかりを好んで集めるコレクターではなく、いくつかの収集方針を以って浮世絵を集められた。そのうちの①江戸時代の神奈川県域に置かれた川崎から箱根まで九宿の東海道の宿駅と金沢八景、江の島、大山ほかの名所を描いた浮世絵、②開港（1859）を契機に造られていった横浜の町や来航した外国人の姿などを描いたいわゆる「横浜浮世絵」を収集する、という方針により作品が充実しているおかげで、総合テーマ展示3「近世の街道と庶民文化」とテーマ展示4「横浜開港と近代化」では常に実物の浮世絵で描かれた神奈川県域のかつての様子を紹介することができる。

このほかに雪の情景を描いた浮世絵や初代歌川広重の作品を集めるという収集方針があったため、神奈川県域に限らず日本全国の名所・風景を描いた浮世絵が多いこともコレクションの特色である。歴史博物館として再編以後も「江戸の四季 初代広重が描く名所江戸百景」（2003）、「歌川広重没後150年記念 広重が描いた日本の風景」（2007）などの特別展を開催した。また、2013年6月に富士山が世界遺産に登録された折には、その直後に初代広重や葛飾北斎ら風景画の名手が描いた富士山の浮世絵を紹介するミニ展示を行うことができ、丹波コレクションにおける風景画の充実ぶりを改めて実感した。現代日本の美術館・博物館では作品・資料を各方面から集めて展覧会を行うことが多いなか、若干は他館から拝借しても館蔵作品主体で特別展規模の展覧会を開催することができる丹波コレクションは県博にとって大変ありがたいコレクションである。

これまでに県博では上記のほか「浮世絵名品500選」（1991）、「横浜浮世絵と空飛ぶ絵師五雲亭貞秀」（1996）、「浮世絵☆忠臣蔵 ―描かれたヒーローたち!?―」（2009）ほか、浮世絵が主となる特別展を繰り返し行ってきたが、館外の展覧会への貸し出しも多く、作品は日本国内だけでなく神奈川県の姉妹都市であるアメリカ・メリーランド州で展覧会を開催（1982）したのをはじめ、海外の展覧会へも貸し出している。また挿図としての雑誌、書籍への掲載、テレビ番組での放映は枚挙に暇のないほどで、丹波コレクションの浮世絵は来館されない方々にも広く親しんでいただいている。今後の県博としては、丹波コレクションを補完するような浮世絵、特に神奈川県域に関する浮世絵を積極的に収集できればと考えている。

浮世絵のほかには、江戸時代の終わり、小田原藩に仕えて花鳥画で名を知られた岡本秋暉（1807～1862）の作品も「金鶏鳥図」（絹本著色、1853）など三点ある。秋暉だけではなく、江戸時代の神奈川県域で活動した絵師について研究と作品の収集を行うことが今後の課題である。

（桑山童奈・主任学芸員）

［上から］
○「歌川広重没後150年記念 広重が描いた日本の風景」展 展示風景（2007）
○「浮世絵名品500選」展図録（1991）
○岡本秋暉「金鶏鳥図」絹本著色（1853）

近代――歴史

担当　神奈川のみならず日本の近代を告げたペリー来航や横浜開港にかかわる展示は、1967年開館の県立博物館（以下、県博）時代から行われていたが、それ以降の歴史については触れられていなかった。そのため、1995年の展示リニューアルにあたり、対象を近現代まで広げた。この再編整備期から近代・歴史分野の活動は本格的に始まったといえる。

当初、近世以降の歴史担当は岩壁義光ひとりであったが、リニューアルに際し國雄行が採用され、準備が進められた。その後、岩壁の退職に伴い、近代史分野と現代史分野を分け、國が近代史担当となった。さらに、「民際外交」を唱えた長洲県政にあって、国際交流が注目されていた時代だったことから、神奈川県の歴史ならではの開国史を専門とする学芸員を増員することが認められ、国際交流史担当学芸員として嶋村元宏が加わり常設展示の準備が進められた。その後1998年に國が退職すると、人事交流職員の県立高校社会科教員・柏木操男が一時その欠を埋めたが、2001年からは近代産業史を専門とする丹治雄一が着任し、再編整備以降現在に至るまで近代史担当は二人体制となっている。

コレクション　コレクションとしては、ペリー来航時の老中阿部正弘の家に伝わった「阿部家資料」やペリー来航時の様子を中心に描いた「黒船来航絵巻」、幕末の遣外使節団関係資料などの国際交流史にかかわる資料群にくわえ、開港場・横浜を幕末から明治・大正期まで描いた絵図・地図類、そして明治中期の横浜にあった日本人が経営する商店や外国商社を銅版画で描いた「横浜諸会社諸商店之図」／「日本絵入り商人録」など、当時の様子を知るための資料群がある。また、西洋文化の窓口となった横浜ならではの文明開化や自由民権運動関係資料をはじめ、来日外国人の記録や日本土産として購入された蒔絵の表紙を持つ写真アルバム（「横浜写真アルバム」）などを所蔵しているのも、当館の特色である。なお、近年は注目度が増した近代建築に関係する資料を精力的に収集している。

特別展　近代史部門が担当した特別展でまず挙げなければならないのは「近代日本と横浜浮世絵」（1998）である。これは、リニューアル時の目玉として導入した、外部研究者との共同研究の成果を展覧会へ結び付けるという試みのなか、國と嶋村が3年にわたる調査研究の成果を県民へ還元した最初の事例である。その後も調査研究に裏付けされた「ペリー来航150周年 黒船」（2003）、「横浜開港百五十年」（2009）といった周年記念展のほか、担当学芸員の専門性を前面に押し出した「日本のビール」（2006）、「彩色立面図に見る日本の近代建築」（2009）、「ペリーの顔・貌・カオ」（2011）、「『キングの塔』誕生！―神奈川県庁本庁舎とかながわの近代化遺産―」（2013）が開催されている。そして、近代史にとどまらず、時代・分野・館種を超越した「アジア・ヨーロッパ・ミュージアムネットワーク国際巡回展　アジアとヨーロッパの肖像」（2009）、「石展」（2015）および「石展2」のような挑戦的取り組みが活発に行われている。　（嶋村元宏・主任学芸員）

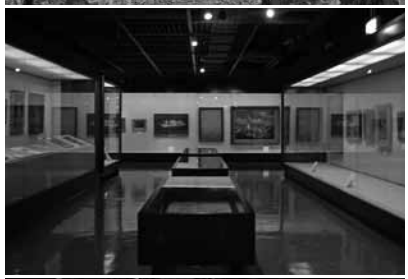
［上から］
○ 横浜諸会社諸商店之図　横浜正金銀行（1887年前後）
○ 特別展「近代日本と横浜浮世絵」の展示風景（1998）
○ 特別展「ペリーの顔・貌・カオ」の馬車道口の掲示板（2011）
○ 特別展「『キングの塔』誕生！」の展示風景（2013）

近代――美術

コレクションの形成　当館近代美術部門は、故横田洋一氏が初代を務め、現在二代目として角田が担当している。当館が横浜に立地することから、開港期から明治にかけて西洋美術に学んだ作家の作品や資料を中心に収集を継続してきた。主なコレクションは、五姓田義松を中心とした五姓田派の作品や資料群。義松の師であり、1861 年以後 1891 年まで横浜に居住した英国人画家チャールズ・ワーグマンの作品や彼が刊行した『ジャパン・パンチ』（当館営業部長として活躍するパンチの守は同誌の表紙を飾り、同誌内で躍起するキャラクターである）。また、横浜本牧に居住した日本画の第一人者下村観山の資料群があり、丹波コレクションに継続する近代印刷作品群として重要な石版画コレクションがある。さらに近代日本美術資料群として全国屈指の質量を誇る橘忠助氏旧蔵美術資料群があり、そのなかには地図類や書籍、明治期の図画教科書などが含まれている。幕末明治の横浜というポイントに集中するという戦略を開館当初から採用したわけではなく、限られた予算での購入と多くの寄贈の賜である。そのため、今後の展望は決して明るいわけではない。多くの方々のご厚意という天祐に頼るという態度は本部門だけの事情ではないが、苦慮しながらここまでコレクションが豊かになった事実を素直に喜び、ひとつひとつの作品や資料に向き合いながら、地道に調査研究とその成果公開につとめるばかりである。そして、この愚直な継続性こそ、当部門のプライドである。

近代美術部門のプライド　コレクションが豊かになったわけは、モノがモノを呼んでくれるからだ。その真意はモノへの愛だ。その愛を常に訴えていたのが、先代横田氏だった。同じ県立館には、日本最初の近代美術館である県立近代美術館、通称「鎌近（かまきん）」があった。1980 年代以後の美術館ラッシュを迎えると、県内でも近現代美術を活動のメインとする川崎市市民ミュージアム（1988）、横浜美術館（1989）、平塚市美術館（1991）、横須賀美術館（2007）など多数建設された。比較すればひときわ小さい当館の展示面積と予算規模で、どのような活動ができるのかは常に問われてきた。その問いへの回答が、愚直な調査研究であり、その継続である。代替わりをしてその積み上げを失う館園は多いけれども、当館は展覧会屋として目の前にある仕事ばかりを追うのではなく、腰を据え、モノと向き合い仕事を積み上げることが幸いできた。弱小故の結果でもあるが、成功させてきたというプライドは高い。先代が担当した展覧会からのバトンタッチを列記しておこう。1986「明治の宮廷画家」→ 2008「五姓田のすべて」2015「五姓田義松」。1990「チャールズ・ワーグマン」→ 2011「ワーグマンが見た海」。2001「王家の肖像」→ 2010 コレクション展「奇妙奇天烈 !?　明治の版画あれこれ」。継続するかたちはわずかかもしれないけれども、きっと次世代がさらなる実りをもたらしてくれると信じている。

（角田拓朗・主任学芸員）



［上から］
○ 義松の墓を初めて発見した故横田氏。撮影は井上氏。（1986）
○ 特別展「五姓田のすべて」会場風景（2008）
○ 特別展「ワーグマンが見た海」会場風景（2011）
○ 特別展「五姓田義松」会場風景（2015）
○ 特別展「五姓田義松」講堂にて特別展示解説（2015）

現代

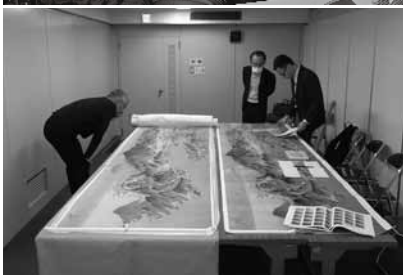
出発　当館の現代史部門は再編整備を契機として設置された。担当者はいない、資料もない。それは、まさにゼロからの出発であった。当初の計画では対象とする時代を戦後としていたが、寺嵜弘康が担当に就くと1923年の関東大震災を起点とする方針が定められた。そして、常設展示では民俗部門とともにテーマ5「現代の神奈川と伝統文化」を構成し、関東大震災から高度経済成長期までを扱うことになった。ところが当該期の資料はそれまで積極的に収集されていなかったため、模索のなかで資料収集が進められた。なお、寺嵜は1994年から県立地球市民かながわプラザの設立準備に携わり、1998年に開館した同施設には国際平和展示室が設けられ、戦争資料の収集と展示が行われている。

実践　模索から生まれた実践の一端を紹介しよう。旧横浜正金銀行本店の建物を引き継ぐ当館にとって、同行ゆかりの資料を後世へ伝えることは使命の一つだが、その多くは博物館の再編後に関係機関のご協力によって収集されたものである。コレクションの中核を占める資料群として、旧横浜正金銀行調査部図書（東京銀行寄贈・約1万冊）や、東京銀行コイン室が収集した国内外の貨幣・紙幣（東京三菱銀行寄贈・約1万2千点）がある。そして資料収集とともに調査・研究を進めた成果として「横浜正金銀行世界三大為替銀行への道」展（2004）を開催したところ、これを契機に行員の遺族から資料の寄贈が相次いだ。さらに、新たな資料に基づく研究の充実や、継続的な資料修復の取り組みを受けて、休館直前には「まぼろしの紙幣　横浜正金銀行券」展（2016）を開催した。資料収集、調査･研究、展示が新たな資料収集につながる。その循環が結実した一例である。

発信　実践の成果は多岐にわたり、特別展等を通じて発信してきた。関東大震災については「80年目の記憶」展（2003）がある。震災復興後の観光県・神奈川を紹介した「ようこそかながわへ」展（2004）では、当部門を代表する資料の一つである吉田初三郎の神奈川県鳥瞰図をお披露目した。また観光という切り口では「観光地鎌倉と鎌倉彫」展（2013）がある。そして戦後に目を向けると、横浜と横須賀を舞台にした「ヨコハマ・ヨコスカストーリー」展（2012）や、東京オリンピック50周年記念の「よみがえる東京オリンピック」展（2014）を開催した。

未完　当部門で最も新しい時代の資料群として、1998年開催のかながわ・ゆめ国体／ゆめ大会関係資料や、2001年に閉館した馬車道の横浜東宝会館関係資料がある。収蔵庫の狭隘化は極めて切実だが、今後も現代資料を体系的に、かつ不断に収集する必要がある。生活の変化や景観の変貌が加速度を増す現在、それらの資料化は完結することのない急務であり、多くのご厚意とともにお預かりした資料を次代へ伝える役割は重い。その責務を果たすためにも、資料情報の整備や関連機関との共有化は大きな課題である。

（武田周一郎・学芸員）



［上から］

○「横浜正金銀行」展の内覧会（2004）

○ 戦後のジャズ文化を紹介した「ヨコハマ・ヨコスカストーリー」展（2012）

○ 休館中の講座「関東大震災再考」。工事と講座を同時並行で進めた（2017）

○ 富士ゼロックスのご協力を得て神奈川県鳥瞰図の複製を製作する（2017）

民俗

これまでのあゆみ　高度経済成長期によって伝統的なムラの暮らしは大きく変化し、生活様式の近代化が進んだ。民俗分野では、その際の変化変容の有り様と、変動期を経てもなお残り続けた伝統文化にはどのようなものがあるのかということを紹介してきた。

博物館に「民俗分野」が導入されたのは、全国的にみても当館が先駆けであった。当館が中心となって、県内各地の民俗事象（村制･族制、生業［農耕・漁撈・諸職］、衣・食・住、信仰、年中行事、通過儀礼［産育・婚姻・葬送］）や、資料の収集および所在情報などを調査し、その成果である各報告書（『神奈川県民俗調査報告』1号～24号等）の刊行は県内における嚆矢である。また、復元民家を最初期に博物館内に展示したのも当館であった。復元民家の中では、正月、盆、雛祭り、五月人形、月見、エビス講、道具の年取りなどの季節展示を行い、かつての生活空間を活かして県内の特徴的な年中行事を再現している。

当分野における資料収集の柱の一つに、1999年に神奈川県指定有形民俗文化財となった17種、1,982点にものぼる「神奈川の職人の道具」コレクションがある。これは指定の理由の一つに、「神奈川県は早くから都市化が進み、多くの伝統的な民俗文化財が消えた地域であるといえる。そのような地域で、これだけの多くの職種の職人の道具が残っていたことが貴重である」ということが挙げられている。これらは、特別展（「職人の道具」）やコレクション展示（桶職人、傘職人、下駄職人、木地師、ものさし職人、大山のこま作り道具）においてその歴史性、道具の使い方やその技術、職人の信仰などを紹介し、私たちの生活文化を支えてきた職人たちの姿に焦点を当ててきた。上記の収集資料の他にも、神奈川県の地形風土のもとに育まれた民具の地域性や特性に留意して、衣食住や生業などの民具（有形民俗文化財）と祭礼や信仰などの伝承（無形民俗文化財）及びそれに関わる属性資料も併せて調査・収集を続けてきた。

これからのあゆみ　高度経済成長期から約半世紀が過ぎ、人々の生活は大量生産された画一的なモノに囲まれるようになり、民具の地域性はほとんど読み取ることはできなくなった。しかしながら、藁や木材や土などのかつての自然素材による民具がプラスチック等に置き換わってもその本質は受け継がれているものもある。また、旧住民とそこへの移住者によって共に形成されていく新たな社会組織、今ではすっかり定着した感のある外来文化のクリスマスやハロウィンなどの行事が今後どのように人々に受容されていくのか等の様々な生活や伝承の変化に関する視点もある。このように民俗分野は有形・無形を問わず庶民生活に関わる人々の営み全てが対象となるため、その資料対象は大変幅広いことが特徴だ。今後はいわゆる“昔のモノ”だけでなく、大量生産ゆえに直ぐに別のモノに取って替わられていく“新しいモノ”が人々の生活や心意にどのような変化をもたらしていくのか、という観点にも注視していくことも重要だと考えている。　（新井裕美・学芸員）

［上から］
○ 特別展「竹と民具」準備中の一コマ（2010）
○ 季節展示「盆」の展示準備（2015）
○ 大山のこま作り道具
○ 横浜市栄区田谷町にて庚申塔の調査（2017）

教育普及

企画普及課の50年　企画普及課は、1972年に学芸部に設置された企画調整課を前身とする。1977年の改組で学芸部は所管の4課を廃止し、グループ制に改めた。この時、企画調整課は企画調整グループとなった。

1995年1月、神奈川県立博物館が人文系の歴史博物館と自然系の生命の星・地球博物館に分かれた時、企画調整グループは歴史博物館に新設された企画情報部に移り、企画普及課となった。企画普及課は、博物館活動の企画及び調整、普及及び広報、講演会・講習会・研究会の開催、博物館及び関連施設・団体等との連絡・協力・情報交換を分掌する。

この年に開催した講演・講座等は、記念講演会4回、県博講座「銅鐸」（4回連続）、神奈川県民アカデミー（現在の県博セミナー）、「神奈川の歴史講座」（8回連続）であった。「教員のための博物館講座」や「お父さん、お母さんのための博物館講座」といった背後に児童・生徒を見据えた講座や、海老名市教育委員会と共催した歴史探訪「史跡　相模国分寺」、史跡指定記念「ドーム・金庫特別公開」を開催した。

子ども向け事業は、学校5日制対応事業とその他の事業に大きく分けられた。学校5日制対応事業は、県内の小中学生を対象とした「ミュージアム・ツアー」・「博物館を探検しよう！」・「子ども映画会」・「銅鐸を学ぶ、銅鐸の音、聴いたことがある」・「子ども歴史クイズ大会」が実施された。その他事業として、「夏休み子ども歴史教室」・「夏休み子ども映画会」などが実施された。平成7年度の児童・生徒入館者数は、14,763名であった。

1996年、「夏休み子ども映画会」を拡大して冬休み・春休みにも実施し、合計6回306名の参加者があった。この年は、ボランティア制度の導入に向けた「ボランティア入門講座」（全6日）を実施した。

1997年には、新たな試みとして「横浜ものはじめクイズ」を行った。「博物館を探検しよう！」も「博物館宝物さがし」と名前を変えて実施した。

1998年には、「おじいちゃん・おばあちゃんのための博物館講座」が開催された。この年から、「60歳からの歴史講座」や「高校生のための講演会」が始められた。展示解説ボランティアは、開館30周年記念特別展「世界のかたち　日本のかたち―渡辺紳一郎古地図コレクション―」（6月28日～8月31日）から活動を開始した。

2000年には、学校連携・総合的学習への対応が新たに始められ、校外学習・職場見学・体験型学習への支援が始められた。初年度は、鎌倉市立御成小学校や湘南白百合学園中等部など6校に対して連携・支援を行った。

2001年、学校週休5日制対応行事は「ミュージアムクイズ」のみに縮小し、子ども・青少年向行事が「博物館で遊ぼう！」（週休5日制行事から移す）・「夏休み子ども博物館教室」・「高校生・大学生のための講演会」の3事業、学校連携・総合的学習の受入校は6校となった。

2002年、従来の「学校連携・総合的学習への対応」の事業を拡大し、従来の事業は「見学等学校の博物館利用に対する対応」と名前をかえて項

［上から］
○ 県博講座会場風景（2015）
○ 建物見学会（2016）
○ パンチの守登場（2013）
○ 博物館体験教室「植物から紙をつくる」（2014）

目とし、教員が常設展を活用しやすくなるようにと「常設展資料一覧」の作成や、「教員向け研修会の実施」を新たな項目として加えた。

2003年、学校5日制対応行事として残っていた「ミュージアムクイズ」を子ども・青少年向け教育活動に移し、学校対応は「総合的学習の時間に対する対応」にまとめられた。この事業は、「展示見学等、学校の博物館利用に対する対応」・「常設展示資料一覧」・「常設展示活用ワークシートの作成」・「教員向け研修会の実施」の4項目で整理された。

この年、近隣の博物館施設17館との共同開催による「ミュージアム・クイズラリー」(ミュージアム・ミッションが後継企画)を開始した。「先生(教員)のための博物館講座」は「学校連携・総合的学習への対応」の項目に移され、教員向け研修の一項目となった。

2008年、横浜開港150周年記念「吹奏楽で辿る歴史の旅」をテーマにミュージアムコンサートがはじめて実施された。この年、「浦賀ウインドオーケストラ」が全3日合計6回の演奏を行い、参加者は635人であった。

2013年3月、当館が1967年3月20日に開館したことにちなみ、3月21日を「博物館の誕生日」として無料開館日に設定した。この日は、展示室を無料で公開すると共に、屋上ドームを特別公開した。無料開館日は、3月21日と11月3日の2回実施している。

当館のイメージキャラクター「パンチの守」の着ぐるみは2013年春に完成し、秋の無料開館日、11月3日に初登場した。

2015年度には、講演・講座等として、県博セミナー7回、県博講座8回、特別展記念講演会5回、体験教室8回、建物見学会4回、現地見学会2回、シンポジウム1回、ミュージアムコンサート2回を開催した。子ども向け行事は、「ミュージアムクイズ」・「ミュージアムクイズラリーよこはま2015」、子ども博物館教室1回、「けんぱく建物たいけん」1回を実施した。学習支援事業も、学校団体の利用は389校13,649人、インターン・シップや職場体験の受入、「歴史博物館の展示(常設展)目録」・「常設展示品キャプション」の更新、教員向け研修会などを実施した。

2016年、歴史博物館は特別展「横浜正金銀行券」展(4月23日～5月29日)を最後に休館に入った。移転後、10月から休館時学習支援事業として講演・講座等が開始され、2017年9月まで1年間実施した。学校団体の博物館利用ができなくなったことで、学芸員が学校に赴く出張講座も10月から開始された。出張講座は、2017年10月まで実施した。「横浜正金銀行券展」と休館時学習支援事業の実績を合わせた2016年度の講演講座等の実績は121講座4,656人、出張講座76校6,004人である。

これからの見通し　企画普及課は、当課が主催する行事の開催、学芸部が展覧会関連行事として実施する行事の運営、学校を対象とした学習支援事業の実施を主要な柱として事業を展開してきた。休館中の2年間に実施した休館時学習支援事業は、再開館後に企画普及課が主催してゆく体験型学習事業のノウハウを蓄積するよい機会となった。この経験が、今後の企画普及課の事業を多彩なものとしていくことを願っている。

(永井 晋・企画普及課長／専門学芸員)

［上から］
○ 無料開館日の案内板(2013頃)
○ 特別陳列『よみがえる東京オリンピック』特別解説「オリンピックを見ていた少女が語るあの頃」(2015)
○ 地域巡回講座「三浦一族の本拠地を訪ねて」(2016)
○ 博物館体験教室「お抹茶文化に親しむ」(2016)
○ 県博講座会場風景(宇徳ビル8階会議室)(2017)

博物館実習

1995 年度から、博物館実習は企画普及課の担当業務として受入れが始まった。

1995 年には、見学実習 5 校、実務実習 31 大学 58 名の受け入れを行った。実務実習は全 6 日で、前期 2 日・後期 4 日に分けて行った。前期は企画普及課が担当し、実務実習生全員を集めて教育普及に関する業務の実習を行った。後期は、実習生の学芸部の専門分野に分け、各分野で日程を調整した上で実習を実施した。グループは考古・中世・近世・近現代・民俗の 5 分野で、受入人数の多い分野は、2 グループに分けて実施した。この年は、8 グループに分けている。

2001 年は、見学実習 9 校、実務実習 24 大学 35 名であった。この年に、実務実習の前期日程を 1 日増やし、前期 3 日、後期 4 日の 7 日に改めた。後期実習は、考古・中世（2 グループ）・近世・近現代・美術・民俗の 7 グループで実施した。

2016 年、当館は空調設備等の改修工事を行うので、休館前に博物館実習を実施することとし、5 月に 7 日間連続で行うこと、学芸部がグループ分けして分野ごとに実習してきた後期実習を 4 日間で全分野の実習を行う形に改めた。学芸部の実習を通して行うことにしたため、実習生の受入人数を絞りこみ、12 校 12 名で実施した。 2017 年度は、休館のため博物館実習の受入を休止した。

これからの見通し　2018 年度は、博物館実習の受入を再開する予定である。実習は、休館を前提とした 2016 年度と同じ形式を予定している。今後の運営方法は、2018 年度の状況を見て判断するのがよいと考えている。

（永井 晋・企画普及課長／専門学芸員）

2001 年度実務実習日程			受入 35 名
前期［3 日］	企画普及課	6 月 8 日～ 10 日	受講 35 名
後期［4 日］	学芸部		
	近現代	8 月 7 日～ 10 日	5 名
	考古	8 月 7 日～ 10 日	3 名
	近世	8 月 7 日～ 10 日	6 名
	美術	10 月 2 日～ 5 日	3 名
	民俗	10 月 16 日～ 19 日	6 名
	中世	11 月 6 日～ 9 日	6 名
	中世	11 月 13 日～ 16 日	6 名

2016 年度実務実習日程		受入 12 名
5 月 17 日	午前・午後　企画普及課	受講 12 名
5 月 18 日	午前・午後　企画普及課	12 名
5 月 19 日	午前・午後　学芸部［保存］	12 名
5 月 20 日	午前・学芸部［考古］　午後・学芸部［民俗］	12 名
5 月 21 日	午前・午後　学芸部［美術］	12 名
5 月 22 日	午前・午後　学芸部［歴史］	12 名
5 月 24 日	企画普及課	12 名

［上から］
○ ミュージアムライブラリ（情報資料課）（2017）
○ 学芸部考古担当（2017）
○ 学芸部美術担当（2017）
○ 最終日のグループ別発表準備風景（企画普及課）（2017）

博物館連携

50年の歴史の中で当館は複数の連携事業を行ってきた。中でも最もロングランかつ現在も続いているのが、地域博物館連携事業である。

地域博物館連携事業　この事業は、2003年に「ミュージアム・クイズラリーよこはま」として始まり、2016年に「ミュージアム・ミッション」へと変身を遂げながら、2017年で15回目の開催となった。近隣の博物館施設が、各館1つずつクイズやミッションなどの「課題」を設ける、スタンプラリー形式の夏休み子ども向け行事を運営している。

連携先は、横浜市、特に中区・西区にある博物館施設。当館も所在するこの地区には多数の博物館施設が集中しており、徒歩による行き来が可能である。また、歴史・美術・文学等分野や時代が様々で、設立母体も県・市・各種協会等多岐にわたる施設が含まれる。その多様性を活かし、参加者が様々な博物館を訪れるきっかけとなることを意図して、各館担当者が連絡会を組織している。

主な対象は小学生を主とする子どもだが、未就学児や大人でも参加は可能としている。近年は子ども向け行事に大人（特に60代以上）の方が興味を示すことが多くなり、実際この事業の参加者の年齢内訳を調査したところ、2010年の時点で子どもと大人（付き添い＋大人のみでの参加）の数が並び、2015年には遂に子どもより大人のみでの参加者のほうが多くなる逆転（?）現象が確認された。少子化の影響か、子どもの博物館離れか、はたまた大人の活性化か。原因は特定しきれないところである。一方、同じ調査で、毎年参加してくださるリピーターの存在も明らかとなった。もし子どもが初回から参加してくれていれば、現在は成人しているかもしれない。子どもから大人まで楽しんでいただけるのは嬉しい限りである。

クイズラリーからミッションへ　2003年～2015年の「ミュージアム・クイズラリー　よこはま」では、全館共通のテーマを毎年設定し、そのテーマに関連するクイズを1館1題出題するクイズラリー形式を採用していた。参加館園数は最大で21館（2009年）にも上った。関連行事として、博物館を展示解説付きで巡る「ミュージアムツアー」や、当館キャラクター「パンチの守」の共催館出張なども試行した。2016、2017年は当館の休館を機に、少数館を各館独自のプログラムを体験しながら回る「ミュージアム・ミッション」を実施した。体験内容はワークシートやシミュレーションなど多彩になり、各館の個性をより強く打ち出す形式となった。

クイズからミッションへ形式を変更しても変わらず重視しているのは、「博物館を実際に訪れ、自分の目で資料をみること」である。この事業に限らず連携事業全般をとおして、複数の「博物館」という場と、「資料（モノ）をよく観て考えてみる」という体験を重ねることで、参加者が自身の中に新たな視点や興味の種を見出すきっかけになることを願っている。

（泉山花江・非常勤学芸員）

［上から］

○ ルールブック兼スタンプ帖となる「ミッションマップ」と各年の記念品（2013-2016）

○ 各館のクイズやミッションをやり遂げるとスタンプ押印（2017）

○ ボーナスステージ「動物園バックヤードツアー」は全てのミッションを達成した者のみ応募できる人気企画（2016、2017）

体験型行事

教育普及事業　博物館と聞いて多くの方が思い浮かべるのは、展示室の風景ではないだろうか。展示される「モノ」を通じて学ぶ場、それが博物館であることは確かだ。しかし博物館は「見る」以外にも「参加する」「体験する」学びの場でもある。私は博物館の中で企画普及課という課に在籍しており、教育普及事業をその仕事としている。来館される方に「かながわの文化と歴史」を伝えるという意味においてはもちろん「展示」も教育普及事業にあたる訳だが、企画普及課では展示以外のもの、具体的には講演、講座、体験教室といった行事や学校に対する学習支援などを教育普及事業として行っている。展示を見るという目的以外に、講座等に参加するため博物館に来館される方も多くいることと思う。

体験型行事　教育普及事業の中でも体験型の行事についてお話したい。博物館では子ども向けから大人向け、その内容も特別展の開催期間中には特別展のテーマにあわせたもの、夏休みの時期には子どもの学習支援を目的としたもの、といったように様々な体験型の行事を行っている。展示事業を休止することとなった平成 28・29 年度も教育普及事業は休むこと無く続け、博物館近くの仮事務所を会場に勾玉づくり、古銭と土器片の拓本とり、浮世絵を題材とした双六と摺り体験、張り子のだるま作り、組紐体験、「背守り」の制作を体験型行事として行った。さらには外部へと会場を移し、キリンビール横浜工場では工場見学を、小田原市郷土文化館分館 松永記念館では茶道体験とあわせて中世と現代のお茶の飲み比べを行った。

こうして実施してきた行事を振り返ってみると、ものづくりを行うもの、味を感じるもの、見学を行うものと「体験型行事」といってもその「体験」の方法は様々だ。どのような体験の方法で行事を組み立てればより参加者に学びを持ち帰ってもらえるか、日々頭を悩ませながら行事の準備をしている。

「体験する」博物館へ　正直に言えば、体験型の行事は準備の段階から行事本番まで手間、暇、人手が必要な上、材料費など座学に比べて費用もかかる。しかしながら行事への参加人数は制限され、単純に「来館者数の増加」を開催の目的とした場合には、全く割にあわない事業といえるかも知れない。しかし、こうした事業を続けるのには理由がある。それは、体験を通じて「見る」だけでは気づかなかったような新たな発見、興味を参加者の中に生み出すこと。このことが次の学びへ、さらには展示内容のより深い理解へとつながっていくと考えているからだ。

平成 30 年度に博物館は再開館し、展示事業が再開される。もちろん体験型のものに限らず様々な教育普及事業も続けていく。来館される皆様には、展示を「見る」だけでなく、是非「参加する」「体験する」場として博物館を利用していただきたいと思う。　（濵本明海・非常勤学芸員）

［上から］
○ 体験教室「まが玉をつくろう」（2017）
○ 体験教室「『背守り』―子どもの健やかな成長を願うもの―」（2017）
○ 体験教室「お茶くらべ」（2017）
○ 体験教室「張り子のだるまを作ろう」練習風景（2017）

営業部長「パンチの守」

当館には営業部長がいる。展覧会を盛り上げたり、イベントで挨拶まわりをしたり、お客さんを歓迎したり、Twitterで博物館の活動や裏側の仕事を紹介したりと日々精力的に活動する部長、その名もパンチの守。2013年に営業部長として活動を開始した。

パンチの守って？　幕末から明治開港期にかけて横浜を中心に活動していたイギリス人の報道画家チャールズ・ワーグマン（1832～91）が、横浜居留地で発行していた風刺誌 *THE JAPAN PUNCH*（1862～87年刊）の誌面に多く描いていたキャラクターが「パンチの守」である。ワーグマンの分身として描かれており、西洋人風の顔つきで大きな鼻をもった人物が丁髷を結い、裃、袴を着る。

当館営業部長への抜擢の理由には、当時からの横浜のワールドワイドな雰囲気をよく伝えられることや、当館が *THE JAPAN PUNCH* はもちろん、ワーグマンの絵画作品やその弟子である五姓田義松らの作品も多く所蔵していることなどの理由が挙げられた。そして2013年11月3日の無料開館日にデビュー。以来、継続的に多方面の活動を展開している。

様々な営業活動　パンチの守の現在の主な活動は、博物館イベント時の盛り上げ役、お客様のご案内、Twitter等を通じた広報の他、地元、馬車道から関内を中心に街頭で挨拶まわりをすることもある。あるいは他団体が主催するイベントに招待され他のキャラクターらと親交を深めつつ博物館のPRをしたりと多岐にわたっている。活動を開始した頃には、その「あまり可愛くない」風貌から怖がられることも少なくなかったが（赤ちゃんを泣かせてしまったことも何度か…）、最近では少しずつ認知度も上がり、お声がけいただくことも多くなってきた。ありがたい限りである。

当館ウェブサイトではパンチの守の活動の予定を掲載しているので、ぜひチェックしてみて欲しい。またパンチの守の誕生については『神奈川県立歴史博物館だより』197号に記事が掲載されている。

それでは最後に本人から一言。　（千葉 毅・学芸員）

おほん。皆さん、ワターシがパンチの守。当館の営業部長を仰せつかっておる。よろしくなのじゃ。日々、博物館の活動や魅力を皆さんにお伝えすべく奔走しておる。ワターシが以前日本にいたのは1862年から1887年頃じゃが、その頃も日本の色々な様子を海外に伝える仕事をしておったから、情報を伝えるのは昔から得意なのじゃ。そうそう、ちょうど横浜正金銀行が出来た頃じゃな。まだ今の博物館の建物ではなくて洋風の少しちいちゃな建物だったと記憶しておる。せっかくじゃから昔話でもしたいところじゃが、あまり時間もないようなので、聞きたい方はワターシのTwitterを見るのじゃ！

それでは皆のもの、これからもよろしくお願いしますのじゃ！ 町でワターシを見かけたらぜひ声をかけて欲しいぞ。

それから子どもたち！ 怖がらなくてよいのじゃぞ！

［上から］
○ チャールズ・ワーグマンによる *THE JAPAN PUNCH* の表紙（1885）
○ デビューの日、馬車道まつりにて（2013）
○ 展示をみるパンチの守（2013）
○ パンチの守が投稿する当館Twitter（2014～）

ボランティアのこれまでとこれから

設立の経緯と沿革　神奈川県立歴史博物館ボランティア（以後県博ボラ）は、1995年の神奈川県立博物館の再編整備にあたり、「親しまれる博物館をめざし、学びながら社会参加をする場の提供のため、展示等の解説を行い、県民への奉仕活動を行う」ことを目的とし、1997年度から展示解説を行うボランティアとしてスタートした。1998年度からは、情報処理を担当するボランティアの導入を開始し（2014年度から休止）、より多くの人へ生涯学習の場を提供するなどの観点から、2001年度から活動年数を最長5年とした。また、2010年度からは、これまでの生涯学習の要望に応えるだけでなく、より多くの人々に博物館活動への参画をすすめるため、行事補助にも活動内容を拡充した。

活動内容　展示解説ボランティア（以後解説ボラ）は、展示資料の看視を行いつつ、来館者の要望に応じて特別展と常設展の案内・解説を行っている。行事補助ボランティア（以後行事ボラ）は、各種行事の際の会場の整理や受付等に加え、体験型行事の際は制作補助を行っている。また、展示への理解を深め活動に役立てるため、館側からは展示に関わるテーマの研修会や、行事ボラが制作補助を行う際の勉強会も行っている。特に行事ボラの勉強会では、事前に行事内容をレクチャーすることで円滑に行事運営が可能となることの他に、様々な意見が出ることで、より充実した行事を実施することが可能となっている。

運営とボランティア会　解説ボラは、曜日ごとに活動班を編成し活動している。それぞれの曜日班ごとに、2名の幹事を選出し、幹事会を構成し、会長・副会長などを選任して、ボランティア会（以後ボラ会）として組織的な活動を行っている。ボラ会と館とは、月に一度の幹事会に館側が出席することで相互の連絡や意見交換を図っている。

これからについて　私がボランティア担当になった2012年、常設展示室の解説マニュアル作成が2010年から引き続き行われていた。この解説マニュアルは、7～8名の解説ボラから構成されるワーキングチームがさらに2組に分かれて案を作り、その案を基に討議してどちらかの案を採用する。ワーキングチームが議論しつくした案をさらに館側と一緒に議論し作り上げていく。最初の会議に出た時には、ワーキングメンバーの勉強量と、自分たちで解説の「幹の部分」を作り上げるのだという強い思いに圧倒された。ボランティア活動を通じて自分自身を高めていこうとする姿勢は、まさに博物館を場とした生涯学習の実践であり、そのことを実感できた時間だった。また、現役ボランティアはもちろんのこと、卒業したボランティアも「いつでも館を助けるよ」と言ってくれ、真摯に当館のことを考えてくれている。これからも、県博ボラに引き続き博物館の顔として活躍していただけるよう、そしてこれまで以上に愛される博物館になれるよう、館側とボラとで協力してより良い館運営とボラ活動の拡充につなげていけたらいいと思う。

（田辺可奈・非常勤学芸員）

［上から］
○ ボランティア館外研修（2013）
○ 展示解説ボラの活動の様子（2014）
○ 行事ボラの勉強会の様子（2014）
○ 行事ボラの活動（まがたまづくり）（2014）

展示解説ボランティアの活動

展示解説ボランティアはその名のとおり、博物館内の展示資料を解説するのが主な業務である。ボランティアになるには、年に 1 回開催される博物館入門講座を受講し、その後書類選考、面接を経なければならない。活動開始前に 2 ヶ月かけて研修を受け、それが終わると各班に配属されてようやく活動が始まるのである。

活動内容は、常設展示室を見学する来館者の質問に答え、また解説が必要であれば、その都度対応する。平日は遠足や修学旅行等で来館する生徒や、ツアーで訪れる団体などに解説をする機会が多い。また、特別展開催期間中は 1 日 2 回、ボランティアが指定の時間に特別展示室で解説を行う。常設展、特別展どちらも展示資料や歴史の知識が無ければ解説は出来ない。常設展は配属前の研修でカバー出来るが、特別展は開催初日から勉強会と称して担当学芸員の展示解説を聴き、それに沿ったかたちで後日ボランティア自身が解説する。特別展開催の度に新たな知識を定着していかなければならないという苦労もあるが、皆熱心に取り組んでいる。

業務は展示解説だけでなく、案内、応対、看視等々、活動は多岐にわたる。言うなれば、館内で最も来館者と接する機会が多いのが展示解説ボランティアであり、来館者と館を繋ぐ架け橋となる存在と言える。その他にフォローアップ研修と言う、数ヶ月に一度各分野の学芸員による、常設展示資料について深く掘り下げた講義を受けている。生涯学習という観点から見ても、当館の展示解説ボランティアは常に学習に余念が無い。

博物館以外での主な活動として、館外研修を年 2 回実施している。館外研修では他博物館、寺社、史跡などを一日かけて巡る。歴史の知識を更に深めるのはもちろんのこと、県博以外のボランティアの方や、学芸員の解説に耳を傾け、自身の解説に役立てることが目的である。また、ボランティア同士の親睦を深める意味も兼ねている。

以上、簡単に展示解説ボランティアの活動を説明してきた。昨今、博物館は全国的に整理・減少傾向にあり、博物館にも経営が求められる時代になってきている。ボランティアも来館者に対する更なるサービスの提供、楽しめるような工夫や環境づくりをしていく必要がある。現在ボランティアは解説をメインに展示室内で活動をしているが、それ以外にも出来ることはたくさんあると思っている。来館者は展示を見る方ばかりでなく、ふと立ち寄ったり、ライブラリーを利用したりと様々な目的をもっている。そうした展示室の外に居る方々が困っていたり、わからないことがあったりした時に手助け出来ることがあればサービスの向上、ひいては来館者の増加に繋がるのではと期待している。

（新井貴之・2017 年度ボランティア会会長）

［上から］

○ 常設展示での展示解説

○ 特別展「陸にあがった海軍」での展示解説（2015）

○ ボランティアルームの扉（2018）

○ 再開直前のボランティアルームの室内（2018）

デザイナー

デザイナーは博物館・展覧会を広報するため、見せるためにあらゆるデザインをする。一般の方の目に触れ、記憶にとどめ、来館していただけるようにデザインをするのが大きな役割であるが、デザインをする上で大切にしていることがある。それは特別展などを担当する人の「想い」である。

博物館との出会い　1997年に開催された特別展「横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀」が当館学芸員との出会いである。今は故人となった横田洋一学芸員の元、資料、研究、展示に対する熱い想いを近くで感じさせていただいた。その「想い」は故人だけではなく全ての学芸員に共通するところであり、分野や方向性、視点によって実に様々でなおかつ熱い。話を重ねていくにつれ、展覧会の面白さが頭の中で形になり、広報物をデザインしていくのである。しかし、想いを感じ取り盛り上がってしまい、冷静な判断ができなくなる場合がある。そんなデザイナーを冷静にさせてくれる要素が当館には備わっていた。館長チェックである。前館長の西川杏太郎氏は、ご自身の感性に正直な方で、決まり切った好みだけではなく、毎回違った視点で展覧会に沿った感想をズバッと述べられた。厳しい意見を投げかけられることもあったが、デザイナーとして大切にしたい点や意見をぶつけると、それに対してもしっかりと耳を傾けてくださった。特別展の度に、前館長との緊迫した意見交換が繰り返された。数年後、「あなたの好きなようにおやりなさい」と言われた時は嬉しさの中に若干の寂しい物足りなさを感じたのをよく覚えている。

現在に至るまで多くの展覧会を通して、デザインが必要とされるメディアをどのように博物館で活用できるかを考え続けている。視点の違うそれぞれの意見を形にしていくのは緊張感があり、試行錯誤しながらできあがったデザインは、ワクワク感を持って広報として発信できるのである。

継続し続けること　当館が今までと変わりなく継続していかなければならないことは、個性豊かな学芸員による強力なマンパワーと専門性の強い展示を外に向けて発信し、神奈川県博の面白さを広報するためにヴィジュアル・コミュニケーションを駆使することである。一般的に博物館では専属のデザイナーが在籍してヴィジュアルを作り上げていくことは少なく外注に頼っているのが現実で、当館は稀なケースであり、デザイナーが在籍することの強みを訴え続けることも今後に向けた重要な役割の一つと考えている。馴染みが薄くなりがちで難しく堅いイメージの博物館での展覧会企画も早い段階から開催直前まで、担当者と向き合い、変化していく熱い「想い」を、わかりやすくデザインすることで博物館を身近に感じてもらいたい。テクノロジーの進化が目覚ましい今、博物館が一つのメディアとして様々な情報を発信する際に、デザインの役割はよりいっそう大きくなっていくことだろう。ヴィジュアル・コミュニケーションは博物館を構成する大切なアイテムなのだと感じていただけるよう「想い」を大切にデザインし続けていきたい。

（野島愛子・非常勤デザイナー）

［上から］
○ 試行錯誤のうえ決定されるチラシデザイン
○ 作業机（2018）
○ 2000年以降に発行された図録たち
○「繭と鋼」展の導入展示室で、壁に写真を貼りポラック氏の書斎を再現（2014）

写真技師

はじめに　神奈川県立歴史博物館には、他の博物館にはほとんど見受けられない、一つの特徴がある。それは、職員として内部にデザイナーと写真技師を抱えていることである。デザイナーについては別の項目で取り上げられているので言及を差し控えるが、ここでは写真技師が担当する職務とこれからの展望について述べたいと思う。

写真技師の職務　現在、当館の写真技師は写真室に所属し、おもに写真の撮影と画像処理、そしてデータの保存とバックアップなどの業務を行うこととなっている。撮影する対象はさまざまで、各学芸員から依頼のあった資料や、チラシやポスターなどの広報用のイメージ、また当館が主催する講座の風景写真など、多岐にわたる。その中で最も多いのは、年に 4 回ほど開催される特別展のための撮影である。当館では、通例として展覧会ごとに図録を刊行しており、数百カットもの写真を短期間で撮り下ろすこともあれば、数日をかけて遠方まで出張撮影を行うこともしばしばである。画像処理については、個人の主観が入らぬよう細心の注意を払っている。使用するモニターに対しては、カラーマネージメントの機器を用いて管理を行い、データと資料本来の色が掛け離れることのないように調整をしている。先の二つの仕事に対し、軽んじられやすいのがデータの保存とバックアップであるが、実はこれこそが最も大切な仕事であると私自身は認識している。ここで注意しなければならないのは、データそのものは実体を持っておらず、操作を一つ誤ると瞬時に消えて無くなってしまうということである。このことを未然に防止するため、撮影したほぼ全てのデータは、複数のハードディスクとサーバー、光ディスクに分散して保存し、仮にオリジナルのデータが消失しても他から復旧できるように態勢を整えている。

これからの展望　今後の課題は、日ごとに増えてゆく画像データをどのように管理・運用し、後世に伝えてゆくかである。当館では 2017 年、フィルム関連の予算が撤廃されるのを機に、中判デジタルカメラのシステムを導入した。現在は、PhaseOne のデジタルバック「IQ260」とカメラボディ「645DF+」を主軸にし、もう一方で Nikon の「D4s」という 35mm のデジタルカメラを併用している。ちなみに、IQ260 で撮影した画像を RAW から TIFF 形式に変換して保存すると、その容量は 1 カットあたり 180MB 近くにもなる。このため、ハードディスクの更新やデータの移行作業は以前より頻度が増すことが予想されるが、今では機材の進歩により受ける恩恵の方がはるかに大きいと実感している。2018 年 4 月、2 年におよぶ休館を経て、当館はいよいよ再スタートする。いま文化財を扱う写真に求められているのは、形態や情報を忠実に写しとることだけではなく、その表層からは読み解くことのできない奥行きや手触りまでを感じさせることなのではないだろうか。私はこの職にある限り、写真を守り伝えながらも、多くの方々に特別な視覚体験を届けられるよう努めてゆきたいと考えている。

（岸山浩之・非常勤写真職）

［上から］

○ 中判フィルムカメラ「Mamiya RB67」（2012 年ころまで使用）

○ 大型フィルムカメラ「Sinar P2」（2017 年ころまで使用）

○ 35mm デジタルカメラ「Nikon D4s」（2016 年から導入）

○ 中判デジタルカメラ「PhaseOne 645DF＋」/ デジタルバック「IQ260」（2017 年から導入）

○ 特別展「陸にあがった海軍」撮影風景（2014）

写真資料

情報資料課の写真資料　1967年に神奈川県立博物館が開館してからの50年間、写真資料の収集や整理、保存業務を継続して行っている。現在、情報資料課が所蔵する写真資料は、収蔵資料等を撮影した写真、県内の民俗行事を記録した写真、館行事を記録した写真、外部機関からの依頼で撮影した県内文化財の写真など多様である。これらの写真は、収蔵資料写真を中心に、収蔵資料管理システム（データベース）に登録することで体系的に管理・保存しており、その総数はフィルムが約11万9千件、デジタルデータが約1万7千件となっている。

所蔵フィルムのなかで、一番古いフィルム群は、開館年度に開催した特別展『近世洋風画名作展』（1967年10月12日～11月5日）の為に撮影したもので、カラーフィルム100件、モノクロフィルム345件となっている。当時撮影した写真はモノクロフィルムが多く、撮影した資料を確認することが困難であるため、コンタクトプリントを作成し、ファイルに整理した。

その後、神奈川県立歴史博物館として再編された1990年代半ばからは、カラーフィルムの利用が増加し、近年は、デジタルカメラの性能向上や、フィルムメーカーの製造ライン縮小などにより、デジタルカメラでの撮影が増加している。そのため、2011年度からは従来行っていたフィルムのデータベース化に加え、デジタルカメラで撮影したデータのデータベース化も開始した。

現在は、デジタルカメラで撮影したデータを直接ハードディスクに保存し、写真資料の管理や保存状況の確認もパソコンのディスプレイ上で済ませている。この50年で写真資料の利用方法や保存方法も大きく変化している。

これからの保存　フィルムを良好な状態で保存するためには、それに適した環境で継続的に保管する必要がある。当館でも館内にあるフィルム専用の収蔵庫内で、温湿度を一定に管理した状態で保管している。1995年以前の県立博物館時代には、現在「写場」（写真を撮影する場所）として利用している場所に暗室やフィルム保存の機能も集約されていた。常温でのフィルム保管が行なわれるなど、フィルムの長期保存に適した保管状態でなかった。歴史博物館への再編時に、フィルムの専用収蔵庫での保管体制が整備されたが、これは当時のカメラマンや学芸員をはじめとする職員の尽力や理解によってはじめて実現したことである。

このように、開館当初からの写真資料が、現在においても良好な状態で利用可能なのは、歴代担当者の努力によるものである。これまでの実績をもとに、貴重な写真資料を後世に伝えていくことが課題であり使命といえる。また、デジタル化を含めた新しい状況への対応も急務となっている。今後も博物館が所蔵する写真資料を、50年後の人にも活用してもらえることを目指して保存環境を整えていきたいと思う。

（檜皮千穂・非常勤資料整理員）

［上から］
○ コンタクトプリントのファイル
○ フィルム収蔵庫の様子
○ 引出の中
○ 引出の中　その2

ミュージアムライブラリー

ミュージアムライブラリー（以下「ライブラリー」とする。）は横浜正金銀行時代に支配人室とその書記室があった場所である。神奈川県立博物館が 1995 年に神奈川県立歴史博物館となった時、フリーゾーンの一角に設けられた。

ライブラリーは、来館された皆様の自己学習を助ける場としてレファレンスサービス、図書、雑誌、情報システム（デジタルミュージアム）等の利用を提供している。図書は、博物館の展示をご覧になった方が、神奈川の歴史や文化についてより深く知りたいと思った時に役立つものを中心に収集している。また、当館の研究活動を広く普及するための図書、例えば特別展に関する図書も収集している。特別展は、学芸員が調査研究したことをわかりやすく展示したものなので、その内容に関連した図書を収集している。その他、調査研究のための資料（他の博物館、美術館等で発行している研究紀要や調査報告書、図録等）、そして博物館活動（講演会、子供向けイベント等）に関する図書も収集している。このようにして、博物館の図書室として特色のある蔵書の構築を行っている。

図書等を配架している場所はライブラリーの他に書庫がある。書庫は一般には公開していないが、馬車道側入口の 2 階で、ドーム（「エースのドーム」と呼んでいる。）の真下にあたる。銀行時代には貴賓室だった所で、外国からのお客様のために旅行案内や汽車や汽船の時刻表など様々な種類の図書があった。このたび休館するため書庫内の図書や雑誌を全部外に出し、書架も撤去してみるとたいへん広々とした部屋だと感じた。壁のカーブや窓の作りにもおもむきがある。書庫の隣の部屋が図書整理室で、収集した図書や雑誌、図録のデータ入力、装備等の作業をしている。特に、皆様が利用しやすいように正確に書名、著者名等の書誌データを作成している。2017 年 3 月 31 日現在で、図書 19,725 冊、図録 15,262 冊、雑誌は一般誌、博物館や大学で発行している研究紀要等を合わせて 2,628 タイトルを所蔵している。実はこうした資料のほとんどは公開していない書庫にあるのだが、ライブラリーだけでも天井に届くほど書棚いっぱいに資料が並んでいる様は壮観である。

ライブラリーの場所は、正面玄関から入った時には右手の廊下をまっすぐ、馬車道口から入った時には左に進んだ最初の角の所にある。少し控えめな佇まいであるうえ、博物館自体重厚な造りで廊下も少し暗く、初めての方は見過ごしてしまうかもしれない。今後は表示の工夫などにより、もう少し皆様の目に留まるようにしたい。また、OPAC（オンライン資料検索システム）も公開の予定になっている。これにより、インターネット経由でご自分のパソコン等から当館所蔵の図書や雑誌が検索できるようになる。そのためにもますます正確な書誌データを作成することが必要である。

博物館にお越しの際は展示の後に（もちろん前でも）ライブラリーへお寄りいただきたい。私たちは皆様をにこやかにお迎えしたいと思う。

（鈴木隆雄・非常勤司書／山梨いずみ・非常勤司書）

［上から］
○ ライブラリー（リニューアル前）
○ 書庫内部（搬出作業中）（2016 年）
○ 書棚を解体中の書庫（2016 年）
○ ライブラリー書架

｜管理課｜　博物館管理の金の糸目

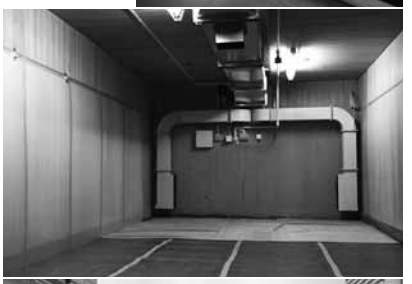
とある地方自治の学者の方がいうには、行政マンに求められるものはコスト、スピード、競争。特にコスト意識が重要だそうだ。最小のコストで最大の効果を得ることは民間でもお役所でも大事。昔のお役所は税金を湯水のように使うと揶揄されていたが、いまは財政状況が厳しいこともあり、ほとんど(？)そんなことはない。それどころか、予算がないからコストを削減する、さらには予算がないから何もできないという、本末転倒なコスト意識。私も過去にいた施設で温暖化防止と省エネを建てまえにエアコン使用の制限に汗を流してきた。

ところで、子供のころ、アンデス文明は文字を持たないがために四大文明よりも高度な文明とはいいがたいと教えられたが、文字を超越した meta-literate というか、テレパシーとか「想い」とかで伝わる「高度」な文明があってもいいじゃないかと思ったことがある。また、ムー大陸は何も残されなかったために認知されず、しかし実はそこにも高度な文明が存在していたかもしれないと思っていたこともある。

さて、そんな私が歴史博物館に着任したのは空調設備等改修工事により休館に入る直前。最新の空調機器は効率的で大幅な節電に繋がると考えていた。ところが、工事前は運転不能なところも多く、一方、改修後はフル稼働が可能なことから、逆に電気量の増える可能性があるとのこと。そもそも、歴史博物館の空調設備改修工事の主たる目的は来館者に快適に観覧していただくためではなく、収蔵資料の保管環境をよりよく保つため。収蔵庫や展示室にある博物館資料を安定的に保存するため、温湿度を適正に管理することに対して金に糸目はつけない。これって本末転倒なコスト意識に陥った私にとってはコペルニクス的なことだった。確かに文化遺産が発見されない故にその文化が認知されないムー大陸と同じように、歴史博物館の資料の一部が後世に引き継がれず、その文化の存在が否定されたとしたら一大事だ。なにをどれだけ残すかは難しい問題だが、残すべきものを劣化させずに保管し受け継いでいくことは博物館の重大な使命であり、そのために最大の努力を注ぐことは当然のことかもしれない。

とはいえ、限られた予算の中で、歴史博物館の運営を行っていかなければならない。現在、平成 30 年 4 月下旬の歴史博物館再開に向けていろいろな準備を行っている。空調工事の予算はあっても、そのほかの施設を改修し、展示や施設を新しくする予算はほとんどない。それでも、再開を待ちわびて訪れていただける方に、少しでもきれいになった、便利になった、見やすくなったと言っていただけるよう、無い予算と知恵を絞りに絞って準備を行っている。

マヤ文明に meta-literate があったかどうかはわからないが、歴史博物館の収蔵品にはたとえキャプションに書かれなくても、学芸員や関係者の想いが込められて次の世代に受け継がれていってほしい。そして、今回の工事やそれに伴う引っ越しなどに苦労した我々行政マンの想いも、ほんの少しでいいので受け継がれていけばいいなぁと思いつつ、開館に向けた準備を行っている。　（勝又 隆・管理課長）



［上から］
○ 新しくなった収蔵庫裏の空調配管（2017）
○ 新しくなった収蔵庫内の空調（2017）
○ 新しくなった屋上の空調機（2017）
○ 改修工事中の展示室（2017）

博物館職員になった「あなた」――行政職からみた博物館

博物館と行政職　本県行政職の担任事務は、施策の立案から内部管理事務まで非常に幅広い。また、人材育成や不祥事防止等のため、概ね 3 ～ 4 年で転勤する。県立博物館にも無論、管理や企画など行政職の事務がある。ある日、行政職の「あなた」は、専門的知識など持ち合わせないが、人事異動で歴史博物館職員の一員となり、学芸員等専門職とともに館運営の一翼を担うこととなった。そして、ほどなく博物館ならではの世界に気づく。

利用者あっての博物館　年間約 300 日超の開館日。老若男女様々な方が来館されるが、すべて生身のお客様。「あなた」は、公権力を前提とした仕事には慣れていても、お客様ファーストで考え、実践した経験に乏しい。『いらっしゃいませ』『ありがとうございました』と言えるには少々時間がかかった。一方、「県民本位」を実感できる貴重な経験となった。

展示は急に変えられない　「あなた」は、予算の裏付けもなく既に 2、3 年先の特別展の企画がほぼ確定している事に驚く。そう、準備には 3、4 年はかかるのだ。単発イベントの企画・実施とは大違い。また、常設展示も、資料の劣化抑制、新知見の反映、マンネリ化防止などのために展示替えは不可欠だが、経費・労力面から容易ではない。多数ご来館いただくには、タイムリーなテーマ、充実した展示、効果的な広報…。何事も先を見越して、学芸員らと入念に準備しなければならない、と思った。

博物館は休まない？　来館者にとって博物館といえば展示室。しかし、バックヤードには、膨大な資料と専門図書が保管されていた。そのため、24 時間防犯・空調が完備。閉館後、収蔵庫・展示室というゆりかごで眠りについた資料たちのために、必要な機器類は ON のまま。委託警備員も常駐していた。

資料あっての博物館　資料は歴史や文化をモノがたる貴重な県民の財産。また、当館旧館建物も国指定の重要文化財。「あなた」は、膨大かつ多様な素材の資料群や旧館建物を眼前にして、《未来に毀損なく確実に伝える事が博物館最大の使命》を実感。ただ、清浄かつ適切な温湿度を保つ収蔵・展示空間の維持には、多額の運転経費が必要だ。しかも、老朽化によりその設備自体が危機的状況。機器更新は急務だが、財政難の折どうすれば庁内外の理解が得られるか頭を悩ます事となった。来館者のために展示の充実も重要だが、資料が毀損しては話にならない。

改修、そして再開　多くの利用者や関係者の方のご理解、ご協力を得て、約 2 年の臨時休館、資料・事務室の一時移転も行い、幸いにも空調機器や屋上防水の更新などが実現できることとなった。これで、ひとまず来館者や資料にとって快適な環境が整う。4 月末には常設展・特別展、図書室、喫茶、売店等すべて再開予定。ボランティアの方々も待ってくれた。やっとリニューアルする神奈川の歴史と文化の一大拠点。「あなた」は、専門職とともに工事の進捗を睨みながら、円滑な館再開とフル活用を目指し、引越しや記念式典など諸々の準備に追われていた。　（竹内廣一・2013 ～ 2016 年度副館長）

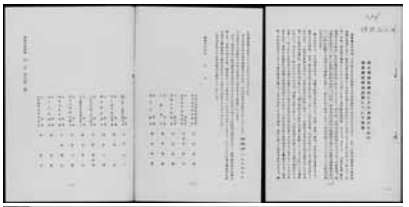
［上から］
○ 更新された屋上防水シート（2018）
○ 恒例となった無料開館日での屋上ドーム公開（2015）
○ 引越し準備中の博物館バックヤード（2016）
○ 再開に向けて準備中の宇徳ビル内仮事務所（2017）

神奈川県博物館協会

協会の一員として　神奈川県博物館協会は、神奈川県内に立地する博物館等が集う任意団体であり、2015 年に創立 60 周年を迎えた。2017 年 4 月現在、加盟館園は 97 館園を数える。「博物館施設相互の連絡を図り、博物館活動の新興に努め､学術文化の進展に寄与する」ことを目的として、年 1 回の『神奈川県博物館協会会報』の発行や年 5 回程度の研修事業が、近年の主な活動である。当館との関係で重要なことは、当館建設の陳情を協会として 1961 年に申し入れている点である。その意味で、当館は協会の尽力により誕生したといえる。そして 1980 年に当時の当館館長が協会長に就任したのを機に、当館館長職が代々協会長に就任し、この協会長就任にあわせて事務局も当館に移り今に続く。さて、同様の協会は都道府県に存在するものの、群を抜いて神奈川は活発だと評価される。その要因のひとつには、実働部隊である事務局ならびに普及事業関係の企画運営にたずさわる幹事たちの熱心さが挙げられる。時期により過多はあるにせよ、近年は 15 名で構成されている。県立博物館、そして県立歴史博物館時代を通じて、自然系を除き当館からは延べ 25 名の幹事が参加してきた。事務局員も延べ 60 名を数え、協会を支えてきた。こう歴史を振り返ると、当館建設に端を発したものの、現在では当館が加盟館園のひとつながら、同会の屋台骨を支えている印象をうける。だが実際には、仕事としてたずさわるばかりでなく､時には研修会に参加して自ら楽しみ､加盟館園の方々と交流を深める姿に、同会の真価が示されているといえる。

これからの展望　創立 60 周年をひとつの契機として、協会の性格は大きく変わり始めた。これまでは純粋な親睦団体として活動してきたが、これからはより高度な機能が期待されてきたと感じている。具体的には目に見える機能、目に見えにくい機能の二種である。前者は、加盟館園の入館者数等のアップにつながる試みである。従来同様に、各種研修事業で加盟館園職員のスキルアップに努めるばかりでなく、また簡易な印刷物ばかりでの広報事業にも限界を感じ、より具体的な支援ができないかと模索し始めた。2016 年度には具体的に専用 web を大幅に刷新し、多方面への情報提供を可能にした。加えて、年 1 回配布する『ミュージアムマップ』を改訂し、より親しみやすく、来館者増を促す工夫を前面にした編集方針に切り替えた。長年続く不景気による来館者数の低減を、側面的に支援する試みである。後者は、頻発する広域災害等に対応するための防災対策である。2016 年 4 月、総会において神奈川県博物館協会総合防災計画が了承された。それに伴い救済活動要綱が、翌年には積立金に関する要綱が整備された。加盟館園が万が一被災したときに、被害のなかった館園が相互に救済しあうための制度である。その仕組みづくりの中核を担ってきたのが、当館である。以上、不可分な関係の当館と協会が、相互に連携することにより、さらに豊かな博物館活動が展開されると期待される。

（角田拓朗・主任学芸員）



［上から］

○ 博物館協会会長ほかによる県知事への県立博物館建設の陳情書草稿（1961）

○ 2014 年度永年勤続表彰（2014）

○ 第 2 回防災訓練の様子（2017）

○ 情報交換会（2017）

○ 大磯研修会（2017）

神奈川県文化財協会

設立の経緯　神奈川県文化財協会は1954年11月1日に結成され、神奈川県教育庁社会教育課内に設置された。翌年には機関誌『かながわ文化財』が発刊された。協会の設立の目的は初代会長古宇田實によれば「多様の文化財の研究、啓蒙や地方文化団体相互の連絡調整を団る」(『かながわ文化財』1)ことにあるという。そして、その目的を達成するために、文化財を保存する郷土館を設けることと、それをまとめるための県の中央博物館建設の重要であることが示されている。

県立博物館設立　1961年4月に会長藤田経世、副会長園田敬男の体制に代わると、博物館設立の機運が高まりを見せ、同年6月、藤田会長らが県議会議長に「県立博物館設立についての請願」を提出し、内山岩太郎知事に陳情した。協会の役員がほぼすべて県の文化財専門委員であったこともあり、県立博物館の設立準備委員に協会のメンバーが多く名を連ね、協会の大きな目標であった中央博物館開館が達成されることとなった。

展覧会を多数開催　藤田会長の下では、1962年から県内の各地で展覧会をおこなった。主な会場はデパート(高島屋、松屋等)の催事場、有隣堂ギャラリー等であった。かながわの歴史展といった全11回に及ぶシリーズ展示から、加藤土師萌や今村紫紅等の神奈川ゆかりの作家展、ペルシャ、中国、オリエント等の文化を紹介する海外展等、多種多様な展覧会を県内で開催したことは特筆すべきである。しかし、デパート等で重要文化財の公開ができなくなると、展覧会の出品資料に制約がかかるようになったため、徐々に規模や内容が縮小されていった。1974年には、それまで園田副会長宅にあった事務局を県立博物館内にうつし、博物館再編後も県立歴史博物館内におかれ現在に至っている。

展覧会から見学会へ　1981年、三上次男が会長に就任すると、展覧会の開催が一旦中止となった。この頃から展覧会から見学会や講演会の充実をはかることにシフトチェンジし、その流れが現在まで続いている。以降の会長は、貫達人、日野一郎、菅原壽雄、伊東秀一、納冨常天が歴任し、2011年から現職の八幡義信に引き継がれている。

今後について　現在は県立歴史博物館で開催される特別展の見学を中心に、貸切バスツアー、鎌倉見学会等、年6～7回の見学会をおこなっている。年度に1度『かながわ文化財』を編集・発行し、見学会の体験記を回数分掲載している。その他の誌面には投稿論文、新指定の神奈川県指定重要文化財の紹介等を掲載し、神奈川の文化財の普及に努めている。2019年に協会は65周年を迎えるが、会員の減少による会費の減収や会員の高齢化、ニーズの変化、事務局の負担等の問題を解決することが重要な課題となっている。博物館のサポーターのような役割をにないながら、県の文化財への理解を深めるために活動が続けられている。　(神野祐太・学芸員)

[上から]
○ 総会のようす(2012)
○ 鎌倉市永福寺址の見学会(2015)
○ 静岡県三嶋大社での見学会(2017)
○ 機関誌『かながわ文化財』

column

神奈川県博
開館 50 周年記念プロジェクト

神奈川県博開館 50 周年　2017 年 3 月、神奈川県立歴史博物館の前身である神奈川県立博物館の開館から 50 周年を迎えました。神奈川県立博物館が開館した 1967 年頃には都道府県立の総合博物館は全国的にも稀で（p.130 を参照）、当館はその先駆的存在として多様な試みを実践してきました。この 50 年間を振り返り、そしてこれからの在り方を見つめてみたいと思い企画したのが神奈川県博開館 50 周年記念プロジェクトです。

ただ、50 周年を迎えた 2017 年は空調設備改修工事に伴い休館中であったため記念展覧会のような催しは難しく、検討の結果、ウェブ上でいくつかのプログラムを展開していくことにしました。これまで当館に親しみ支えてきてくださった方々に感謝を込めてこの節目となる年をお伝えするとともに、これまで当館を知らなかった方々にも「神奈川県博」という存在を知ってもらえればと考えました。

〈みんなの神奈川県博アーカイブ〉と〈思い出分布図〉　まず、これまで当館に足を運んでくださった方々の当館に対する想いを聞いてみたいと考え、当館に関する思い出を募集しウェブ上で公開することにしました（みんなの神奈川県博アーカイブ）。ただ、それだけでは企画としてはやや新鮮味に欠けますし、ウェブに掲載された思い出を読んだ閲覧者の共感も得づらいでしょう。そこで、思い出を寄せてくださった人の場所を地図上に落とし「思い出分布図」を作ることにしました。「神奈川県博に思い出を持っている人が地球上のどんな場所に分布しているのか」を視覚的に表現してみたいと思ったのです。結果はどうでしょうか。ぜひ実際にウェブサイトでご覧頂きたいと思います。

神奈川県博のカケラ　当館で収蔵している資料や作品は、実は展示室だけではなく様々なところで活躍しています。街頭の案内板、商店街のシャッター、はたまたお菓子の包装紙などなど。それらは大切な「神奈川県博のカケラ」です。ウェブサイトではそんな「カケラ」たちを紹介しています。皆さんが生活する場所にも「カケラ」が隠れているかも知れません。ぜひ探してみてくださいね。

#のこしたい神奈川　神奈川県博の活動拠点は神奈川ですが、神奈川にある沢山の魅力の全てを当館がご紹介することはもちろん出来ません。また、魅力を感じるポイントは一人ひとり異なるでしょう。あなたが残していきたい、残って欲しいと願う神奈川の魅力は何ですか？ あなたにとっての「#のこしたい神奈川」を SNS で発信して下さい！

このプロジェクトのための特設ウェブサイトは、横浜デジタルアーツ専門学校の協力を得て、学生たちと共同で制作しました。学生たちと学芸員とで議論を重ね、素敵なウェブサイトが出来上がりました。次代を担う感性を感じながら、神奈川県博の 50 年のあゆみをご覧頂ければと思います。

特設ウェブサイト URL　http://ch.kanagawa-museum.jp/50th/

（千葉 毅・学芸員）

神奈川県博思い出分布図の一画面

ウェブサイト制作に向け議論する横浜デジタルアーツ専門学校の学生たち

特設ウェブサイトは
こちらの QR コードから！

県博回想録

神奈川県立博物館が文部省指定の科学研究費指定機関に認定されるまで

松島義章

［1967年～2004年・地学担当、生命の星・地球博物館、現・同館名誉館員］

神奈川県立博物館（以下神奈川県博）は1967年（昭和42年）3月20日の開館。それ以降3年ほど過ぎ博物館活動が軌道に乗った頃、先輩学芸員からぼつぼつ文部省へ科学研究費の申請をしたいので詳しい情報を集めるように言われました。早速関係大学や国立科学博物館などに問い合わせると、現在は大学が優先で博物館は無理であろうと言われ情報収集を中止しました。

暫く経過した1978年（昭和53年）2月、北海道立開拓記念館の学芸部長から博物館の研究費につき、突然の電話で神奈川県博はどの様な状況かの質問を受けました。その時、開拓記念館は文部省の科学研究費申請機関に認定されている旨を話されました。開拓記念館は神奈川県博より4年遅れて開館し、学芸員数も当館より少ないが、学芸員の研究成果が優れていて文部省は認可をしました。

早速、全国の自然系博物館で科学研究費申請機関となっている博物館を調べました。当時の自然系博物館で指定館は大阪市立自然史博物館、横須賀市自然・人文博物館と北海道立開拓記念館の3館のみでした。そこで科学研究費申請機関認定の手続方法等につき、急きょ文部省大学学術局科学研究助成課に伺いました。係長から現在は大学が優先で博物館は難しいが、申請することは自由です。認定される条件には①博物館が県の研究機関であること、②学芸員が研究職給与を受けていること、③ここ数年間の博物館活動を除く学術研究活動の実績を示すことが必要条件である旨を話されました。

早速、大阪市立自然史博と北海道開拓記念館へ文部省に提出した申請書のコピーをお願いしました。申請書は両館の申請書に沿った内容で作成することにしました。申請書の作成には大場達之、松島義章、横田洋一、川口徳治朗の学芸員、管理課と経理課職員の6名が申請書作成に当りました。

当時、常勤職員には博士号取得学芸員は無く、修士1名で他の学芸員は全て学士でした。認定条件の②と③は満たされていましたが、①については難しい。知事部局では農業試験場、林業試験場、水産試験場、衛生研究所、温泉地学研究所などは全て県の研究機関でした。当時、教育委員会の県立金沢文庫、県立鎌倉近代美術館、県立博物館は県の研究機関に入っていません。しかし、当館の自然系（動物・植物・地学）は、知事部局の研究機関のオブザーバーとして研究活動へ参加し、県土に関する自然誌研究の一端を担っていました。この点で博物館が神奈川県の研究機関の1つに位置づけられました。

出来上がった申請書は、教育委員会社会教育課を通して知事部局へ提出、神奈川県知事長州一二のもとで文部省文部大臣砂田重民へ提出することになります。

博物館から社会教育課へ提出前、館内で作り上げた申請書の内容確認のため、再度、大学学術局科学研究助成課へ伺い係長に内容を視て頂きました。持参した際、偶然にも学術審議員の先生が居られ、申請書につき質問を受けました。先生からは神奈川県博は良い研究成果を出されているので頑張って欲しいと励まされました。さらに、翌日に東京大学海洋研究所の教授が研究助成課へ立ち寄った際、神奈川県博の情報を打診され“良い研究成果を出ていると話しておいた”と後日話してくれました。このような経過を経て、1978年（昭和53年）9月16日付けをもって「文部省科学研究費補助金指定機関」に指定されました。

指定機関の内定が決まり神奈川県へ通知される前に、1979年（昭和54年）度文部省科学研究費の説明会が東京大学教養学部講堂で開かれるので、出席し説明を受けるよう連絡がありました。当日会場受付では1979年度から新たに神奈川県立博物館が加わる旨の連絡が届いていました。1979年度の科学研究費の説明に従い、殆どの学芸員が一般研究に申請書を作成提出しました。1979年度採択されたのは一般研究（D）4件（清水真澄、岩壁義光、神澤勇一、松島義章）となり、研究機関としてのスタート初年度となりました。

広い視野の博物館を目指して

清水眞澄

［1967 年～ 1982 年・中世美術担当、現・三井記念美術館館長］

私は、1967 年神奈川県立博物館（以下県博）が開館する 2 ヵ月ほど前に採用になり、15 年間在籍した。その間に展覧会などの業務、調査・研究、仲間とのコミュニケーション、博物館・美術館との関りなど多くのことを学んだ。私の人生の中で最も楽しく有意義な十数年であったと思う。

当時県博の展示・組織・活動は、人文系だけでなく自然系も、初代学芸部長だった歴史学者貫達人（ぬきたつと）先生（後に青山学院大学教授・副学長、鎌倉国宝館館長）のもと「歴史」を柱に筋が通っていた。温厚なとも「けんか貫」ともいわれたが、そんな学芸部長を私は新人ながら信念に生き、ブレることがない人と感じていた。たった一年ほどしか一緒に仕事をしなかったのに、生涯私の最も尊敬する人となった。（2009 年没）

貫先生は、展示は別にして、教育、調査・研究、資料の収集、保存・保護等の博物館活動に神奈川県という枠をはめず、日本のあるいは世界のという大きな視点に立っての博物館を目指していた。そのことは、今後の神奈川県博にととっても重要なことであるし、成城大学を経て現在三井記念美術館の館長を務める私の中に今も生きている。

改装なって新しく出発する県博に期待する声は大きい一方で、近年の公立博物館をとりまく様々な環境はかなり厳しいと聞く。私が貫先生と酒を酌み交わしながらよく話し合った、博物館のこと、歴史学のこと、人生のことなどを思い出しながら、これからの県博が何を目指すのか、広い視野に立ってじっくりと検討し、夢を追うとともに日々地道な努力によってそれが実現されることを心から期待している。

「職人の道具」の思い出

長田 平

［1967 年～ 2008 年・民俗担当、2003 年～ 2008 年・企画普及課長］

県立博物館開館 50 周年おめでとうございます。

ここでは、私が初めて担当した「職人の道具」（1980 年）について報告いたします。

この展覧会は、民俗グループとしても初めての大規模展でした。当館蔵の資料（11 職種 約 400 点）を中心に構成しました。機械化により職人の居場所が少なくなり、同時に道具類が消えました。手仕事に関わる道具を通して日本の生活文化を考える上で少しでもお役に立てればという趣旨でした。テーマは 4 つにわけられ、① 絵画に現れた職人の姿、② さまざまな職人、③ 職人の信仰、④ 機能からみた道具としました。

会期中、文化庁の調査官が見学に来られ、もう少し点数を増やし国指定文化財に向けて準備を進めるようにと指導を受けました。民俗グループとしても活動の柱ができその方向で進みました。しかし、問題が起きました。調書作成作業の実測図製作です。調書には資料 1 点につき写真と実測図の添付が必要です。民俗担当学芸員全員が作成に集中すると他の仕事ができません。人的要求をしても通らず、作業は順調というわけにはいきませんでした。

そうこうしているうちに、当時の管理部長から 1995 年の再編整備に向けて、国指定文化財を目指して作業をするようにとの話がありました。そこで改めて文化庁に出向き指定に関して確認したところ、今は数だけでは判断できず、地域の特色が必要で、神奈川県博所蔵のものには地域性が欠けるとのことでした。その後、実測図製作の人的要求が通ったものの国指定にはなりませんでしたが、「神奈川の職人の道具」として 17 職種 1,882 点が神奈川県指定有形民俗文化財に指定されました（現在、そのいくつかをデジタルミュージアムで紹介しています）。

開催に当たり「職人の道具」で展覧会が開催できるのかといった心配の声もありましたが、これ以降、同様の展覧会が各県市町村で開催されています。

博物館の写真

井上久美子

［1973 年～ 2013 年・写真職］

博物館に勤務を始めて驚いたことがありました。毎年夏の終わりの決まった日に、現在は閉じて使われていない正金銀行時代の入口扉の前で、老紳士が聖書らしき書物を広げ、何か唱えていましたが、やがてその姿を見ることはなくなりました。神奈川県立歴史博物館は長い歴史を語る建造物であることを想います。

1970 年代前半、通常資料はモノクロで撮影、重要カットのみカラーで撮影していました。モノクロは暗室で処理しており、フィルム、印画紙は、現像･停止･定着・水洗を正確に処理することが原則で、プリントを大量処理する場合、学芸員と共に暗室作業をすることもありました。暗室作業が重なると薬品の結晶が指の汗腺からでてきます。先輩である中野万年氏の指先がひどく荒れていたこともありました。撮影用照明はタングステン光。博物館の写場は広さ高さに限界があり、大きな資料等は展示場や他の場所での撮影になりました。この場合、閉館後部屋や展示ケースの電源の確認も要し、手間のかかる作業になりました。俯瞰撮影は、1995 年のリニューアルまでは展示場の階段にあった空間を利用できましたが現在はできません。出張先でのカラー撮影の場合、正確な色再現のため黒幕等で外光を遮断し、照明光だけに限定するため夏は始終汗を拭いながらの撮影でした。展示等に関係する撮影だけでなく、市町村との提携で文化財調査の撮影も行いました。フィルム保存には、温湿度管理等は重要で、1995 年からは恒温恒湿の収蔵庫の中に保管しています。博物館資料としての写真に関する情報は、当時の奈良博の矢沢邑一氏、京博の金井杜男氏、東博の山本勉氏を何度もお訪ねし、現場や管理状況等をみて参考にさせていただきました。デジタル時代になってきて近年はフィルムでの撮影も並行して行っていましたが、乳剤も薬品も縮小傾向が続き、現在はデジタル撮影のみになっています。

学芸員の想い出

鈴木通大

［1978 年～ 2012 年・民俗担当］

一本の電話によって採用通知を受けた日、組合のソフトボール大会でアキレス腱を断裂した日、昼休みの卓球、そして特別展、研修旅行、民俗調査･農具調査、再編事業等の仕事、et cetera……。想い出される日々の出来事は昨日の如く走馬燈のように蘇ってくるが、なぜか、研修旅行の記憶だけが鮮明に思い出される。というのも、この時の体験が「学芸員の仕事」の原点となったとともに、大きな財産となったからである。

この旅は、二泊三日の行程で始まった。横浜駅を夜行寝台特急で発ち、映画『東京物語』の舞台である尾道に到着。まだ人気のいないアケード街を抜けて坂道を登り「千光寺」､「尾道市立美術館」を皮切りに､「日本はきもの博物館」､「草戸千軒遺跡」､翌日は「後楽園」､「岡山県立博物館」、最終日は「国立民族学博物館」と見学した。なかでも「日本はきもの博物館」､「草戸千軒遺跡」､「国立民族学博物館」では、施設、収蔵資料、整理や保存、展示などを担当者から懇切丁寧な説明を受け、見ること、聞くことが印象深かった。

はきもの博では、日本と世界のあらゆる「はきもの」を弥生時代から現代まで 1,500 点を展示され、約 1 万 3,000 点を収蔵。丁寧な実測図が付いた資料カード及び台帳が整備していることに驚嘆する。草戸千軒では、水に埋もれていた厖大な木器資料。これらの保存法が確立するまで発掘の状態を保持し、研究する姿を目前に感激する。今では、珍しい横杵の使用は近世からで、それ以前は竪杵であったが、この中世遺跡から横杵が発掘されたことによって教科書が変わるかもと……。みんぱくでは、収蔵庫の広さに羨望。さらにコンピューターによる資料管理の嚆矢となった収蔵資料データベースシステムの運用等を実地見学した。

また、念願のひとつが叶ったことである。それは、博物館のなかで専門分野が異なる学芸員同士が共同研究に取組み、その研究成果を特別展に結実させたことである。

すぎこしかた

岩壁義光

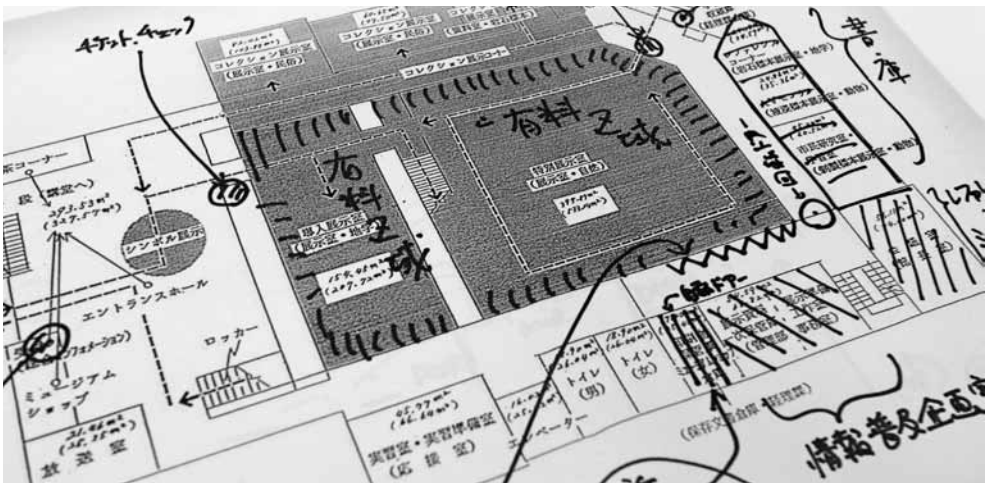
［1978 年～ 1990 年・近代歴史担当、現・学習院大学史料館客員研究員］

私にとって、神奈川県博は青春そのものです。20 代後半から 30 代を神奈川県博で過ごして、今思い返すと嫌な思い出は一つもありません。自分を持ちながら、他者を許容できる同僚に恵まれたのは幸いでした。その一人が、近代美術担当の横田洋一氏です。一緒に特別展や調査などをする機会が多かったのですが、馴れ合いではなく、美術と歴史との立場の違いから衝突も少なくありませんでした。しかし、私の提案に対して「やめろ」と言われた記憶はありません。むしろ、「やってみろ」と促してくれたのです。このような具合に、神奈川県博は自分の思いを具体化できる雰囲気に溢れていました。

自然系の学芸員との交流も忘れられません。彼らとは世界観が近いところがあり、博物館の将来構想などについて、よく議論したものです。例えば、植物担当の大場達之氏は「博物館コンビナート構想」を主張していました。中央博物館が情報の拠点としての役割を担い、地域の博物館や研究者、利用者などを結びつけることを目指したもので、当時出版された『神奈川県植物誌』はその構想の一端ですが、人文系でも同じようなことが出来なかったことは残念です。自然系の分野で早くからコンピューターが活用されていたことにも、刺激を受けました。平田大二氏や山地純氏と共に文部省の研究助成を受け 2 年を費やして行った博物館におけるマルチメディアの利用についての調査研究は大変に有益であったと思いますが、再編時に私自身が宮内庁書陵部に異動になったため、あまり活用されなかったのは残念です。それから、未整理が多かった近代史資料の整理と『近世・近代歴史資料目録』の作成は、後輩の方々に遺せた仕事の一つと思っています。

県博時代最後の仕事として立案したのが「人文系博物館情報普及計画」（1990 年 9 月）です。建物整備には日本大学建築学部の研究成果を参考とし、またデータベースの整備や、レファレンス機能の充実とともに、博物館の空間利用についても思いを巡らせました。なかでも重視したのは、開放感のある博物館イメージを構築すべく、1 階を全面的に開放し、通り抜け空間を設置する計画です。それは、アメリカ合衆国のメリーランドでの体験に着想を得たものでした。該地の博物館では、夜、博物館を会議や会合の会場として市民に活用させていました。館の資金集めの一環でしたが、博物館の利用に少し柔軟になる必要があるのではないか、資料がダメージを受けない範囲でイベント会場として使う可能性があるのではないかと、いろいろ模索しました。

こうした構想が生み出せたのは、冒頭に挙げたような博物館の雰囲気や、同僚との交流があったからこそだと感じています。



寄託資料の平本家文書

鈴木良明

［1978 年～ 2003 年・民俗・近世歴史担当、2000 年～ 2003 年・企画普及課長、現・鎌倉国宝館館長］

横浜市神奈川区羽沢町の旧家に古文書があるらしいとの情報に接しましたのは、1983 年度に入ってからでした。今から 34 年前のことです。機会を得て確認に伺いましたが、古く立派な長屋門を構え、いかにも旧家らしい趣のある母屋と広い敷地のお宅で、頃来このような住環境が横浜に残っているのかと驚きました。この旧家が、『新編武蔵風土記稿』橘樹郡羽沢村項に記された「旧家百姓喜兵衛」の後裔「平本氏」であることを後で知りました。

早速ご当主に自身の立場と訪問の趣旨をお話したところ、いとも簡単に「古文書とはこんなものかい」といいながら、何点かを奥のほうから引き出して見せて下さいました。保存状態は決して良好とは言えませんでしたが、立派な近世の古文書でした。いったいどのくらいあるのかとお尋ねしましたが、納屋や長屋門にもいくらか有るとのことで、ダンボール箱で 10 箱は下らない量と推察できました。「神奈川県史」編纂の史料悉皆調査に漏れてこれだけ量の古文書との邂逅はまったく予期しなかったものですからとても感激しました。

爾来迷惑を顧みず、橋本さん、岩壁さん、鳥居さんとともに何度お宅へ調査にお邪魔したことか。ようやく「平本家文書目録」（1,309 点）として成果の一半を『神奈川県立博物館研究報告』（第 14 号・別冊）に報告し得たのは 1988 年になっていました。

「平本家文書」一括は調査終後から館でお預かりさせていただいておりますが、全部を県博へ持っていかれると、先祖の香りがなくなってしまうので、何点かは自分の手元に置きたいとのお申し出でにより、これらを除いて現在でも寄託中のはずです。ところがこの数点が災禍で焼失してしまいました。惜しいことでした。ですから目録にあって現存しない史料があります。このことを回想の機会に銘記しておきたいと思います。

県立博物館から、生命の星・地球博物館と歴史博物館へ

平田大二

［1979 年～・地学担当、現・生命の星・地球博物館館長］

県立博物館時代（1962 ～ 1995）　私が神奈川県立博物館に就職したのは、1979 年の 4 月でした。旧横浜正金銀行を改装した重厚な建築物である県立博物館に勤めることに緊張で一杯でした。また、当時の県立博物館の学芸員には、人文系・自然系の各分野に個性あふれる先輩諸氏が大勢いて、その迫力に圧倒されたことも懐かしい思い出の一つです。県立博物館として開館してから 12 年間が過ぎ、さまざま荒波を乗り越えてきた自負がそのような雰囲気を醸し出していたのでしょう。県立博物館学芸員の第 1 世代、第 2 世代といえる方々でした。鬼籍に入られた方もいるのは寂しい限りです。そのような中で、何も知らない若輩者が生意気にも議論を吹きかけていたことは、今になって思えば若気の至りでした。学芸員だけでなく、事務職員の方々にも様々な教えをいただきました。特に、私が就職したときの学芸部長であった H.N. 氏から、「学芸員の仕事は 24 時間エンドレスだ」と言われたことが強く印象に残っています。もっとも、夜のお付き合いもだいぶありましたが。しかしそれらの数々が、現在の私の糧になっていることは確かです。県立博物館開館準備時代や開館後のことは、「神奈川県立博物館 20 年のあゆみ」（1987）に詳しく書かれています。そこには建設構想段階からすでに、将来における分野別の博物館への発展も考えられていました。「神奈川県立（歴史）博物館 30 年のあゆみ」（1998）には、再編整備に関する資料がまとめられていますので、機会がありましたらあわせてお読みいただければと思います。

再編整備から再編後（1989 ～ 1995 ～ 2017）　県立博物館が開館して 20 年を過ぎるころから、利用者からは常設展示の陳腐化が言われ、内部では施設の老朽化と収蔵スペースの狭隘化が問題となってきました。このような状態が続いていくのかとあきらめかけていた頃、1980 年代後半から日本ではこれまでにないバブル景気が始まりました。神奈川県の財政も豊かとなり、それまであまり見向きもされなかった博物館にも

陽が当たり、県立博物館を再編整備する構想が進められることになったわけです。ようやく県立博物館準備時代の夢がかなうことになったわけです。博物館では分野によって資料の特性が異なり、資料の保存方法や研究方法、展示手法も異なります。本来ならば、米国スミソニアン博物館機構のように分野別の博物館群となればよいのですが、それは無理な話なので、人文系と自然系に再編整備することになったわけです。当時の長洲一二知事の英断でもあったわけですが、知事の記念碑あるいはハコモノ行政とも揶揄されました。だれもが右肩上がりのバブル景気が続くと妄想していましたが、バブルは突然、泡と消えるものであることを忘れていたのです。両館が開館する直前にバブルは崩壊してしまいました。古今東西、博物館が経済と政治に左右され続けてきましたが、また同じことの繰り返しとなりました。また、1995 年の開館年は、阪神淡路大震災や開館記念日に地下鉄サリン事件が起きるという、衝撃的な年でもありました。あれから 23 年、両館はそれぞれ苦労をしながら、地道に博物館活動を続けてきたことはご存知の通りです。学芸員も新しい世代にバトンタッチしてきました。

両館の未来（2017 ～∞）　さて、県立博物館の開館から再編整備を経て、両館は開館 50 年の歴史を重ねることになりました。欧米の博物館や国立の博物館に比べれば、まだまだ短い歴史です。たかが 50 年、されど 50 年です。次の 50 年、さらに 100 年に向けて、歴史を積み重ねていって欲しいと思います。あらためて述べるまでもなく、博物館の使命は歴史や自然の証拠となる資料を集め、整理保管し、研究に基づいた成果を社会に伝えていくことです。正倉院は 1000 年続いてきて、奈良時代の文物を現代に伝えています。これからの両館が何を目指すか、博物館とは何か。50 年の歴史を振り返りながら、職員だけでなく関係者や利用者も含めて一緒に考え、議論することも必要でしょう。

県博の二十一年

相澤正彦

［1982 年～ 2004 年・中世美術担当、現・成城大学教授］

私が就職したのは 1982 年 10 月、28 歳の時でした。都心周辺では数少ない総合博物館で、東博に次ぐ学芸員数 30 数人を誇っていました。開館して 15 年、博物館の在り方が問われる中で、自然系が主張する欧米型の自然史系研究博物館の考え方が、しばしば行政側と衝突する一方で、人文系は研究面、展覧会面でもなかなか軌道に乗っていない様子でした。私としては研究面での充実は有り難いことでしたし、実際その時間にも恵まれていた事も確かです。そうはいっても、収蔵品はレプリカが主体で実物はごく僅かという具合で、テーマがしっかりとした大きな展覧会をうち、実物を目のあたりにしたいという思いが常にありました。機会はその二年後におとずれました。それが全国の時宗寺院の文化財を集めた『遊行の美術展』の開催でした。先輩の薄井和男さんが彫像、自分は絵巻や仏画といった分担で計画を練り、予算を寄せ集めて 1,200 万円ほどに漕ぎつけました。中でも記憶に強く焼き付いているのは資料調査でした。訪れる寺院から知られざる秀作が次々と現れて、まるで宝探しのような気分でした。展示、図録も充実したものになり、展覧会の在り方としてもその後のレールを敷いたものと自負しています。退職するまでの 21 年の間、10 数本の展示に関わりました。楽しいこと苦しいことありましたが、出版交渉と作品借用の苦労を思うと、もう一度と言われても二の足を踏みます。が、それこそ学芸員の醍醐味ともいえましょう。ここまで美術史を細々とやってこられたのも、常に作品を見ることで、間断なく感性を活性化出来たからだと思っています。あの時代を思い返すことなど滅多にないことでしたが、今思うと先輩、後輩たちに甘えながら、随分と身勝手なことをやっていたというのが本音です。

自宅が近いせいもあって今でも県博に足を向けます。あるとき、特別展開催直前に訪ねてしまいましたが、学芸員総出で和やかに展示作業をしていました。これぞ県博ですね。私の人生の誇りです。こんな風に書いているとあのころが無性に懐かしくなってくると同じくらいに、県博よ、永遠なれ、という思いが心底からこみ上げてきます。

夢に出てくる部屋

塩澤寛樹

［1982年～2000年・中世美術担当、現・群馬県立女子大学教授］

年に一度くらい夢に出てくる部屋がある。

入り口をくぐると、突き当たりは鳥居和郎氏のスペース。ただし、書架が見えるだけで本人の姿はその向こう側だ。左へ折れると、右手には岩壁義光氏と相澤正彦氏が向かい合わせ、左手には横田洋一氏と橋本健一郎氏がやはり向かい合わせている。もちろん、四氏の周りも書架で囲まれている。この向きで部屋の左奥には薄井和男氏（今は館長である）、右奥は流し。薄井氏と流しに挟まれた、とても小さなスペースが、当時最年少で、一番後からこの部屋に入ってきた私に与えられた場所であった。先輩諸氏に比べると、かなり狭いが、致し方ないところである。

この当時、二階の学芸部は人文系と自然系が同居し、人文系は歴美と民考に大きく分かれていた。この部屋は、その「歴美の部屋」と呼ばれていた。中は書架で複雑に仕切られ、住人は何れ劣らぬ猛者揃いである。私がこの部屋に入ったのは、入館三年目のことであった（入館当初は普及に配属され、隣の部屋に居た）。

正確にいえば、この部屋に入った当時、出入り口のすぐ右には磯崎厚子氏が居た（ほどなく、図書館に移って行った）。また、その後岩壁氏と相澤氏は三階の資料室に引っ越したので、中央の空間は少し広くなった。そして、岩壁氏が書陵部へ移籍し、國雄行氏が入館すると、薄井氏は三階の岩壁氏の場所へ移動して、國氏が薄井氏の場所へ来て、この部屋の住人となった。さらに、寺嵜弘康氏が入り、私の対面の突き当たりに席を設けた（この場所は私の席より一段と狭かった）。この部屋の変遷はここで終わり、その後、博物館の再編整備により歴美の部屋は終焉を迎え、山下町の仮事務所へ移る。

学芸員として、あるいは社会人として、様々な試練と失敗を経験し、コーヒー係を務め、日々の宴会の買い出しを担ったのはここにいた時である。では、この夢の中の私は、懐かしくほのぼのとした気持ちでいるかというと、それは違う。いつも何か不安定で、落ち着かない、焦りや圧迫感の入り混じった気持ちで夢を見ている。精神もこの頃の自分に帰るらしい。

一年間の山下町仮事務所生活を経て、戻ってからの学芸部は三階に移った。そこで過ごした期間もかなりあったのだが、新しい中世の部屋が夢に出てくることはない。年に一度くらいではあるが、夢に出てくるのはいつも必ず、私が二十代の過半を過ごした、あの「歴美の部屋」なのである。

神奈川県立博物館から神奈川県立歴史博物館へ

山地　純

［1984年～2000年·情報資料·企画普及担当、現·金沢文庫専門学芸員］

昭和62年（1987）からの博物館再編事業に私は当初から係わりました。人文系、自然系の中堅学芸員と共に情報資料担当の新人が作業チームに入ったのです。

まず、博物館を取り巻く状況や県民の意見を聞くために、横浜国立大学建築学科野村東太教授により調査が行われ、野村研究室大学院生、社会教育課若手と博物館学芸員の私の3人が一番下っ端として整理を担当。博物館にまだファクシミリが導入されておらず、近くの店まで何度も足を運んだものです。その調査結果をもとに再編整備の方向性が決まり、検討委員による博物館構想が出来上がる一方、社会教育課と博物館との会議、館内での打合せや、新技術の視察などが続く日々でした。人文系内部では学芸員、司書、それぞれの思いがあり意見もまとまりにくく、さらに社会教育課との摺り合わせで大もめに揉めたりと、「新しく博物館を作るよりも手間取ったのかも。」と今では思います。

国の重要文化財である建物（旧横浜正金銀行本店本館）を引き続き利用することになっていた人文系博物館（今の歴史博物館）は、自然系が移っても手狭であることは間違いなく、「昭和42年（1967）に増築した部分を全て毀して8階建新館を造りたい。」という壮大な意見もでました。結局は旧横浜正金銀行本店本館の営業室部分に増床した2階3階部分を付け替えることで落ち着きました。組織や学習支援などの博物館活動では基本的には自然系博物館と同様にという話でしたが、やはり考え方の違いでかなり異なる形になりました。平成元年（1989）からは社会教育課博物館準備担当として、博物館に席を置きながら教育庁で具体的な仕事に就き、個人的な休みも含め平成3年（1991）に博物館に戻った時「当初計画とは随分ずれてしまっているな。」と感じつつも、新たな博物館づくりに邁進しました。

平成7年（1995）3月17日開館式典の日、ミュージアムライブラリーで長洲一二知事を迎えた時、「やっとオープンだ。」とホッとしました。翌日から、展示が一新された歴史博物館はそれまでの歴史を踏まえながらも、新たなる活動を始めたのです。

机のなかった新採用時代

新井田秀一

［1990年～、地球環境・人工衛星画像解析担当、現・生命の星・地球博物館主任学芸員］

私が博物館に採用されたのは、1990年です。
当時は県立博物館再編整備事業の真最中で、分離分館される自然系の博物館（現、生命の星・地球博物館）に向けた学芸員増員としてです。そのため、兼務先となる教育庁社会教育課建設準備班（住宅供給公社ビル7階）にいることがほとんどでした。博物館には、週に一度の展示設計会議で行くぐらいです。ですから執務スペースを持っていませんでしたが、はじめは問題を感じていませんでした。何故ならば、別の場所に新しい展示を作るというのが一番大きな仕事だったからです。これをこなすことに追われる毎日でした。

転機は、程なくやってきます。「博物館だより」から執筆依頼があったのですが、書くネタがなかったことと、何より一般向けに書いたことがなかったので自信がなく、断ってしまったことがあります。そのことについて、年度末ぐらいに松島義章さんからボソッと「がっかりだ」と言われてしまったのです。再編整備の仕事はしていても、学芸員の仕事ができてないことを指摘されました。また、2年目には追加の学芸員として小出良幸さんが採用されました。とてもアクティブな方で、いっしょに仕事をしていく中でいろいろ刺激を受けました。

そして、2年目の年度末に自然系学芸員の会議か何かの席で、反省や希望などを聞かれました。その時に、「机」をリクエストしました。その結果、当時2階の階段脇にあった自然系学芸員室（動物系学芸員室？、中村一恵さんと高桑正敏さんの執務室）の一角に二人でスペースをいただくことができました。

小出さんは活用していたのですが、私は物置き的に使ってしまいました。自分の研究を進めるための機材や材料がなかったために使いこなせなかったからなのですが、言い訳でしかありません。今回のように当時の事を思い出す機会があると、この席をベースにしながら時間を有効に使って、人文系学芸員も含めていろいろな方の研究スペースにお邪魔しておけばよかったと悔んでしまいます。こういうチャンスは活かさないといけません。

立体資料収集の苦労話

國 雄行

［1991 年～ 1999 年・近代歴史担当、現・首都大学東京教授］

私は 1991 年に神奈川県立博物館に採用されると、博物館リニューアルの準備のため、先輩の学芸員が作成した展示資料案に基づき、近代史の資料収集を始めた。学生時代に史実を解明する素材、つまり史料は古文書しか知らなかったが、博物館は文書館ではないため、古文書ばかりを展示するわけにはいかなかった。古文書や絵画を展示ケースに陳列しても、見た目がペッタンコになってしまい、展示としては迫力不足だからである。私が学芸員として最も苦労したのは、平面資料ではなく立体的な資料を収集することであった。

先輩に連れられて、古美術商や骨董品収集家の方々を訪ねて立体物を探したが、なかなか納得の行く資料に出会えない日々が続いた。博物館では展示に必要な資料がない場合は、複製を製作することとなる。しかし、当時の神奈川県立博物館は、複製ではなく、ホンモノを展示しようという情熱に溢れていたのである。

そのような時、先輩が県内 A 市から外国人遊歩区域（横浜居留地から外出できる範囲）を測量するための三角点が出土したことを教えてくれた。私はすかさず国の関係機関に問い合わせた。その結果、この機関が複数の三角点をもっており、しかも、そのうちの一点を「神奈川県立博物館に貸しても良い」との返事をいただいたのである。私は狂喜乱舞した。たかが石柱ではあるが、これで展示ケースに立体物を展示することができるのである。ウキウキして借用の手続きに進んだ。ところがである。A 市の関係者が、神奈川県立博物館が A 市出土の三角点を持って行ってしまうと勘違いし、国の関係機関に苦情を入れてしまったのである。これで状況は一変。借用の話も水泡に帰してしまった。県内の市町村との関係の難しさを痛感した出来事であった。この後、地道に一つずつ立体資料を収集し、なんとか神奈川県立歴史博物館のオープンにこぎ着けたのである。

博物館再編整備事業とその思い出

福田美子

［1991 年～ 1995 年・生涯学習課博物館建設準備担当～博物館開設準備室、現・県教育委員会文化遺産課長］

1995 年 3 月、1967 年 3 月に開館した県立博物館を、県立歴史博物館と県立生命の星・地球博物館に再編整備する事業が終わり、両館が開館しました。

開館までには、博物館内での検討、本課において 1986 年、総合計画へ位置付け、整備構想のための調査、懇談会からの提言、基本・実施設計、工事等と長い年月がかかりました。その中で、1992 年度、開館準備を進める博物館開設準備室（以降、「準備室」という。）が設置されました（1995 年 3 月末廃止）。

1991 年度の展示及び情報システムの設計業者の選定では、当時は珍しかった企画提案方式により各社から提案をいただき、展示は（株）乃村工芸社、情報システムは富士通（株）に決定しました。また、建築設計は開館時の改修を担当した（株）国設計に決定しました。それからは来る日も来る日も、学芸員の方々と各事業者の担当者の方々と、準備室等の職員で、喧々諤々（けんけんがくがく）の打合せを行った結果、かながわの歴史の 5 つのエポックに焦点をあてた、県立歴史博物館へと再編整備できました。

その過程の中で、旧営業室の内装がどうにか復元できる程度に残っていることが判明し、復元に向けた関係者の熱い思いを各方面に御理解いただき、文化庁に御指導いただきながら、かつての改修工事も担当した（株）竹中工務店による建築工事において、横浜正金銀行時代の内装等に復元できました。（関係者の熱い思いも、『重要文化財 旧横浜正金銀行本店本館 復元の記録』に掲載されています。）

また、思い出深い模型として「横浜開港と近代化」展示室の「横浜居留地模型」があります。これは、象の鼻の波止場、日本大通を中心とした外国人居留地と日本人街の模型で、将来、当時の状況が判明したら、建物を追加するという発展性のある模型です。いつの日か、建物が増えることを楽しみにしています。

奇跡の博物館

佐藤登美子（旧姓 佐々木）
［2001年～2009年・工芸担当、現・福井県越前市産業環境部産業政策課工芸の里推進室］

「神奈川県博みたいに、自分たちで調査して、それをもとに展示を組み立てられる博物館が、全国に一体どれだけあると思う?!」

県博をやめて福井に移って数年後、地元市役所でも本格的に仕事を始めたころ、いっしょに調査にまわっていた文化財委員の先生にそう言われたことがある。そうか、そうなのね……。周辺の公立博物館の不甲斐ない仕事っぷりにあきれて悪態ついていたところ、そんな風に言われたのでした。

また在職当時、美専の作業員さん達に「いつも学芸員が総出で展示作業するなんて、こんなにみんなが仲良い館、他にありませんよ」と何度も聞かされていました。本当に、今はそれが身に染みてわかるのです。

学芸員の仕事があくまで個人プレイであり、それを良しとしている館もある。でもチームプレイじゃなければできないテーマの展覧会を、神奈川県博はたくさんやってきました。いろいろな分野の資料がでてくる大規模な社寺展などはその最たるものです。

調査の現場で出てくるモノが「作品」なのか「資料」なのか。そんな話題が笑いとともに語られるなんて、それはとりもなおさず神奈川県博がモノから歴史を考える学問の、最前線を走っているからなのですよ。

そんな職場をなんで辞めたのか……。用事があって顔を出したり電話したりするたび、今も県博の学芸員がうらやましくて仕方がない。

もし今私に課せられた使命があるのだとしたら、「地方からものを言う」ことを実践しつづけよ、ということなんじゃないかな。自分のフィールドを這いずり回って集めた資料たちが、その地域固有の歴史を語り出す楽しさを、一度でも知ってしまったらそこから逃れられるものではない。若かりし頃県博で味わったその悦楽に、これからも素直に従って生きていくしかないんじゃないかな。それにしても、私がここで一から、県博みたいな「チーム」を作れるのかしらん。さて、いくら何でもそれは大それた試みのようです……。

私の9年間

西川杏太郎
［2002年～2011年・館長、現・美術院国宝修理所理事長］

神奈川県立歴史博物館が、今年、開館して満50周年を迎えたこと、心からお祝い申し上げます。

あの頃、私は文化庁で文化財管理指導官という役を務めていた時で、各県の教育委員会の方々から、県立博物館を運営するに当たっての様々なご相談に応じ、忙しく過ごしていました。作品が常に良好な温湿度を保って陳列されるべきこと、また展示室内での照明の種類と、光量の適切な保持法、また作品によって展示期間を制限すべき事など、各館からのご相談に応じていたことが想い出されます。

神奈川県立博物館では、私と同じく彫刻史の研究者であった旧知の清水眞澄氏が主任学芸員であったので、そのことについてご相談したり、また近代建築の重要文化財である横浜正金銀行本館が、内部の大きな改修工事をして博物館としての好適な環境に改めることについての計画など、なつかしく想い起こされます。又一方県教育委員会の方々には、自然博物館は別に施設を造るべきこと、既に活動していた近代美術館は、さらに充実させることなどをおすすめしました。

そして、横浜正金銀行の建物は、その外観を生かし、重要文化財としての価値を損ねることなく、後方にあらたに増築し、一方内装は博物館にふさわしく大改造が行われ、立派な総合博物館としての出発を迎えることが出来たのです。その後、県立の自然博物館は、全く別に箱根湯本の広い敷地に新設され、又鎌倉にあった近代美術館も、葉山の海に面した広い環境に移転され、県立の三大博物館が整備されることになったのです。

こうして明治建築の代表作である横浜正金銀行は、県立博物館として出発し、ここに開館50周年のめでたい年を迎えた訳です。

一方、私は、1996年、春、東京国立文化財研究所長を最後に、永い文化庁勤務を終えて退官し、やっと公務員生活から解放され、ほっとした所でした。しかし、2002年春、県教育委員会から、神奈川県立歴史博物館の館長をやってくれないかという思いがけないお申し出をうけたのです。既にご縁の深かった館への

お招き。これは私にとって、又とない嬉しいご注文でした。勤務してみると、この歴史的な意義の深い横浜正金銀行の建物を歴史博物館として生かした開館以来の学芸員諸兄のご苦労のあとを、しみじみとたどって私の歴博館長勤務は続き、9年間に及びました。

代々の学芸員諸氏のご苦労のあとをたどり、私の仕事ははじめられましたが、館としての陳列構成、作品の選択などは既に見事に整理公開されていて、私の仕事はもっぱら博物館というものは、県の行政機関の一つなのではなく、県が運営する重要な文化施設つまり研究職公務員（学芸員）が主体となって、運営すべき研究機関であることを明確に示す仕事だけでした。

館長がやってきた

鈴木尚遠

［2004年～2006年・管理部長］

私が管理部長に就いたとき、西川杏太郎館長が外部から招かれ神奈川県立歴史博物館の非常勤館長に就任した2002年4月1日から、2年が経過していた。

それまでの館長は、本庁の部長職相当の職であり、（人事的配慮から補職されることもあったようで）中には教育施設の経験のない方もおり、それらの方は資料に関する知識、展示に関する経験がなく、いきおい入館者数及び収入額の増、服務規律の徹底などに懸命になる傾向があったようである。服務規律の徹底は求めて当然であるが、前二者についてはそれだけではあるまい。ついでに言うと副館長は本庁次長職相当であり、館長、副館長ともグレードの高い職級であった。

西川館長は週一回金曜日に出勤。文化庁文化財調査官、奈良国立博物館長、東京国立文化財研究所長を歴任しており、展示内容、展示方法について来館の都度辛辣に意見を言う方であり、少々煙たがれることもあった。しかし来館のたびに積極的に職員と交流し、館長と学芸員をはじめとする職員が意見交換しながら全館をあげて博物館の運営をしていく形が出来上がってきたのはこの時期からではないだろうか。館長の週一度の出勤日にいかに的確に1週間の出来事を伝え、滞りなく館が運営されるように務めることが私の仕事でもあった。西川館長は国家公務員として予算、人事の仕組みについてはよく理解しており、その方面についての危惧はなかった。

なお、西川館長退任後は歴史博物館の薄井学芸部長が館長に就任した。西川館長の就任が行政改革の一環として行われたとしても、結果的には歴史博物館にとって良かったと考えている。

特別企画

歴代学芸部長座談会

2017年9月6日　於・馬車道十番館
司会　天野 勇

天野　これより歴史博物館歴代学芸部長座談会を開催いたします。まず歴史博物館ができた前後の学芸部の様子を当時の部長であった八幡さんからお話しいただけますか。

県博から歴博への再編

八幡　私は1969年、開館の2年後に入ったんですね。それで2000年3月に退職ということで、丸々31年博物館にいました。1995年から学芸部長を仰せつかって、5年やったんです。博物館が1967年に開館したときは総合博物館でやっていたわけですね。学芸部も含めて全体で非常に大きな力を持っておりました。人数もおりまして、県立の博物館だけれども国立博物館並の色々な人員を揃えていました。

1987年になって再編整備、博物館が2つに分かれていくのをどうやっていくかという懇談会が自然系を含めて持たれました。1990年には人文系の整備計画がまとまって、収集計画、展示計画の検討に入りました。それが2年間あったんです。ただ、実は私もそれには参加していないのですね。なぜかと言うと、当時、私は50代のはじめで、これからやっていく2つの館は出来るだけ若い方々にイニシアティブをとってもらって、若い発想でこれからのことを考えてもらおう、と。

ただ、人文系の整備計画やプロポーザルでは、私たちも前面に立っていた。いよいよ館を作っていくわけですから、その段階では相当色んな意見を言いましたね。毎週のように展示業者と、どういう風に展示をやっていくかっていう話を相当しました。その中で私が一番思っていたのは、県博は過去に約30年の歴史があるんだから、そういう展示を活かした形にしていくということ。

当時、色んなところで博物館、美術館が出来て、一過性でショーウィンドー的な展示、きれいで分かりやすくて、ただ一回やればそれでかなり済んじゃうという展示がまかり通る時代だった。

県立博物館は、開館当初たくさんのレプリカを作って、それで2、3年目ぐらいのときに他館の方に「ニセモノの博物館じゃないか」とすごく揶揄されたりしたんです。でもそれから実物資料をたくさん揃えて。レプリカ中心ではなくて実物を中心として展示替えをしていく、そういう人文系の博物館にしたい、ということを相当強く言った。

川口　私は高校を卒業してすぐ博物館に入ってるんです。その時は準備事務室時代なんですね。1年後にオープンする予定なんだけど博物館のことはまったく分からなかった。先輩学芸員の言われるままにやった

んです。その１年間で、うちの博物館と比較しながら関心のある博物館を見ていたのです。

それまでの博物館というのは、いわゆる国立博物館。歴史を扱っていながら並んでいるものは美術工芸品的なもの。もう少し平たく言うと骨董的なものが並んでいる。それを時代別に並べたり、あるいはテーマを絞って並べて、そのモノの持っている価値をみせるのが博物館の主流でした。国の持っているものはそれだけで十分見応えがあった。ただ、高度経済成長期のなかでどんどん資料が散逸する状況もあって資料を集めようと思っても集まらない。それでは国立の博物館とは対等にやっていけないということで、もう少し文化史に力を入れました。モノの持っている価値ではなくて、通史的なものですね。このモノはなぜ造られたのか、このモノにはどのような歴史的価値があるのかという点に重点を置きました。それを説明するにはどうしても資料が足りない。それをつなぐのは模型であるし､複製であるし､ジオラマであるのです。モノが使われている場面を復元するというのが展示の趣旨になっていた。

その後、各県で公立博物館が必要だと要望があがったとき、参考にするために神奈川県博に見に来るわけです。「文化史を語る展示にするためには模型や複製がないとできないんだ」というふうに。これが昭和40年代の博物館の特徴です。

その後、神奈川県博でもやっぱり実物資料が足りないね、と。実物に勝るものはないねという話になりました。再編整備のとき、人文系では大体資料収集費が10億円くらいありました。景気が悪くなって２億円くらいスパッと持っていかれてしまったけれども、実物資料を多く購入出来て、いい展示ができるようになった。それからもう１つは、それぞれの専門の学芸員を入れたということ。それで充実した資料収集と展示ができるようになったというのが、今私の実感としてありますね。

天野　薄井さん、その頃の様子はいかがでしたか。

薄井　再編のときは、八幡さんから若い人にやらせろということで、川口さんが若い方のリーダー、それにサブということで私が加わって業者との折衝だとか学芸部の意見の取りまとめだとか、そういうのを２人でやっていた。それこそ毎晩22、23時くらいまでやってから、飲みに行っていた覚えがあります。

役所の本庁も本庁なりの博物館のイメージを持ってくるんだけど、我々は我々で博物館というのはこういうものなんだという想いがある。見た目に派手ということではなくて、継続性のあるものにしなければならない、と。資料を買うとかレプリカ造るにしても、本当に学芸部一丸となって、それぞれの専門の人がそれぞれの知恵を絞って資料集めるってことに邁進していたというのがね、事実だと思います。

あと、あの建物の制約の中でどれだけのことができるか。途中で川口さんと限界を感じて当初計画からは相当縮小していると思います。その頃私が思っていたのは、やはり博物館はモノをみせるところなので、モノを大事にしなければならないということ。一緒に美術を担当していた相澤さんとモノを買うことに精力を

八幡義信
部長在任期間　1995年～2000年
専門分野　中世史

川口德治朗
部長在任期間　2000年～2008年
専門分野　考古学

薄井和男
部長在任期間　2008年～2011年
専門分野　中世美術史

寺嵜弘康

部長在任期間　2011 年～ 2017 年
専門分野　現代史

天野　勇

部長在任期間　2017 年～現職
（＊行政職）

傾けていたんですよ。もう買いまくっていたと言ってもいい。結果としては、前の県立博物館時代とはまったく違った展示になったとみんなは言ってくれました。当然 100% は出来ていないのだけれども。

オープニングの時は「県博かわったね、よくなったね」と、非常に好評でした。県の上層部や審議会をやってくれていた諸先生方なんかも来てくれて。「県博はやっぱりすごいな」ということで。新しい時代のニーズに応える博物館として、生まれ変わることはできたなと。

川口さんが先ほど仰ったように、よく他館の人が見に来ていました。博物館のスタイルを変える一つの指針みたいなことをやったなという自負は我々もありました。ただ、いけなかったのは、その後、展示を 5 年に一度はリニューアルというかローリングできると思ったんだけれど、そういうことが出来なくて。ほったらかしになっちゃったのは、残念だなと思います。ただ、数年で陳腐化するものは造らなかったと。

天野　寺嵜さん、いかがでしょう。

寺嵜　私はリニューアルする直前の 1992 年に常勤職員になりまして、チンプンカンプンというところで「おまえは現代史」ということで、資料集めて展示の計画をたてろというようなことで、いろいろ五里霧中の中やってきました。

2 点お話をしたいことがあって、1 点目は資料収集です。民俗資料は、昭和 42 年に県博を作ろうとした機運が高まった時、文化財の散逸を防ごうとする流れに乗ってかなり体系的に集められてきました。けれど現代資料はなかなか集められなくて。最初、資料はほとんどまったくないという状況でしたので、1992 年から 1994 年の 3 年間で収集して展示にこぎつけたということです。

お金にするとすごく安いけれど今の時点で集めてないと後々困るということで神奈川に関係するものは意図的に集めました。新しい時代のモノは評価も難しくて、どういう風に収集していけばよいのか悩みました。ある時、収集会議で当時の副館長が「そんな二束三文のどこの馬の骨ともわからないような資料を買ったところで」というような言い方をされたことがあって、ちょっと悲しかったですね。でもまぁ、そんなことがありながらも再編整備以降、一番資料を収集したのは現代史部門だと思っております。

2 点目は展示関係です。高度経済成長期をどう取り扱うか非常に難しかった。最終的にコラージュ的な展示になってしまったのは返す返すも残念で、とにかくあそこは直したい。

もう 1 つはその当時は流行りであったモニター類。タッチパネルがいいんだと言われておりましたが更新を定期的にしていかないと陳腐化するし壊れます。川口さんか薄井さんの時代かどちらか忘れましたけれども、全部撤去したんです。今の若い人たちがリニューアルする時にですね、展示業者さんのいうことを真に受けないで、ちゃんとした形でお金を使わないと、どんどん金食い虫になっていくのではないかなと思いますので、これは皆さんに申し伝えたいなと思います。

八幡　再編整備した頃、館長は「博物館の常識は世間の非常識だ」と言っておりました。我々が「それが

博物館の常識なんだ」と言っても理解できないわけです。それは何名かに言われましたね。

それから再編整備した平成７年の６月に博物館の敷地が国史跡になるんですよ。建物が重要文化財で、敷地が国の史跡。その場所に神奈川県立歴史博物館が存在するというのが重要なんだと思いますね。

ボランティアガイド

八幡　平成９年に博物館でボランティアガイドを募集するということがあったんですね。募集を新聞広告等で出してね。そしたら 400 名を超える応募があった。選考の面接で私も矢面に立ったんですけど。400 名近い方と面接しました。

皆さん博物館を愛しているものだと思っていたわけですよ。だから博物館の仕事をやりたいんだろうと。でもそういう質問しましたらね「博物館に興味はないんですよ」と言われたんですね。「なぜ応募したんですか」と質問したら、自分が何をやっていいかわからない、自分を変えたいと思ったときに、新聞で応募が出ていたのでやってみよう、と。「知識もまったくないし興味もまったくないんだけれども応募しました」と言われて。結局その人は採用されたんですけれども、印象とは裏腹に採用された後すごく知識を付けられて、重要な役割を果たしてくれました。博物館と一般の県民の皆さんとの懸け橋としてね、非常に大きな役割を担ってくれましたね。

川口　ボランティアのことについては、学芸員の中でもそれなりの評価がありました。例えば、ボランティアの年限は永年ではなくて期限を決めてやらないと、場合によってボス化していってしまうということがあって館側や学芸員側に要求をつきつけてくる。特に若い学芸員にはもっとああしろこうしろとか、こういう展示をしろということもあったりして、任期制にした方がいいのではないか、とか。こちらが話して欲しいこと以外はしゃべらないで欲しい、とか。勉強するのはいいんだけれども自説を展開されてしまうと困るなと。世間的に、館に、迷惑をかけるようなことはしてはいけない。ややもするとそちらに走ってしまうので、気を付けなければいけない。

再編で残った課題

川口　薄井さんが話されていましたけれども、県博のリニューアルというのは実は展示についてだけだったんですね。私たちがやりたかったのは展示プラス施設だったんですけれど、予算がなくて、施設についてはほとんど何にもいじっていない。県の施設の方に、この次は施設のリニューアルがあるからね、と言っていたのですが。照明の問題、空調の問題、収蔵庫の問題。こういうことはまだクリアできてないですよ、と。

そのとき言ってきたことが、ここにきてぼーんとでてきたので、私たちにしてみれば、非常につらいところもある。

天野　薄井さん、いかがでしょうか。

薄井　重要文化財に指定になっていない新館部分はぶっ壊して、もっと高層にする話もあったんですよね。そうするとそこにほとんどの機能を集約できる。搬入口が小さいという問題もクリアできる。実際にはそれができなくて。建物については手つかずのまんまだったので実現できなかったことは随分あると思います。

神奈川県博の学芸部長

天野　それぞれ学芸部長だったときの苦労話、良かったこと、あるいは、現役学芸員に伝えたい失敗談などありましたらお願いします。

八幡　再編整備したあと、最初に学芸部長になったんですけれど、課が取り払われまして、学芸部ということで全部一緒になったんですね。当時 2、30 人いたんですか。やりやすくはなったんですが、ともかく学芸員はそれぞれ専門性をもって、やっているわけですよね。それぞれの個性も超強いんですよ。

一同　（苦笑）

八幡　で、やっぱりそれがいいんですよね。それが無かったら出来ないんですよ。担当している一人か二人がしっかり研究積んで、資料収集もやって、展示までもっていくわけだし、超個性の強い人がいて学芸部が成り立つわけだから、それをまぁ、守っていくというのか、そこを最大限に活かして、博物館の運営に活かしていく。それをまずは考えましたね。まぁ部長になるなんて思っていなかったから、どうしようと思ったんですが。学芸部の代表として方向性を間違わなければやっていけるかなと思っていました。

ある程度の年になってからは、博物館の仕事というのは、館全体がその展覧会を背負っているんだ、ということを感じないとね。事務の方は知らないとかあんまり関係ないとか。学芸の中でも、よく展覧会があると一人がやって、他の人はあんまり手伝わなかったりね。でも管理部門とか情報普及とか、ボランティアガイドの方もそうだし、色んな人に関わってもらって、はじめてそれが出来るっていう。館がそういう特別展をやるのに、みんなが関わっているという意識をいつも持っていないとうまく館は回らないんだな。

薄井　学芸部長はムードメーカーなんですよ。全部を統率するということはまず出来ないんだけれども。

八幡　やっぱりそういう意識を持たないとね。

薄井　そうすると学芸員はついてきてくれるんだよ。

天野　川口さん、いかがでしょうか。

川口　私は割と長かったもんで、色んなことがあるんですが。私の時は各地で博物館が出来始めた。特に市町村の博物館が充実してきたというところがあって。その中でいつも頭にあったのは、市町村の博物館と県博とはどこがどういう風に違うのかなと。このままいくと県立の博物館の存在意義はなくなってしまうのではないかなという思いが常々あったんですね。そうは言いながら、神奈川県博というのは歴史的にも古いし、参考にされた博物館だから、それなりのプライドというか……。市町村がやることは市町村にお任せすればよい。神奈川県でないと出来ないことはなんなのか、というのをいつも、頭の中に入れながらやり取りをしていた思いがあるんですね。

資料収集費なんかは景気が悪くなって、目減りしていったんだけれどもゼロにしてはいけない。あと調査研究費ですね。調査研究費はどの博物館でもついているわけではないんですね。これも絶対ゼロにするのは止そうと。それはなぜかというと、市町村が予算要求をするときに神奈川県博を見習うんですね。予算要求を出すときに、こんなことはどこがやっているのかと必ず聞かれる。神奈川県博がやっているとなると、あぁそうかと。だから満額いかなくても予算費目としては必要。そういう、いい意味のお手本になっていかなければならない、という考えがずーっと頭の中にあった。

寺嵜　私は部長を 5 年 10 か月勤めました。私が一番苦労したのは人間の問題です。やっぱりマンパワーが。再編整備した平成 7 年度の常勤職員は 38 人いるんです。常勤だけで。ところが平成 26 年では大体 24 人くらい。マンパワーが減ってきているのが一番私は苦労しました。

あと旅費ですね。展覧会というのは、事前に調査に行って撮影して集荷に行って返却に行くというので、大体 4 回くらいは同じところに行かなくてはいけない。ところが旅費がないものですから、公用車を使って運転手さんに負担をかけたりとか、非常に心苦しい思いもしましたし、なかには自分のポケットマネーで、公務出張ではなく行って相談するということをやっていることもある。見てて非常に申し訳ないなと思っています。今後、同じようなことは避けるべきであるし、特に旅費については徹底的に確保することが必要なんだろうなと思っています。

予算についても非常に減ってます。一番減っているのは展示事業費で、特定財源を自分たちで稼いでそれで展覧会をやるというような、蛸が自分の足を食べて生きるみたいな、そういう状況にあるんです。とにかく私のいた 5 年 10 か月は金のなさに悩まされて、部下には大変ご迷惑をかけたなと本当に反省しております。以上です。

薄井　僕はこの中では学芸部長短いんですよ。学芸部長になるとは思っていなかったところもあって、おそらく一番学芸部長としての意識は低かったのではないかと思います。ただ、私には寺嵜さんという有力な片腕があったんです。僕は寺嵜さんにマネジメントを随分助けられました。学芸部長って、有能なアシストする人がいないといけないと思います。昔は学芸庶務という人がいたんです。事務方の中の経験を踏んだ人が、学芸庶務として、部長の旅費だとか出張の伝票だとかね全部やってくれる人がいて。部長一人というのはなかなかきついと思いますね。

寺嵜　マンパワーが減っていく中で、どうやったら効率的に動けるのかな、と。私の率直な意見を言いますと、学芸部長に多大なる負担をかけてきたというのは事実だと思うので、それを解決するような組織の在り方みたいなものも検討されるべきなのかなと。昔とは違った状況にあるわけですから。そうしないと苦労の連鎖が続くだけであって改善する見込みがないのかなって思うので、そのあたりをちょっと、幹部の皆さんには、真剣にお考えいただかないと、やはりどこかで破綻がきてしまうという気がします。

薄井　なかなか詰まった話になってきたね。

一同　（笑）

川口　寺嵜さんが言うみたいにマンパワーですね。人やセクションの配置。県博がじり貧にならないためには。さっき言ったように調査研究もそうだし、色んな意味で展開させていくためには、やっぱりマンパワー。なんとか最低限ここまではないといい展示も出来ないし、県博としての名前もそのまま存続できないなというようなこともあるので。

薄井　いま全国規模ですよね。どこの博物館もまぁ人が足りない、人が足りないと。そういう話ばかりで。それをこれからどうしていくかというのはすごく難しい課題ですよね。

寺嵜　少し話を戻してもいいですか。県博の課題の 1 つ、反省点なんですけれども、あの 3.11 の大地震。横浜で震度 5 強を記録しましたけれども、神奈川県博では幸いなことにあまり被害はないんですね。他の博物館さんなんかは、収蔵庫でいろいろあったりとか……。だから防災対策というのはちゃんとこれから構築すべきだというのがあるんですけれども。もう 1 つこれから考えていかなければならないことは、津波の問題とか都市型のゲリラ豪雨。サービスヤード入口は 90mm くらいの雨が降るとかなり溢れて、もう排水がダメになってしまうんで

すね。そんなこともこれだけ懸案になっているので、空調設備の改修が終わったら今度は災害対策といったところをやっていただいて。とにかくうちは収蔵庫が地下にありますから、そういう水害とかがあったら、いの一番に収蔵庫が危険になってしまうわけですよ。やっぱりそれを次の短期的計画としてですね、考えていただきたいなと私は思っています。

県博協と文化財協会

天野　部長時代の何か苦労したということではいかがでしょうか。

寺嵜　苦労というのはたくさんあるんですけれども、外部団体である県博協（編注・神奈川県博物館協会）と文化財協会（編注・神奈川県文化財協会）の 2 つの事務局を兼務するようになったのは川口部長の時からなんですけれども、両方を兼ねるのはかなりきついものがあります。文化財協会では、学芸部長は必ず見学会に行くようにしていますし、県博協でも合同部会や研修会で相当な数、出席しなければならない。そういうことも学芸部長と副館長さんの役割分担の見直しとして考えて下さると、天野部長が楽になるのではないかなと思います。

薄井　でも、県博協は本当によくやっているし、しっかり機能してる。その中で県博というのは一番頼りになるところ、形で言えば上に立ってくれているところということで役に立っているので、県博協の事務局がうちにあるというのは、自他ともにふさわしいかなと、僕なんか思っているんですけれども、あとは運営の仕方ですけれども。

寺嵜　県博協で印象的なのは、一番最初に幹事として立案した研修会で梱包の研修をしまして。平成 10 年だか 11 年にしたんですね。そのときに薄井さんや川口さんに声をかけて梱包の実演をしてもらったんですけれど、川口さんにいいお話をしていただいたんです。「梱包するのに自信がない、どうすればよいかと悩みをもっているなら県博に聞いてください」と。県博に聞いてもらえればちゃんとお答えしますよ、というお話をされて。やっぱり私たちの県立博物館は学芸員がきちっとそういうことができることを伝統的にしてきたところだなと思います。去年の引越しの時にも学芸員総出でそれが出来ちゃうというところが、これは伝統だなぁと思っています。そういう技術の蓄積があるからこそ、県内の博物館さんに一定の信頼感を持たれている 1 つの要因だと思います。

八幡　その話と関連しますけどね。再編前、昭和 50 年頃かなぁ、毎年そうだったんだけれども。日通の職員の梱包研修の場として県博に来てたんですね。そういうプロの研修の場にもなっていたわけですよ。県博の学芸員がそれに関わっていたということは非常に大きな力だと思いますね。後発していろんな館が出来て、そういうところの館の人は梱包出来ない人がいっぱいいるんですね。そういう土壌がないので。日通なりヤマトなりに任せきりで、どこが悪いかどこがいいかということを指摘出来ないんだよね。我々は県博の学芸員はそういうことが分かってるから、日通さんも一目二目も置いているんですよ。やりこめられることはなくてね。そういうことは今も続いているんですよね。

薄井　続いてますよ。展覧会やるときは分野が違っても学芸員総出でやる伝統がありますのでね。それはよその館ではなかなか持っていない。大体みんな驚く。これは神奈川県立博物館時代からずっと連綿と続く伝統でして。これだけは学芸員は常に納得して、やだという人はいないですね。これは未来永劫というとオーバーだけど、これからずっと守っていかないと。

寺嵜　もし、その技術が伝承されないと何が困るかというと、展示作業員を雇う回数が増えて展示の事業費が増えるということなんですね。その部分を職員がちゃんと肩代わりしているんだとというところは逆に売りなんですよね。

薄井　だから、昔は県博料金というのがあったんですね。ある程度学芸員がやるから日通なりヤマトなりが、少し安くしてくれたんです。

寺嵜　今回の引越しも安かったですよ。

薄井　予算査定している人もそんなに努力しているんだということを分かって欲しいね。現場の人じゃないと分からないから。うちの学芸員はそれくらいやってるんですよね。

天野　それでは次にいきまして、今までも出てきましたが県博の学芸部の個性や特徴というような話題に移らせていただきます。

神奈川県博学芸部の個性

八幡　さきほども言いましたが超強いですね、個性が。でも個性を活かしていかないと。型にはめたのでは十分な実力を発揮できないと思うんですよね。

薄井　神奈川県博の学芸員の個性というのは、いい意味で誇りを持っていて。言い方は悪いかもしれないけれど神奈川県博は垢抜けてないといけないと思うんですよ。仕事が垢抜けてなきゃいけない。さらりとスマートに確実に堅実にやる。それを目指してやるのが神奈川県博の学芸員だと思うんですよね。都会の博物館としてハイグレードな博物館として、国に負けない博物館というところから出発してきているんだけれども。お金の問題も多々あるんだけれども、根底に流れている精神的なものかも知れないけれども、よそとは俺は違うよ、と。そういういい意味の誇りというのは神奈川県博の学芸員はいつまでも持ってないといけないと思うね。だから「あそこと同じでいいや」ではなくて「よそと違うんだ」と。常に仕事の中で思ってやってもらいたいなというのが、私の思っていることです。

寺嵜　学芸部の個性、特徴というのはありすぎなんですけれども。個性がぶつかり合うというのはとても大事ですね。あと、学芸部として私が伝えたいなと思っていることは、展覧会の準備を始めた日と撤収を終えた日はやっぱり担当者を慰労したり、担当者が手伝ってくれた人に感謝するという意味で、コミュニケーションをとる場として、飲み会の場をどんどん活用して欲しいな、と。机に向かって会議だけでは言えないこともあるんですよね。みんなの緊張がほぐれた中で、つい本音が出たりとか、こんなこと考えているんだ、と。そういうコミュニケーションは是非とも、開館以来の伝統として残して欲しいなと思います。

八幡　開館当初は、毎年でかい展覧会をやるんですけれども、展覧会名に「日本の〜」とついたんですよね。そういう規模で展覧会が打てたんですよね。それから「神奈川県の〜」という風に変わっていくわけだけれども。展覧会が始まる前に、前夜祭というのがあるんですけれども、これは館の職員は全員で、あと展覧会開催に協力してくれた人たちなんかとね、和気あいあいとお礼を兼ねながら飲むことができたんですね。ずーっと伝統としてあったのですが、これも重要な伝統だよね。

寺嵜　立場を越えてこの人が何を考えているのか、部長対部下ではなくて、一学芸員として話ができるという、そういう場なんじゃないかなと思います。もちろん、お酒のない場だって必要なんだけれども。やっぱり構えられてしまうことがあって。

川口　僕らは学芸部の人間で他の世界を知らないから、あんまり分かんないんですよね。こういうものだと思っちゃっているから。よその館の方から言われると、県博ってそうなのかなと思いますけど。

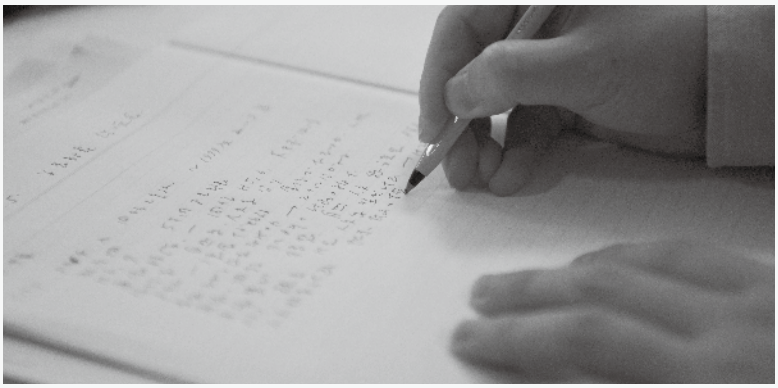
　振り返ってみると、学芸員が展覧会も研究も出来ていたのは、管理課の方々のおかげなんじゃないでしょうか。彼らが非協力的になるとギクシャクしてしまう。そうなるといい展示が打てない。管理の方々に協力してもらったんじゃないかと。博物館好きだと言ってくれる方が結構いて、そういったときはやりやすかったんじゃないかな。昭和41年頃は、学芸部と管理部はすごい仲が悪かったんですね。暮れの御用納めなんかやると、学芸の人間が管理の部屋にお酒をばらまきに行って、それに対して管理は「お返しだ」って来るし。対決みたいな感じですよ。だんだん理解してもらいながら県博の名前が定まってきたんじゃないかな。学芸だけの力ではなくて、きっと管理の人たちが要所要所にいてくれて、ステップアップしていったんじゃないかなという気がしますね。

八幡　頼朝展（編注・1999年開催の「源頼朝とゆかりの寺社の名宝」）、結構お金かかっちゃって予算オーバーなんですよね。そしたら管理部長が、お金を取るために、全国にある補助金を出す制度を見つけて来てくれるんですよ。それに応募して、2か所か3か所、そういう補助金を取ってくれて、やりやすくしてくれたということがありました。やっぱり、人との付き合いがあってこそできることでね、そういうのが出来るのが神奈川県博なんだと思いますね。

寺嵜　朝二日酔いで管理に怒鳴り込んだ学芸員もいましたね（笑）。

　先ほど、薄井さんは誇りと言われましたけれども、25年間県博にいて思ったのは、県博の名刺の重みというか、相手にそれを見せるだけで信用されるという、自分の肩書が県博であることで非常に信用されるんですね。その信用を培ってきたのは歴史であり伝統であるわけなので、そういうものがこれからもずっとつながっていけるといいですね。それだけの技術、能力を引き継いで、あるいは開発していただいて。西川（杏太郎）前館長ではないですけれども、日本の中の神奈川県博ですから、ということをちょっとでも心の中に留めて活動していただくとありがたいです。

薄井　西川さんはね。なんで関わっ



たかというと神奈川県博のステータスを知っているからだよ。だから来たんですよ。あの人はそうじゃなかったら絶対来ないよ。うちだからラブコールに答えたんですよ。

もう１つ言うと、神奈川県博を辞めて名刺がなくなったらただの人になる。やっぱり神奈川県博の名刺の重さはそこなんだよね。なくなったらただの人なんだよ。

寺嵜　僕も今ただの人なんだよ。

一同　（笑）

薄井　僕はまだ名刺持ってる（笑）。

寺嵜　すごくすばらしい館だと思いますよ。今日は学芸部長だけだけど、やっぱり色んな人が関わっていて、そういう人たちが培ってきた。

薄井　神奈川県博が育てたものは多くある。先輩方や途中で辞めた人たちも、第一線で活躍している方々ばかりで。うちの畑がいい、土がいい。だから育っていったというところがありますよ。これは伝えていかなければならない。なり下がっちゃいかん！いい土は常にいい土を耕していかなければならない。

オフと仕事

八幡　休みの日とかね、楽しく野球をやった。ボーリングも盛んな時はやりましたね。ハイキングもやったことがあるし、仕事以外の面で自然発生的にね、出てくるとよい交流になるんではないかと。現在はなかなか野球といったって大変だろうけど、当時は他になかったからやりましたけれどね。夢中だったよね。

川口　そうですね。僕なんか強引に誘ったからね。全員にユニフォームを作って。月一回くらい試合をやってましたね。MUSEUM というユニフォームでね。東京だと上野の国立博物館だとか芸大もあったかな。首都圏に美術館リーグ「B リーグ」を作ってやりましたね。県内では八幡宮その他ね、色んなチームとやって、それが博物館活動に非常にプラスになって。

天野　それはいつごろですか？

川口　昭和 50 年くらいですかね。

寺嵜　ユニフォームは 2 種類あったんですか。

川口　そうです、2 種類です。最初グレーだったのが、次はブルーになりました。組合の試合ですかね。

八幡　図書館とか色んなところと試合やりましたんでね。

寺嵜　野球のユニフォームとかボウリングのユニフォームなんかは、現代史資料でとってありますから。

川口　僕は捨てちゃったからなぁ。

寺嵜　グローブとバットもまだとっています。何でも現代史（笑）。

八幡　再編整備で現代史が加わったというのは非常に大きな意味がありますよ。それまではペリー来航までだったんだから。現代史が展示の柱に加わったのは、神奈川県博にとっては非常に大きなことであったと思います。

川口　大変というよりも楽しかったですね。

薄井　この間岩壁さんが来て「神奈川県博で嫌なことは１つもなかった」と言ってましたね。よっぽど普段が嫌なのかな。

一同　（笑）

薄井　でも確かにね、毎日仕事に行くのが楽しかったもん。県博に出てくるのが楽しくてしょうがなかったね。それから展覧会をやっているときも、結構大変だけれども、毎日朝になるとあれやろうこれやろうと張り切って出てきましたよ。やっぱり学芸員というのはそこじゃないですかね。嫌々特別展をやる学芸員はいないと思いますがね。

八幡　オープンすると忙しいんだよね。団体が来たり展示解説やったり。

寺嵜　再編整備の時の引越し。あの時、横田さんが引越しチームの座長で私がサブでやったんですけれど、ほとんど横田さんは何もしないから、私が色々とやったんですけれども。あれはきつかったね。だけどあれで私一番良かったのは、引越しの資料を梱包するのを立会うんですけれども、どんなものがあるかということをその時に見ることが出来たこと。そういう苦労は買ってでもしろ、というのが。なので、頭に入っているというかね。皆さん苦労は買ってでもした方がいいですよ。

薄井　今回梱包やったでしょ。あれは皆さんの宝ですよ。全部見たんですから。全部見ないで終わっちゃう人もいるんだから。全部何があるか確認できたのはすごい大きいと思う。このあと自前のものをどれだけ使うとかよそから足りないものをどれだけ借りるかという目安になる。それが頭の中にできていることはすごい強いと思う。

寺嵜　もう１つ課題と言いますか、防犯体制ですね。それはもう一度再点検していただけないかなぁと思います。今の守衛さんの前のシャッターの開け閉めの問題もそうですし、館内の防犯カメラの更新ですとか。これは何かあってからでは困るんだと思います。何か起きてからだと信用を失墜してしまうのではないかなと。今まで神奈川県博ではそういうことがなく来ているわけですから、その信用を落とさないためにも防犯体制というのは必要なんじゃないかなと思っています。

県博のこれから

天野　最後のテーマなんですが、県博のこれからを期待して、ということで。

現状を簡単にお話しさせていただきますと、私は今年４月から学芸部長を兼務しているわけですが、予算的には、資料収集費は 10 億には遠く及ばず、何百万円だけなのですが、一方で、県民の方から寄贈の申し出があったり。お金はありませんが、皆さまからの寄贈のお話しをいただき、学芸員が行って整理をして、今後の展示や研究に役立つようなことになるんではないかと思います。予算は無いけれど自分たちで梱包して汗をかいて資料を集めて……。そういったことをやっているということが、県民の皆さまからの信頼を得て「うちに資料があるから使ってください」ということが今後ますます多くなるんじゃないかなと思います。

今後の 50 年、100 年に向けて一言いただけますか。

八幡　県博というのは、全職員が支えていくものだと思います。それに尽きると思います。

川口　博物館活動をするには整備がきちっと出来てないとダメだと思うんですね。将来構想委員会のようなものを作って１つずつチェックする必要があると思います。夢でもいいんですけれども、この博物館の将来像を描くということを常にやっていって欲しい。実際、再編の話が来る前から学芸部の中では再編整備委員会というのを持っていたんです。だから、話が来たときに慌てなかったんですね。理想的な博物館に向けて準備しておくのをぜひやって欲しいと思います。

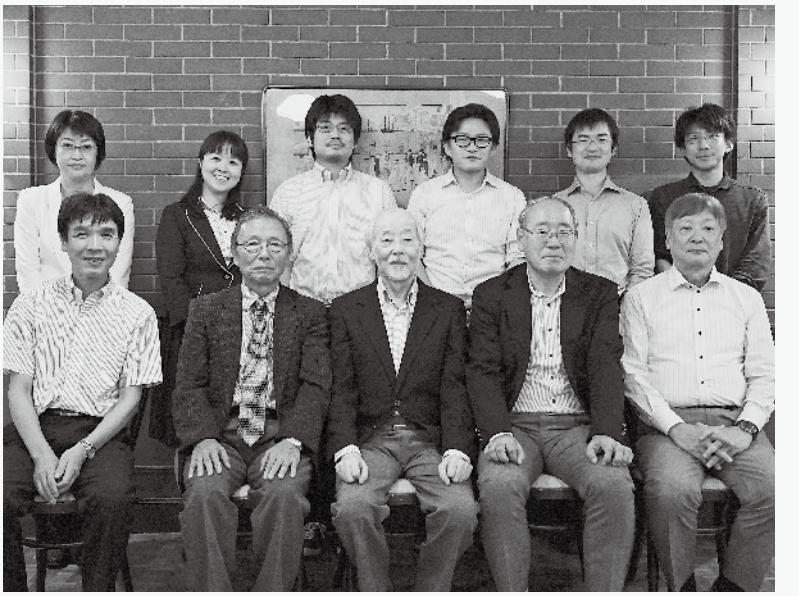
寺嵜　管理であれ企画情報部であれ学芸であれ、皆さんがやってよかったなって思える瞬間があると思うんです。私にとってはそれは建物公開ですね。無料なんだけど、多くの人が初めて入ったと喜んでくれて。終わった後の心地よい疲れというんですか、これはやっぱり大事で。それは、設備の方や守衛の方も一緒で、建物公開というのを一つのコミュニケーションを取るための場にしていって欲しいなと。

学芸員に対しての希望なんですか、マンパワーが減っているということも言ったんですけど、人が少ないと何が起こるかというと、アウトプットはするけれどもインプットする余裕がない。つまり、新しいことをしたいんだけれど、そのための時間がない。それが一番のネックかなと。若い人たちには、インプットする色んなことに関心をもって、知識を吸収するという時間を週に一回でもいいから取って欲しいんですね。色んな業務はあるのかもしれないですけれど、自分はこの日はこのためにやるんだ、そういう時間を取っていただくと、それが蓄積されて残っていきますから。出す一方では枯れてしまいますので、人が足りないからすごくつらくて大変なんだろうけれど、その辺を期待してどんどん皆

さん太って下さい（笑）。

薄井　僕は非常勤ですけど、館長ということでやらせていただいております。将来に対する不安を皆様もお持ちだろうと思います。今のところ県の直営でやっております。今のところ指定管理にしろとかという話は止まっている。これはありがたい、望ましいと思います。ただ、危機意識的なところは常に持っていてもらいたいですね。それに対する戦闘力も常に磨いて欲しいし学芸員は持ってなきゃいけないと思います。研究と展示は第一義として力を発揮してもらいたいけれど、一方では防衛本能というものも常に持っていて、組織としてもいい組織を作っていかなければならないし。

1つは和を保つというかな。防御力をつけるには和を保つのが一番大事だと思います。職場に来て隣の席の人とメールでやり取りしているというが当然になっているようですが、博物館では絶対にそんなことはあっちゃいけない。やっぱり肉声で話をするという、これが一番大事なんじゃないかなと。生の資料を扱う学芸員がITを頼っているようじゃダメなんです。モノを扱うからには、即物的な感情で学芸員には動いてもらいたい。時代が変わり手法が変わってもそういうのは変わらないと思うんですよね。肉声をもって仕事をしていただきたいというのが皆さんに持っていただきたいことです。



天野　話は尽きませんが、ここで座談会を終了とさせていただきます。皆さま、今日は本当にありがとうございました。

座談会を終えて

神奈川県立博物館から神奈川県立歴史博物館へと再編した頃のお話から始まり、その頃開始されたボランティアガイドについて、学芸部の個性や学芸部長の苦労、そしてこれからの課題……と、歴戦の学芸部長らから多岐にわたって博物館のあゆみをうかがうことが出来ました。

これまでの学芸部長が、職場の仲間たちと苦楽をともにし、その中で博物館の伝統と誇りを後輩たちに受け継いで来たんだ、という気概に触れることが出来たように思います。

今回の空調工事に伴う資料移転の際に、これまでの学芸員たちが収集してきた資料の背景にある様々な想いを折りに触れうかがうことが出来ました。梱包の際には、その想いを引き継ぐ気持ちで一つ一つ作業しました。資料とその想いがつながった瞬間でした。

今回うかがった色々なお話しの背景にある想い、そして受け継いできた伝統と誇りは、将来の後輩職員にもつないでいかなければならないと改めて強く感じました。

さて、平成30年4月再開第一弾の展覧会は、この「つなぐ」をキーワードに、この50年間に収集した資料で構成する「神奈川県博開館51周年記念　つなぐ、神奈川県博―Collection to Connection―」です。資料の背景にある様々な想いを少しでも伝えられるよう、伝統である「学芸員総出」で準備を行い、開催いたします。どうぞ御期待ください。　（天野 勇・学芸部長）

展覧会全記録
1967–2016

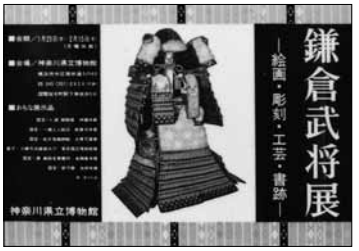
1967 昭和42年度［神奈川県立博物館開館］

特別展　かながわ名宝展
［会　期］ 3月22日(水)～4月9日(日)
［担当者］ 村田慶之輔・長谷部満彦

特別展　夏の昆虫と貝類標本
［会　期］ 8月22日(火)～9月21日(木)
［担当者］ 小林峯生・村岡健作

特別展　近世洋風画名作展
［主　催］ 神奈川県立博物館・朝日新聞社
［会　期］ 10月12日(木)～11月5日(日)
［担当者］ 横田洋一

特別展　鎌倉武将展 ―絵画・彫刻・工芸・書跡―
［会　期］ 1月25日(木)～2月15日(木)
［担当者］ 長谷部満彦・清水眞澄



特別展　梶山遺跡展 ―古代人の生活と遺物―
［会　期］ 3月15日(金)～4月29日(月)
［担当者］ 神沢勇一

＊主催標記のないものは当館のみの主催による

1968 昭和43年度

特別展　日本民芸館展
［主　催］ 神奈川県立博物館・日本民芸協会・神奈川県民芸協会
［会　期］ 5月3日(金)～5月26日(日)
［担当者］ 和田正洲・中村ひろ子

特別展　日本洋画の巨匠たち
―明治・大正・昭和前期―
［会　期］ 6月8日(土)
～7月7日(日)
［担当者］ 横田洋一

特別展　丹波コレクション　広重の風景
［会　期］ 7月23日(火)～8月4日(日)
［担当者］ 大戸吉古

特別展　海と陸の間 ―海岸の自然―
［会　期］ 8月10日(土)～9月1日(日)
［担当者］ 村岡健作・中村一恵

特別展　県下の先史時代土器展 ―土器と生活―
［会　期］ 3月15日(土)～5月11日(日)
［担当者］ 神沢勇一

1969 昭和44年度

特別公開　世界の蝶
［会　期］ 4月8日(火)～5月5日(月)
［担当者］ 小林峯生

特別公開　猛鳥類の生活
［会　期］ 5月10日(土)～6月22日(日)
［担当者］ 小林峯生

特別公開　和時計資料室
［会　期］ 6月3日(火)～6月10日(火)
［担当者］ 和田正洲

特別展　丹波コレクション　浮世絵200年
［会　期］ 7月12日(土)～8月10日(日)
［担当者］ 大戸吉古

季節展　高山の花 ―種類とその社会―
［会　期］ 7月5日(土)～8月20日(水)
［担当者］ 大場達之・高橋秀男

特別展　日本のカニ・世界のカニ
［会　期］ 8月20日(水)
～9月30日(火)
［担当者］ 村岡健作

特別展　日本の刀剣
［会　期］ 11月18日(火)～12月7日(日)
［担当者］ 長谷部満彦・横田博圀

季節展　神奈川県の岩石
［会　期］ 11月20日(木)～1月11日(日)
［担当者］ 今永 勇

特別展　ふるさとの造形 ―神奈川県の民芸・民具から―
［会　期］ 1月20日(火)～2月11日(水)
［担当者］ 和田正洲

特別展　神奈川県の化石
［会　期］ 2月24日(火)～4月5日(日)
［担当者］ 松島義章

1970 昭和45年度

特別展　花のきものと髪かざり
―江戸時代の服飾美術を中心にして―
［会　期］ 4月28日(火)～5月17日(日)
［担当者］ 長谷部満彦・横田博圀

テーマ展　昆虫の世界
［会　期］ 月　日(　)～5月31日(日)
［担当者］ 小林峯生

特別公開　和時計室
［会　期］ 6月9日(火)～6月14日(日)
［担当者］ 和田正洲

テーマ展　カニと人生
［会　期］ 6月9日(火)～7月29日(日)
［担当者］ 村岡健作

特別展　高山の自然 ―環境と生物―
［会　期］ 7月21日(火)
～8月30日(日)
［担当者］ 高橋秀男・大場達之

テーマ展　日本の貝・世界の貝
［会　期］ 8月1日(土)～9月10日(水)
［担当者］ 村岡健作

テーマ展　初代広重「東海道五十三次」
―現在の状況と比較して―
［会　期］ 10月6日(火)～10月11日(日)
［担当者］ 大戸吉古

特別展　横浜開港と洋画の開花
―チャールス・ワーグマンとその周辺―

［会　期］ 10月17日(土)
～11月8日(日)
［担当者］ 横田洋一

テーマ展　きのこ

［会　期］ 月 日( )～10月31日(日)
［担当者］ 高橋秀男

テーマ展　神奈川の岩石

［会　期］ 11月20日(金)～12月27日(日)
［担当者］ 今永 勇

テーマ展　神奈川県産脊椎動物化石展

［会　期］ 1月20日(金)～2月28日(日)
［担当者］ 松島義章

特別展　日本の楽器

［会　期］ 3月6日(土)
～3月28日(日)
［担当者］ 長谷部満彦・清水眞澄

担当者から一言

楽器の展覧会は、音楽。楽器に関係する大学や博物館で展示されることはあるが、今でもあまり多くない。そのきっかけは定かでないが、まったく知識がないので東京芸術大学教授小泉文夫先生に指導を仰ぎ、畏友樋口昭氏（埼玉大学名誉教授）にお世話になって実現した。弦楽器は日本の三味線や琴から、インド、中近東、中国、韓国などに広くルーツを求め、日本の雅楽、舞楽、能楽や民俗芸能の楽器を幅広く展示した。いい展覧会だったが、今なら音楽や映像と組み合わせられたと少し残念に思う。　（清水）

1971 昭和46年度

テーマ展　鳥の嘴とその生活

［会　期］ 5月20日(木)～7月10日(土)
［担当者］ 中村一恵

テーマ展　和時計展

［会　期］ 6月1日(火)～6月20日(土)
［担当者］ 和田正洲

特別展　日本の甲虫

［会　期］ 7月20日(火)
～8月29日(日)
［担当者］ 小林峯生

テーマ展　小笠原諸島の昆虫
―伊豆七島の昆虫相との比較―

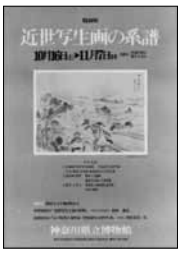
［会　期］ 7月20日(火)～8月29日(日)
［担当者］ 小林峯生

テーマ展　帰化植物

［会　期］ 9月14日(火)～10月17日(日)
［担当者］ 高橋秀男・中村一恵

特別展　近世写生画の系譜

［会　期］ 10月16日(土)
～11月7日(日)
［担当者］ 横田洋一



テーマ展　帰化動物

［会　期］ 10月20日(水)～11月30日(火)
［担当者］ 小林峯生・中村一恵

特別展　日本の兜

［会　期］ 11月20日(土)
～12月12日(日)
［担当者］ 清水眞澄

テーマ展　神奈川の岩石

［会　期］ 12月10日(木)～1月16日(日)
［担当者］ 今永 勇

特別展　**鎌倉の水墨画** ―画僧祥啓の周辺―
［会　期］ 2月1日(火)～2月27日(日)
［担当者］ 中島亮一

テーマ展　**神奈川県内産の貝化石**
［会　期］ 2月15日(火)～3月31日(金)
［担当者］ 松島義章

1972 昭和47年度

テーマ展　**神奈川県の仕事着**
［会　期］ 4月1日(土)～4月30日(日)
［担当者］ 和田正洲

特別展　**海に生きる鳥**
［会　期］ 5月3日(水)～5月31日(水)
［担当者］ 中村一恵

テーマ展　**近世の街道と宿場**
［会　期］ 6月3日(土)～6月28日(水)
［担当者］ 横田洋一

特別陳列　**新収資料の紹介**
［会　期］ 7月1日(土)～7月20日(木)

特別展　**貝の世界**
［会　期］ 7月25日(火)
～8月31日(木)
［担当者］ 村岡健作

テーマ展　**フォッサ・マグナ地域の植物**
―富士・箱根・伊豆の特色ある植物―
［会　期］ 9月5日(火)～10月1日(日)
［担当者］ 高橋秀男

テーマ展　**海蝕洞窟遺跡**
―三浦市間口遺跡・海に生きた古代人の生活と文化―
［会　期］ 10月5日(木)～10月28日(土)
［担当者］ 神沢勇一・川口徳治朗

担当者から一言
1971年から1973年まで5回に亘って行った、三浦市間口洞窟遺跡の発掘調査の成果を発表した展示でした。その際に発見された卜甲はアカウミガメの甲羅を用いた占いの道具で、古墳時代後期のものでした。発掘調査による初めて発見例で、私の竹べらの先で取り上げたのですが、これが何であるか、かいもく見当がつきませんでした。報告書より先に、この展覧会で紹介したのですが、見学者から大変注目され、胸が高鳴ったことを憶えています。　(川口)

特別展　**中世の陶器**
［会　期］ 11月1日(水)
～11月30日(木)
［担当者］ 長谷部満彦・八幡義信

担当者から一言
日本各地で生産された中世の陶器200数十点と関連資料を通して、わが国における中世陶器の成り立ちや発展の様子を展示・解説したものです。中世都市鎌倉では中国や朝鮮半島から威信財として多くの輸入陶磁器が到来し現在まで社寺に伝わっていますが、国内の中世陶器もたくさん鎌倉に運ばれ「やぐら」や武家屋敷遺跡などから数多く出土しています。恐らく中世の陶器に焦点をあてた大規模展示は初めてのことであったと思われます。(八幡)

テーマ展　**大理石**
［会　期］ 12月5日(火)～12月24日(日)
［担当者］ 今永 勇

テーマ展　**和鏡** ―池谷コレクションを中心に―
［会　期］ 1月9日(火)～1月28日(日)
［担当者］ 清水眞澄

特別展　広重 —東海道と江戸名所—

［会　期］ 2月3日(土)
～2月25日(日)
［担当者］ 大戸吉古・横田洋一

1973 昭和48年度

テーマ展　ふるさとの食器 —食生活の用具—

［会　期］ 4月1日(日)～4月29日(日)
［担当者］ 和田正洲

テーマ展　雑草の社会

［会　期］ 5月3日(木)～5月27日(日)
［担当者］ 高橋秀男・大場達之

テーマ展　化石は生きている

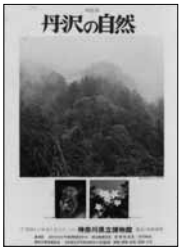
［会　期］ 6月2日(土)～7月1日(日)
［担当者］ 松島義章

特別陳列　新収品展

［会　期］ 7月7日(土)～7月22日(日)

特別展　丹沢の自然

［会　期］ 7月28日(土)
～9月2日(日)
［担当者］ 小林峯生



テーマ展　神奈川県の山と信仰 —大山を中心に—

［会　期］ 9月8日(土)～9月30日(日)
［担当者］ 八幡義信

担当者から一言

神奈川県の中央部に当たる丹沢山地には信仰の対象となった霊山がたくさんあります。そのなかで相模の国御岳として名高い大山を取り上げました。1879年に山頂の経塚から発見された常滑焼の経塚壺など、1960年に県教育委員会による山頂で行われた調査で発見された出土資料、阿夫利神社や大山

寺などに伝わる山岳信仰資料により、古代から近世に至る山と信仰の歴史をたどった展示です。　（八幡）

特別陳列　ニュージーランド現代民芸品展

［会　期］ 10月6日(土)～10月28日(日)
［担当者］ 和田正洲

特別展　日本のうつわ —縄文から明治まで—

［会　期］ 11月3日(土)
～12月2日(日)
［担当者］ 八幡義信

担当者から一言

縄文時代から明治時代に至る日本のうつわと、その関連資料により飲食器を通してわが国の食生活の変遷をひろくたどろうとしたものです。テーマ1は「美しい日本のうつわ」。機能的であるとともに美しい意匠に形つくられた土器、漆器、ガラス器、陶磁器など多彩な材質のうつわを展示しました。テーマ2～6は縄文時代から明治時代にわたるさまざまな材質のうつわを時代順に展示し、また会場にはうつわが使われている場面のパネルや当時の食べ物に関した資料も展示しました。（八幡）

テーマ展　浮世絵から見た忠臣蔵

［会　期］ 12月8日(土)～12月23日(日)
［担当者］ 横田洋一

テーマ展　正月の郷土玩具

［会　期］ 1月8日(火)～1月27日(日)
［担当者］ 和田正洲

テーマ展　横浜浮世絵

［会　期］ 2月2日(土)～2月24日(日)
［担当者］ 横田洋一

テーマ展　浮世絵に描かれた神奈川県 —その今と昔—

［会　期］ 3月21日(木)～3月31日(日)
［担当者］ 横田洋一

1974 昭和 49 年度

テーマ展　日本の風景 ―北斎と広重―
［会　期］ 4 月 4 日（木）～ 4 月 28 日（日）
［担当者］ 大戸吉古・横田洋一

テーマ展　模型からみた鉄道のあゆみ
［会　期］ 5 月 3 日（金）～ 5 月 26 日（日）
［担当者］ 大戸吉古

テーマ展　時計
［会　期］ 6 月 1 日（土）～ 6 月 30 日（日）
［担当者］ 和田正洲

特別陳列　新収品展
［会　期］ 7 月 6 日（土）～ 7 月 21 日（日）

特別展　地図のさまざま
［会　期］ 7 月 27 日（土）
～ 9 月 8 日（日）
［担当者］ 今永 勇

テーマ展　早雲寺の遺宝
［主　催］ 神奈川県文化財協会・神奈川県立博物館・神奈川新聞社
［会　期］ 9 月 14 日（土）～ 9 月 29 日（日）
［担当者］ 清水眞澄

テーマ展　趣味の植物誌
［共　催］ 植物ニュースの会
［会　期］ 10 月 5 日（土）～ 10 月 27 日（日）
［担当者］ 高橋秀男

特別展　日本の鉄砲
―その伝来から明治まで―
［会　期］ 11 月 2 日（土）
～ 12 月 1 日（日）
［担当者］ 横田洋一

テーマ展　金沢文庫・称名寺 ―絵画―
［会　期］ 12 月 7 日（土）～ 12 月 22 日（日）
［担当者］ 中島亮一

テーマ展　貝のコレクション ―三浦半島の貝―
［会　期］ 1 月 8 日（水）～ 2 月 2 日（日）
［担当者］ 村岡健作

テーマ展　縄文時代の石器
［会　期］ 2 月 8 日（土）～ 3 月 2 日（日）
［担当者］ 神沢勇一・川口徳治朗

1975 昭和 50 年度

テーマ展　郷土人形
［会　期］ 4 月 1 日（火）～ 4 月 29 日（火）
［担当者］ 和田正洲

テーマ展
描かれた明治の風物詩 ―五姓田義松絵画資料展
［会　期］ 5 月 10 日（土）～ 6 月 1 日（日）
［担当者］ 横田洋一

テーマ展　吾妻鏡 ―鎌倉幕府の記録―
［会　期］ 6 月 7 日（土）～ 6 月 29 日（日）
［担当者］ 八幡義信

担当者から一言
東国中世史研究の重要史料の一つである「吾妻鏡」を様々な視点からとらえた展示です。原本は存在しませんが、古い写本や古活字本、木版本、研究書などと共に、「吾妻鏡」に記載された鎌倉の社寺の古瓦などを展示しました。写本では前田家尊経閣文庫所蔵の 3 件の重要文化財史料、内閣文庫所蔵の北条本、東京大学史料編纂所所蔵の「吾妻鏡」ほか。版本では本館所蔵の慶長古活字本・寛永 3 年版本 2 種（初版・再版）・寛文元年本・寛永八年平仮名版。江戸時代以降の研究書。鎌倉の社寺では永福寺・鶴岡八幡宮・建長寺はじめ 13 社寺の古瓦資料や仏像彫刻、絵画、書跡などを関連資料として展示しました。「吾妻鏡」をテーマとした初めての展覧会でした。　（八幡）

特別陳列　新収品展
［会　期］ 7 月 5 日（土）～ 7 月 20 日（日）

特別展　自然の華 ―鉱物のさまざま―

［会　期］ 7月26日(土)
～8月31日(日)
［担当者］ 今永 勇

テーマ展　建長寺の絵画と墨跡

［主　催］神奈川県文化財協会・神奈川県教育委員会・
神奈川新聞社
［会　期］ 9月13日(土)～9月28日(日)
［担当者］ 中島亮一

特別展　東海道今昔物語

［会　期］ 11月1日(土)
～11月30日(日)
［担当者］ 大戸吉古・阿部正道

テーマ展　先史時代の装身具

［会　期］ 1月10日(土)～2月1日(日)
［担当者］ 神沢勇一

1976 昭和51年度

テーマ展　足柄山と金太郎

［会　期］ 4月10日(土)～5月9日(日)
［担当者］ 横田洋一

テーマ展　和時計

［会　期］ 5月29日(土)～6月27日(日)
［担当者］ 和田正洲

テーマ展
特別展からみた神奈川県立博物館10年のあゆみ

［会　期］ 7月17日(土)～9月5日(日)

テーマ展　渡り鳥 ―ガンとカモ―

［会　期］ 10月2日(土)～10月24日(日)
［担当者］ 中村一恵

特別展　横浜浮世絵と長崎版画

［会　期］ 10月30日(土)～11月28日(日)
［担当者］ 横田洋一

特別展　日本のこよみ

［会　期］ 1月22日(土)～2月20日(日)
［担当者］ 長谷部満彦

特別展　日本のスミレ・世界のスミレ

［会　期］ 2月26日(土)～3月27日(日)
［担当者］ 大場達之

1977 昭和52年度

特別展　浮世絵の彫りと摺り
―初摺り・後摺り・変り摺り―

［会　期］ 4月29日(金)～5月22日(日)
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎
［入館者数］ 10,396人

特別展　化石 ―ジュラ紀の生物―

［会　期］ 7月23日(土)～8月31日(日)
［担当者］ 松島義章　　［入館者数］ 19,603人

開館10周年記念特別展
100躰の仏像を観る ―神奈川の彫刻―

［会　期］ 10月8日(土)～11月13日(日)
［担当者］ 清水眞澄　　［入館者数］ 38,619人

担当者から一言

開館10周年記念事業の展覧会で、大磯・王福寺薬師如来像、横須賀・浄楽寺阿弥陀三尊像（運慶作）、伊勢原・宝城坊四天王像、横浜・称名寺弥勒菩薩像をはじめ名品が100躰以上揃い、今思うと、よくこれだけの仏像が展示できたというのが率直な感想である。最終日、閉館直後のエントランスホールで、私は感動と寂しさにしばし呆然としていた。学芸だけでなく、総務や経理の事務職員、守衛さん達も一緒に仏像を梱包し、大工仕事をし、展示した思いがあったからである。　（清水）

特別展　淡水の生きものたち

［会　期］ 3月2日(木)～3月20日(木)
［担当者］ 村岡健作　　［入館者数］ 9,059人

1978 昭和 53年度

特別展　こけし古名品展

［会　期］ 4 月 29 日（土）～ 6 月 4 日（日）
［担当者］ 長田 平　　［入館者数］ 18,122 人

神奈川芸術祭特別展　小笠原の生物
―大洋島における生物の進化

［会　期］ 7 月 1 日（土）～ 9 月 3 日（日）
［担当者］ 中村一恵　　［入館者数］ 18,223 人

特別展　日本の民窯 ―暮らしのやきもの―

［会　期］ 10 月 7 日（土）
～ 11 月 26 日（日）
［担当者］ 八幡義信
［入館者数］ 21,644 人

担当者から一言

日本陶磁協会及び日本民藝館の後援のもとに開催されました。「中世の陶器」、「日本のうつわ」に続く陶磁器関係の企画で、江戸時代の暮らしのやきものに焦点を当てた展示です。民窯とは江戸時代以降に庶民の生活に供された暮らしのやきもののことです。全国各地には庶民の日常生活を支えた窯場がたくさんありましたが、この展示では全国の窯場や博物館、美術館、資料館、個人などから 1300 点以上の生活雑器を集め、展示された近世の窯場は 78 におよびました。これまで博物館や美術館では展示されることの少なかった暮らしのやきものを全国から集めた大規模な展示でした。（八幡）

トピックコーナー　天皇海山のカニ類

［会　期］ 1 月 27 日（土）～ 3 月 4 日（日）
［担当者］ 村岡健作

特別陳列　カナダ外務省提供
カナダ北西岸インディアン文化資料展

［会　期］ 2 月 3 日（土）～ 2 月 18 日（日）
［担当者］ 和田正洲　　［入館者数］ 3,706 人

巡回展　神奈川 野の花

［会　場］ 相模原市橋本公民館
［会　期］ 2 月 21 日（水）～ 2 月 27 日（火）
［入館者数］ 420 人

［会　場］ 小田原市郷土文化館
［会　期］ 3 月 2 日（金）～ 3 月 8 日（木）
［入館者数］ 496 人

［会　場］ 秦野市西公民館
［会　期］ 3 月 10 日（土）～ 3 月 16 日（金）
［入館者数］ 536 人

［担当者］ 大場達之

特別展　八幡宮 ―明治期の神と仏の世界―

［会　期］ 3 月 3 日（土）～ 3 月 25 日（日）
［担当者］ 岩壁義光・薄井和男
［入館者数］ 10,123 人

担当者から一言

短い期間でしたが、廃仏毀釈による鶴岡八幡宮寺から鶴岡八幡宮への移り変わりを、展示することが出来ました。学芸員として最初に開催した展示会で、深く記憶に残っています。（岩壁）

1979 昭和 54年度

特別陳列　浮世絵に見る明治憲法

［会　期］ 4 月 28 日（土）～ 5 月 20 日（日）
［担当者］ 岩壁義光　　［入館者数］ 8,409 人

特別展　日本のシカ ―その生活と人とのかかわり合い―

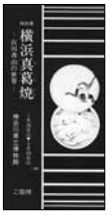
［会　期］ 7 月 28 日（土）～ 8 月 30 日（木）
［担当者］ 小林峯生　　［入館者数］ 10,437 人

神奈川芸術祭特別展
江戸派の絵画 ―谷文晁の画業をさぐる―

［会　期］ 10 月 27 日（土）～ 11 月 25 日（日）
［担当者］ 中島亮一　　［入館者数］ 10,282 人

特別展　横浜真葛焼 ―宮川香山の世界―

［会　期］ 1 月 26 日（土）～ 2 月 24 日（日）
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 9,547 人



特別陳列　根付 ―森谷・池田コレクションから―

［会　期］ 1 月 26 日（土）～ 2 月 24 日（日）
［担当者］ 清水眞澄
［入館者数］ 9,547 人（特別展と同一カウント）

特別展　春の昆虫 ―かながわの春のチョウ―

［会　期］ 3 月 1 日（土）～ 3 月 30 日（日）
［担当者］ 新井一政　　［入館者数］ 8,790 人

1980 昭和 55 年度

特別陳列　東漸寺

［会　期］ 4 月 12 日（土）～ 5 月 11 日（日）
［担当者］ 清水眞澄・薄井和男
［入館者数］ 11,454 人

特別陳列　下村観山資料展 ―没後 50 年

［会　期］ 5 月 10 日（土）～ 6 月 8 日（日）
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎

特別展　世界の蝶

［会　期］ 7 月 26 日（土）～ 8 月 31 日（日）
［担当者］ 新井一政　　［入館者数］ 26,026 人

特別陳列　海外における公家大名展

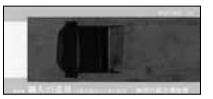
［会　期］ 9 月 13 日（土）～ 9 月 28 日（日）
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎・岩壁義光

担当者から一言

明治期の華族が果たした欧米文化導入による日本の近代化をテーマとした展示。旧華族家所蔵初出資料が多数展示された。　（岩壁）

神奈川芸術祭特別展　職人の道具

［会　期］ 10 月 25 日（土）～ 11 月 23 日（日）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大・鈴木良明
［入館者数］ 9,869 人



特別展　郷土の人物展 ―かながわの 100 人から―

［主　催］ 神奈川県社会教育課・神奈川県立博物館
［会　期］ 1 月 31 日（土）～ 2 月 22 日（日）
［担当者］ 橋本健一郎・岩壁義光
［入館者数］ 4,895 人

担当者から一言

「かながわの 100 人」が選定されたことを受け開催した展示です。神奈川県出身でない私にとって、恥ずかしながら名前を聞いてもピンと来ない人物も多く、神奈川への地元意識が少なかったことを改めて感じることになりました。展示を準備する中で多くの出会いがあり、神奈川県博としての仕事を強烈に意識させられました。　（岩壁）

特別展　地中海気候の花 ―硬葉樹林帯の植物―

［会　期］ 3 月 3 日（火）～ 3 月 29 日（日）
［担当者］ 大場達之・高橋秀男
［入館者数］ 7,080 人

1981 昭和 56 年度

特別展　蓄音機とレコードの歴史

［会　期］ 4 月 25 日（土）～ 5 月 24 日（日）
［担当者］ 橋本健一郎
［入館者数］ 11,215 人

担当者から一言

この特展では、展示がレコードのジャケットやラベル等に偏重していたため、蓄音機から流れる音を展示室で再現することにしました。現在では特展で AV 機器の活用はごく普通のことですが、当時はそれほど一般的ではなく、

カセットテープに録音してヘッドホーンを利用しました。しかしトラブルも多かった記憶があります。　（岩壁）

特別展　海洋の科学 ―海の地質をさぐる―

［会　期］ 8月1日（土）～9月6日（日）
［担当者］ 今永 勇　［入館者数］ 12,096人

神奈川県国際交流展

メリーランド現代美術展

―Works on Paper

［会　期］ 9月12日（土）～9月27日（日）
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 4,859人

担当者から一言

友好県州締結記念展。内容的には県博にはそぐわなかったが、多くの県民にご覧戴くために開催した現代アート展。　（岩壁）

かながわふるさとまつり特別展

キノコ ―キノコと自然と人間と―

［会　期］ 10月3日（土）～11月3日（火）
［担当者］ 生出智哉　［入館者数］ 11,600人

神奈川芸術祭特別展

鎌倉のまつり ―鶴岡八幡宮の神事―

［会　期］ 11月14日（土）～12月6日（日）
［担当者］ 八幡義信　［入館者数］ 4,187人

International Exchange Exhibition

JAPAN AND THE WEST IN JAPANESE PRINTS

［会　場］ ウォルターズ･アートギャラリー（米国メリーランド州）
［会　期］ 1月24日（日）～2月21日（日）
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎・岩壁義光

担当者から一言

県博最初の海外交流展。前年のクラフト展の返礼展。メリーランド州ボルティモア市のウォルターズ・アート・ギャラリーが会場。市主催で正式なレセプションも行われ、他州の学芸員との交流を盛んに行った。　（岩壁）

開館15周年記念特別展　館蔵品展

［会　期］ 2月27日（土）～3月28日（日）
［担当者］ 学芸部　［入館者数］ 10,305人

1982 昭和57年度

国際交流展　米国メリーランド州公開記念

浮世絵に見る日本と西洋

［共　催］ 神奈川新聞社
［会　期］ 4月24日（土）～5月23日（日）
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎・岩壁義光
［入館者数］ 15,653人

特別展　日本の昆虫

［会　期］ 7月24日（土）～8月29日（日）
［担当者］ 新井一政　［入館者数］ 19,611人

特別展

シギとチドリの世界

［会　期］ 9月11日（土）～10月10日（日）
［担当者］ 中村一恵　［入館者数］ 7,391人

特別展　絵にみる庶民生活

［会　期］ 3月5日（土）～3月27日（日）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大・鈴木良明
［入館者数］ 5,401人

担当者から一言

博物館に入るまでは、モノ（物質文化＝民具）よりもコト（精神文化＝伝承）を研究対象としていた。澁澤敬三の「絵引」には関心があったので、それを活用するため特別展に選んだテーマが「描かれた民俗事象」、タイトルは「絵画資料にみる民俗生活」としたかったが断念した。モノは対象とせず、四季耕作図・一遍聖絵・風俗絵巻・地誌などの絵画資料をもとに、当時の服装･食具･農具･祭礼・職人など、生き生きと描かれた生活の様相を紹介。　（鈴木）

1983 昭和58年度

特別展　黒潮の生きもの

［会　期］ 7月23日(土)～9月4日(日)
［担当者］ 村岡健作
［入館者数］ 14,295人

神奈川芸術祭特別展　常盤山文庫名品展

［主　催］ 神奈川県立博物館・常盤山文庫
［会　期］ 10月29日(土)～11月27日(日)
［担当者］ 八幡義信・横田洋一・相澤正彦
［入館者数］ 10,163人

担当者から一言

入館して六カ月ほどのことで、私の初めて担当した展覧会でした。最初は情報普及課に配属されていたのですが、私の専門の水墨画や墨蹟が出品される関係で、急遽、学芸部に移されました。構成や図録執筆は慶応大学の衛藤駿先生、所蔵者は根津美術館の菅原壽雄館長、作品は国宝揃いということで、両氏の薫陶と名作の実見によって、禅宗美術研究への目が開かれたことは何にも代え難い経験となりました。清拙正澄筆の「毘嵐巻」を目の前にした感動は今も忘れられません。　（相澤）

特別展　県下新出土考古資料展

［会　期］ 2月25日(土)～3月25日(日)
［担当者］ 神沢勇一・川口徳治朗
［入館者数］ 7,470人

担当者から一言

昭和42年開館以来、15年を経て神奈川県内で発見された考古資料の展示でした。高度成長期の中で多数の遺跡が発掘調査され、多数の出土品があり、展示品の選定に頭を痛めました。展示候補が決まって、出品の交渉をする際に所蔵者から色々と条件、注文を付けられました。交渉人・集荷者・展示取扱者の指名、貸出資料の写真撮影・実測図作成の禁止などがあり、日常的に丁寧な付き合いを欠かさずに、関係を築いておくことが大切であることを知らされました。　（川口）

1984 昭和59年度

特別展　小哺乳類の世界 ―野や森の小さなけものたち―

［会　期］ 7月21日(土)～9月2日(日)
［担当者］ 山口佳秀　　［入館者数］ 12,168人

神奈川芸術祭特別展
神奈川の古瓦 ―国分寺から西洋館まで―

［会　期］ 10月6日(土)～11月3日(土)
［担当者］ 斎藤彦司　　［入館者数］10,691人

担当者から一言

瓦は各時代の主要な建造物の屋根に葺かれていました。いわば、歴史の目撃者だったのです。瓦に歴史を語ってもらいたいと考え特別展を企画しました。また、瓦は「値うちのないもの・つまらないもの」の代名詞になっています。童謡「はなさかじじい」の二番の歌詞に「いじわるじいさんぽちかりて、うらのはたけをほったれば、かわらやかいがら（せとがけ）、ガラガラガラガラ」とあります。畑から瓦・貝殻・瀬戸片が沢山出土するならば、私がもう少し意地悪だったら、考古学上もっと良い仕事が出来たかも知れないと、ふと考えました。　（斎藤）

特別展　コケの世界 ―その種類と人とのかかわりあい―

［会　期］ 2月23日(土)～3月31日(日)
［担当者］ 生出智哉　　［入館者数］ 7,367人

1985 昭和60年度

館蔵品特別陳列　化石 ―失われた世界の生きものたち―

［会　期］ 7月20日(土)～8月25日(日)
［担当者］ 松島義章　　［入館者数］ 9,455人

特別展　木地屋の世界

［会　期］ 9月1日(日)～10月6日(日)
［担当者］ 長田 平・鈴木通大　　［入館者数］ 6,613人

担当者から一言

木地屋はかつて全国の山中を渡り歩き、盆や椀の木地を生産していまし

たが、時代の変化とともに、各地の漆器産地などに定住し、日本の工芸史に大きな足跡を残しました。本県においても伊勢原市大山と箱根地方に木地屋が活躍していたことは江戸時代から知られていました。本展では、木地屋の歴史的背景に留意しながら、発掘された木地製品、木地屋の組織、木地屋の信仰、木地屋の道具、ロクロの変遷などを展示しました。「職人の道具」展の各論編的展覧会という位置付けです。（長田）

特別展　遊行の美術
―一遍――そして浄土を求め旅した人びと―

［会　期］ 10月19日(土)～12月1日(日)
［担当者］ 薄井和男・相澤正彦　［入館者数］14,826人

担当者から一言

まだ駆け出しの学芸員時代、同僚の相澤さんと無我夢中で取り組んだ大規模特別展でした。一遍上人を開祖と仰ぐ時宗は、この当時、国宝一遍聖絵を除き一般にはその文化財などよく知られておらず、本展はその全容を紹介する初の展覧会でした。時宗総本山である藤沢遊行寺の協力をいただき全国を巡っての調査、出陳交渉、そして準備、開催と疲れ知らずで駆け抜けました。総本山の所在地、神奈川県の博物館学芸員として、ほかには絶対に譲れない題材だとのおもいもありました。学芸員、研究者としてのよろこびを与えてくれた最初の担当展でした。（薄井）

特別陳列　新収資料 ―井上コレクション―

［会　期］ 3月1日(土)～3月　日(　)
［担当者］ 小林峯生

特別展　横浜銅版画 ―明治の商家―

［会　期］ 3月25日(火)～5月11日(日)
［担当者］ 岩壁義光　［入館者数］15,373人

担当者から一言

横浜商人の活動を銅版画を通じて知って戴くことを目的とした歴史展示。美術の視点では展示順序が異なるとの意見があった。（岩壁）

1986 昭和61年度

開館20周年記念特別展　火山と地震

［会　期］ 7月20日(日)～9月7日(日)
［担当者］ 今永 勇　［入館者数］ 12,482人

開館20周年記念特別展
明治の宮廷画家 ―五姓田義松―

［主　催］ 神奈川県立博物館・明治美術研究学会
［会　期］ 10月18日(土)
～11月30日(日)
［担当者］ 横田洋一・岩壁義光
［入館者数］ 15,936人

担当者から一言

この展示会で五姓田の史料翻刻を担当しました。後年、『太政官期地方巡幸研究便覧』（柏書房）を刊行した際に、彼の巡幸関連作品と日記が大変役に立ち、図録の意味を見直した次第です。（岩壁）

特別陳列　近世の屏風

［会　期］ 1月6日(火)～1月　日(　)
［担当者］ 相澤正彦

フランス巡回記念・開館20周年記念特別展
浮世絵名作展

［主　催］ 神奈川県立博物館・毎日新聞社
［会　期］ 1月24日(土)
～2月22日(日)
［巡　回］ 熊本県立美術館・大丸東京店
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎・
岩壁義光
［入館者数］ 17,521人

担当者から一言

フランスのオルレアン、カーン、ルーアンで開催した巡回展。ヨーロッパの博物館活動を学ぶ上でも好機会になった。（岩壁）

開館20周年記念特別展
貝のさまざま ―鹿間コレクションから―

［会　期］ 3月14日(土)～5月17日(日)
［担当者］ 村岡健作　［入館者数］ 20,976人

1987 昭和 62年度

特別展　写真でみる「神奈川の巨樹・名木」

［会　期］ 7月 18日（土）～ 8月 30日（日）
［担当者］ 高橋秀男　　［入館者数］ 10,811 人

特別展　鍋島 ―藩窯から現代まで―

［主　催］ 神奈川県立博物館・朝日新聞社
［会　期］ 9月 20日（日）～ 11月 15日（日）
［担当者］ 八幡義信　　［入館者数］ 29,387 人

担当者から一言

鍋島焼は伊万里、柿右衛門、九谷などとともにわが国近世磁器を代表する窯場です。なかでもとりわけ鍋島焼は、藩直営の御用窯として保護され、幕府や諸大名への公的な贈答品のみを製作したため、その意匠や色彩など格調の高さにおいて独特の光彩を放っています。当館では「中世の陶器」「日本のうつわ」「日本の民窯」「横浜真葛焼」など、日本の陶磁器を紹介してきましたが、その一環として伝統的な藩窯の魅力と現代に至る変遷を展示しました。　（八幡）

特別展　アメリカの夢を描く　ポール・デービスの世界

［主　催］ 神奈川県立博物館・毎日新聞社
［会　期］ 12月 1日（火）～ 12月 20日（日）
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 3,467 人

新春陳列　近世の絵巻と絵本

［会　期］ 1月 5日（火）～ 1月 31日（日）
［担当者］ 相澤正彦

神奈川県植物誌 1988 刊行記念特別展　神奈川の植物

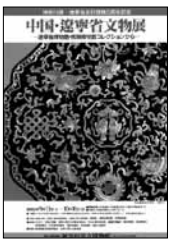
［会　期］ 3月 19日（日）～ 5月 8日（日）
［担当者］ 高橋秀男　　［入館者数］ 13,487 人

1988 昭和 63年度

特別展　日本の帰化動物　―外国からやってきた生きものたち―

［会　期］ 7月 16日（土）～ 8月 31日（水）
［担当者］ 中村一恵　　［入館者数］ 10,621 人

特別展　神奈川県・遼寧省友好提携 5周年記念
中国・遼寧省文物展
―遼寧省博物館・旅順博物館コレクションから―



［主　催］神奈川県・神奈川県教育委員会・神奈川県立博物館・遼寧省・遼寧省文化庁・遼寧省博物館・旅順博物館
［会　期］ 9月 13日（火）～ 10月 16日（日）
［担当者］ 斎藤彦司・相澤正彦
［入館者数］ 12,747 人

担当者から一言

姉妹都市であった遼寧省と神奈川県の親善記念として行われたものです。考古と絵画が主体であったため斎藤彦司先輩とともに突然降って湧いたように担当を命じられました。当時は中国各省の文物展覧会ばやりでしたが、中国側が選んだものを展示するのがやまやまでしたので、担当の仕事としては中国側への表敬訪問随行や作品撮影等といったものでした。省都瀋陽と大連に幾度か出向くことになりましたが、この目で発展以前の中国を見られたことが、予期せぬ収穫でした。撮影終了後、緊張していた遼寧省博物館の学芸スタッフが途端に笑顔になり、小宴になったことは今でも忘れられません。　（相澤）

特別展　神奈川の金銅仏 ―銅・鉄の仏たち―

［会　期］ 10月 25日（火）～ 11月 27日（日）
［担当者］ 薄井和男
［入館者数］ 16,380 人

担当者から一言

県博の学芸仕事にもひととおり慣れたころ、仏像彫刻の担当として少し変わった切り口で仏像展をとおもい、県内の金属造の像だけを拾う特別展を企画した。神奈川は銅造のほかに鉄造の仏像が全国でも多くあり、これもあつかうことにしました。重い、銅造の仏像は

小ぶりでも結構重たい。しかし、鉄造はこの比ではなかった。半等身大の像でも、四人で持って腰が抜けるほど重い。「神奈川の金銅仏」それは重い思い出がよみがえる特別展でした。（薄井）

新春陳列　近世の絵巻と絵本

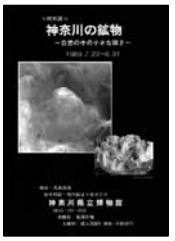
［会　期］ 1月5日（火）～1月31日（日）
［担当者］ 相澤正彦

1989 昭和64年度・平成元年度

特別展　J.-H ファーブル
―昆虫と語ったプロヴァンスの聖者―

［主　催］ 神奈川県立博物館・毎日新聞社
［会　期］ 4月15日（土）～6月4日（日）
［担当者］ 高桑正敏・新井一政
［入館者数］26,140人

特別展　神奈川の鉱物
―自然の中の小さな輝き―



［会　期］ 7月28日（土）
～8月31日（木）
［担当者］ 平田大二・今永 勇
［入館者数］ 7,617人

特別展　大開港シリーズ第3回
開港から攘夷の海

［主　催］ 社団法人霞会館・神奈川県立博物館・兵庫県立歴史博物館
［会　期］ 9月9日（土）
～10月10日（火）
［担当者］ 岩壁義光
［入館者数］ 5,863人

担当者から一言

霞会館と共同調査し開催した大開港展の一部。出品資料のうち、谷文一の『万延元年遣米使節随行スケッチ』は現地の新聞の挿絵などを剽窃して描かれたものもあり、幕末期における情報の作られ方を考えるよい機会になりました。また、この展示会を機に黒船来航絵巻をはじめとする歴史絵画資料を神奈川県博の目玉と位置づけ、市民権を与えたいと考えるようになりました。後輩の方々には、今後の活躍に期待しています。（岩壁）

特別展　後北条氏と東国文化

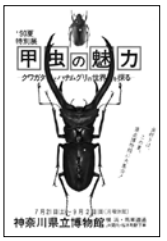
［会　期］ 10月21日（土）～11月26日（日）
［担当者］ 鳥居和郎・相澤正彦
［入館者数］ 10,725人

特別陳列　平成元年　新収蔵品展

［会　期］ 3月17日（土）
～4月1日（日）
［入館者数］ 3,868人

1990 平成2年度

特別展　甲虫の魅力
―クワガタとハナムグリの世界を探る―



［会　期］ 7月21日（土）
～9月2日（日）
［担当者］ 高桑正敏
［入館者数］ 17,578人

特別展　没後100年記念　チャールズ・ワーグマン
ロンドン発・横浜行き
あるイギリス人画家の幕末・明治

［主　催］ 神奈川県立博物館・神戸市立博物館・朝日新聞社
［会　期］ 9月29日（土）
～11月11日（日）
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 14,667人

特別展　近世武相名所めぐり
―浮世絵・絵図・名所記にみる江戸庶民の楽しみ―

［会　期］ 2月2日(土)～3月10日(日)
［担当者］ 鈴木良明・橋本健一郎
［入館者数］ 9,942人

特別陳列　中津層調査の成果　ステゴドンゾウの発掘
―200万年前の神奈川を探る―

［会　期］ 3月20日(水)～5月12日(日)
［担当者］ 松島義章
［入館者数］ 14,580人

特別陳列　平成2年　新収蔵品展

［会　期］ 3月20日(水)～5月12日(日)
［入館者数］ 14,580人

1991 平成3年度

特別展　深海への招待
―未知と神秘の世界を探る―

［会　期］ 7月20日(土)～9月1日(日)
［担当者］ 今永 勇
［入館者数］ 12,853人

特別展　浮世絵名品500選
―春信・清長・歌麿・北斎・広重―

［会　期］ 10月5日(土)～12月1日(日)
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎
［入館者数］ 24,166人

担当者から一言

「丹波コレクション」をはじめとする浮世絵約7000点の中から厳選した517点を、前期・後期に分けて展示しました。総勢86人の絵師による浮世絵版画創始から近代までを網羅し、浮世絵の流れをたどる本邦初の展覧会となりました。作品の選定及び、作品解説には故横田洋一氏とともに苦労しましたが、当館の浮世絵コレクションの特徴を示す展示になったと自負しております。　(橋本)

トピックス展示　四季耕作図屏風

［会　期］ 1月5日(日)～2月2日(日)
［担当者］ 相澤正彦

トピックス展示　横浜真葛焼

［会　期］ 2月1日(土)～3月26日(木)
［担当者］ 横田洋一

トピックス展示　萩原鉱物コレクション

［会　期］ 3月28日(土)～5月28日(木)
［担当者］ 松島義章

1992 平成4年度

トピックス展示　金太郎と鍾馗

［会　期］ 4月25日(土)～5月28日(木)
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎

トピックス展示　古代・石の造形美

［会　期］ 5月30日(土)～6月25日(木)
［担当者］ 神沢勇一

トピックス展示　七夕

［会　期］ 6月27日(土)～7月30日(木)
［担当者］ 橋本健一郎

トピックス展示　幽霊・妖怪

［会　期］ 8月1日(土)～8月27日(木)
［担当者］ 橋本健一郎

トピックス展示　彫漆（堆朱・堆黒）と鎌倉彫
［会　期］ 8 月 29 日（土）～ 9 月 23 日（水）
［担当者］ 薄井和男

トピックス展示　浄土教の美術
［会　期］ 9 月 26 日（土）～ 11 月 26 日（木）
［担当者］ 相澤正彦

トピックス展示　かながわの正月行事
［会　期］ 11 月 28 日（土）～ 1 月 28 日（木）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大

トピックス展示　黒船来航絵巻の世界
［会　期］ 1 月 5 日（火）～ 1 月 28 日（木）
［担当者］ 岩壁義光

トピックス展示
輸出伊万里 ―海をわたった日本のやきもの―
［会　期］ 1 月 30 日（土）～ 3 月 31 日（水）
［担当者］ 八幡義信

トピックス展示
神奈川の現代史 ―新収蔵資料の紹介―
［会　期］ 2 月 27 日（土）～ 3 月 31 日（水）
［担当者］ 寺嵜弘康

再編整備に伴うコーナー　再編整備に伴う PR 展示
［会　期］ 3 月 16 日（火）～ 3 月 31 日（水）
［担当者］ 学芸部

1993 平成 5 年度

1994 平成 6 年度

再編整備のため、休館

※ 再編整備後については、歴史博物館主催展覧会を掲載

1995 平成 7 年度［神奈川県立歴史博物館開館］

開館記念特別展
［会　期］ 3 月 18 日（土）～ 5 月 14 日（日）

特別展　浮世絵最後の巨匠　月岡芳年展
［共　催］ 日本経済新聞社
［会　期］ 7 月 1 日（土）～ 8 月 27 日（日）
［担当者］ 横田洋一　　［入館者数］ 15,306 人

特別展　弥生文化の謎とロマン　銅鐸の美
［主　催］ 神奈川県立歴史博物館・毎日新聞社
［会　期］ 1 月 13 日（土）
～ 3 月 24 日（日）
［担当者］ 國平健三・川口徳治朗
［入館者数］ 19,621 人

1996 平成 8 年度

特別陳列　平成 7 年度　新収品展
［会　期］ 4 月 13 日（土）～ 5 月 19 日（日）
［担当者］ 学芸部　　［入館者数］ 7,236 人

特別企画　浮世絵に見る夏の風物詩
［会　期］ 7 月 20 日（土）
～ 8 月 25 日（日）
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 10,947 人

特別展　寛永の華　後水尾帝と東福門院和子
［主　催］ 社団法人霞会館・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 10 月 3 日（木）
～ 11 月 10 日（日）
［担当者］ 鈴木良明・橋本健一郎・相澤正彦
［入館者数］ 11,781 人

特別企画　絹の華　横浜スカーフの歴史

［共　催］ 横浜繊維振興会
［会　期］ 2月1日（土）
　　～3月2日（日）
［担当者］ 相馬孝昭・宗像盛久
［入館者数］ 4,795人

特別展　横浜の古寺・寶生寺の文化財

［会　期］ 3月20日（木）
　　～5月5日（月）
［担当者］ 薄井和男・相澤正彦
［入館者数］ 9,148人

担当者から一言

宝生寺は横浜市内の中世美術の宝庫であり、私は入館以来、その寄託品を担当し、親しく謦咳に接していた御住持の佐伯真光師のご厚志に応えるためにも、念願の展覧会でした。多くの仏画や仏像を整然と展示することができ、図録もB5判の瀟洒な手帳の体裁で作りることができ、得心のいく展覧会でした。佐伯師は高名な仏教学者で、眼光鋭く、手厳しい社会時評などもものされていました。が、私には常に穏やかで仏教学の奥深さを教えてくれました。鬼籍に入られて久しくなりますが、懐かしい限りです。　（相澤）

1997　平成9年度

開館30周年記念特別展
世界のかたち　日本のかたち
―渡辺紳一郎古地図コレクションを中心に―

［会　期］ 6月28日（土）
　　～8月31日（日）
［担当者］ 嶋村元宏
［入館者数］ 8,682人

担当者から一言

はじめて主担当した特別展。日本近現代史を専攻してきた私にとっては未知なる領域である古地図研究を一から始めることになりました。コレクションを受け入れ、資料整理、調査研究そして展覧会を通じてその成果を県民にお見せするという、まさに学芸員としての一通りの仕事を経験できました。また学芸員としては駆け出しの私に対し、多くの方々がサポートしてくれてやり遂げることができた、まさに“県博の特別展”を実感できた展覧会でもありました。　（嶋村）

特別展　遊行寺蔵　一遍上人絵巻の世界

［会　期］ 9月13日（土）
　　～10月19日（日）
［担当者］ 相澤正彦・薄井和男
［入館者数］ 5,470人

担当者から一言

藤沢清浄光寺にある「遊行上人縁起絵巻」10巻は、国宝「一遍聖絵」が高名な反面、あまりその価値が認識されておらず、かねてから全巻展示を期していたものでした。清浄光寺には「遊行の美術展」開催後も、宗宝委員として全国寺院調査などで親しくさせていただいたために、話はとんとん拍子に進みました。私が就職した当初から、研究者の先達として敬してやまなかった遊行寺宝物館長の高野修氏への御恩返しの念もありました。　（相澤）

開館30周年記念特別展
横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀

［会　期］ 11月1日（土）
　　～12月14日（日）
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 9,278人

開館30周年記念特別展　30年のあゆみ

［会　期］ 1月24日（土）～3月1日（日）
［担当者］ 宗像盛久　　［入館者数］ 4,610人

特別展　木と民具
―暮らしの知恵と工夫―

［会　期］ 3月21日（土）～5月5日（火）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大
［入館者数］ 6,123人

担当者から一言

道具の素材がテーマです。伝統的な生活用具つまり民具の多くは、木をはじめとして草・竹・石など身の回りにある自然の素材を生かして作られました。しかし、それらの自然由来の素材からから金属やプラスチックなどに変わったものも少なくありません。ここで取り上げた伝統的な民具の大部分は我々の日常生活から消えましたが、自然とともに生ていた先人たちの知恵と工夫が見られました。（長田）

1998 平成10年度

コレクション展　ワーグマン展

［会　期］ 5月23日（土）～6月28日（日）
［担当者］ 横田洋一

特別展　包むこころ ふろしき展

［主　催］神奈川県立歴史博物館・毎日新聞社
［会　期］ 7月11日（土）～8月23日（日）
［担当者］ 橋本健一郎
［入館者数］ 9,532人

担当者から一言

三瓶清子氏所蔵の日本の風呂敷約500点の中から200余点を選び、毎日新聞社と共催で行った展覧会です。各種の祝い事に使われていたデザインは種類が多く、四角い布でおこなう創意工夫の多様さに驚きました。風呂敷の良さを見直す画期的な展覧会となりました。（橋本）

特別展　一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査開始30周年・一乗谷朝倉氏遺跡特別史跡指定25周年記念巡回展
越前朝倉氏・一乗谷 ―眠りからさめた戦国の城下町―

［主　催］福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館・朝日新聞社・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 9月3日（木）～10月18日（日）
［担当者］ 鳥居和郎
［入館者数］ 12,561人

特別展　発掘品から見る関東の戦国文化
―後北条氏関連新出土資料を中心として―

［会　期］ 9月3日（木）～10月18日（日）
［担当者］ 鳥居和郎　［入館者数］（12,561人）
［備　考］「越前朝倉氏・一乗谷」に併設

特別展　関東水墨画の200年
―中世にみる型とイメージの系譜―

［主　催］ 栃木県立博物館・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 10月31日（土）～11月29日（日）
［担当者］ 相澤正彦／橋本慎司（栃木県立博物館）
［入館者数］ 7,385人

担当者から一言

関東水墨画展については、私の前任の中島亮一氏が既になされていたので、あまり触手が動きませんでした。そんなおり、栃木県立博物館の新進の学芸員であった橋本慎司氏の呼びかけがあり、重い腰を上げたのですが、米国調査などにも誘ってもらい、新たな重要さに気づきました。国内の主要作例200点ほどを集め、二館で共催した展覧会は好評を得、後日、『関東水墨画』（国書刊行会）として上梓されるなど、私の研究の大きな柱となりました。当時、東京文化財研究所にあった水墨画研究会の、若手とはいえ一級の水墨画研究者の協力を得たことも大きかったと思っています。（相澤）

コレクション展　須加原コレクション
―郷土人形の美―

［会　期］ 12月12日（土）～1月24日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康

コレクション展　北野天神縁起絵巻
―知られざる室町狩野派の逸品―

［会　期］ 1月30日（土）～2月28日（日）
［担当者］ 相澤正彦

特別展　横浜浮世絵と近代日本 ―異国“横濱”を旅する―

［会　期］ 3月6日（土）
～4月4日（日）
［担当者］ 國 雄行・嶋村元宏
［入館者数］ 8,620人

担当者から一言

浮世絵は鑑賞するもので詳細な解説をつけるものではない…。この特別展は、こうした風潮に反抗し、浮世絵を歴史資料として位置づけ、絵の中に描かれた事象を細部まで徹底的に分析し、解釈することを目的とした。このような経緯から、図録は図版よりも解説文が多くなってしまった。後日、この図録を見た美術関係の人からは、「これは図録ではなく、字録だ！」との、誠に適切で有り難いご批判をいただいた。（國）

1999 平成11年度

特別展　磁器の技と美 ―有田そして瀬戸へ―

［主　催］神奈川県立歴史博物館・愛知県陶磁資料館・瀬戸市・朝日新聞社
［会　期］ 4月24日（土）
～5月30日（日）
［担当者］ 國平健三
［入館者数］ 15,839人
［備　考］「横浜が生んだ真葛焼」を併設

横浜開港140周年記念コレクション展
横浜銅版画 ―近代横浜の諸会社諸商店―

［会　期］ 6月5日（土）～8月8日（日）
［担当者］ 嶋村元宏

特別展　かまくらの石塔
―極楽浄土への祈りのかたち―

［会　期］ 7月10日（土）
～8月29日（日）
［担当者］ 斎藤彦司
［入館者数］ 7,929人

コレクション展　中世の陶器 ―つぼ・かめ・はち―

［会　期］ 8月14日（土）～10月11日（月・祝）
［担当者］ 八幡義信

県有形民俗文化財指定・記念特別陳列
神奈川の職人の道具コレクション

［会　期］ 9月11日（土）～10月11日（月・祝）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大

特別展　没後800年記念
源頼朝とゆかりの寺社の名宝

［会　期］ 10月23日（土）
～11月28日（日）
［担当者］ 八幡義信・薄井和男・相澤正彦
［入館者数］ 20,122人

担当者から一言

鎌倉幕府の創設者である源頼朝没後800年を記念した展覧会でした。頼朝ゆかりの寺社に伝わる美術資料は、中世を代表する文化遺産です。肖像彫刻、肖像画、古文書などからは頼朝のイメージを知ることが出来ますし、10数年の調査を経て全貌が明らかになった永福寺はじめ、頼朝にゆかりのある全国の寺社に伝わる多くの美術・歴史資料から源頼朝に焦点を当てた大展覧会でした。神護寺蔵の伝頼朝像（国宝）の出品が実現しましたが、特に当時、この画像について製作年代や人物につき疑義が提示されていたこともあり、全国に残されている伝頼朝像を可能な限り借用し10点を展示しました。（八幡）

特別展　広重 ―その美と叙情―

［会　期］ 1月22日（土）
～3月20日（月・祝）
［担当者］ 横田洋一・橋本健一郎
［入館者数］ 19,935人

担当者から一言

初代歌川広重の約4000点の中から代表作である「江戸名所百景」シリーズ全100余点を一気に展示しました。「東海道五十三次」のイメージを払拭するような叙情の風景画家、広重ワールドを存分に楽しめる展覧会として画期的でした。（橋本）

2000 平成12年度

特別展　東洋のやきもの ―日本・朝鮮・中国―

［会　期］ 4月22日(土)
～7月9日(日)
［担当者］ 國平健三
［入館者数］ 16,587人

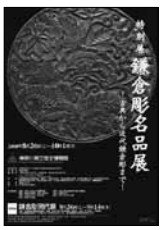
担当者から一言

日本の焼物の展示で問題になるのが、江戸時代から明治にかけての作風によった名称と焼成地に関する問題である。例示に唐津焼をあげると、当然のことながら佐賀県唐津市の岸岳周辺での陶器生産の窯場を想定するが、必ずしもそうとばかりは言いきれない。今までの慣習で呼ばれてきた名称と生産地とは必ずしも一致しているわけではなく、その違いを明確に区別した展示手法には限界があることを痛感した。　(國平)

コレクション展　絵にみるふるさとの暮らし

［会　期］ 7月22日(土)～8月13日(日)
［担当者］ 長田 平・鈴木通大

特別展　鎌倉彫名品展 ―古典から近代鎌倉彫まで―



［会　期］ 8月26日(土)
～10月1日(日)
［担当者］ 薄井和男
［入館者数］ 10,719人

特別展　さよなら20世紀
―カメラがとらえた日本の100年―

［主　催］神奈川県立歴史博物館・毎日新聞社
［会　期］ 10月7日(土)
～11月26日(日)
［担当者］ 横田洋一・嶋村元宏
［入館者数］ 15,128人

担当者から一言

はじめて新聞社と共同企画した全国巡回特別展。戦争と平和の時代であった20世紀を、貴重な歴史の「証人」である写真をとおして振り返る、デジタルメディアを活用した画期的な展覧会でした。資料選定は毎日新聞本社ビルで週1回ペースで行いましたが、深夜まで及ぶこともありました。世紀をまたぐプロジェクトであり、長時間に及ぶ業務でしたが、まったく苦にならない準備作業でした。20世紀の最後を締めくくるにふさわしい展覧会でした。　(嶋村)

特別陳列　2001年「希望の年」記念事業
20世紀のかながわ ―過去・現在・未来―

［会　期］ 12月16日(土)～2月12日(月)
［担当者］ 寺嵜弘康

特別展　岩倉使節団　日独交流史展
―横浜から世界へ―

［主　催］日独交流史展実行委員会・社団法人アジア調査会・神奈川県立歴史博物館・財団法人岩倉公旧蹟保存会
［主　管］ 毎日新聞社
［特別協賛］ 日本財団
［会　期］ 1月20日(土)
～2月12日(月)
［担当者］ 嶋村元宏　　［入館者数］ 4,366人

特別展　ZENGA 帰ってきた禅画
―アメリカ ギッター・イエレン夫妻コレクションから―

［会　期］ 2月24日(土)
～4月22日(日)
［担当者］ 相澤正彦
［入館者数］ 11,263人

2001 平成13年度

特別展　王家の肖像 ―明治皇室アルバムの始まり―

［会　期］ 4月28日(土)～6月3日(日)
［担当者］ 横田洋一
［入館者数］ 11,116人

特別陳列　修復完成記念 弘明寺木造仁王像

［会　期］ 6月9日(土)～7月8日(日)
［担当者］ 薄井和男

コレクション展　須加原コレクション

［会　期］ 6月9日(土)～7月8日(日)
［担当者］ 寺嵜弘康

特別展　明治のノスタルジー 小林清親の世界

［会　期］ 7月20日(金)
～8月26日(日)
［担当者］ 桑山童奈
［入館者数］ 5,093人

担当者から一言

本来は横田洋一氏が担当者として手をあげた展覧会でしたが、その前の「王家の肖像 ―明治皇室アルバムのはじまり―」展も横田さんの担当で多忙であったため、結構土壇場で私が担当することになりました。はじめての特別展です。出品する作品を選ぶ際、「浮世絵の摺の違い」を目の当たりにして懊悩しました。　（桑山）

特別展　東海道宿駅制度400年記念

江戸時代の東海道
―描かれた街道の姿と賑わい―

［会　期］ 9月15日(土)
～10月21日(日)
［担当者］ 鈴木良明・橋本健一郎
［入館者数］ 9,203人

担当者から一言

慶長6年（1601）徳川家康がいわゆる東海道宿駅制度を開始から400年目の節目にあたるタイムリーな企画と考えたからです。斯界では何かの節目に合わせて耳目を集める企画が常套といえます。「便乗型企画」「安直な企画」とも揶揄されます。が、そこはひとひねり。「宿駅制度400年記念」と冠を付し県内博物館施設19館が協力・連携して当該年度一斉の開催としました。次の節目に面白い趣向を期待しましょう。　（鈴木）

特別展　遼寧省・京畿道・神奈川県の文物展
―名宝にみる文化交流の軌跡―

［主　催］ 神奈川県・中国遼寧省・韓国京畿道・神奈川県立歴史博物館・遼寧省博物館・旅順博物館・京畿道博物館・(財)自治総合センター・遼寧省・京畿道・神奈川県文物展実行委員会
［会　期］ 11月3日(土)
～12月2日(日)
［担当者］ 國平健三・相澤正彦・
古川元也・佐々木登美子
［入館者数］ 15,122人

担当者から一言

県と姉妹都市であった遼寧省と韓国京畿道とで、相互の作品を展示し合った最初で最後？の本格的な交流展でした。前回と異なり当方からの作品選定も可能になったため、当時、新進の板倉聖哲氏のアドバイスを受け、遼寧省博物館の明清画の名作が勢揃いし、衆目を集めた展覧会となりました。考古・陶磁器担当の国平健三先輩と中韓を幾度か行き来しました。韓国では現場の若い学芸スタッフたちと懇意になりましたが、道政府の方が最後になって全く動かず、図録が出来上がったのに作品が来るか来ないかわからず、心労極まりました。最後は館長に乗り込んでもらい活路を開きました。　（相澤）

コレクション展　小正月の飾り物

［会　期］ 12月15日(土)～1月20日(日)
［担当者］ 長田 平・鈴木通大

2002 平成14年度

特別展　大正昭和くらしの博物誌
―民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム―

［特別協力］国立民族学博物館
［会　期］1月26日(土)
～3月24日(日)
［担当者］長田 平・鈴木通大
［入館者数］8,018人

特別展　江戸の四季
―初代広重が描く名所江戸百景―

［会　期］4月13日(土)～5月12日(日)
［担当者］橋本健一郎・桑山童奈
［入館者数］10,385人

特別展　2002 FIFA WORLD CUP 記念文化催事
日韓交流と FOOTBALL

［会　期］5月26日(金)～7月7日(日)
［担当者］嶋村元宏・丹治雄一
［入館者数］8,495人

特別展　海を渡ったアイヌの工芸
―英国人医師マンローのコレクションから―

［主　催］財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構・神奈川県立歴史博物館
［会　期］7月27日(土)～9月1日(日)
［担当者］長田 平
［入館者数］10,034人

コレクション展　三浦市間口洞窟遺跡の出土資料

［会　期］9月7日(土)～9月29日(日)
［担当者］川口徳治朗

特別展　変わり兜 ―戦国の奇想天外―

［会　期］10月12日(土)
～11月17日(日)
［担当者］鳥居和郎・古川元也
［入館者数］10,512人

担当者から一言

変わり兜は、戦国時代を象徴する武具というイメージで見られがちですが、関東の戦国文書や記録類からはそのような印象は感じられません。この展示では制作や移入の年代が明確な作例、形態ごとの作例、そして絵画、記録類も加えて変わり兜の再検討を行いました。これにより現存する変わり兜の多くは江戸時代以降で、祭礼具、また変わり兜を扱った出版物の流行に合わせて制作されたと思われるものが多いなど、展示をきっかけとして、従来の固定的なイメージが大きく見直されたものと思われます。（鳥居）

コレクション展
井上良斎の陶芸 ―松本コレクションから―

［会　期］11月30日(土)～1月12日(日)
［担当者］佐々木登美子

特別展　四都美人装い競べ
―京・大坂・江戸・名古屋―

［会　期］1月25日(土)
～3月2日(日)
［担当者］橋本健一郎
［入館者数］6,415人

担当者から一言

京、大阪、江戸の三都と独自の文化を発展させた名古屋に関する、浮世絵の作品、さらに小袖衣装・化粧道具を加え、各都の装いを競わせた展覧会となりました。展覧会期間中には、高橋雅夫氏主唱のビューテイサイエンス学会の協力を得て、江戸と京都の女性の髪型、結髪の実演会を行うなど、楽しんで頂ける展覧会になったと記憶しております。（橋本）

2003 平成15年度

馬車道リニューアル記念特別陳列
馬車道　日本と世界をむすぶ道

［会　期］3月15日(土)～4月20日(日)
［担当者］寺嵜弘康・丹治雄一

特別展　ペリー来航 150 周年記念　黒船

［主　催］神奈川県立歴史博物館・文化庁
［会　期］ 4 月 26 日（土）
　　～ 6 月 15 日（日）
［担当者］ 嶋村元宏
［入館者数］ 15,376 人

担当者から一言

はじめて自身の専門分野の研究成果をベースとした特別展。ペリー来航は全国を震撼させた事件だったことから、全国各地に資料が残されており、調査に訪れた沖縄、函館をはじめとする各地の学芸員とのつながりを強めることができました。学術的には、“ペリー来航情報の伝播”に焦点を当てるとともに、画像資料を多く出品したこれまでにない展覧会となりました。一般の方の関心も高く、観覧者は 15,000 人を超え、歴史学会からも注目された展覧会となりました。　（嶋村）

コレクション展　青磁・白磁

［会　期］ 6 月 21 日（土）
　　～ 7 月 13 日（日）
［担当者］ 佐々木登美子

特別展　80 年目の記憶
―関東大震災といま―

［会　期］ 7 月 26 日（土）～ 9 月 7 日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康
［入館者数］ 8,055 人

担当者から一言

1923 年（大正 12）から発災 80 年目を期して開催した。担当者にとって最初の大規模な展覧会であった。県内各地の被害の様相を紹介するとともに、震災の記憶としての日記、作文、絵画、遺物などを展示したが、県内各地の震災記念碑のパネル展示は、従来にない試みであった。一方で、朝鮮人虐殺の展示がないことについて来館者と直接話をできたことも、現代史の難しさを感じた展覧会であった。　（寺嵜）

コレクション展
「ものさし職人の道具」展
―県指定有形民俗文化財「職人の道具コレクション」から―

［会　期］ 9 月 13 日（土）
　　～ 10 月 5 日（日）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大

特別展　神奈川県文化財保護条例制定 50 周年記念
重要文化財 ―かながわ考古展―

［主　催］神奈川県立歴史博物館・文化庁
［会　期］ 10 月 18 日（土）
　　～ 12 月 7 日（日）
［担当者］ 川口徳治朗・國平健三
［入館者数］ 9,256 人

担当者から一言

国・県指定考古資料の展示でした。全てが指定品なので、事務手続きと資料の取扱に時間、労力、神経を遣いました。横浜の個人所蔵の弥生式土器を借用交渉する際、住居地の鶴見から離れた場所へ移動させたくないので、断ると言われました。その後、何度か面談の機会を得て話をさせていただく中で、身辺に不運な時期があって、住居近くの畑で農作業をしていた際にこの土器が出土し、これを契機に不運から解放されたという話を聞きました。身辺から遠ざけると再び不運に戻るという不安があるということでした。幸運をもたらす土器を多くの方に紹介させてくださいと懇願し、承諾をいただきました。　（川口）

コレクション展　横浜真葛焼優品展

［会　期］ 12 月 20 日（土）
　　～ 2 月 22 日（日）
［担当者］ 佐々木登美子

特別展　浮世絵　江戸名所七変化
―丹波コレクションの魅力―
［前期］かたちと表現の面白さ

［会　期］ 3 月 6 日（土）～ 3 月 28 日（日）
［担当者］ 桑山童奈
［入館者数］ 4,587 人

2004 平成16年度

特別展　浮世絵　江戸名所七変化
―丹波コレクションの魅力―
［後期］江戸名所さまざま

［会　期］ 4月17日(土)～5月9日(日)
［担当者］ 桑山童奈　　［入館者数］ 7,454人

コレクション展　浄土教の絵画と彫刻

［会　期］ 5月29日(土)～6月27日(日)
［担当者］ 相澤正彦・薄井和男

重要文化財旧横浜正金銀行本店本館創建100周年記念特別展
横浜正金銀行 ―世界三大為替銀行への道―

［会　期］ 7月24日(土)
～9月12日(日)
［担当者］ 寺嵜弘康・丹治雄一
［入館者数］ 9,107人

特別展　湘南の古刹　神武寺の遺宝

［会　期］ 10月9日(土)
～11月14日(日)
［担当者］ 薄井和男・佐々木登美子
［入館者数］ 9,155人

担当者から一言

逗子の古刹神武寺は、私の出身高校がその山下にあり、学生時代から親しんできた寺でした。県博の特別展では、以前から箱根の早雲寺や横浜の寶生寺などを取り上げてきましたが、よし、つぎは思い出深い神武寺だと決めました。御住職に展覧会開催の依頼の折、出身校を告げ、さまざまな昔話をして、結果、ご快諾を頂戴いたしました。学芸員として、古寺の歴史と文化財を紹介できた充実感はもちろんですが、なにか古巣に恩返しが出来たような、不思議な気持ちを感じた特展でした。（薄井）

コレクション展　江戸時代の旅案内

［会　期］ 11月27日(土)
～12月26日(日)
［担当者］ 古宮雅明

2005 平成17年度

特別展　かながわの三匹獅子舞
―獅子頭の世界―

［会　期］ 1月29日(土)
～3月13日(日)
［担当者］ 鈴木通大
［入館者数］ 5,511人

担当者から一言

神楽や正月の門付けに登場する獅子舞（伎楽系）は広く周知された民俗芸能だが、「三匹獅子舞」といわれる一人立の獅子舞（風流系）はほとんど知られていない。そこで、神奈川県域でも10ヶ所で演じられている三匹獅子舞の紹介をめざした。獅子舞の様相をはじめ、使用する獅子頭、羯鼓、笛、ササラ、天狗面、法螺貝、衣装などの諸道具などを展示。正面玄関口の広場では、愛川町の「三増の獅子舞」保存会による実演を開催し、好評を得た。（鈴木）

再編10周年記念特別展　館蔵美術工芸名品展

［会　期］ 4月16日(土)
～5月15日(日)
［担当者］ 薄井和男・佐々木登美子
［入館者数］ 6,540人

コレクション展　五姓田義松 ―横浜で学んだ洋画の魁―

［会　期］ 6月4日(土)
～6月26日(日)
［担当者］ 桑山童奈

特別展　幕末・明治　かながわ名所探訪

［会　期］ 7月15日(金)
～9月4日(日)
［担当者］ 嶋村元宏
［入館者数］ 8,369人

コレクション展　職人の道具 ―大山のこま作り道具―

［会　期］ 7月30日(土)
～9月11日(日)
［担当者］ 長田 平・鈴木通大

特別展　聖地への憧れ　中世東国の熊野信仰

［会　期］ 10月8日(土)
～11月20日(日)
［担当者］ 古川元也
［入館者数］ 11,147人

担当者から一言

熊野信仰の展示といえば平安貴族の熊野参詣がお決まりだが、視点を変えて、東国に色濃く遺る熊野社の意味を考えた。結果的に、中世武士や庶民の信仰に焦点を当てたギッシリ、ぐちゃぐちゃ古川ワールドの濫觴となる。初の主担当で、ほぼ孤軍奮闘。初陣にして散々だったが、伝説の横田さんから「フルカワー、それでイイんだー(怒)」と飲み屋で説教され、妙に自信をつけてしまう始末。某印刷屋さんには今も足を向けられません…合掌。　(古川)

コレクション展　石の造形 ―縄文時代の石器―

［会　期］ 1月7日(土)～2月5日(日)
［担当者］ 川口徳治朗

神奈川県神社庁設立60周年記念特別展
神々と出逢う ―神奈川の神道美術―［前期］

［主　催］ 神奈川県立歴史博物館・神奈川県神社庁
［会　期］ 2月18日(土)
～3月26日(日)
［担当者］ 薄井和男・佐々木登美子・梅沢 恵
［入館者数］ 10,171人

担当者から一言

神奈川県神社庁の設立60周年に因んだ共催展でした。県内の古社、名社に所蔵されている文化財を一堂に集め公開するという、内容、規模とも県博単独では絶対に開催不可能な画期的特別展でした。担当学芸員として事前に多くの神社に赴き、ぜったいにみる機会のなかった神像や、秘蔵の文化財を調査し、展覧会を催すことが出来たのはたとえようもない喜びでした。この展覧会はその後の、各地で開催された神道関係展に少なからず影響をあたえました。　(薄井)

担当者から一言

展覧会の2年以上前から県内各地の神社を調査して回ったこと、今も私の財産です。平安に遡る古い作品が残っている神社は、なんとなく「匂い」でわかるように。
準備が始まった当初は、鶴岡八幡宮の宝物ばっかりになってしまうのでは？と懸念の声もありましたが、新発見もあいつぎ、量質ともに大充実の展覧会となりました。　(佐々木)

担当者から一言

初担当の展覧会が専門分野(神道美術)という幸運な新人でした。神奈川県神社庁の全面協力のもと、薄井さん、佐々木さんと県内の古社をめぐり宝物調査を実施。チラシ、図録の表紙には、タイトルの「出逢う」にかけ、向かい合う男女神像を配置しました。　(梅沢)

2006 平成18年度

神奈川県神社庁設立60周年記念特別展

神々と出逢う ―神奈川の神道美術―［後期］

［主　催］神奈川県立歴史博物館・神奈川県神社庁
［会　期］4月1日(土)～5月7日(日)
［担当者］薄井和男・佐々木登美子・梅沢 恵
［入館者数］14,207人

コレクション展

書と絵画に見る神奈川の近代
―齋藤由蔵コレクションから―

［会　期］5月27日(土)
～7月2日(日)
［担当者］寺嵜弘康

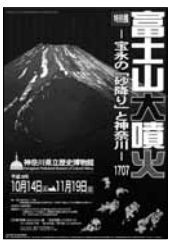
特別展　**日本のビール**
―横浜発 国民飲料へ―

［会　期］7月22日(土)
～9月10日(日)
［担当者］丹治雄一
［入館者数］9,071人

担当者から一言

日本ビール産業史の研究は、大学院時代からの研究テーマでした。当館のような地域博物館で、その地域と関係のないテーマの特別展を開催することはなかなか難しいため、日本ビール産業発祥の地である横浜をフィールドとする博物館に職を得たことに心から感謝しました。単独で担当した初めての特別展で、大好きなビールも控えて準備に集中しましたが、今にして思うともう少しコク（深み）と爽快感（楽しさ）を出せたかなという反省もあります。　（丹治）

特別展　**富士山大噴火**
―宝永の「砂降り」と神奈川―



［会　期］10月14日(土)
～11月19日(日)
［担当者］古宮雅明
［入館者数］11,094人

担当者から一言

富士山宝永噴火（宝永4年・1707年）を全体的に取り上げた初めての本格的な展覧会と（密かに）自負している。県内に残された古文書や絵図を中心に、全国各地から集めた関係資料を展示。初公開資料や準備過程で新資料を「発見」するなど特別展開催の醍醐味も味わうこともできた。噴火経過と被災状況にスポットを当てたが、地域の復興にあまり触れられなかったのが心残り。初めて担当した特別展で思い出深く、経験浅い私を支えてくれた周囲には今でも感謝している。　（古宮）

コレクション展　**摺師・正文堂の仕事**

［会　期］12月9日(土)
～1月14日(日)
［担当者］桑山童奈

コレクション展

横浜真葛焼 ―造形の妙技　置物・香炉・香合―

［会　期］1月27日(土)
～3月11日(日)
［担当者］佐々木登美子

特別展　**大漁の証　万祝**

［会　期］2月3日(土)
～3月11日(日)
［担当者］長田 平
［入館者数］6,055人

担当者から一言

万祝は、俗に千両・万両といわれる予期せぬ漁獲高を得たとき、その大漁を祝って船主や網元が船子・網子に贈った着物です。この習俗を伝える地域は、房総を中心に静岡県から青森県にかけての太平洋沿岸地域に見られます。万祝の図柄は実にバラエティーにとんでいます。本展では万祝の習俗と各地に残された万祝を紹介し、海の男の粋な晴れ姿を鑑賞して頂きました。（長田）

2007 平成19年度

特別展　ようこそかながわへ
—20世紀前半の観光文化—

［会　期］ 4月21日(土)
〜6月3日(日)
［担当者］ 寺嵜弘康・角田拓朗
［入館者数］ 11,199人

コレクション展　中世の銭

［会　期］ 4月14日(土)
〜6月10日(日)
［担当者］ 古川元也

コレクション展　東海道分間絵図全巻開陳

［会　期］ 6月16日(土)
〜7月16日(日)
［担当者］ 古宮雅明

特別展　歌川広重没後150年記念
広重が描いた日本の風景

［会　期］ 7月28日(土)
〜9月17日(日)
［担当者］ 桑山童奈
［入館者数］ 14,994人

開館40周年記念特別展　宋元仏画

［会　期］ 10月13日(土)
〜11月25日(日)
［担当者］ 梅沢 恵
［入館者数］ 9,746人

担当者から一言

はじめて一人で担当する展覧会としてはあまりにも大きなテーマでした。西川杏太郎館長の「人が入らないけれど、県博がやるべき展覧会です！」とのご勇断により実現。新米学芸員に手をさしのべてくださった館内外の諸先輩のおかげで開催できました。舶載仏画の魅力をどう伝えるかという課題と格闘し、学芸員として成長させてもらいました。その後の研究を方向付けてくれた特別な展覧会でもあります。（梅沢）

コレクション展　魅惑の音色　蓄音機の楽しみ

［会　期］ 12月15日(土)
〜1月14日(月)
［担当者］ 寺嵜弘康

特別展　瓦が語る
—かながわの古代寺院—

［会　期］ 2月2日(土)
〜3月16日(日)
［担当者］ 國平健三
［入館者数］ 6,515人

担当者から一言

県内の古代寺院址のなかで、横須賀市所在の宗元寺址を最も古い寺院として位置づけ、その年代を天智朝期(662〜671)の前半に求めた。宗元寺出土の軒丸瓦は、奈良県王寺町所在の西安寺址出土瓦と同じ笵型で造られたもので、西安寺での使用を終えて持ち込まれたとした。東国へ寺院が波及してくる背景には中央政権との関りが推察されるのであるが、このことを証明できる出土品や遺構は現在でも非常に少ない。限られた展示品から観覧者に理解が得られたかは疑問に思える企画であったことに反省点がある。　（國平）

2008 平成20年度

特別展　横浜・東京
―明治の輸出陶磁器―

［会　期］ 4月26日（土）
～6月22日（日）
［担当者］ 佐々木登美子
［入館者数］ 18,680人

担当者から一言

宮川香山の作品と東京横浜で活躍していた絵付師たちの作品をめいっぱい展示した展覧会でした。なかなかデコラティブでキッチュな作風もあり、公立博物館で「美術作品」として展示することに、所蔵者さんからも「あんた勇気あるね」と言われました。
ポスター・チラシのキャッチコピーに「ハマヤキ故郷へ帰る」とつけたら、語呂がよかったのか、そっちのほうがインパクトがあって、みんな「ハマヤキ展」と呼んで定着してしまった。ハマヤキという陶磁器の用語は無いので、一部からお叱りを受けましたが…。（佐々木）

コレクション展　郷土人形の美　須加原コレクション

［会　期］ 7月5日（土）
～7月27日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康

特別展　五姓田のすべて
―近代絵画への架け橋―

［主　催］ 神奈川県立歴史博物館・
岡山県立美術館
［会　期］ 8月9日（土）
～9月28日（日）
［担当者］ 角田拓朗
［入館者数］ 8,961人

担当者から一言

実に人の入らなかった展覧会だったが有識者からの評価は高く、第21回倫雅美術奨励賞を受賞する栄誉をうけた。五姓田派の全貌を見たいという応援者は多く満足頂いたようだが、本展を誰よりも楽しみにしていた先代横田洋一氏に見てもらえなかったのが唯一の心残り。担当のデビュー戦であり、かいた恥は数えきれない。鈍器の如き図録とやせ細り続けた担当の姿のギャップは、このときに確立されたと振り返って自覚した次第。（角田）

特別展　戦国大名北条氏とその文書
―文書が教えてくれるさまざまなこと―

［会　期］ 10月18日（土）
～11月24日（月）
［担当者］ 鳥居和郎
［入館者数］ 8,211人

担当者から一言

この展示では、様々な文書が作成された状況を、それぞれ関連する絵画、工芸、彫刻などの資料を用いて立体的に再現することを目指しました。文書の解説を文字だけで行わず、関連する様々な資料を加えることにより、文書作成者の心情などをよりわかりやすくするためです。異なるジャンルの資料を共に展示することにより、無機的に見える文書が、突如、実存感を漂わせるなど、担当者としても博物館の展示の面白さを再確認した企画でした。（鳥居）

コレクション展
中世の板碑
―館蔵コレクションを中心に―

［会　期］ 12月6日（土）
～1月18日（日）
［担当者］ 古川元也

特別展　アジアとヨーロッパの肖像
SELF and OTHER: Portraits from Asia and Europe

［主　催］ 神奈川県立歴史博物館・朝日新聞社・アジア欧州財団
［特別協力］ 大英博物館
［会　期］ 2月7日（土）
～3月29日（日）
［担当者］ 嶋村元宏
［入館者数］ 9,127人

2009 平成21年度

特別展　神奈川開港・開国150周年メモリアルイベント

横浜開港百五十年
―神奈川・世界との交流―

［会　期］ 4月25日（土）
～6月14日（日）
［担当者］ 嶋村元宏
［入館者数］ 16,242人

コレクション展　江戸時代の地図・絵地図

［会　期］ 6月25日（土）
～8月9日（日）
［担当者］ 古宮雅明

特別展　慶應義塾創立150年記念
神奈川開港・開国150周年メモリアルイベント
横浜開港150周年記念　福澤諭吉と神奈川
―すべては横浜にはじまる―

［主　催］神奈川県立歴史博物館・慶應義塾・フジサンケイグループ
［会　期］ 8月22日（土）
～9月23日（水）
［担当者］ 寺嵜弘康・古宮雅明・桑山童奈・角田拓朗／西沢直子・都倉武之（慶應義塾福澤研究センター）
［入館者数］ 16,226人

日英友好150年の礎を築く
第8代エルギン伯爵と絵画工芸品展

［主　催］第8代エルギン伯爵と絵画工芸品展実行委員会
［会　期］ 10月10日（土）～11月8日（日）
［担当者］ 嶋村元宏

特別展　鎌倉の日蓮聖人 ―中世人の信仰世界―

［主　催］神奈川県立歴史博物館・日蓮宗神奈川県第二部宗務所・文化庁
［会　期］ 10月17日（土）
～11月29日（日）
［担当者］ 古川元也
［入館者数］ 14,488人

かながわの遺跡展2009　横浜開港の考古学

［主　催］神奈川県教育委員会生涯学習文化財課・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 12月12日（土）
～1月11日（月・祝）
［担当者］ 市川正史
（県教育委員会生涯学習文化財課）
［入館者数］ 2,551人

コレクション展　古瀬戸と中国の青磁・白磁

［会　期］ 1月16日（土）
～2月14日（日）
［担当者］ 國平健三

特別展　彩色立面図に見る日本の近代建築
―銀行・オフィスビルから邸宅まで―
［前期］　神奈川県編

［会　期］ 2月20日（土）
～3月28日（日）
［担当者］ 丹治雄一
［入館者数］ 3,849人

担当者から一言

近代建築史について、研究を深めていけそうな手応えを得たころに準備に着手した特別展です。メインの展示資料は神奈川県内の近代建築と日本全国の銀行建築を図面風に描いた119点の彩色立面図でしたが、これらの建築に関係する実物資料も紹介しました。これまで外部への貸し出し実績がなかった日本銀行金融研究所アーカイブと約1年近い交渉を重ねて、「日本銀行新築場沿革図」をお借りすることができたのがいちばんの思い出です。（丹治）

2010 平成22年度

特別展　彩色立面図に見る日本の近代建築
―銀行・オフィスビルから邸宅まで―
［後期］ 銀行建築編

［会　期］ 4月3日（土）～5月9日（日）
［担当者］ 丹治雄一　　［入館者数］ 5,548人

コレクション展　奇妙奇天烈!? 明治の版画あれこれ

［会　期］ 6月5日（土）
～7月19日（月）
（前期6／5～6／27、
後期6／30～7／19）
［担当者］ 角田拓朗

夏の特別企画　まつり ―人々のつどい、にぎわい―

［会　期］ 6月30日（水）
～8月29日（日）
［担当者］ 学芸部
［備　考］ 常設展示室内で開催

特別展　天狗推参！

［主　催］神奈川県立歴史博物館・文化庁
［会　期］ 9月25日（土）
～10月31日（日）
［担当者］ 梅沢 恵・古川元也・
古宮雅明・鈴木通大
［入館者数］ 9,203人

担当者から一言

就職してすぐに異分野の先輩学芸員と「怪異」をテーマに月一回の研究会をはじめました。民俗学の鈴木通大さんに県内の怪異伝承などをうかがったりしながら、展覧会を見据えてテーマを天狗に絞り、大杉神社や道了尊、鞍馬寺に調査に出かけました。妖怪展だと思って観に来た人の期待を（良い意味で）裏切る充実の展覧会だったと担当一同自負しております。　（梅沢）

特別展　浮世絵☆忠臣蔵
―描かれたヒーローたち!?―

［会　期］ 11月20日（土）
～12月19日（日）
［担当者］ 桑山童奈
［入館者数］ 6,613人

担当者から一言

300年以上経た今も日本人の心に生き続ける赤穂事件―忠臣蔵の世界を描いた浮世絵の展覧会を企画することは、楽しくも身の引き締まる思いでした。関連イベントとして研究者による学術的な講演だけではなく、桂歌助師匠による忠臣蔵ゆかりの落語「中村仲蔵」を聴く会を催したことが思い出深いです。　（桑山）

平成22年度かながわの遺跡展
発掘された武家の古都・鎌倉

［主　催］神奈川県教育委員会・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 1月8日（日）
～2月12日（日）
［担当者］ 宍戸慎悟
（県教育委員会文化遺産課）
［入館者数］ 4,946人

コレクション展　江戸時代の貨幣

［会　期］ 2月19日（土）
～4月10日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康・古宮雅明・古川元也

2011 平成23年度

特別展　御移転100年記念　能登から鶴見の地へ
曹洞宗大本山總持寺　名宝100選

［主　催］曹洞宗大本山總持寺・鶴見大学仏教文化研究所・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 4月16日（土）
～5月22日（日）
［担当者］ 薄井和男・小井川理
［入館者数］ 13,139人

特別展　チャールズ・ワーグマン来日 150 周年記念

ワーグマンが見た海 ―洋の東西を結んだ画家―

［主　催］神奈川県立歴史博物館
　　神奈川新聞社
［会　期］ 6 月 11 日（土）
　　～ 7 月 31 日（日）
［担当者］ 角田拓朗
［入館者数］ 12,452 人

コレクション展　修理完成記念特別公開　涅槃図

［会　期］ 8 月 3 日（水）
　　～ 8 月 31 日（水）
［担当者］ 梅沢 恵

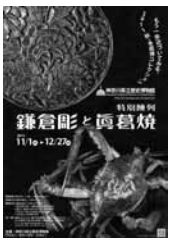
特別展　竹と民具 ―竹とともに暮らす―

［会　期］ 9 月 10 日（土）
　　～ 11 月 6 日（日）
［担当者］ 長田 平・鈴木通大
［入館者数］ 8,924 人

担当者から一言

この展覧会では先人たちが竹の特性を活かして生み出したさまざまな竹製品を紹介しました。テーマは、竹と衣生活・竹と食生活・竹と住生活・竹と農耕・竹と漁業等に分類して展示しました。竹とともに暮してきた先人達の知恵の一端に触れていただきました。　（長田）

特別陳列　鎌倉彫と眞葛焼



［特別協力］ 鶴岡八幡宮、田邊哲人
［会　期］ 11 月 1 日（火）
　　～ 12 月 27 日（火）
［担当者］ 小井川理
［入館者数］ 10,757 人（常設展示室を会場としたため有料域入館者数を入場者数として記載）

平成 23 年度かながわの遺跡展

弥生時代のかながわ
―移住者たちのムラと社会の変化―

［主　催］神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 1 月 8 日（日）～ 2 月 12 日（日）
［担当者］ 伊丹 徹
　　（県教育委員会文化遺産課）
［入館者数］ 4,956 人

コレクション展　甦る名刀 ―館蔵赤羽刀から―

［会　期］ 1 月 14 日（土）
　　～ 3 月 25 日（日）
［担当者］ 古川元也

2012 平成 24 年度

特別展　ヨコハマ・ヨコスカ　ストーリー
―二つの港町の戦後文化―

［会　期］ 4 月 21 日（土）
　　～ 6 月 17 日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康
［入館者数］ 14,229 人

担当者から一言

響きの良い展覧会名、戦後のジャズを取り上げたことなど思い出に残る展覧会である。図録をはじめ展示そのものが多くの人々の遊び心から生まれた。原信夫氏から貴重な資料や楽器・衣装を拝借できたのは原夫人愛子氏を紹介していただいた吉澤智恵子さんのおかげであり、ジャズについては柴田浩一氏のご高配により、県博始まって以来の音楽付きの講座や演奏会ができた。友人のありがたさに感謝したい。　（寺嵜）

特別展　ペリーの顔・貌・カオ
―「黒船」の使者の虚像と実像―

［会　期］ 7 月 7 日（土）
～ 8 月 26 日（日）
［担当者］ 嶋村元宏
［入館者数］ 8,239 人

特別陳列　夢窓疎石と鎌倉の禅宗文化

［会　期］ 9 月 1 日（土）
～ 9 月 28 日（金）
［担当者］ 梅沢 恵
［入館者数］ 6,835 人

担当者から一言

学生時代に津久井光明寺宝物調査に参加して夢窓疎石の頂相と出会い、県博に就職してすぐに寄託をお願いしました。傷んでいましたが、助成を受けて修理をし、完成記念に企画したのが本展です。妙智院本をはじめ夢窓疎石像の諸本を一堂に展示し、頂相を本格的に研究するきっかけになりました。　（梅沢）

特別展　武家の古都・鎌倉　世界遺産登録推進 3 館連携特別展
再発見！鎌倉の中世

［主　催］武家の古都・鎌倉世界遺産登録推進三館連携特別展企画委員会・神奈川県立歴史博物館・文化庁
［会　期］ 10 月 6 日（土）
～ 12 月 2 日（日）
［担当者］ 古川元也・近野正幸・小井川 理
［入館者数］ 11,243 人

担当者から一言

鎌倉世界遺産登録を目指して、鎌倉国宝館、県立金沢文庫と 3 館連携で開催した展覧会。県博では鎌倉市内で出土した考古遺物や、赤星直忠・三上次男・八幡義生らが活躍した鎌倉研究黎明期の様相を紹介しました。県博史上でも破格の「物量勝負」となった展覧会。反省点は山ほどありますが、「あれほど集まることは滅多にない」展示として今も話題にのぼり、図録を参照いただけることは、何よりの成果だと思っています。　（小井川）

コレクション展
KEN・PAKU（県博）発掘クロニクル
―神奈川県立博物館による発掘調査の軌跡―

［会　期］ 12 月 15 日（土）
～ 2 月 7 日（日）
［担当者］ 近野正幸

平成 24 年度かながわの遺跡展　勝坂縄文展

［主　催］神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）・神奈川県立歴史博物館
［特別協力］東京藝術大学大学院映像研究科
［会　期］ 12 月 15 日（土）
～ 2 月 7 日（日）
［担当者］ 千葉 毅（県教育委員会文化遺産課）
［入館者数］ 6,248 人

担当者から一言

「縄文人をより身近に、生々しく」を意図して企画した私のデビュー展です。土器づくりの得意な縄文人と苦手な縄文人や、ちょっとしたミスを「ごまかし」たりという、人間味を感じるような部分に焦点をあててみました。失敗した部分もたくさんあり反省の連続でしたが、これまでの考古学の展示にはあまりなかった視点の展示が少し出来たかな、と思います。　（千葉）

特別展　観光地鎌倉と鎌倉彫
―近代鎌倉のガイドブック―

［会　期］ 2 月 16 日（土）
～ 3 月 24 日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康・小井川 理
［入館者数］ 8,081 人

2013 平成25年度

特別展　江戸時代　かながわの旅
―「道中記」の世界―

［会　期］ 4月27日(土)
～6月23日(日)
［担当者］ 桑山童奈・古宮雅明
［入館者数］ 12,566人

担当者から一言

「県博総合研究『道中記の研究』」の成果報告のひとつとしての企画。近世歴史部門のコレクションとして最もボリュームのある「道中記」であるが、それ自体は地味。それをいかに「見せる」かに苦心した。桑山学芸員が美術分野を、私が歴史分野をと一応分担したが、私は「過酷」な企画普及課長の業務に追われていて、桑山氏には多大な負担をかけた。また根本非常勤学芸員の献身的な助力にも深謝々々。　（古宮）

特別展　「キングの塔」誕生！
―神奈川県庁本庁舎とかながわの近代化遺産―

［会　期］ 7月20日(土)
～9月16日(月)
［担当者］ 丹治雄一
［入館者数］ 8,031人

特別展　こもんじょ ざんまい ―鎌倉ゆかりの中世文書―

［共　催］ 神奈川県立金沢文庫
［会　期］ 10月5日(土)
～12月1日(日)
［担当者］ 古川元也・永井 晋
［入館者数］ 10,331人

特別陳列
眞葛焼 ―田邊哲人コレクションと館蔵の名品―

［会　期］ 1月11日(土)
～3月2日(日)
［担当者］ 小井川 理
［入館者数］ 9,649人

平成25年度かながわの遺跡展
地中に埋もれた江戸時代の道具たち
―かながわの町と村の暮らしぶり―

［主　催］ 神奈川県教育委員会(埋蔵文化財センター)・神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 1月11日(土)
～2月23日(日)
［担当者］ 冨永樹之
(県教育委員会文化遺産課)
［入館者数］ 8,092人

コレクション展　アメリカ人女性が巡った明治の日本

［会　期］ 3月15日(土)
～4月13日(日)
［担当者］ 嶋村元宏

2014 平成26年度

特別展　明治大学クリスチャン・ポラックコレクション
繭と鋼 ―神奈川とフランスの交流史―

［会　期］ 4月26日(土)
～6月22日(日)
［担当者］ 角田拓朗
［入館者数］ 10,611人

コレクション展　庶民の祈り
―御札・御守のさまざま―

［会　期］ 7月19日(土)
～8月30日(日)
［担当者］ 新井裕美

担当者から一言

「苦しい時の神頼み」―人の力ではどうにもならない困難な状況に遭遇した時に、神仏を頼りの綱とすることは今も昔も変わりません。なぜ人々は神仏にすがるのか、何を願ったのか。一つの家で長年収集された大量の御札や御守りの皺を一枚ずつ伸ばしたりそこに記載された文字や絵柄を採録したりしながら、そんなことを考えて整理作業をしていました。展示解説では、御札・御守りの使われ方に焦点を当て、祈願の実態に迫れるように努めました。（新井）

特別陳列　開催 50 周年記念

よみがえる東京オリンピック

［会　期］ 7 月 19 日（土）
～ 9 月 28 日（日）
［担当者］ 寺嵜弘康・武田周一郎
［入館者数］ 9,785 人

特別展　白絵 ―祈りと寿ぎのかたち―

［主　催］ 神奈川県立歴史博物館・文化庁
［会　期］ 10 月 11 日（土）
～ 11 月 16 日（日）
［担当者］ 小井川 理
［入館者数］ 10,835 人

担当者から一言

出産の際に立てまわす「白絵屏風」との出会いから、白地やまっさら素地に白で松竹鶴亀を描く「白絵」の展覧会を企画しました。胞衣納の容器、婚礼調度や天児、犬筥の外箱など、あまり知られてこなかった資料を紹介できました。広報物や図録、展示デザインを、白を基調に統一。デザイナーの野島さんは、展示担当者の愛情を汲んだデザインを実現してくれました。デパート設置のチラシがはけて追加を求められたことは思い出のひとつです。（小井川）

平成 26 年度かながわの遺跡展

発掘された御仏と仏具

―神奈川の古代・中世の仏教信仰―

［主　催］ 神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）、神奈川県立歴史博物館
［会　期］ 12 月 6 日（土）
～ 1 月 18 日（日）
［担当者］ 冨永樹之
（県教育委員会文化遺産課）
［入館者数］ 4,132 人

特別展　陸にあがった海軍

―連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争―

［特別協力］ 慶應義塾
［会　期］ 1 月 31 日（土）
～ 3 月 22 日（日）
［担当者］ 千葉 毅
［入館者数］ 15,816 人

担当者から一言

戦争遺跡をテーマにした展覧会です。縄文が専門の私にとって、不勉強にして分からない事だらけのなか準備し、先輩学芸員はじめ多くの方に迷惑をかけ、図録の原稿が進まず、泣きながら開催した展覧会でした。
しかし縄文だけやっていれば知り合うことのなかっただろう人たちともつながることができ、近現代の歴史を扱う難しさや面白さも少しだけ分かるようになった気がしています。ただ、もうしばらくはやりたくない…（千葉）

2015 平成 27 年度

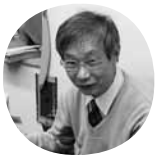
特別展　中世東国の茶

―武家の都鎌倉における茶の文化―

［会　期］ 4 月 25 日（土）
～ 6 月 21 日（日）
［担当者］ 永井 晋
［入館者数］ 9,885 人

担当者から一言

この展覧会は、金沢文庫で古文書・聖教を中心に展示した企画展「武家



の都鎌倉の茶」(2010)を、特別展に発展させたものである。陶磁器・考古遺物など立体的の資料を多く展示し、文字資料だけではイメージしにくかった中世の喫茶文化を目で見てわかる資料を中心に展示を構成できたことがよかった。　(永井)

コレクション展　地図と写真でみる馬車道

[会　期]　7月11日(土)
～8月30日(日)
[担当者]　寺嵜弘康・武田周一郎

担当者から一言

博物館が立地する馬車道をテーマに企画しました。馬車道商店街協同組合や、老舗の商店の皆さんにご協力いただき、当館所蔵資料だけでなく多くの資料を展示できたのは幸いでした。神奈川県博・横浜正金銀行・馬車道の歩みを探る、暑い暑い30才の夏でした。　(武田)

特別陳列　仏のすがた祈りのかたち ―県博の仏教美術―

[会　期]　7月25日(土)～8月23日(日)
[担当者]　小井川理・神野祐太

担当者から一言

就職1年目ではじめて担当者に名前を連ねた展覧会。県博の一員になったことのうれしさとともにみられる側になったその重圧をも肌で感じました。右も左もわからず、先輩の薄井さんと小井川さんから少しでも多くのことを学ぼうと思いました。展示準備中のわくわく感は何事にも代えがたいです。　(神野)

特別展　没後100年　五姓田義松
―最後の天才―

[会　期]　9月19日(土)
～11月8日(日)
[担当者]　角田拓朗
[入館者数]　30,872人

担当者から一言

五姓田義松が天才である――この命題の証明は不可能といわれていました。しかし最大限の知恵を振り絞り、展示点数、関連出版、解説回数など桁違いの仕事量を積み上げ、マスコミの強烈な追い風も吹いた結果、奇跡が起こりました。「美術の教科書が書き換わった」と評されたことは、担当者冥利に尽きる痛快な展覧会でした。　(角田)

特別展　国宝　一遍聖絵

[会　期]　11月21日(土)～12月13日(日)
[担当者]　古川元也・小井川 理／
遠山元浩(遊行寺宝物館)・
梅沢 恵(金沢文庫)
[入館者数]　7,615人

担当者から一言

遊行寺さまからご縁をいただいて実施した展示。同宝物館、県立金沢文庫とともに国宝「一遍聖絵」全十二巻を展示した。複数館での共同展示は世界遺産展で開発した手法を応用した。このほか、東京国立博物館平成館ではシンポジウムも開催していただいた。とにかく絵巻を見ることに集中できる展示室づくりに意を注いだ。それにしても、「一遍聖絵」をこれほどじっくりと間近で観ることができる展示があったであろうか。お客が少なかった訳ではなく…(涙)。　(古川)

平成27年度かながわの遺跡展
縄文の海　縄文の森

[主　催]　神奈川県教育委員会・神奈川県立歴史博物館
[会　期]　12月19日(土)
～1月30日(土)
[担当者]　加藤勝仁
(県教育委員会文化遺産課)
[入館者数]　5,591人

特別展　石展 ―かながわの歴史を彩った石の文化―

［主　催］ 神奈川県立歴史博物館・神奈川県立生命の星・地球博物館
［会　期］ 2月6日(土)
～3月27日(日)
［担当者］ 丹治雄一・新井裕美・千葉 毅・鳥居和郎／山下浩之(地球博)
［入館者数］ 10,062人

担当者から一言

七沢石を採掘していた石切り場跡での調査では、ヒル忌避剤をたっぷり足にふりかけ、藪をかき分け、石の切り屑が散らばる急斜面で何度も尻もちをつき…。石屋さんの会合へお邪魔した時には、ノミやセットウを手にして石を割っていたら腕が筋肉痛に…。その現場に足を運び、実際に道具を使ってみなければわからないこと一。五感をフル活用した調査は、研究の大きな糧となっています。　（新井）

2016　平成28年度

特別展　まぼろしの紙幣　横浜正金銀行券
―横浜正金銀行貨幣紙幣コレクションの全貌―

［会　期］ 4月23日(土)
～5月29日(日)
［担当者］ 寺嵜弘康・武田周一郎
［入館者数］ 9,566人

担当者から一言

現代史の学芸員として25年もの間、多くの横浜正金銀行関係の資料を収集してきた。その集大成がこの展覧会であった。横浜正金銀行券という中国大陸で30年あまりしか流通しなかった稀少な紙幣の全貌を紹介するとともに、国内外の金銀貨幣など一堂に展示したものである。近現代史は資料の蓄積があってこそ研究が進むとすれば、研究成果の展示、資料の収集、そして新たな研究というサイクルを実感した展覧会である。　（寺嵜）

担当者から一言

休館直前の特別展。嗚呼、これで展示とも暫しお別れ…と感慨に浸る余裕もなく、準備に奔走しました。横浜正金銀行ゆかりの資料を収集することは、当館の使命のひとつ。横浜正金銀行券をはじめとするコレクションを前にして、博物館の大きな蓄積を感じ、先人の歩みに想い馳せるも束の間、閉幕。そして怒涛の引越作業がはじまったのでした。（武田）

企画展　石展2 ―かながわの大地が生み出した石材―

［主　催］ 神奈川県立生命の星・地球博物館、神奈川県立歴史博物館
［会　場］ 神奈川県立生命の星・地球博物館
［会　期］ 12月17日(土)
～2月26日(日)
［担当者］ 田口公則・山下浩之(地球博)／丹治雄一・新井裕美・千葉 毅・鳥居和郎
［入館者数］ 21,480人

column

2016年～2017年に実施した空調設備等改修工事について

収蔵・展示環境の維持のために

博物館は、文化財である博物館資料を次の世代へ引き継ぐ役割も担っている。そのためには、資料が保管されている収蔵庫や展示室は清浄な空気環境であるとともに、急激な温湿度変化が起こらない、一年を通じてほぼ一定の温湿度を維持することが博物館には求められているのである。

そのために必要となるのが空調機器であるが、当館は展示リニューアルにあわせ1995年に空調機器を入れ替えたが、2010年前後からセンサーの異常や空調機本体に不調をきたし、特に梅雨時の湿度制御が困難な状況が続いていた。カビの発生リスクを抑える様々な人的対応をとっていたがそれも限界に達し、2016年2月に空調設備改修工事を行うことが正式に決定され、収蔵資料を他の収蔵施設へ移し、事務室移転を終え、12月から翌年12月までの間に、空調機器の刷新とともに、ダクトの交換ならびに、空調機械室の改善工事をおこなったのである。

工事対象である空調設備は、大きく収蔵庫系統、展示室系統、執務室系統の三つに分かれる。

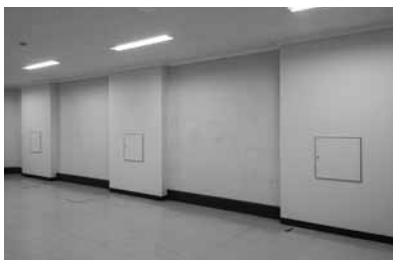
収蔵庫系統は、これまで収蔵庫6室のうち3室、2室、1室の三区画を、メインとバックアップのそれぞれ2台、計6台の空調機器で制御していた。改修にあたって、空調機器の性能がアップしていることもあり、制御区画を見直し、3室と3室の2区画に分け、一区画につき2台の空調機器を設置した。1台をバックアップとして、1台が故障したときに使用するためではなく、24時間ごとに交互運転することで1台の空調機器の負担を減らし、より長期にわたって稼働させるためである。また、湿度については、各室に加湿器を設置し、空調機本体から送り込まれた空気に排気口で加湿した空気を混合させることで、各室ごとに異なる湿度環境を可能とした。さらに、これまでは粉塵を対象としたフィルタだけであったのに加え、有機酸用ケミカルフィルタを取り付け、空気環境の清浄化も高めた。

展示室系統は、展示室の制御を目的としているが、当館の展示ケースは、ケース内外の空気の出入り率が低いエアタイト型を採用しているため、ケースの扉を開いたときに取り込んだ温湿度が維持される。したがって、資料を展示する際に、展示室は収蔵庫同様の温湿度にしておく必要がある。当然、来館者にとっても快適な室内環境となった。

執務室系統は、当然事務室用の機器を設置した。しかし、収蔵スペースの関係から、これまでも一部資料を保管していた部屋については、一般の空調機とともに、加湿器・除湿器を設置した。また、明治時代の建造物であることから、外気の影響を直接受けやすい構造であったので、空調性能を高めるため、窓を覆う仮設壁面を設置した。

2017年12月15日には、予定通り引き渡しを受け、博物館としての51年目を、資料にとっても、来館者にとっても快適な環境で再開することになった。

（主任学芸員　嶋村元宏）



1904	8	8	横浜正金銀行本店の新築落成式
1923	9	1	関東大震災により横浜正金銀行本店屋上ドームと1階から3階までの内部を焼失
1960	11		第8回全国博物館大会開催（於横浜開港記念会館）。これを機に県立博物館設立の要望が高まる
1961	6		県立博物館の設置についての請願陳情を県議会で採択
	6	19	神奈川県文化財協会が県立博物館設立について請願
	6	22	神奈川県博物館協会が県立博物館建設とその準備のための調査機関緊急設置について陳情 神奈川県美術協議会ほか県内美術関係諸団体が県立博物館設立について請願
	9		博物館の規模・内容等を検討するため内山岩太郎知事と学識経験者12名が懇談
	11		県教育委員会教育長の諮問機関として博物館研究調査委員会を設置
1962			関内商店街協同組合・横浜商工会議所が県立博物館設立に賛同
1963	3	5	東京銀行横浜支店建物が県の重要文化財に指定
	3	19	十王図（1963.2.14国重文指定）受入
	6		県教育庁内に博物館準備事務室を設置（1964.3廃止）
	8		内山知事から東京銀行頭取宛てに同行横浜支店の土地・建物について譲渡意志の有無参照 東京銀行横浜支店の土地・建物について神奈川県県有財産評価評価審議会委員の調査実施
	9		東京銀行堀江薫雄頭取より内山知事に対し譲渡したい旨の正式回答。買収価格4億7千万円
	10		博物館準備事務室を東京銀行横浜支店2階事務室に移転 博物館設立準備の進展に伴って研究調査委員（6名）を追加委嘱
	11		東京銀行と土地・建物譲渡に関する公式折衝を開始
1964	4		博物館準備事務局を設置（1966.11廃止）
	4		博物館設立準備の進展に伴って研究調査委員（7名）を追加委嘱
	4		神奈川県立博物館準備協議会を設置
	5		第1回県立博物館準備協議会を開催
	8		東京銀行横浜支店の土地・建物売買契約を締結
1965	4		博物館準備事務局の組織を改め庶務部・業務部の2部体制とする
	6		設計を横浜国立大学大岡実・河合正一両教授の指導のもとに國建設設計事務所に委託
1966	3		旧東京銀行横浜支店の県立博物館への改修工事着工（1967.2竣工）
	11		神奈川県立博物館条例の制定により神奈川県立博物館を設置。庶務部・学芸部の2部体制とする
1967	3	20	**神奈川県立博物館開館**
	6		庶務部に庶務課・経理課の2課を置く
	8	20	横浜市梶山遺跡第1次発掘調査（考古分野）（～8.29）
	12	5	横浜市梶山遺跡第2次発掘調査（考古分野）（～12.14）
			神奈川県博物館協議会を設置
			神奈川県民俗調査開始（民俗分野・～2003）
1968	4		学芸部に学芸課・人文課・自然課の3課を置く
	8	1	横浜市梶山遺跡第3次発掘調査（考古分野）（～8.12）
	12	16	大磯町後谷原北横穴群発掘調査（考古分野）（～12.23）
1969	3		旧横浜正金銀行本店本館が国の重要文化財に指定
	7		庶務部を管理課に変更し管理課・経理課の2課を置く
	11	30	横浜市佐藤内遺跡発掘調査（考古分野）（～12.11）

1 収蔵庫の内壁工事（1966）
2 開館記念式典（1967）
3 開館を祝う横断幕が馬車道にかかる（1967）
4 村田良策初代館長（1967）
5 開館の頃の馬車道（1967）
6 アポロ 11 号の月面着陸の速報パネル展示に見入る観覧者たち（1969）

1970	3		収蔵庫空調改修工事を実施
	8	6	藤沢市小糸遺跡発掘調査（考古分野）（～ 8.20）
	10		全国博物館週間にちなみ無料入館・特別公開・映画会等を実施
1971	3		絵画収蔵庫を改修。3 階資料室へ空調機を設置
	3	11	三浦市間口洞窟遺跡第 1 次発掘調査（考古分野）（～ 3.17）
	8	17	三浦市間口洞窟遺跡第 2 次発掘調査（考古分野）（～ 8.30）
1972	3	24	三浦市間口洞窟遺跡第 3 次発掘調査（考古分野）（～ 3.29）
	8		学芸部 3 課の名称を廃し企画調整課（部内業務の調整・連絡）・学芸第一課（普及・教育）・学芸第二課（人文科学系）・学芸第三課（自然科学系）の 4 課を置く
	8	17	三浦市間口洞窟遺跡第 4 次発掘調査（考古分野）（～ 8.31）
1973	8	17	三浦市間口洞窟遺跡第 5 次発掘調査（考古分野）（～ 8.31）
			この頃「野外民俗博物館」構想がオイルショックで頓挫
1974	7	27	馬車道玄関開所式
			この頃民俗資料の外部収蔵庫での保管が始まる
			神奈川県方言集編さん調査開始（～ 1978）
	8		管理部に施設保全課を置く
1975	3	12	横浜市梶山遺跡第 4 次発掘調査（考古分野）（～ 3.18）
1976	3	1	横浜市上台遺跡第 1 次発掘調査（考古分野）（～ 3.10）
1977	3	16	横浜市上台遺跡第 2 次発掘調査（考古分野）（～ 3.29）
	5		「時代に対応する開かれた博物館」を目指し組織改正。学芸部の課制を廃止しグループ制とする
	10	18	開館 10 周年記念特別展「100 躰の仏像を観る　神奈川の彫刻」開催（～ 11.13）
1978	3	21	横浜市上台遺跡第 3 次発掘調査（考古分野）（～ 3.30）
	9		文部省学術研究機関に指定。科学研究費補助金の申請が可能となる。
	12	5	横浜市紅取遺跡発掘調査（考古分野）（～ 12.19）
1979	3		当館学芸員の呼びかけにより神奈川県植物誌調査会発足
1980	2	22	入場者 100 万人達成
	3	20	横浜市師岡貝塚第 1 次発掘調査（考古分野）（～ 3.29）
1981	3		国庫補助により屋上の化粧壁・外壁ドライエリア部分・シャッター窓等の改修工事を実施
	3	5	横浜市師岡貝塚第 2 次発掘調査（考古分野）（～ 3.23）
	9	12	アメリカ・メリーランド州との初の国際交流展「紙の作品」開催（～ 9.27）
1982	1	24	メリーランド州ボルチモア市ウォルター・アート・ギャラリーで県立博物館所蔵品による「浮世絵に見る日本と西洋」展開催（～ 2.21）
	2	27	開館 15 周年記念特別展「館蔵品展」開催（～ 3.28）
	3		横浜市師岡貝塚第 3 次発掘調査（考古分野）
			神奈川県民俗文化財分布調査始まる（国庫補助調査）（～ 1983）
1984	3		旧館屋上部分のシート防水工事・ドーム裾部分の銅板張替え等を実施
1985	8	29	太刀　銘備前国長船住左近将監長光造（1960.5.17 県重要文化財指定）受入
1986	3	15	大磯町庄ヶ久保第 8 号横穴墳墓・堂後下第 9 号横穴墳墓発掘調査（考古分野）（～ 3.24）
	7	20	開館 20 周年記念特別展「火山と地震」開催（～ 9.7）
	10	18	開館 20 周年記念特別展「明治の宮廷画家　五姓田義松」開催（～ 11.30）
	11	24	皇太子殿下・皇太子妃殿下・浩宮殿下来館
1987	1	24	開館 20 周年記念・フランス巡回記念特別展「浮世絵名作展　日本版画の黄金時代」開催（～ 2.22）
	3	14	開館 20 周年記念・フランス巡回記念特別展「貝のさまざま　鹿間コレクションから」開催（～ 5.17）
	3	20	20 周年記念式典開催。無料開館（～ 3.22）。『神奈川県立博物館 20 年のあゆみ』刊行。

1 標本鑑定会（1970）
2 アポロ12号が持ち帰った「月の石」の展示（1970）
3 震災犠牲者慰霊祭（1973）
4 馬車道口玄関がオープン（1974）
5 第1回馬車道まつりでの記念植樹（1976）
6 美術品専用車で出張中の一コマ（1980）

	4		第 2 次新神奈川計画の重点政策「文化施設 21 世紀構想」の一環として博物館再編整備事業策定
			自然系・人文系博物館再編整備が「第二次新神奈川計画」に盛り込まれる
	6	1	加藤整爾、館長に就任
1988	3		神奈川県植物誌調査会が 1979 年より準備を進めてきた『神奈川県植物誌』刊行
	3		「県立博物館整備構想調査報告」をまとめる
	4	22	ソビエト連邦オデッサ州副知事チェルカスキー・ウラジミール・アンドレビッチ氏　来館
	5		県立博物館整備構想懇談会（学識経験者）ならびに検討委員会（内部職員）を設置
	5	1	元大英博物館自然史部門古生物部長・化石両生類爬虫類鳥類研究室長　アラン・チャーリッグ氏　講演会
	5	25	ハンガリー駐日大使カーロイ・サルカ夫妻　来館
	8	31	遼寧省文化庁副庁長　郭大順氏　来館
	9	13	神奈川県･遼寧省友好提携 5 周年記念「中国･遼寧省文物展 ―遼寧省博物館･旅順博物館コレクションから―」（～ 10/16）
	12		博物館総合診断調査報告書をまとめる
	12	21	神奈川県立博物館整備構想懇談会による「神奈川県立博物館整備構想に関する提言 ―自然系博物館・人文系博物館の基本的な考え方―」がまとまる
1989	3		自然系博物館の整備計画・展示計画をとりまとめる
	4		社会教育課に建設準備班を設置
	4	1	岩野好秀、館長に就任
	4	16	メリーランド州政府職員来館
	6	23	パリ・ギメ美術館文化技官クリスチーヌ清水女史来館
	7	6	マレーシアペナン州使節団来館
	7	21	英国チェルシースクール・オブ・アート美術史学科長渡辺俊夫氏来館
	10	22	米国古生物学者ヂェラード・ケース氏来館
	11		自然系博物館資料収集委員会を設置
	11		自然系博物館展示プロポーザルを実施
	11	9	英国教育科学省アンソニー・ジョン・ブラントン課長ほか来館
	12	4	メリーランド州ウォルターズアートギャラリー・アジア美術学芸員フット・ウォード氏来館
1990	3		自然系博物館資料収集計画をまとめる
	3		人文系博物館の整備計画・展示計画策定
	4		再編整備連絡会議を設置
	8		人文系博物館資料収集委員会を設置
			「諸職調査」（国庫補助調査）始まる（～ 1991 年）
1991	3		博物館総合情報システム整備計画策定
	3		人文系博物館の資料収集計画をまとめる
	3		自然系博物館の建築工事及び展示の基本設計をまとめる
	7		人文系博物館展示プロポーザルを実施
	8		博物館総合情報システム実施計画をまとめる
	9		人文系博物館の展示基本設計について検討を開始
	10		自然系博物館の造成工事を始める
1992	1		常設展示内で「トピックス展示」はじまる。「彫漆と鎌倉彫」「浄土教の美術」「七夕」など、各々 1 ～ 2 か月の会期の特集展示。再編整備に伴い休館するまで継続。
	3		自然系博物館の建築工事及び展示の実施設計をまとめる
	3		人文系博物館の展示基本設計をまとめる

1

2

3

4

5

6

1 特別展「明治の宮廷画家」(1986)
2 特別展「神奈川の植物」(1988)
3 特別展「中国・遼寧省文物展」(1988)
4 特別展「日本の帰化動物」(1988)
5 防災訓練 (1989)
6 再編時の改修工事見学会 (1994)

	4		博物館開設準備室を設置
	4		博物館開設準備調整会議を設置
	4		人文系博物館の改修工事調査設計を開始
	6		博物館情報システムのプロポーザルを実施
	7		博物館再編整備推進懇話会を設置
	7	2	二十四間四方白星兜鉢（1957.2.19 重要文化財指定）受入
	9		博物館情報システムの調査設計を開始
	9		人文系博物館の改修工事調査設計をまとめる
	10		自然系博物館の建築工事及び展示工事を開始
	10		人文系博物館の改修工事基本・実施設計を開始
	11		人文系博物館の展示工事実施設計を開始
	11	18	色々威腹巻（1962.2.2 重要文化財指定）受入
1993	3		人文系博物館の改修工事基本・実施設計をまとめる
	3		人文系博物館の展示工事実施設計をまとめる
	3		博物館情報システムの調査設計をまとめる
	3	16	再編整備に伴う PR 展示（～ 3.31）
	4	1	再編整備事業に伴う改修工事準備のため休館（～ 1995.3.17）
	4	1	伊藤喜一郎、館長に就任
	9	27	再編整備事業に伴う改修工事のため仮事務所へ移転
	10	1	人文系博物館の改修工事（～ 1994.11）、展示工事（～ 1995.3）
	10	18	安藤雅之、館長に就任
1994	3		博物館情報システムの基本・詳細設計をまとめる
	4	1	小野仁一郎、館長に就任
	4		博物館情報システムのプログラム開発を開始
	9	8	二十八間四方白星兜鉢（1956.6.28 重要文化財指定）受入
	10		人文系博物館の改修工事終了
	12		自然系博物館の建築基礎工事終了
1995	1		神奈川県立博物館条例改正に伴い神奈川県立博物館は神奈川県立歴史博物館と名称変更（新たに神奈川県立生命の星・地球博物館を設置）
	2	14	石清水八幡宮図・一遍上人図・賢江祥啓筆花鳥図が県の重要文化財に指定
	3		歴史博物館の展示工事が終了
	3		博物館情報システム一部稼働開始
	3	17	神奈川県立歴史博物館開館式典挙行
	3	18	**神奈川県立歴史博物館開館**
	3	18	特別展「開館記念特別展示」開催（～ 5.14）
	6	27	旧横浜正金銀行本店が国の史跡に指定
1996	5	2	歴史博物館開館以来の入館者が 10 万人を突破
1997	7		博物館ボランティアが活動を開始
1998	2	17	木造菩薩半跏像が県重要文化財に指定
	3	25	『神奈川県立（歴史）博物館　30 年のあゆみ』刊行
	4		北村紀男、館長に就任
1999	2		金銅装笈・椿彫木朱漆笈・清拙正澄墨跡・石室善玖墨跡・源頼朝袖判下文・源頼家袖判下文が県重要文化財に指定。また神奈川の職人の道具が県有形民俗文化財に指定
	4		重要文化財の公開承認施設として文化庁から承認

1

2

3

4

1・2 再編に向けた模型のチェック
1 中世鎌倉模型（1993）
2 横浜居留地模型（1995）
3 再編に伴う休館時の仮事務所にて（1994）
4 再編工事を終え新しく整備された展示室（1995）
5 馬車道にかかる歴史博物館開館を祝う横断幕（1995）
6「広重」展内覧会（1999）
7 子ども向けイベント「博物館であそぼう」（2000）

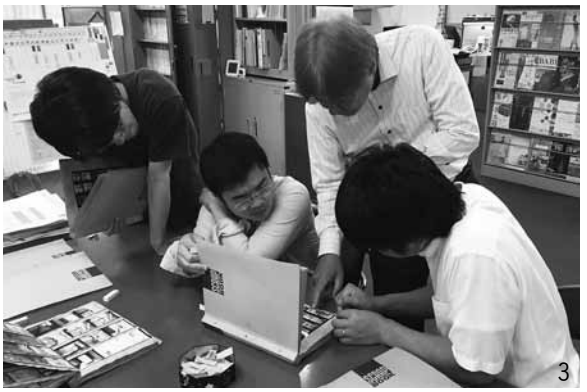
5

6

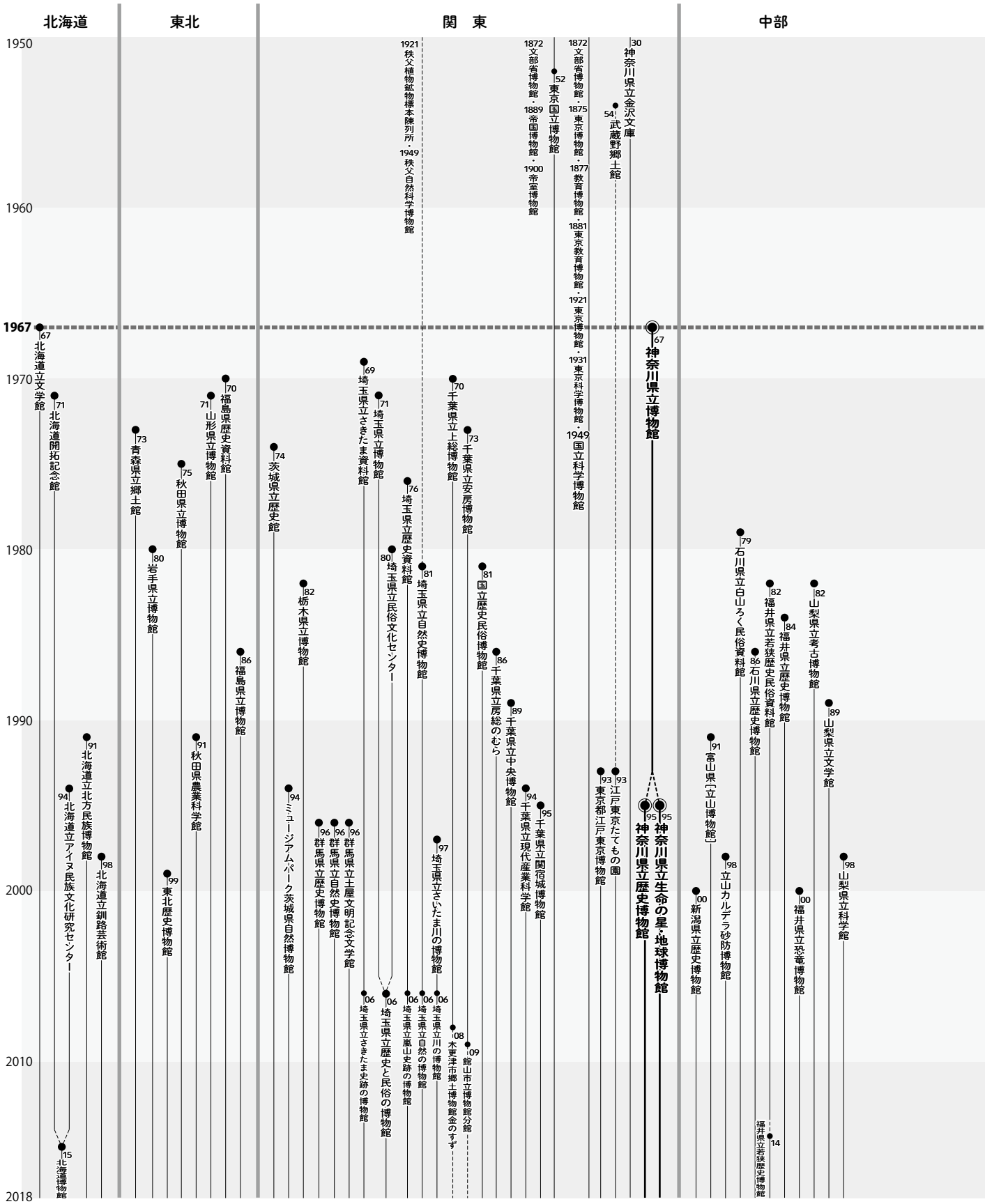
7

	9	11	県有形民俗文化財指定・記念特別陳列「神奈川の職人の道具コレクション」（〜 10.11）
2000	1		重要有形民俗文化財の公開事前届免除施設として文化庁から承認される
	4		馬場昭男、館長に就任
2001	2	13	三浦市間口洞窟遺跡出土品が県重要文化財に指定
	3		神奈川県博物館協議会を廃止
	4		畠山康、館長に就任
2002	4		西川杏太郎、館長に就任
2003	10	18	神奈川県文化財保護条例制定 50 周年記念「重要文化財―かながわ考古展―」を開催（〜 12.7）
2004	8		旧横浜正金銀行本店本館が創建 100 周年をむかえる 同記念特別展「横浜正金銀行―世界三大為替銀行への道―」を開催
	9		吉田初三郎「神奈川県鳥瞰図」を調査
2005	3		神奈川県立歴史博物館に再編されて 10 周年をむかえる 同記念特別展「館蔵美術工芸名品展」を開催
	3		民俗資料収集協力者制度が終了
2006	4		神奈川県立博物館組織規則の一部改正により、管理部管理課、経理課を統合し管理課に改め、企画情報部企画普及課、情報資料課及び学芸部の 2 部 3 課となる
2007	3		神奈川県立博物館の開館から 40 周年を迎える
	10	13	開館 40 周年記念特別展「宋元仏画」開催（〜 11.25）
	11	30	旧横浜正金銀行本店が近代化産業遺産（横浜港周辺の関連建築物群）に認定
2008	4	19	ミュージアム・コンサートを初めて開催
2009	3		中長期計画を策定
2010	6	30	常設展示室を利用した初めての企画展示として特別企画「まつり　人々のつどい、にぎわい」を開催（〜 8.29）
	7	31	県博フレンズ会議を初めて開催
2011	3	11	東日本大震災。当館の位置する横浜市中区では震度 5 強を記録。埴輪 1 点が転倒により破損。当日は安全確認のため急遽閉館した。建物や施設の甚大な被害には至らず、翌日から営業再開。点検のため一部展示室は一時閉室となった。
	11	1	特別陳列を初めて開催（「鎌倉彫と眞葛焼」〜 12.27）
2012			この年から重要文化財「十王図」の保存修理を行う（〜 2017.3）
2013	3	20	この年から春分の日（開館記念日）と文化の日を県立歴史博物館の無料開館日とし、屋上ドームも公開
	11	3	営業部長パンチの守が活動開始
2014	7	25	twitter の運用を開始
2015	3		県立歴史博物館と県立生命の星・地球博物館に再編されて 20 周年を迎える
	3	7	開館 20 周年記念「特別展ポスターで振り返る歴博 20 年の歩み」展を開催（〜 3.29）
2016	2	6	県立生命の星・地球博物館と初めて共催した特別展「石展―かながわの歴史を彩った石の文化―」を開催（〜 3.27）
	5	30	空調設備等の改修工事のため休館（〜 2018.4 予定）
2017	3	20	神奈川県立博物館の開館から 50 周年を迎える。
	8	8	神奈川県博開館 50 周年記念特設ウェブサイトを公開。横浜デジタルアーツ専門学校と共同制作。「みんなの神奈川県博アーカイブ」「神奈川県博のカケラ」「# のこしたい神奈川」などの記念事業を紹介。
	12	15	空調設備等改修工事完了。引渡し式。
2018	3	31	『神奈川県立博物館・神奈川県立歴史博物館　50 年のあゆみ』刊行

1 正面玄関前にて雪かき（2014）
2 無料開館日となっている開館記念日にて（2014）
3 過去の写真を見ながら（2017）
4 空調工事期間中は資料は外部の恒温恒湿倉庫へ（2017）
5 空になった展示室（2017）
6 展示室グラフィックパネル更新の打合せ（2018）
7・8 空調工事完了引渡し式（2018）

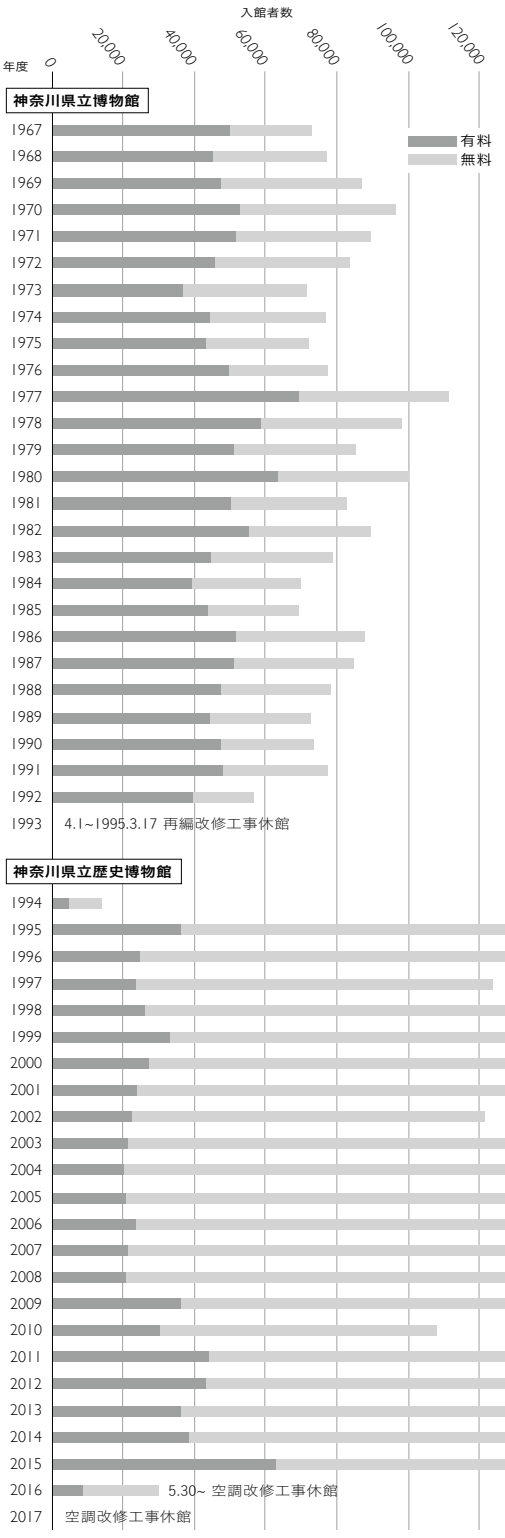


全国の都道府県立博物館等 設立年



九州・沖縄
四国
中国
近畿
中部
1936 沖縄郷土博物館
1945 沖縄陳列館
1946 首里市立郷土博物館／東恩名博物館
1947 沖縄民政府立首里博物館
53 琉球政府立博物館
53 鹿児島県立博物館
72 沖縄県立博物館
07 沖縄県立博物館・美術館
71 宮崎県総合博物館
04 西都原考古博物館
95 大分県立先哲史料館
81 大分県立歴史博物館
92 熊本県立装飾古墳館
04 佐賀城本丸歴史館
05 長崎歴史文化博物館
93 佐賀県立名護屋城博物館
80 佐賀県立九州陶磁文化館
70 佐賀県立博物館
73 九州歴史資料館
05 九州国立博物館
83 鹿児島県歴史資料センター黎明館
91 高知県立歴史民俗資料館
17 高知県立高知城歴史博物館
58 高知県立牧野植物園
59 愛媛県立博物館
94 愛媛県総合科学博物館
94 愛媛県歴史文化博物館
99 香川県歴史博物館
08 香川県立ミュージアム
90 徳島県立博物館
12 山口県立山口博物館
07 島根県立古代出雲歴史博物館
71 岡山県立博物館
79 広島県立歴史民俗資料館
89 広島県立歴史博物館
72 鳥取県立博物館
38 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
1895 帝国奈良博物館
1900 奈良帝室博物館
1947 国立博物館奈良分館
52 奈良国立博物館
71 和歌山県立紀伊風土記の丘
71 和歌山県立博物館
74 奈良県立民俗博物館
82 和歌山県立自然博物館
83 兵庫県立歴史博物館
92 兵庫県立人と自然の博物館
07 兵庫県考古博物館
77 国立民族学博物館
88 京都府京都文化博物館
91 大阪府立弥生文化博物館
94 大阪府立近つ飛鳥博物館
48 滋賀県立産業文化館
1875 京都府京都博物館
1897 帝国京都博物館
1900 京都帝室博物館
1924 恩賜京都博物館
52 京都国立博物館
53 三重県立博物館
61 滋賀県立琵琶湖文化館
70 滋賀県立近江風土記の丘資料館
89 三重県立斎宮歴史博物館
92 滋賀県立安土城考古博物館
96 滋賀県立琵琶湖博物館
08 〈休館〉
14 三重県総合博物館
76 岐阜県博物館
77 名古屋市博物館
94 長野県立歴史館
05 山梨県立博物館
06 岐阜県ミュージアムひだ
11 ミュージアム飛騨

年間観覧者数の推移



年度	開館日数	入館者数				
		総数	有料	無料	一日平均	累計
1967 (昭42)	302	72,773	49,927	22,846	241.0	72,773
1968 (昭43)	302	77,224	45,366	31,858	255.7	149,997
1969 (昭44)	302	86,659	47,628	39,031	287.0	236,656
1970 (昭45)	299	96,424	52,582	43,842	322.5	333,080
1971 (昭46)	302	89,610	51,558	38,052	296.7	422,690
1972 (昭47)	302	83,712	45,845	37,867	277.2	506,402
1973 (昭48)	295	71,206	37,038	34,168	241.4	577,608
1974 (昭49)	294	76,878	44,187	32,691	261.5	654,486
1975 (昭50)	296	71,798	43,031	28,767	242.6	726,284
1976 (昭51)	292	77,430	49,855	27,575	265.2	803,714
1977 (昭52)	274	111,064	69,206	41,858	405.3	914,778
1978 (昭53)	280	98,256	58,661	39,595	350.9	1,013,034
1979 (昭54)	286	85,322	51,396	33,926	298.3	1,098,356
1980 (昭55)	286	100,082	63,372	36,710	349.9	1,198,438
1981 (昭56)	282	82,448	49,959	32,489	292.4	1,280,886
1982 (昭57)	285	89,709	55,566	34,143	314.8	1,370,595
1983 (昭58)	287	79,115	44,665	34,450	275.7	1,449,710
1984 (昭59)	287	69,641	39,603	30,038	242.7	1,519,351
1985 (昭60)	287	69,386	43,582	25,804	241.8	1,588,737
1986 (昭61)	294	88,109	51,537	36,572	299.7	1,676,846
1987 (昭62)	294	84,976	51,494	33,482	289.0	1,761,822
1988 (昭63)	293	78,584	47,318	31,266	268.2	1,840,406
1989 (昭64・平元)	291	72,534	44,509	28,025	249.3	1,912,940
1990 (平2)	286	73,381	47,665	25,716	256.6	1,986,321
1991 (平3)	286	77,160	47,813	29,347	269.8	2,063,481
1992 (平4)	286	56,659	39,498	17,161	198.1	2,120,140
1993 (平5)	再編改修工事休館					2,120,140
1994 (平6)	13	13,933	5,105	8,828	1071.8	2,134,073
1995 (平7)	296	180,337	36,491	143,846	609.2	2,314,410
1996 (平8)	293	132,850	24,704	108,146	453.4	2,447,260
1997 (平9)	297	123,636	23,868	99,768	416.3	2,570,896
1998 (平10)	292	137,469	26,366	111,103	470.8	2,708,365
1999 (平11)	294	160,300	33,372	126,928	545.2	2,868,665
2000 (平12)	301	135,595	27,400	108,195	450.5	3,004,260
2001 (平13)	302	130,669	24,098	106,571	432.7	3,134,929
2002 (平14)	305	121,264	22,458	98,806	397.6	3,256,193
2003 (平15)	302	128,593	21,335	107,258	425.8	3,384,786
2004 (平16)	307	134,296	20,681	113,615	437.4	3,519,082
2005 (平17)	306	130,526	21,140	109,386	426.6	3,649,608
2006 (平18)	307	142,188	23,378	118,810	463.2	3,791,796
2007 (平19)	310	134,056	21,511	112,545	432.4	3,925,852
2008 (平20)	309	132,932	21,192	111,740	430.2	4,058,784
2009 (平21)	306	154,427	36,487	117,940	504.7	4,213,211
2010 (平22)	302	107,840	30,507	77,333	357.1	4,321,051
2011 (平23)	306	141,176	44,383	96,793	461.4	4,462,227
2012 (平24)	309	138,120	43,305	94,815	447.0	4,600,347
2013 (平25)	309	127,895	36,492	91,403	413.9	4,728,242
2014 (平26)	308	142,193	38,738	103,455	461.7	4,870,435
2015 (平27)	310	178,873	62,898	115,975	577.0	5,049,308
2016 (平28)	52	29,844	8,787	21,057	573.9	5,079,152
2017 (平29)	空調改修工事休館					5,079,152

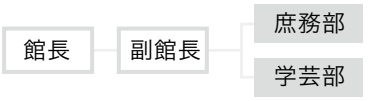
県立博物館時代の無料入館者は、招待券や減免による展示室への入館者数。

歴史博物館への再編後は、それに加え、1階フリーゾーン（コレクション展示室、ミュージアムライブラリー、正面エントランスから馬車道玄関への回廊等）の利用者も加算されている。

組織の変遷

県立博物館

1966 年 11 月

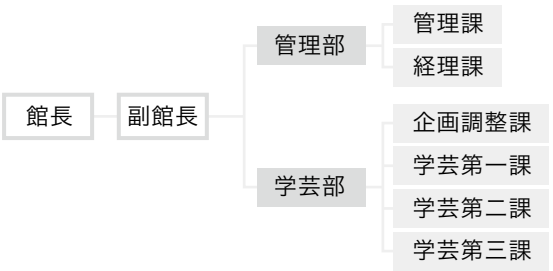


1967 年 6 月

1968 年 4 月

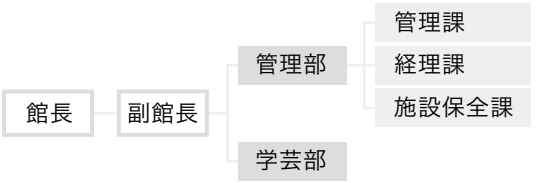
1969 年 7 月

1972 年 8 月



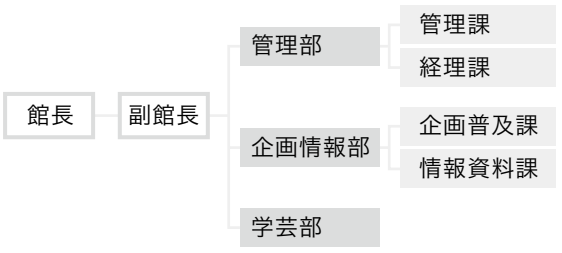
1974 年 8 月

1977 年 5 月

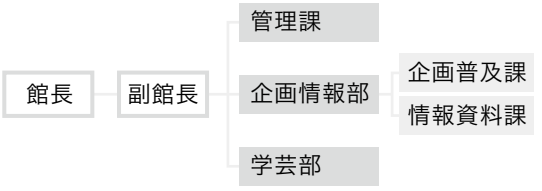


県立歴史博物館

1995 年 1 月



2006 年 4 月（現在の体制）



教育庁社会教育部社会教育課博物館準備事務室［〜 1964.3］／博物館準備事務局［1964.4 〜］

職・氏名　在職期間

室長［〜 1964.3］／**局長**［1964.4 〜］
菅谷　実　1963.4.1 〜 1965.3.31
仁科卓郎　1965.4.1 〜 1966.11

室長補佐［〜 1964.3］／**次長**［1964.4 〜］／**庶務部長**［1965.4 〜］
松原富郎　1963.4.1 〜 1965.3.31
菊地長治　1965.4.1 〜 1966.11

業務部長［1966.4 〜］
貫　達人　1966.4.1 〜 1966.11

（庶務部員）
村田慶之輔　1963.4.1 〜 1964.3.31
苅部初雄　1963.4.1 〜 1966.11
木村平八郎　1964.4.1 〜 1965.3.31
大藤富子　1964.4.1 〜 1965.3.31
小林峯生　1964.4.1 〜 1966.11
神沢勇一　1964.4.1 〜 1966.11
佐藤好孝　1964.4.1 〜 1966.11
塩島照夫　1965.4.1 〜 1966.3.31
高梨敏雄　1965.4.1 〜 1966.11
細川征治　1965.4.1 〜 1966.11
山本喜代子　1965.4.1 〜 1966.11
林　語郎　1965.4.1 〜 1966.11
鈴木太郎　1965.4.1 〜 1966.11
大賀幸雄　1966.4.1 〜 1966.11
榎本睦生　1966.4.1 〜 1966.11
神林征和　1966.4.1 〜 1966.11
酒井巳代司　1966.4.1 〜 1966.11
政木幸恵　1966.4.1 〜 1966.11

（業務部員）
今永　勇　1965.4.1 〜 1966.11
大戸吉古　1965.4.1 〜 1966.11
大平敏子　1965.4.1 〜 1966.11
斎藤彦司　1965.4.1 〜 1966.11
高橋秀男　1965.4.1 〜 1966.11
寺田恵子　1965.4.1 〜 1966.11
中島亮一　1965.4.1 〜 1966.11
中村一恵　1965.4.1 〜 1966.11
和田正洲　1965.4.1 〜 1966.11
阿部正道　1966.4.1 〜 1966.11
大場達之　1966.4.1 〜 1966.11
加賀ひろ子　1966.4.1 〜 1966.11
川口徳治朗　1966.4.1 〜 1966.11
川西ぎん子　1966.4.1 〜 1966.11
田中孝子　1966.4.1 〜 1966.11
谷川佳澄　1966.4.1 〜 1966.11
長谷部満彦　1966.4.1 〜 1966.11
松島義章　1966.4.1 〜 1966.11
宗像盛久　1966.4.1 〜 1966.11
村田慶之輔　1966.4.1 〜 1966.11
山口佳秀　1966.4.1 〜 1966.11
横田洋一　1966.4.1 〜 1966.11

神奈川県立博物館

職・氏名　在職期間

館長
村田良策　1966.11 〜 1969.3.31
斎藤太次郎　1969.4.1 〜 1972.3.31
土屋武人　1972.4.1 〜 1974.3.31
高橋緊蔵　1974.4.1 〜 1976.3.31
北林一光　1976.4.1 〜 1978.3.31
田中　宏　1978.4.1 〜 1979.3.31
戸栗栄次　1979.4.1 〜 1982.3.31
田中雅夫　1982.4.1 〜 1983.3.31
前場　廣　1983.4.1 〜 1986.3.31
河合弘光　1986.4.1 〜 1986.9.23
宇野喜三郎　1986.10.8 〜 1987.5.31
加藤整爾　1987.6.1 〜 1989.3.31
岩野好秀　1989.4.1 〜 1992.3.31
村上　治　1992.4.1 〜 1993.3.31
伊藤喜一郎　1993.4.1 〜 1993.10.17
安藤雅之　1993.10.18 〜 1994.3.31
小野仁一郎　1994.4.1 〜 1994.12.31

副館長
仁科卓郎　1966.11 〜 1968.3.31
幸田　稔　1968.4.1 〜 1969.3.31
柿沼育也　1969.4.1 〜 1973.3.31
金子良運　1973.4.1 〜 1977.3.31
中島久雄　1979.4.1 〜 1985.3.31
井上昭治　1985.4.1 〜 1988.3.31
船倉哲士　1988.4.1 〜 1989.3.31
柳ヶ水政彦　1989.4.1 〜 1992.3.31
鈴木真哉　1992.4.1 〜 1994.12.31

庶務部／管理部
庶務部長［〜 1969.3］／**管理部長**［1969.4 〜］
菊地長治　1966.11 〜 1968.3.31
石塚勝義　1968.4.1 〜 1970.3.31
栗山幹雄　1970.4.1 〜 1977.3.31
大屋亮威　1977.4.1 〜 1981.3.31
赤井文夫　1981.4.1 〜 1985.3.31
岸　薫　1985.4.1 〜 1988.3.31
田辺隆男　1988.4.1 〜 1989.3.31
上村隆明　1989.4.1 〜 1992.3.31
若杉昭平　1992.4.1 〜 1994.3.31
神田順弘　1994.4.1 〜 1994.12.31

庶務課長［〜 1969.3］／**管理課長**［1969.4 〜］
大賀幸雄　1966.11 〜 1971.3.31
石井親雄　1971.4.1 〜 1973.3.31
鈴木久雄　1973.4.1 〜 1975.3.31
高島幹弥　1975.4.1 〜 1977.3.31
中村勝洋　1977.4.1 〜 1980.3.31
尾崎辰吉　1980.4.1 〜 1982.3.31
壹谷多實夫　1982.4.1 〜 1984.3.31
小林　功　1984.4.1 〜 1986.3.31
磯崎彰夫　1986.4.1 〜 1990.3.31
市川　清　1990.4.1 〜 1993.3.31
森野健一　1994.4.1 〜 1994.12.31

経理課長
石井親雄　1967.4.1 〜 1971.3.31
小池　明　1971.4.1 〜 1974.3.31
藪田達男　1974.4.1 〜 1978.3.31
壹谷多實夫　1978.4.1 〜 1982.3.31
片野正敏　1982.4.1 〜 1985.3.31
山口兼夫　1985.4.1 〜 1987.5.31
池田了子　1989.6.1 〜 1990.3.31
堀川哲勝　1990.4.1 〜 1992.3.31
北村信男　1992.4.1 〜 1994.12.31

施設保全課長
鈴木久雄　1974.4.1 〜 1975.3.31
高島幹弥　1975.4.1 〜 1977.3.31
長田保之助　1977.4.1 〜 1983.3.31
土屋松雄　1983.4.1 〜 1988.3.31
大矢秀夫　1989.4.1 〜 1989.2.10
相澤靖夫　1989.4.1 〜 1991.5.31
鈴木孝雄　1991.6.1 〜 1994.12.31

（庶務部・管理部員）
細川征治　1966.11 〜 1968.3.31
山本喜代子　1966.11 〜 1968.3.31
榎本睦生　1966.11 〜 1969.3.31
関口三郎　1966.11 〜 1969.3.31
高梨敏雄　1966.11 〜 1970.3.31
鈴木太郎　1966.11 〜 1972.3.31
佐藤好孝　1966.11 〜 1972.3.31
神林征和　1966.11 〜 1977.3.31
林　語郎　1966.11 〜 1982.3.31
酒井巳代司　1966.11 〜 1988.3.31
政木幸恵　1966.11 〜 1994.12.31
関野美松　1967.4.1 〜 1968.3.31
中川和子　1967.4.1 〜 1968.3.31
新原勝巳　1967.4.1 〜 1968.3.31
増田（横山）邦代　1967.4.1 〜 1970.3.31
今井厚子　1967.4.1 〜 1971.3.31
岡田嘉久　1967.4.1 〜 1973.3.31
塚田延子　1967.4.1 〜 1973.3.31
小山　守　1967.4.1 〜 1980.3.31
佐藤　斉　1967.4.1 〜 1989.3.31
青砥康雄　1967.4.1 〜 1991.3.31
村松一彦　1967.4.1 〜 1993.3.31
平本紀美男　1967.4.1 〜 1994.12.31
岡本規子　1967.4.1 〜 1982.3.31
渡部重夫　1967.4.1 〜 1985.3.31
大金時夫　1968.4.1 〜 1970.3.31
林　四男治　1968.4.1 〜 1970.3.31
阿部澄子　1968.4.1 〜 1972.3.31
小原真理子　1968.4.1 〜 1973.3.31
片桐政江　1968.4.1 〜 1973.3.31
阿部　昇　1969.4.1 〜 1972.3.31
竹原一夫　1969.4.1 〜 1974.3.31
加藤久雄　1969.4.1 〜 1993.3.31
橋都貴久江　1970.4.1 〜 1972.3.31

山田春夫　1970.4.1 ～ 1973.3.31
森野健一　1970.4.1 ～ 1978.3.31
横関敏治　1970.4.1 ～ 1976.3.31
稲木洋子　1971.4.1 ～ 1975.3.31
星野（加藤）進　1971.4.1 ～ 1979.3.31
伊東洋子　1971.4.1 ～ 1978.3.31
南部（澤田）久美子　1972.4.1 ～ 1973.3.31
今泉保史　1972.4.1 ～ 1978.3.31
浅野哲勇　1972.4.1 ～ 1991.3.31
渡辺　明　1972.4.1 ～ 1993.3.31
浅羽靖子　1972.4.1 ～ 1975.3.31
湯浅恵子　1973.4.1 ～ 1975.3.31
横溝美智博　1973.4.1 ～ 1977.3.31
高田秀之　1973.4.1 ～ 1985.3.31
小島健司　1974.4.1 ～ 1977.3.31
村田（川口）ケイ子　1974.4.1 ～ 1981.3.31
鬼頭有子　1975.4.1 ～ 1980.3.31
中村芳明　1976.4.1 ～ 1978.3.31
鴨下（蓮池）照美　1976.4.1 ～ 1979.3.31
大久保博司　1977.4.1 ～ 1980.3.31
天野光彦　1978.4.1 ～ 1981.3.31
一之瀬敏夫　1978.4.1 ～ 1981.3.31
戸塚得郎　1978.4.1 ～ 1982.3.31
千野京子　1978.4.1 ～ 1984.3.31
古谷孝雄　1979.4.1 ～ 1984.3.31
高橋（奥田）栄子　1979.4.1 ～ 1985.3.31
服部　貴　1979.4.1 ～ 1986.3.31
坂下健二　1980.4.1 ～ 1983.3.31
富澤　隆　1981.4.1 ～ 1985.3.31
小島真人　1981.4.1 ～ 1986.3.31
中野大樹　1982.4.1 ～ 1983.3.31
赤間久芳　1982.4.1 ～ 1986.3.31
小林　実　1983.4.1 ～ 1988.3.31
三浦一良　1984.4.1 ～ 1987.5.31
饗場幸子　1984.4.1 ～ 1989.3.31
斉藤雄治　1985.4.1 ～ 1987.5.31
松本洋子　1985.4.1 ～ 1989.3.31
中村政義　1985.4.1 ～ 1990.3.31
野口忠義　1986.4.1 ～ 1988.3.31
井上弘毅　1986.4.1 ～ 1987.3.31
守屋幸雄　1986.4.1 ～ 1991.3.31
佐藤高利　1987.6.1 ～ 1989.3.31
小川恒士　1987.4.1 ～ 1990.3.31
長岡秀哉　1987.6.1 ～ 1990.3.31
岡崎隆治　1988.4.1 ～ 1991.5.31
川村二三男　1988.4.1 ～ 1991.5.31
大沼俊子　1989.4.1 ～ 1992.3.31
梶間俊美　1989.4.1 ～ 1992.3.31
上野博之　1990.4.1 ～ 1992.3.31
吉田満男　1990.4.1 ～ 1992.3.31
伍島武士　1990.4.1 ～ 1993.3.31
増尾純一　1990.4.1 ～ 1993.3.31
渡辺次郎　1990.4.1 ～ 1994.3.31
小野　勝　1991.6.1 ～ 1994.3.31
江藤政克　1992.4.1 ～ 1994.3.31
古賀由紀　1992.4.1 ～ 1994.12.31
鈴村真理子　1992.4.1 ～ 1994.12.31
新谷博行　1993.4.1 ～ 1994.12.31
青木大輔　1994.4.1 ～ 1994.12.31
近藤康浩　1994.4.1 ～ 1994.12.31
田中賢一　1994.4.1 ～ 1994.12.31

学芸部

学芸部長

貫　達人　1966.11 ～ 1968.3.31
金子良運　1970.4.1 ～ 1973.3.31
伊東秀一　1973.4.1 ～ 1975.3.31
田辺昭朗　1975.4.1 ～ 1976.3.31
中島久雄　1976.4.1 ～ 1979.3.31
納富常天　1979.4.1 ～ 1981.3.31
中島久雄　1981.4.1 ～ 1985.3.31
高橋秀男　1985.4.1 ～ 1994.3.31
村岡健作　1994.4.1 ～ 1994.12.31

学芸課長［1968.4 ～ 1972.3］
／**企画調整課長**［1972.4 ～］
横田博圀　1968.4.1 ～ 1972.3.31
大戸吉古　1972.4.1 ～ 1977.3.31

人文課長［1968.4 ～ 1972.3］
／**学芸第二課長**［1972.4 ～］
和田正洲　1968.4.1 ～ 1976.3.31

自然課長［1968.4 ～ 1972.3］
／**学芸第三課長**［1972.4 ～］
堀江澄男　1968.4.1 ～ 1972.3.31
秋山隆司　1972.4.1 ～ 1977.3.31

学芸第一課長［1972.4.1 ～］
半田佳夫　1972.4.1 ～ 1977.3.31

（学芸部員）
大平敏子　1966.11 ～ 1968.3.31
川西ぎん子　1966.11 ～ 1968.3.31
谷川佳澄　1966.11 ～ 1968.3.31
村田慶之輔　1966.11 ～ 1969.3.31
加賀ひろ子　1966.11 ～ 1970.3.31
阿部正道　1966.11 ～ 1977.3.31
大戸吉古　1966.11 ～ 1977.3.31
長谷部満彦　1966.11 ～ 1979.3.31
和田正洲　1966.11 ～ 1979.3.31
中島亮一　1966.11 ～ 1983.3.31
大場達之　1966.11 ～ 1988.5.31
小林峯生　1966.11 ～ 1989.3.31
神澤勇一　1966.11 ～ 1991.3.31
今永　勇　1966.11 ～ 1994.12.31
川口徳治朗　1966.11 ～ 1994.12.31
斎藤彦司　1966.11 ～ 1994.12.31
高橋秀男　1966.11 ～ 1994.12.31
田中孝子　1966.11 ～ 1994.12.31
中村一恵　1966.11 ～ 1994.12.31
松島義章　1966.11 ～ 1994.12.31
宗像盛久　1966.11 ～ 1994.12.31
山口佳秀　1966.11 ～ 1994.12.31
横田洋一　1966.11 ～ 1994.12.31
梅川紀子　1967.4.1 ～ 1969.3.31
宇田川久江　1967.4.1 ～ 1970.3.31
渡辺レイ子　1967.4.1 ～ 1970.3.31
大塚正博　1967.4.1 ～ 1971.3.31
戸枝敏郎　1967.4.1 ～ 1985.3.31
清水眞澄　1967.4.1 ～ 1992.3.31
中野萬年　1967.4.1 ～ 1993.3.31
新井一政　1967.4.1 ～ 1994.12.31
長田　平　1967.4.1 ～ 1994.12.31
広田（奥野）花代子　1967.4.1 ～ 1994.12.31
平本千代子　1968.4.1 ～ 1979.3.31
磯崎厚子　1968.4.1 ～ 1992.3.31
村岡健作　1968.4.1 ～ 1994.12.31
長瀬和雄　1969.4.1 ～ 1970.3.31
柏木（小川）昌子　1969.4.1 ～ 1977.3.31
八幡義信　1969.4.1 ～ 1994.12.31
八木　保　1971.4.1 ～ 1973.3.31
井上久美子　1973.4.1 ～ 1994.12.31
生出智哉　1974.4.1 ～ 1994.12.31
橋本健一郎　1974.4.1 ～ 1994.12.31
薄井和男　1977.4.1 ～ 1994.12.31
後藤　登　1978.4.1 ～ 1982.3.31
岩壁義光　1978.4.1 ～ 1990.10.31
鈴木良明　1978.4.1 ～ 1994.12.31
鈴木通大　1978.4.1 ～ 1994.12.31
荻原由紀　1979.4.1 ～ 1986.3.31
平田大二　1979.4.1 ～ 1994.12.31
坂下健二　1982.4.1 ～ 1983.3.31
鳥居和郎　1982.4.1 ～ 1994.12.31
相澤正彦　1982.10.1 ～ 1994.12.31
池田茂昭　1983.4.1 ～ 1990.3.31
塩澤寛樹　1982.10.16 ～ 1994.12.31
犬塚（山地）純　1984.4.1 ～ 1994.12.31
加藤隆志　1985.4.1 ～ 1987.3.31
高桑正敏　1985.4.1 ～ 1994.12.31
今村實男　1986.4.1 ～ 1990.3.31
勝山輝男　1989.4.1 ～ 1994.12.31
小倉弘子　1990.4.1 ～ 1993.3.31
安藤公美子　1990.4.1 ～ 1994.12.31
小出良幸　1990.4.1 ～ 1994.12.31
新井田秀一　1990.4.1 ～ 1994.12.31
國平健三　1991.4.1 ～ 1994.12.31
國　雄行　1991.4.1 ～ 1994.12.31
寺嵜弘康　1991.4.1 ～ 1992.3.31［非］
　1992.4.1 ～ 1994.12.31
嶋村元宏　1993.10.1 ～ 1994.12.31
瀬能　宏　1993.10.1 ～ 1994.12.31
苅部治紀　1993.11.1 ～ 1994.12.31
山下浩之　1993.11.1 ～ 1994.12.31
広谷浩子　1993.4.1 ～ 1994.12.31
木場英久　1993.4.1 ～ 1994.12.31
大島光春　1993.4.1 ～ 1994.12.31
樽　創　1993.4.1 ～ 1994.12.31
田中徳久　1994.7.1 ～ 1994.12.31

教育庁生涯学習部生涯学習課博物館建設準備班・担当［～ 1992.3］／博物館開設準備室［1992.4 ～］

兼：博物館との兼務

職・氏名	在職期間
室長［1992.4 ～］	
吉田英男	1992.4.1 ～ 1994.12.31［兼］
博物館建設準備班・担当［～ 1992.3］／博物館開設準備室［1992.4 ～］	
高畑充治	1989.4.1 ～ 1995.12.31
山口佳秀	1989.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
新井一政	1989.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
嘉山重夫	1989.4.1 ～ 1991.5.31
平田大二	1989.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
小板橋聡士	1989.4.1 ～ 1991.5.31
犬塚（山地）純	1989.4.1 ～ 1991.5.31［兼］
	1994.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
飯塚眞康	1990.4.1 ～ 1995.12.31
船澤良二	1990.4.1 ～ 1992.3.31
塩川孝治	1990.4.1 ～ 1995.12.31
中島晴夫	1990.4.1 ～ 1993.3.31
新井田秀一	1990.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
高橋秀男	1991.4.1 ～ 1994.3.31［兼］
村岡健作	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
松島義章	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
中村一恵	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
今永　勇	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
生出智哉	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
秋山志乃夫	1991.4.1 ～ 1995.12.31
高桑正敏	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
勝山輝男	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
小出良幸	1991.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
福田美子	1991.6.1 ～ 1995.12.31
佐藤英樹	1991.6.1 ～ 1995.12.31
内田紀子	1992.4.1 ～ 1995.12.31
高瀬博光	1992.4.1 ～ 1995.12.31
古木次郎	1992.4.1 ～ 1994.3.31
白岩正明	1992.4.1 ～ 1995.12.31
上野博之	1992.4.1 ～ 1995.12.31
鈴木孝雄	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
田中孝子	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
宗像盛久	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
奥野花代子	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
長谷川　浩	1993.4.1 ～ 1995.12.31
坂本貴之	1993.4.1 ～ 1995.12.31
鈴木智明	1993.4.1 ～ 1995.12.31
広谷浩子	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
木場英久	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
樽　創	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
大島光春	1993.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
瀬能　宏	1993.10.1 ～ 1995.12.31［兼］
苅部治紀	1993.11.1 ～ 1995.12.31［兼］
山下浩之	1993.11.1 ～ 1995.12.31［兼］
加藤憲一	1994.4.1 ～ 1995.12.31
岡本恭一	1994.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
八幡義信	1994.4.1 ～ 1995.12.31［兼］
古谷久夫	1994.4.1 ～ 1995.12.31
金井一雄	1994.4.1 ～ 1995.12.31
土屋定夫	1994.4.1 ～ 1995.12.31
高橋健二	1994.4.1 ～ 1995.12.31

神奈川県立歴史博物館

在職期間欄の略称は以下の通り。
非：非常勤　再：再任用　臨：臨時的任用

職・氏名	在職期間
館長	
小野仁一郎	1995.1.1 ～ 1996.3.31
杉山徳光	1996.4.1 ～ 1997.3.31
樋口悦朗	1997.4.1 ～ 1998.3.31
北村紀男	1998.4.1 ～ 2000.3.31
馬場昭男	2000.4.1 ～ 2001.3.31
畠山　康	2001.4.1 ～ 2002.3.31
西川杏太郎	2002.4.1 ～ 2011.5.31［非］
薄井和男	2011.6.1 ～ 2013.3.31
	2013.4.1 ～［非］
副館長	
鈴木真哉	1995.1.1 ～ 1995.5.31
浅倉利之	1995.6.1 ～ 1998.3.31
河合　宏	1998.4.1 ～ 2001.3.31
伊佐浩一	2001.4.1 ～ 2004.3.31
斎藤光男	2004.4.1 ～ 2007.3.31
中村英二	2007.4.1 ～ 2007.5.31
山口友久	2007.6.1 ～ 2010.3.31
佐藤　宏	2010.4.1 ～ 2013.3.31
竹内廣一	2013.4.1 ～ 2017.3.31
目黒節子	2017.4.1 ～
管理部	
管理部長	
神田順弘	1995.1.1 ～ 1995.5.31
谷口和彦	1995.6.1 ～ 1998.3.31
中出征夫	1998.4.1 ～ 2000.3.31
三堀健一郎	2000.4.1 ～ 2002.3.31
白岩正明	2002.4.1 ～ 2004.3.31
鈴木尚遠	2004.4.1 ～ 2006.3.31
管理課長	
森野健一	1995.1.1 ～ 1997.3.31
手塚善久	1997.4.1 ～ 1999.5.31
水谷　保	1999.6.1 ～ 2001.3.31
石川儀郎	2001.4.1 ～ 2003.5.31
熊谷　肇	2003.6.1 ～ 2005.3.31
大野　満	2005.4.1 ～ 2008.3.31
熊谷　淳	2008.4.1 ～ 2011.5.31
橋本千晴	2011.6.1 ～ 2014.3.31
小山田明	2014.4.1 ～ 2016.3.31
勝又　隆	2016.4.1 ～
経理課長	
北村信男	1995.1.1 ～ 1995.5.31
堤　義也	1995.6.1 ～ 1998.3.31
内藤勝夫	1998.4.1 ～ 2001.3.31
高橋洋一	2001.4.1 ～ 2004.3.31
堀池博彦	2004.4.1 ～ 2006.3.31
（管理課・経理課員）	
古賀由紀	1995.1.1 ～ 1995.5.31
新谷博行	1995.1.1 ～ 1995.5.31
鈴村真理子	1995.1.1 ～ 1995.5.31
青木大輔	1995.1.1 ～ 1996.3.31
政木幸恵	1995.1.1 ～ 1996.3.31
近藤康浩	1995.1.1 ～ 1997.3.31
田中賢一	1995.1.1 ～ 1997.3.31
大和田祥子	1995.1.1 ～ 1998.3.31
平本紀美男	1995.1.1 ～ 2002.3.31
	2002.4.1 ～ 2011.3.31［再・非］
佐藤恵美子	1995.6.1 ～ 1998.3.31
岡田修一	1995.6.1 ～ 2003.3.31
菊地原忠明	1996.4.1 ～ 1999.5.31
大野治良	1997.4.1 ～ 2000.3.31
辻　章雄	1997.4.1 ～ 2000.3.31
遠藤厚子	1998.4.1 ～ 2001.3.31
山口裕也	1998.4.1 ～ 2001.3.31
伊藤　信	1998.4.1 ～ 2004.3.31
守武治比古	1999.4.1 ～ 2001.3.31
古谷　洋	1999.6.1 ～ 2002.3.31
白井伸子	2000.4.1 ～ 2004.3.31
落合正嗣	2000.4.1 ～ 2005.3.31
張本達宏	2001.4.1 ～ 2003.5.31
堀　マリ子	2001.4.1 ～ 2005.3.31
内堀隆樹	2002.4.1 ～ 2005.3.31
持田一義	2004.4.1 ～ 2007.3.31
大浦富雄	2004.4.1 ～ 2008.3.31
松岡明美	2005.4.1 ～ 2008.3.31
三好晴夫	2005.4.1 ～ 2009.3.31
橋本　浩	2006.4.1 ～ 2008.3.31
齋田房子	2006.4.1 ～ 2010.3.31
山本輝美	2005.4.1 ～ 2006.3.31
飯田　恵	2007.4.1 ～ 2008.3.31［非］
北村智子	2007.4.1 ～ 2010.3.31［非］
吉村美知子	2007.4.1 ～ 2010.3.31［非］
石井敏夫	2008.4.1 ～ 2012.3.31［再］
加後智佳子	2008.4.1 ～ 2012.3.31
布施こづえ	2008.4.1 ～ 2013.3.31
諏訪修平	2009.4.1 ～ 2012.3.31
海老原成介	2009.4.1 ～ 2013.3.31
樋渡　功	2009.4.1 ～ 2015.5.31
宮川明代	2010.4.1 ～ 2012.3.31［再］
品矢はる美	2010.4.1 ～ 2013.3.31［非］
大塚清志	2011.4.1 ～［非］
奥田春菜	2012.4.1 ～ 2015.3.31
瀬戸　昇	2012.4.1 ～［再・非］
柴田健治	2012.4.1 ～ 2017.4［再・非］
丸山百合子	2013.4.1 ～ 2016.3.31［非］
細山富幸	2013.4.1 ～ 2017.3.31
中山聖枝	2013.4.1 ～
生澤恵子	2014.12 ～ 2016.4［臨］
村野井 聡	2015.4.1 ～
佐藤好枝	2015.6.1 ～
阿部雅明	2017.4.1 ～
田中和夫	2017.5 ～ 2017.10［再］
柴田健治	2017.11 ～［非］
技術担当部長	
鈴木幸雄	1995.1.1 ～ 1995.5.31
風間春夫	1995.6.1 ～ 1998.3.31
企画情報部	
企画情報部長	
岡本恭一	1995.4.1 ～ 1996.3.31
河野照之	1996.4.1 ～ 1999.3.31
河合　宏	1999.4.1 ～ 1999.5.31
高嶋和夫	2000.4.1 ～ 2001.3.31
戸矢敏夫	2001.4.1 ～ 2003.5.31
内田和孝	2003.6.1 ～ 2005.3.31
白畑裕史	2005.4.1 ～ 2007.5.31
奥山　久	2007.6.1 ～ 2010.3.31
石井真吾	2010.4.1 ～ 2012.3.31
日比野典明	2012.4.1 ～ 2014.3.31

柏木弘子　2014.4.1 ～ 2015.5.31
天野　勇　2015.6.1 ～
※ 2017.4.1 ～ 学芸部長兼務

企画普及課
企画普及課長
斉藤彦司　1995.4.1 ～ 2000.3.31
鈴木良明　2000.4.1 ～ 2003.3.31
長田　平　2003.4.1 ～ 2008.3.31
鳥居和郎　2008.4.1 ～ 2012.3.31
古宮雅明　2012.4.1 ～ 2015.3.31
柏木弘子　2015.4.1 ～ 2015.5.31
永井　晋　2015.6.1 ～

情報資料課長
岡本恭一　1995.1.1 ～ 1995.5.31
相馬孝昭　1995.6.1 ～ 2001.3.31
高橋　宏　2001.4.1 ～ 2003.5.31
宮下　智　2003.6.1 ～ 2007.3.31
山森正實　2007.4.1 ～ 2011.5.31
田中　徹　2011.6.1 ～ 2012.3.31
木佐貫健二　2012.4.1 ～ 2015.5.31
中村喜一　2015.6.1 ～ 2017.3.31
宇賀田　信　2017.4.1 ～

（企画情報部員）
安藤公美子　1995.1.1 ～ 1995.5.31
坂本貴之　1995.1.1 ～ 1997.3.31
山地　純　1995.1.1 ～ 2000.3.31
宗像盛久　1995.1.1 ～ 2001.3.31
岩沢美子　1995.6.1 ～ 1999.5.31
田中孝子　1995.1.1 ～ 2005.3.31
　2005.4.1 ～ 2008.3.31［再］
井上久美子　1995.1.1 ～ 2008.3.31
　2008.4.1 ～ 2013.3.31［再・非］
樋口陽子　1996.4.1 ～ 1999.5.31
坪田浩一　1997.4.1 ～ 2003.3.31
神谷まさ子　1999.6.1 ～ 2001.3.31
井田文枝　1999.6.1 ～ 2002.3.31
臼井和子　2001.4.1 ～ 2003.3.31
中野雅之　2001.4.1 ～ 2012.3.31
池成隆夫　2002.4.1 ～ 2003.3.31［再］
北村幹雄　2002.4.1 ～ 2003.3.31［再］
白木靖博　2002.4.1 ～ 2003.3.31［再］
野上武昭　2002.4.1 ～ 2003.3.31［再］
原瀬隆敏　2002.4.1 ～ 2003.3.31［再］
塩見ゆう子　2002.4.1 ～ 2005.3.31
大中臣二郎　2003.4.1 ～ 2004.3.31［再・非］
長谷川光児　2003.4.1 ～ 2008.3.31［再・非］
飯田弘美　2003.4.1 ～ 2005.3.31
落合　令　2003.4.1 ～ 2006.3.31
野島愛子　2003.4.1 ～［非］
檜皮千穂　2003.4.1 ～ 2011.3.31［非］
豊田倫子　2004.4.1 ～ 2006.3.31［非］
木曽幸博　2004.4.1 ～ 2006.3.31［再］
渡辺征雄　2004.4.1 ～ 2006.3.31［再］
三瓶裕子　2004.9.1 ～ 2011.3.31［非］
阿部侃壽　2005.4.1 ～ 2007.3.31［再］
土屋美恵子　2005.4.1 ～ 2008.3.31
中川麻希子　2005.4.1 ～ 2009.3.31
林　みさき　2006.8.1 ～ 2009.3.31［臨・非］
人見栄一　2006.4.1 ～ 2009.3.31
大矢礼子　2007.4.1 ～ 2008.3.31［非］
佐伯良徳　2007.4.1 ～ 2008.3.31［非］
田巻秀夫　2007.4.1 ～ 2008.3.31［非］
大矢次實　2007.4.1 ～ 2009.3.31［非］
田鎖　進　2007.4.1 ～ 2009.3.31［非］
土倉昌夫　2007.4.1 ～ 2009.3.31［非］
鈴木由佳　2007.4.1 ～ 2013.3.31［非］
青木裕子　2008.4.1 ～ 2009.3.31［非］
石井雅代子　2008.4.1 ～ 2011.3.31［非］
川口淳子　2008.4.1 ～ 2011.3.31［非］
臼井和子　2008.4.1 ～ 2012.3.31［再］
高橋秀和　2008.4.1 ～ 2012.3.31［非］
津軽谷静子　2008.4.1 ～ 2012.3.31
井口令菜　2009.4.1 ～ 2010.3.31［非］
鎌田麻希　2009.4.1 ～ 2010.3.31［非］
栗原一也　2009.4.1 ～ 2010.3.31
吉田泰治　2009.4.1 ～ 2011.3.31［非］
木村卓司　2009.4.1 ～ 2012.3.31［再］
長嶋敏雄　2009.4.1 ～ 2013.3.31［再］
秋山孝之　2009.4.1 ～ 2014.3.31
片柳圭輔　2010.4.1 ～ 2011.3.31［非］
高木義友　2010.4.1 ～ 2011.3.31［再］
谷口美穂　2010.4.1 ～ 2013.3.31
佐藤裕子　2011.4.1 ～ 2012.3.31［非］
三澤優一　2011.4.1 ～ 2012.3.31［非］
草間敏保　2011.4.1 ～ 2014.3.31［非］
斉藤由樹　2011.4.1 ～ 2015.3.31［非］
鈴木敏子　2011.4.1 ～ 2016.3.31［非］
浅井真里子　2011.4.1 ～ 2017.3.31［非］
岩田正明　2011.4.1 ～ 2016.3.31［再］
藤牧　健　2011.6.1 ～ 2014.3.31
泉山花江　2011.12.1 ～［非］
柳生真弓　2012.4.1 ～ 2015.3.31［非］
山中　潤　2012.4.1 ～ 2015.3.31［再］
篠崎淑子　2012.4.1 ～ 2017.3.31
岸山浩之　2012.4.1 ～［非］
田辺可奈　2012.4.1 ～［非］
檜皮千穂　2012.4.1 ～［非］
内山美代子　2013.4.1 ～ 2015.3.31［非］
伊藤瑞湖　2013.4.1 ～ 2016.3.31
余合和歌子　2013.4.1 ～［再］
山口真喜子　2014.4.1 ～ 2017.3.31
有村泰治　2014.4.1 ～［再］
伊藤友久　2014.4.1 ～
神津由紀子　2015.4.1 ～ 2016.3.31［非］
下田知美　2015.4.1 ～ 2016.3.31［非］
豊田倫子　2015.4.1 ～ 2016.3.31［非］
三瓶裕子　2015.4.1 ～ 2016.3.31［非］
板倉桂子　2016.4.1 ～ 2017.3.31［非］
高田泰子　2016.4.1 ～ 2017.3.31
黒田博明　2016.4.1 ～［再］
鈴木隆雄　2016.4.1 ～［非］
濵本明海　2015.4.1 ～［非］
山梨いずみ　2016.4.1 ～［非］
大島理加　2017.4.1 ～
加茂たがね　2017.4.1 ～［非］
豊田倫子　2017.4.1 ～［非］
石尾久美子　2017.4.1 ～ 2017.6
山下樹子　2017.7 ～

学芸部
学芸部長
八幡義信　1995.1.1 ～ 2000.3.31
川口徳治朗　2000.4.1 ～ 2008.3.31
薄井和男　2008.4.1 ～ 2011.5.31
寺嵜弘康　2011.6.1 ～ 2017.3.31
天野　勇　2017.4.1 ～
※企画情報部長兼務

（学芸部員）
國　雄行　1995.1.1 ～ 1999.3.31
斎藤彦司　1995.1.1 ～ 2000.3.31
塩澤寛樹　1995.1.1 ～ 2000.3.31
八幡義信　1995.1.1 ～ 2000.3.31
横田洋一　1995.1.1 ～ 2002.3.31
鈴木良明　1995.1.1 ～ 2003.3.31
橋本健一郎　1995.1.1 ～ 2003.3.31
相澤正彦　1995.1.1 ～ 2004.3.31
川口徳治朗　1995.1.1 ～ 2008.3.31
國平健三　1995.1.1 ～ 2007.3.31
　2007.4.1 ～ 2010.3.1［再］
長田　平　1995.1.1 ～ 2008.3.31
　2008.4.1 ～ 2012.3.31［再］
鈴木通大　1995.1.1 ～ 2008.3.31
　2008.4.1 ～ 2012.3.31［再］
寺嵜弘康　1995.1.1 ～ 2017.3.31
※ 1995.5 ～ 1999.4 地球市民かながわプラザ併任
鳥居和郎　1995.1.1 ～ 2012.3.31
　2012.4.1 ～ 2017.3.31［再］
薄井和男　1995.1.1 ～ 2013.3.31
　2013.4.1 ～［非］
※ 2011.6.1 ～ 館長
嶋村元宏　1995.1.1 ～
柏木操男　1999.4.1 ～ 2001.3.31
古川元也　2000.4.1 ～ 2017.3.31
桑山童奈　2000.4.1 ～
佐々木登美子　2001.4.1 ～ 2009.3.31
丹治雄一　2001.4.1 ～
古宮雅明　2003.4.1 ～ 2015.3.31
　2015.4.1 ～［再］
梅沢　恵　2005.4.1 ～ 2013.3.31
角田拓朗　2006.4.1 ～
安藤孝雄　2007.6.1 ～ 2010.3.31［再］
浅井（祝園）麻起子
　2007.4.1 ～ 2011.3.31［非］
吉澤智恵子　2007.4.1 ～［非］
鈴木峰夫　2010.4.1 ～ 2013.3.31［再］
小井川　理　2010.4.1 ～
千葉　毅　2010.4.1 ～
※ 2011.4.1 ～ 2013.3.31 文化遺産課兼務
近野正幸　2011.4.1 ～ 2013.3.31
※文化遺産課兼務
中村茉貴　2011.4.1 ～ 2017.3.31［非］
岡田真帆　2012.4.1 ～ 2013.12［非］
鈴木尚遠　2012.4.1 ～ 2017.3.31［再］
新井裕美　2012.4.1 ～
武田周一郎　2012.4.1 ～ 2017.3.31［非］
　2017.4.1 ～
小堀信夫　2013.4.1 ～［再］
永井　晋　2013.4.1 ～
根本佐智子　2013.4.1 ～［非］
三浦麻緒　2014.4.1 ～［非］
米沢　玲　2015.4.1 ～ 2015.8［非］
兼松藍子　2015.9 ～ 2015.12［非］
神野祐太　2015.4.1 ～
永島武晴　2016.1 ～ 2016.3.31［非］
小澤葉奈　2016.4.1 ～ 2017.1［非］
橋本遼太　2016.4.1 ～
菅沢そわか　2017.4.1 ～ 2017.10［非］
新井　実　2017.4.1 ～［再］
渡邊浩貴　2017.4.1 ～［臨］
江原　香　2017.11.1 ～［非］

＊1号から11号までの名称は『神奈川県立博物館研究報告　考古・歴史・美術・民俗』

1号 1968年3月

神沢勇一　相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について

2号 1969年3月

神沢勇一　吉井貝塚出土の打痕を有する角器の一群について

神沢勇一・川口徳治朗　梶山貝塚出土の貝刃について

和田正洲　摘み田と田植

加賀ひろ子　漁村における麻糸撚りの技術

斉藤彦司　朝倉能登守夫人墓石造宝篋印塔の造立年代について

清水真澄　関東の院派仏師について

3号 1970年3月

神沢勇一　貝庖丁に関する二三の考察

大戸吉古　万延元年における横浜居留地に関する一考察

横田洋一　チヤールス・ワーグマンについての一考察

八幡義信　鎌倉幕政における安達盛長の史的評価

斎藤彦司　葉山町の石川家墓地にある江戸時代の宝篋印塔について

4号 1971年3月

神沢勇一・川口徳治朗　東京湾沿岸地域出土の貝刃について

大戸吉古　横浜開港のひとつの前提 ―弘化3年の歴史的意義について―

赤星直忠　ほしいもの

5号 1972年3月

神沢勇一・川口徳治朗　間口洞窟遺跡出土の貝刃 ―弥生時代における貝刃の存在例について―

八幡義信　鶴岡八幡宮相撲職関連文書について ―散逸した古文書の出現―

6号 1974年3月

斎藤彦司　神奈川県下の石造宝塔について

7号 1977年3月

阿部正道　神奈川県内の鎌倉街道概説 ―県内「京都鎌倉往還」を中心に―

8号 1979年3月

中島亮一　荘厳房行勇の出自と鎌倉来住をめぐる諸問題

9号 1981年3月

清水眞澄　建長寺木造大覚禅師像と「玉眼」の問題

神澤勇一　貝庖丁の再検討 ―神奈川県三浦市間口洞窟遺跡出土例を中心に―

10号 1982年3月

阿部正道　相模国三浦氏と周防国 ―三浦義澄と平子重経―

鈴木通大　神社合祀後における〈分祀〉について ―神奈川県下の民俗事例をもとに―

斉藤彦司　関東形式と箱根山の石塔類について

11号 1983年3月

神澤勇一　日本における骨卜、甲卜に関する二三の考察 ―先史古代の卜骨・卜甲と近世以降の諸例との比較検討を中心に―

鈴木通大　日本民俗学と民具研究の軌跡 ―民具研究をめぐる柳田國男と渋澤敬三を中心に―

12号 1985年3月

鳥居和郎　相模国における真宗教団の展開 ―「寺院の造立」を視点として―　附・大谷大学所蔵『申物帳』

鈴木良明　近世御免勧化と寺社の格合 ―御免勧化に対する寺社側の意識―

橋本健一郎　双六に見る旅案内 ―北斎画『鎌倉、江ノ島、大山、新板往来雙六』を中心として―

横田洋一　中国におけるチャールズ・ワーグマン

岩壁義光　明治一一年巴里万国博覧会と日本の参同

鈴木通大　神奈川県下の畑作儀礼について ―事例報告を中心に―

13号 1987年3月

岩壁義光　日本人女性の対清国人婚姻形態と子女就籍問題について ―日清戦中戦後を中心に―

鳥居和郎　臨済宗円覚寺派正安寺に伝来する「報恩講」について

加藤隆志　畑作と「ツカ」―相模原台地の事例を中心に―

相澤正彦　飯田家所蔵の菊地容斎書画類

横田洋一　三代広重と文明開化の錦絵（一）―附、三代広重下絵画稿類集―

14号 1988年3月

薄井和男　津久井地方の仏像彫刻

塩澤寛樹　厚木市・延命寺菩薩立像二軀について

相澤正彦　坂東報恩寺本親鸞聖人伝絵の現状と問題点

［史料紹介］

岩壁義光　「在日米国総領事報告 ―日清戦時下の居留清国人―」

14号（別冊）

平本家文書目録

15号 1989年3月

納富常天　五山版『地蔵菩薩本願経』について

鈴木通大　神奈川県下における稲作儀礼について ―事例報告を中心に―

[史料紹介]

鳥居和郎　北条氏規「掟書」について

岩壁義光　幕末・明治初期の在留清国人取締関係史料について ―外務省記録『条約未済国及清国人取締方参考書』―(外務省外交史料館所蔵)

16号　1990年3月

[史料紹介]

岩壁義光　明治初期における在留清国人籍牌関係史料(一) ―外務省記録『在留清国人民籍牌規則竝ニ実施一件』―

17号　1991年3月

鈴木通大　柳田國男と神奈川の民俗学研究 I　―郷土会の相州内郷村調査を中心に―

[研究ノート]

岩壁義光　阿部家資料「馬蹄鉄進上」について

18号　1992年3月

國平健三　「相模型坏」出現期の意義 ―柏ヶ谷長ヲサ遺跡の出土品を例に挙げて―

塩澤寛樹　川崎市・能満寺聖観音菩薩立像について

鈴木通大　神奈川県下にみられる盆の砂盛り習俗について

[研究ノート]

寺崎弘康　天皇機関説排撃運動の地域的展開(一) ―神奈川県の国家主義団体の動向を中心に―

[史料紹介]

國　雄行　阿部正弘旧蔵本『英国侵犯事略並和解』について

19号　1993年3月

塩澤寛樹　南足柄市・保福寺薬師如来坐像について ―東国十一世紀彫刻の一例として―

鳥居和郎　後北条氏領国下における参詣活動について ―相・甲間の導者の往来を視点として―

寺崎弘康　地租改正事務局の一考察 ―七等出仕片山重範の活動を通して―

横田洋一　三代広重と文明開化の浮世絵(二)

20号　1994年3月

塩澤寛樹　千葉・蓮蔵院聖観音立像について

鳥居和郎　北条氏康書状における特殊な封式について ―横ノ内折と糊付の関連をめぐって―

嶋村元宏　幕末通商外交政策の転換

21号　1995年3月

鈴木通大　オビシャ行事をめぐる諸問題 ―関東地方における事例を中心に―

[史料紹介]

嶋村元宏　阿部家旧蔵「別段風説書」について ―ペリー来航前夜の世界情勢―

寺崎弘康　米国の博物館と現代資料

22号　1996年3月

塩澤寛樹　川崎市・影向寺二天立像について ―その制作年代を中心として―

鳥居和郎　後北条氏による医師の招来と近衛家について ―新出の北条氏康宛の近衛稙家書状から―

横田洋一　十九世紀の海外情報と異国人のイメージ ―童絵解萬國噺を中心にして―

[研究ノート]

國　雄行　1910年 日英博覧会について

23号　1997年3月

塩澤寛樹　小田原市・宝金剛寺銅造大日如来坐像について

鳥居和郎　戦国期、東国における京仏師の活動について

鈴木通大　神社整理後の「神社復祀」について

[研究ノート]

國平健三　相模国府研究の現状 ―発掘調査成果による大住府についての検討(一) ―

24号　1998年3月

相澤正彦　初期狩野派の北野天神縁起絵巻(上)

塩澤寛樹　横浜・真福寺木造千手観音立像について

25号　1999年3月

塩澤寛樹　神奈川・證菩提寺阿弥陀三尊像再考

横田洋一　写真的視覚の交錯と近代日本絵画の諸相

26号　2000年3月

[論文]

相澤正彦　狩野元信の鞍馬蓋寺縁起絵巻について ―新出の毛利家模本に関連して―

[研究ノート]

横田洋一　明治の石版画より　笑う子供たち

鈴木通大　葬送儀礼の持続と変化について ―大和市深見地域の事例を中心に―

27号　2001年

鳥居和郎　戦国大名北条氏と本願寺 ―「禁教」関係史料の再検討とその背景―

古川元也　鎌倉彫と鎌倉物 ―三条西実隆の意識から―

相澤正彦　初期狩野派の北野天神縁起絵巻(下)

28号　2002年3月

[論文]

古川元也　京都妙覚寺墓地の無縁石造物考 ―中近世移行期の葬送と石塔造立―

鳥居和郎　後北条氏文書に見られる二つ折りの懸紙について

[研究ノート]

寺嵜弘康　関東大震災と「社寺文化財」の復旧 ―神奈川県域を中心に―

29 号　2003 年 3 月

［論文］

古川元也　日輪をあらわす長烏帽子形兜について

［史料紹介］

嶋村元宏　川村清兵衛「房総相模御備場取調書」について

［資料紹介］

桑山童奈　「東海道名所風景」における現・神奈川県域の表現

30 号　2004 年 3 月

［論文］

國平健三　相模国分寺の研究（上）

古川元也　山北町指定重要文化財「箱根権現縁起絵巻」について

［資料紹介］

嶋村元宏　ペリー来航絵巻について（一）

31 号　2005 年

［論文］

國平健三　相模国分寺の研究（中）

［研究ノート］

桑山童奈　『役者見立東海道』研究

古宮雅明　朝鮮通信使の通行と地域の負担についての覚え書き ―小田原における饗応接待の食材（鶏と玉子）の調達について―

32 号　2006 年 3 月

［論文］

鳥居和郎　桜井武兵衛覚書について　―内容とその成立背景の検討―

［研究ノート］

古川元也　大川戸熊野神社文書について

［資料紹介］

梅沢　恵　總持寺所蔵の中世絵画 ―春日社寺曼荼羅と役行者像―

嶋村元宏　ペリー来航絵巻について（二）

33 号　2007 年 3 月

［研究ノート］

佐々木登美子　絵画資料に見る笈の形式

鳥居和郎　越前における後北条氏遺臣桜井氏について

古川元也　京都本法寺墓地の無縁石造物について

［資料紹介］

寺嵜弘康　神奈川県立歴史博物館所蔵の旧横浜正金銀行調査部図書について ―旧横浜正金銀行資料コレクションの紹介―　その 1

34 号　2008 年 3 月

［論文］

古川元也　京都本法寺内所在の本阿弥家墓石について

鳥居和郎　後北条氏関係文書の料紙と折式について ―形と折りに込められた意識―

鈴木通大　「三匹獅子舞」研究の現状と課題

［資料紹介］

寺嵜弘康　横浜正金銀行券について（1）―旧横浜正金銀行資料コレクションの紹介　その 2 ―

35 号　2009 年 3 月

［論文］

梅沢　恵　神奈川県立歴史博物館所蔵十六羅漢図修理報告

古川元也　「仏日庵公物目録」成立に関する一考察

古宮雅明　富士山宝永噴火被災地の川普請と幕府の対応

丹治雄一　旧横浜正金銀行本店本館における創建時の金庫扉・スチールサッシ・スチールシャッターの残存状況について

36 号　2010 年 3 月

［新出資料紹介］

薄井和男　足柄神社の木造男神坐像について

［資料紹介］

桑山童奈　木版画摺師　正文堂の仕事

［作品紹介］

角田拓朗　神奈川県立歴史博物館所蔵近代版画コレクション

［資料紹介］

寺嵜弘康　横浜正金銀行券について（II）―旧横浜正金銀行史料コレクションの紹介　その 3 ―

37 号　2011 年 3 月

［論文］

寺嵜弘康　横浜正金銀行創立当初の職制と行員について

［研究ノート　作品・資料紹介］

角田拓朗　橘忠助氏旧蔵美術資料群について

38 号　2012 年 3 月

［論文］

古川元也　円覚寺智真「夢記」と「仏日庵公物目録」

角田拓朗　「チャールズ・ワーグマン」という画家の位相 ―神奈川県立歴史博物館所蔵水彩画群と『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』の比較検証を中心として―

［研究ノート］

嶋村元宏　アメリカ人旅行家ウィリアムズ女史が観た明治の日本 ―当館所蔵『ウィリアムズ女史日本旅行記念蒐集資料』から―

［資料紹介］

千葉　毅　神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手

近野正幸　横須賀市蛭畑（ひるばたけ）遺跡出土の人面付土器について

梅沢　恵　宝生寺所蔵の二種の羅漢図について

39 号　2013 年 3 月

［論文］

古宮雅明　富士宝永噴火を描いた絵図についての考察

［研究ノート］

武田周一郎　橘忠助氏旧蔵美術資料群と明治期府県管内図

[資料紹介]

丹治雄一　横浜正金銀行本店の関東大震災復旧工事資料について ―神奈川県立歴史博物館所蔵「横浜正金銀行本店等震災復旧工事関係資料」のうち「決定見積書」の紹介―

40 号　2013 年 10 月

[論文]

角田拓朗 《東海道懐古帖》の史的位置 ―リアリズムをめぐるあるひとつの断層―

[研究ノート]

古川元也　外法成就の志一上人について

鳥居和郎　戦国大名北条氏と手づくねのかわらけについて

[資料紹介]

梅沢　恵　冷泉為恭筆　釈迦三尊像模本

寺嵜弘康　横浜正金銀行員の肖像写真 ―川島忠之助資料から―

[目録]

『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』総目次（1 ～ 40 号）

調査報告・資料集成・総合研究報告等総目録

科学研究費補助金による調査研究事業

41 号　2014 年 10 月

[論文]

嶋村元宏　ペリー来航に関わる情報収集活動とその伝播について ―画像資料を中心に―

[研究ノート]

鳥居和郎・根本佐智子　後北条氏遺臣桜井氏の越前関係文書について

武田周一郎　明治期府県管内図の作成主体について ―神奈川県を事例として―

丹治雄一　神奈川県庁所蔵四代目神奈川県庁舎実施設計図とその内容について

[資料紹介]

根本佐智子・古宮雅明　松平造酒助江戸在勤日記 ―元治元年八月十八日～同九月朔日―

桑山童奈　石崎源六版『三五景一覧』の絵師たち ―「人名録」を手がかりに―

42 号　2015 年 11 月

[研究ノート]

古川元也　新安沖沈没船の墨書瓷器について

古宮雅明　『従江戸長崎迄海陸之絵図』小考

寺嵜弘康　横浜正金銀行の海外展開 ―ニューヨーク出張所の開設を中心に―

[資料紹介]

千葉　毅　神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料 ―林國治氏、小林小三郎氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料―

永井　晋　『鎌倉証菩提寺年中行事』にみえる天台寺門流の僧侶

根本佐智子・古宮雅明　松平造酒助江戸在勤日記 ―元治元年九月二日～九月十一日―

嶋村元宏　信濃国松代藩の横浜警衛に関する史料について ―国文学研究資料館所蔵「信濃国松代真田家文書」を中心に―

43 号　2016 年 12 月

[研究ノート]

鳥居和郎　北条氏綱像の改変について ―北条早雲像、氏康像、時長像などとの比較から―

丹治雄一　明治期の箱根山周辺産安山岩の石材利用と土屋大次郎の事業活動

[資料紹介]

千葉　毅　神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代撚糸文期土器群 ―林國治氏旧蔵の横浜市十王堂免遺跡採集資料―

吉永亜紀子・千葉　毅　神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代前期貝塚出土動物遺体 ―横浜市上台遺跡住居址内貝塚ブロックサンプルの分析―

高橋　健・千葉　毅　神奈川県立歴史博物館所蔵の骨角器 ―林國治氏、赤星直忠氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料―

建石　徹・降幡順子・千葉　毅　神奈川県立歴史博物館所蔵横浜市称名寺貝塚採集土器の胎土分析および赤色顔料分析

神野祐太　神奈川県立歴史博物館所蔵の銅造観音菩薩立像について ―付・神奈川県所在善光寺式阿弥陀及び脇侍像一覧―

鳥居和郎　山北中学校遺跡出土の武蔵型板碑について

小井川 理　個人所蔵　永徳四年銘鶴岡八幡宮金銅納経札について

根本佐智子・古宮雅明　松平造酒助江戸在勤日記 ―元治元年九月十一日～十月朔日―

寺嵜弘康・武田周一郎　横浜正金銀行中井芳楠・長三郎関係資料群について

[事業報告]

嶋村元宏　幕末期の日露関係資料について ―「海の学び調査・研究サポート」支援事業報告―

44 号　2018 年 1 月

[論文]

永井晋　中世都市鎌倉における密教の成立と展開

[研究ノート]

桑山童奈　神奈川県立図書館蔵「横浜風景画帖」にみる版元和泉屋市兵衛の横浜進出

根本佐智子　川崎宿復元の試み

小井川理　近代鎌倉彫における古面意匠の採用について ―鎌倉彫後藤家の帳簿類と現存作例から―

新井裕美　神奈川県内の高遠石工の活動 ―江戸時代中期から明治時代末期における石造物の造立状況―

嶋村元宏　博物館資料を活用した歴史体験プログラムについて ―「地域素材の教材化」考―

田辺可奈　常設展示室における来館者動向について ―ボランティアスタッフの視点から―

[資料紹介]

根本佐智子・古宮雅明　松平造酒助江戸在勤日記 ―元治元年十月朔日より十一月十日―

資料目録・調査報告・資料集成・総合研究報告等　目録

※各書の掲載順・表記は、初出に従い、それぞれの発行年月を併記した。

資料目録

神奈川県立博物館人文部門

(1)　民俗資料分類目録　1978 年 3 月
(2)　考古資料目録　1979 年 3 月
(3)　近代絵画資料目録（五姓田義松作品集）　1980 年 3 月
(4)　中世古文書資料目録　1981 年 3 月
(5)　近世・近代版画資料目録　1983 年 3 月
(6)　工芸品資料目録　1984 年 3 月
(7)　近世・近代歴史資料目録　1985 年 3 月
(8)　丹波コレクション版画図録 I
　　—神奈川県内東海道宿駅編—　1986 年 3 月
(9)　中世・近世・近代美術関係資料目録　1987 年 2 月
(10)　民俗資料分類目録（2）　1989 年
(11)　宮川香山作品目録　1989 年 3 月
(12)　中世歴史資料目録　1990 年 3 月
(13)　北条家資料目録　1991 年 3 月
(14)　江藤昭コレクション目録　1992 年 3 月
(15)　チャールズ・ワーグマン作品目録　1993 年 3 月

丹波コレクション目録

第 I 編　1969 年 3 月
第 2 編　1969 年 8 月
第 3 編　1970 年 11 月

調査報告

神奈川県立博物館発掘調査報告書

1 号　梶山遺跡 (1)　1968 年 3 月
2 号　梶山遺跡 (2)　1969 年 3 月
3 号　後谷原北横穴群　1969 年 3 月
4 号　梶山遺跡 (3)　1970 年 3 月
5 号　左藤内遺跡　1971 年 3 月
6 号　間口洞窟遺跡　資料編　1972 年 3 月
7 号　間口洞窟遺跡　本文編　1973 年 3 月
8 号　間口洞窟遺跡 (2)　1974 年 3 月
9 号　間口洞窟遺跡 (3)　1975 年 3 月
10 号　梶山遺跡 (4)・上台遺跡 (予報)　1977 年 3 月
11 号　上台遺跡　1979 年 3 月
12 号　紅取遺跡　1980 年 3 月
13 号　師岡遺跡 (資料編)　1981 年 3 月
14 号　師岡遺跡 (1)（本文編）　1982 年 3 月
15 号　師岡遺跡 (2)　1983 年 3 月
16 号　師岡遺跡 (3)　1986 年 3 月
17 号　小糸遺跡　1988 年 3 月
18 号　大磯丘陵横穴墳墓群 (1)　1989 年 3 月
19 号　大磯丘陵横穴墳墓群 (2)　1992 年 3 月

神奈川県民俗調査報告

1 号　相模川流域の民俗　1968 年 3 月
2 号　串川・中津川流域の民俗　1969 年 3 月
3 号　相模川下流域の民俗　1970 年 3 月
4 号　三浦半島の民俗 (I)　1971 年 3 月
5 号　三浦半島の民俗 (II)　1972 年 3 月
6 号　県央部の民俗 (I) —大和・綾瀬地区—　1973 年 3 月
7 号　県央部の民俗 (II) —伊勢原地区—　1974 年 11 月
8 号　県央部の民俗 (III) —秦野地区—　1975 年 12 月
9 号　県西部の民俗 (I) —湯河原町・真鶴町—　1980 年 3 月
10 号　県西部の民俗 (II) —小田原市・南足柄市—　1982 年 3 月
11 号　県西部の民俗 (III) —小田原市—　1983 年 3 月
12 号　足柄の民俗 (I) —中井町・大井町—　1984 年 3 月
13 号　足柄の民俗 (II) —足柄上郡松田町—　1985 年 3 月
14 号　足柄の民俗 (III) —足柄上郡山北町—　1986 年 3 月
15 号　県北部の民俗 (I) —津久井郡藤野町—　1987 年 3 月
16 号　県北部の民俗 (II) —愛甲郡清川村—　1988 年 3 月
17 号　境川流域の民俗　1989 年 3 月
18 号　農耕習俗と農具—昼間家日記を中心に—　1990 年 11 月
19 号　農耕習俗と農具 II —神奈川の鍬—　1992 年 3 月
20 号　農耕習俗と農具 III —神奈川のクルリ棒・千歯—
　　1999 年 3 月
21 号　分類神奈川県方言辞典 (I)
　　—自然・動物・植物—　2003 年 3 月
22 号　分類神奈川県方言辞典 (II)
　　—身体と健康・服飾・飲食・住居—　2005 年 3 月
23 号　分類神奈川県方言辞典 (III)
　　—社会生活・経済生活・人の一生・儀礼と信仰—
　　2006 年 3 月
24 号　分類神奈川県方言辞典 (IV)
　　—娯楽、行動・性情、時間・空間、その他—
　　2007 年 3 月

総合研究報告

神奈川県立歴史博物館総合研究報告

地域社会と近世文化
研究代表者：鈴木良明　1999 年 3 月

さがみの国と都の文化交流
研究代表者：國平健三　2002 年 3 月

中世東国における文化の移入
研究代表者：相澤正彦・塩澤寛樹　2003 年 3 月

開国と異文化の交流
研究代表者：嶋村元宏　2005 年 3 月

関東地域における民具の流通
研究代表者：長田 平　2006 年 3 月

神奈川県貝塚地名表（神奈川県内貝塚の分布と形成に関する研究）
研究代表者：川口徳治朗　2008 年

『道中記』の研究
研究代表者：桑山童奈・古宮雅明　2011 年 3 月

日本銀行と横浜正金銀行の建築
研究代表者：丹治雄一　2014 年 3 月

鎌倉彫後藤家資料にみる近代鎌倉彫の受注に関する基礎的研究
研究代表者：小井川 理　2017 年 5 月

資料集成

神奈川県考古資料集成

1　弥生式土器　1969 年 3 月
2　縄文式土器　1970 年 3 月
3　土師式土器　1971 年 3 月
4　須恵器　1972 年 3 月
5　弥生式土器（2）　1973 年 3 月

展示案内

神奈川県立博物館展示解説シリーズ

1　植物　1971 年 3 月
2　民俗　1972 年 3 月
3　動物　1971 年 5 月
4　地学　1973 年 3 月
5　歴史 1　1972 年 3 月
6　歴史 2　1972 年 3 月
7　考古　1973 年 3 月

神奈川県立博物館総合案内　1985 年 2 月

神奈川県立歴史博物館展示解説書　1995 年 3 月

神奈川県立歴史博物館総合案内　1996 年 11 月

子ども展示解説　1997 年 3 月

発見の旅にでよう！神奈川県立歴史博物館ポケットガイド　2003 年 3 月

記念誌

神奈川県立博物館 20 年のあゆみ　1987 年 3 月

神奈川県立（歴史）博物館 30 年のあゆみ　1998 年 3 月

その他

神奈川県言語地図　1979 年 3 月

神奈川県民俗分布地図　1984 年 3 月

科学研究費による調査研究事業一覧

※ 1979 年度に申請機関となって以後の、当館職員が研究代表者となった調査研究事業についてのみまとめた。また、当該研究の分担者に当館職員があたっている場合、その氏名を記した。1995 年度再編整備により、人文科学分野を県立歴史博物館、自然科学分野を県立生命の星・地球博物館として分立して後は、歴史博物館を申請機関として採択された事業を掲載した。

1979 年度　一般研究 (D)　課題番号：461025
研究代表者：清水眞澄
いわゆる「京仏師」の総合的調査及び研究 ―特に円派仏師について―

1979 年度　一般研究 (D)　課題番号：461106
研究代表者：岩壁義光
「異国日記」の研究による近世初期の対アジア関係について

1979 年度　一般研究 (D)　課題番号：461129
研究代表者：神沢勇一
弥生時代、古墳時代および奈良時代に属する卜骨・卜甲の研究

1979 年度　一般研究 (D)　課題番号：464262
研究代表者：松島義章
南関東・東海地域における海成沖積層の上限高度からみた地殻変動

1980 年度　一般研究 (C)　課題番号：551017
研究代表者：横田洋一
横浜浮世絵と長崎版画に見られる外国新聞挿絵類の影響について

1980 年度　一般研究 (D)　課題番号：564266
研究代表者：松島義章
大陸沿岸系種の消長からみた縄文海進における内湾の海況変化

1981 年度　一般研究 (C)　課題番号：56510226
研究代表者：松島義章　研究分担者：神沢勇一・川口徳治朗
縄文海進に伴う内湾の環境変遷と貝塚立地

1983 年度　奨励研究 (A)　課題番号：58710183
研究代表者：鳥居和郎
関東地方における鎌倉新仏教の流伝と寺院について

1984 年度　一般研究 (C)　課題番号：59510037
研究代表者：横田洋一　研究分担者：橋本健一郎
幕末日本渡来画家 P・B・W, ハイネの研究

1984 年度　奨励研究 (A)　課題番号：59710216
研究代表者：川口徳治朗
縄文時代貝塚出土の貝製品と構成貝類の研究

1984 年度　一般研究 (C)　課題番号：59450507
研究代表者：松島義章
縄文海進に伴う浅海域の環境変遷と貝塚の立地

1985 年度　一般研究 (C)　課題番号：60512l6
研究代表者：神沢勇一　研究分担者：鈴木良明
卜占遺物（卜骨・卜甲）の分析に基づく弥生時代以降の卜占風習の成立発展の解明

1985 年度　一般研究 (C)　課題番号：60540511
研究代表者：松島義章
日本列島における完新世の浅海性貝類群集の時間的・空間的分布

1985 年度　奨励研究 (A)　課題番号：60710030
研究代表者：相澤正彦
時宗芸術史の研究（特に絵画作品を中心として）

1985 年度　奨励研究 (A)　課題番号：60740468
研究代表者：平田大二
三浦層群三崎層中の火山砕屑物の岩石学的研究

1985 年度　奨励研究 (A)　課題番号：60710216
研究代表者：岩壁義光
明治期における在留清国人の法的地位（婚姻と国籍を中心に）

1986～1988 年度　一般研究 (C)　課題番号：61510208
研究代表者：川口徳治朗
縄文時代貝塚出土の貝製品に関する用途的研究

1986 年度　一般研究 (C)　61510027
研究代表者：橋本健一郎　研究分担者：横田洋一
幕末・明治期浮世絵版画の絵師とその作品の総合的かつ分析的研究

1987 年度　奨励研究 (A)　課題番号：62710025
研究代表者：薄井和男
時宗関係彫刻の研究 ―阿弥陀如来・肖像を中心として―

1987 年度　奨励研究 (A)　課題番号：62740486
研究代表者：平田大二
三浦層群に含まれる酸性凝灰岩層の岩石学的研究

1988～1989 年度　一般研究 (C)　課題番号：63510194
研究代表者：岩壁義光
近代日本の対清政策と居留清国人取扱問題 ―刑事民事訴訟問題を中心に―

1988～1990 年度　一般研究 (C)　課題番号：63540635
研究代表者：松島義章　研究分担者：平田大二
浅海性貝類群集からみた完新世の黒潮の消長

1989～1990 年度　一般研究 (C)　課題番号：01510252
研究代表者：神沢勇一
出土遺物と魚貝類遺存体の科学的対比に基づく弥生時代漁撈形態の地域特性の解明

1990 年度　奨励研究 (A)　課題番号：02710027
研究代表者：塩澤寛樹
東国における平安前期彫刻の研究

1991 年度　一般研究 (C)　課題番号：03640661
研究代表者：松島義章　研究分担者：川口徳治朗・平田大二
貝類からみた完新世日本列島沿岸域の環境変遷

1992 年度　一般研究 (C)　課題番号：04610030
研究代表者：横田洋一　研究分担者：橋本健一郎
司馬江漢と北斎派の洋風版画 …特に「七里ヶ浜図」の成立をめぐって

1992～1994 年度　一般研究 (C)　課題番号：04610178
研究代表者：宗像盛久
研究分担者：田中孝子・奥野花代子・山地 純
博物館を利用した小学生の自主活動プログラムの研究 ―楽しみながら自ら学ぶための活動プログラム作成を目指して―

1993 年度　一般研究 (C)　課題番号：05610343
研究代表者：國平健三
古墳時代終末期の葬制からみた地方豪族層の実態と初期寺院に関わる研究

1993 年度　奨励研究 (A)　課題番号：05710216
研究代表者：國 雄行
近代日本の工業化始動期における欧米農具の導入政策について

1994～1995 年度　一般研究 (C)　課題番号：06610390
研究代表者：國平健三　研究分担者：平田大二
律令制下での手工業生産体制の組織的な研究

1994～1996 年度　一般研究 (C) 萌芽的研究→基盤研究 (C)
課題番号：06801010　研究代表者：相澤正彦
日本中世絵画史における「東国」と「西国」の様式研究

1994～1996 年度　一般研究 (C) →基盤研究 (C)
課題番号：06610332　研究代表者：鈴木良明
近世東国における高野山参詣と文化的影響

1994～1996 年度　一般研究 (C)　課題番号：06680193
研究代表者：平田大二　研究分担者：小出良幸・山下浩之
地球環境を理解するための博物館学習プログラムの開発

1994～1996 年度　一般研究 (C)　課題番号：06804030
研究代表者：小出良幸　研究分担者：山下浩之
硫化鉄メルトへの放射性元素の分配 ―地球の核形成に伴う熱源元素の移動―

1995～1997 年度　一般研究 (C) →基盤研究 (C)
課題番号：07680215
研究代表者：新井一政
研究分担者：奥野花代子・田中徳久・勝山輝男
博物館ボランティア活性化に関する調査研究

1995～1996 年度　一般研究 (C) →基盤研究 (C)
課題番号：07610323　研究代表者：鈴木通大
神社整理後における「神社復祀」に関する民俗学的調査研究

1995～1996 年度　一般研究 (C) →基盤研究 (C)
課題番号：07610361　研究代表者：鳥居和郎
戦国時代における産業および文化の地方移入について ―その移入を支えた人々と在地社会に及ぼした影響―

1995 年度　奨励研究 (A)　課題番号：07710036
研究代表者：塩澤寛樹
東国十一世紀彫刻の基礎的研究

1997～1998 年度　基盤研究 (C)　課題番号：09610357
研究代表者：寺嵜弘康
太平洋戦争期における米軍による日本戦略爆撃の研究

1997～1998 年度　奨励研究 (A)　課題番号：40261193
研究代表者：嶋村元宏
幕末の海外情報と危機意識

1998～2000 年度　基盤研究 (C) (2)　課題番号：10610066
研究代表者：横田洋一
肖像としての明治天皇 ―視覚表現変遷の原点として―

1999～2002 年度　基盤研究 (C) (2)　課題番号：11610066
研究代表者：塩沢寛樹　＊2000 年度より研究機関移動
鎌倉幕府の造像文化に関する基礎的研究

1999～2002 年度　基盤研究 (C)　課題番号：11610365
研究代表者：國 雄行　＊1999 年度より研究機関移動
近代日本と博覧会 ―明治政府の内国勧業博覧会・万国博覧会・共進会政策―

2001 年度　公開促進費　課題番号：135001
研究代表者：相澤正彦
関東水墨画

2001～2002 年度　奨励研究 (A) →若手研究 (B)
課題番号：13710208　研究代表者：古川元也
室町時代後期における非文献資料を利用した地域文化 (信仰) 伝播の基礎的研究

2002～2004 年度　基盤研究 (C)　課題番号：14510086
研究代表者：橋本健一郎 (～平成 14 年度) →嶋村元宏 (平成 15 年度～)　研究分担者：鈴木良明・桑山童奈・丹治雄一
浮世絵版画と「名所」に関する研究 ―東海道を中心に―

2002～2005 年度　基盤研究 (C)　課題番号：14580175
研究代表者：寺嵜弘康
戦前期における文化財保護と保護主体に関する研究

2005～2007 年度　若手研究 (A)　課題番号：17682002
研究代表者：古川元也
非文献資料を利用した中世都市における基盤信仰の研究

2005～2006 年度　基盤研究 (C)　課題番号：17520531
研究代表者：國平健三
蛍光 X 線分析による相模国古代寺院瓦の生産地に関する研究

2006～2008 年度　基盤研究 (C)　課題番号：18520484
研究代表者：嶋村元宏　研究分担者：梅沢 恵・角田拓朗
ペリー来航関係画像資料の史料批判的研究

2006～2007 年度　若手研究 (B)　課題番号：18720039
研究代表者：梅沢 恵
船載仏画を規範とする十六羅漢図の図像受容と展開に関する研究

2007～2010 年度　若手研究 (B)　課題番号：19720037
研究代表者：角田拓朗
近代日本絵画史における鉛筆の意義

2008～2010 年度　基盤研究 (C)　課題番号：80250231
研究代表者：寺嵜弘康　丹治雄一 (分担)
川島忠之助関係資料から見た明治期の横浜正金銀行

2009～2012 年度　若手研究 (B)　課題番号：21720041
研究代表者：梅沢 恵
中世鎌倉文化圏における絵画制作と外来文化受容に関する研究

2011～2015 年度　基盤研究 (B)
研究代表者：永井 晋
金沢文庫古文書及び称名寺聖教紙背文書の復元的考察

2012～2014 年度　基盤研究 (C)
研究代表者：古川元也　研究分担者：小井川 理
中世鎌倉地域における寺院什物帳 (文物台帳) と請来遺品 (唐物) の基礎的研究

2012～2014 年度　若手研究 (B)
研究代表者：角田拓朗
洋画・洋風画を中心とした十九世紀日本絵画史構築に関する基礎研究

2013 年度　公開促進費
研究代表者：古川元也
中世後期日蓮教団の社会史的研究

2013～2015 年度　基盤研究 (C)
研究代表者：桑山童奈
江戸時代の神奈川県域における絵図の出版状況および浮世絵との関係についての研究

2014～2017 年度　基盤研究 (C)
研究代表者：寺嵜弘康
横浜正金銀行ニューヨーク支店に関する研究

2016～2019 年度　基盤研究 (C)
研究代表者：古川元也　＊2017 年度より研究機関移動
中世東国における寺院什物帳（文物台帳）と請来遺物（唐物）の発展的研究

2016～2017 年度　研究活動スタート支援
研究代表者：橋本遼太
鎌倉～南北朝時代におけるやまと絵の様式展開に関する基礎的研究

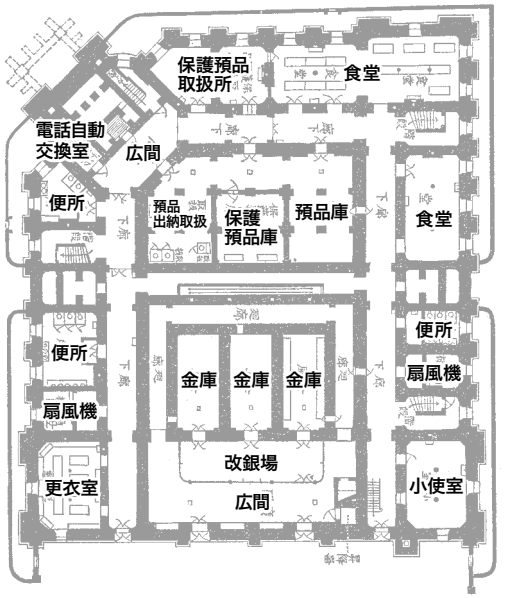
2017～2021 年度 (予定)　基盤研究 (C)
研究代表者：小井川 理
研究分担者：武田周一郎・神野祐太・橋本遼太・渡邊浩貴
原三溪関係資料の基礎的研究 ―コレクション形成の具体相の解明―

2017～2018 年度　研究活動スタート支援
研究代表者：武田周一郎
地図印刷技術者・岩橋章山の思想と台湾での動向に関する基礎的研究

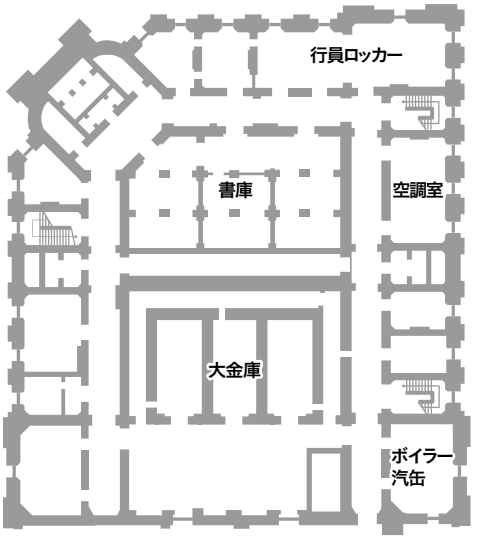
建物利用の変遷

地階

横浜正金銀行竣工時［1904］

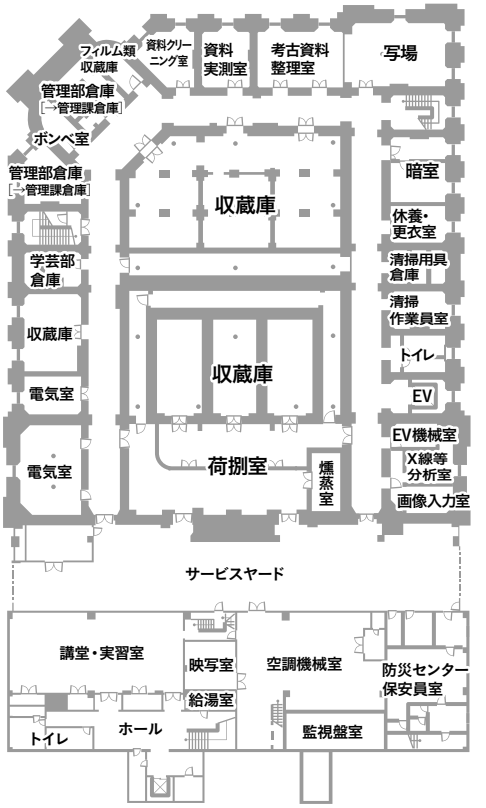


東京銀行・博物館準備事務室時［1964］



県立博物館開館時［1967］

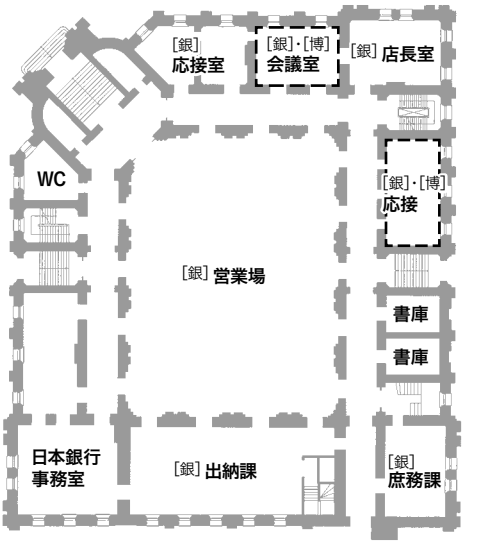
県立歴史博物館開館時［1995］



1階

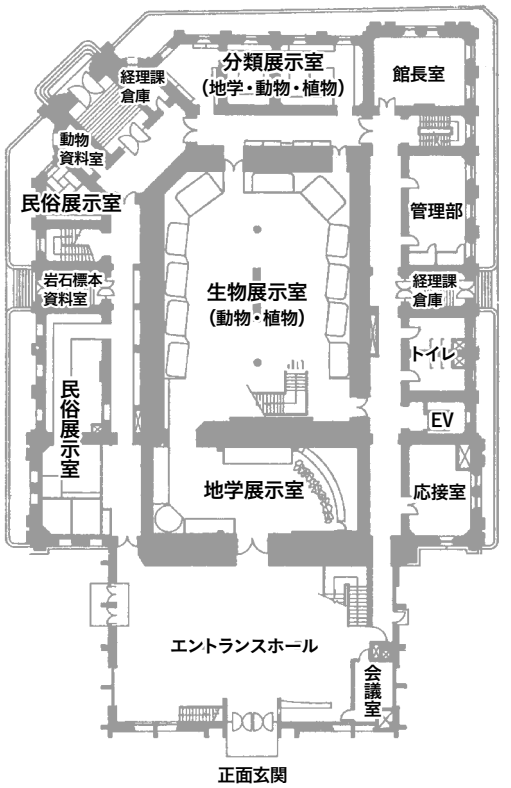
横浜正金銀行竣工時［1904］

東京銀行・博物館準備事務室時［1964］

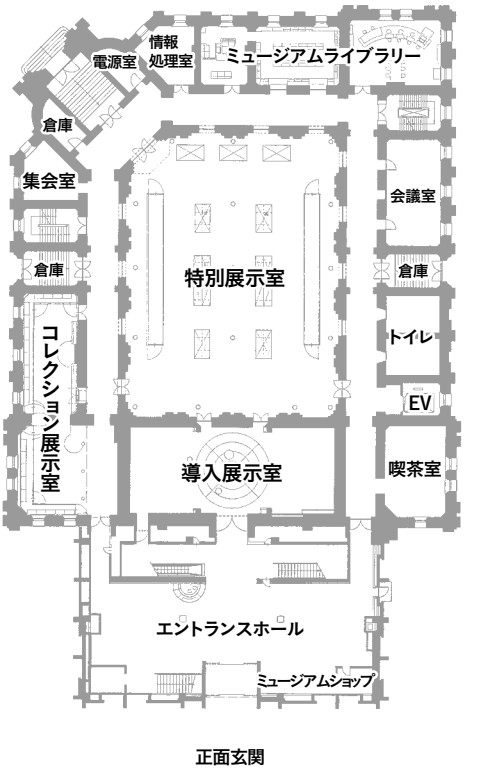


［銀］：東京銀行
［博］：博物館準備室

県立博物館開館時［1967］

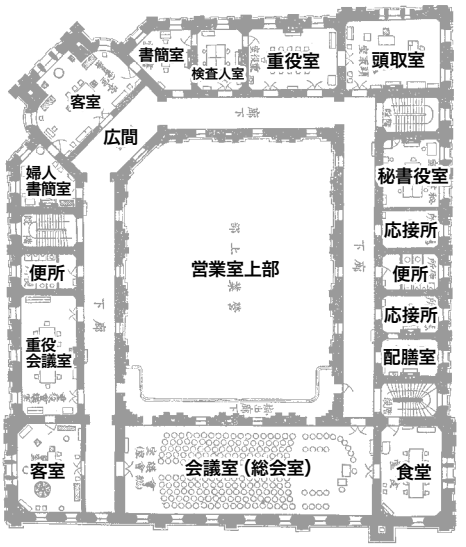


県立歴史博物館開館時［1995］

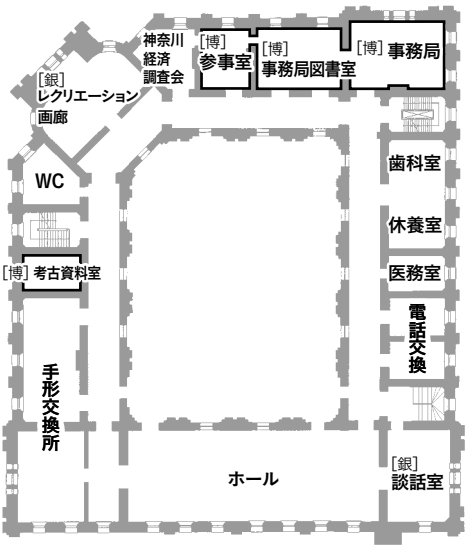


2 階

横浜正金銀行竣工時［1904］

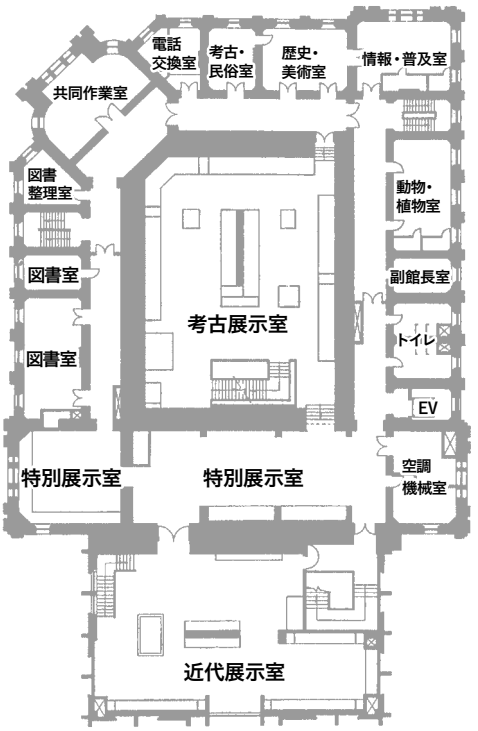


東京銀行・博物館準備事務室時［1964］

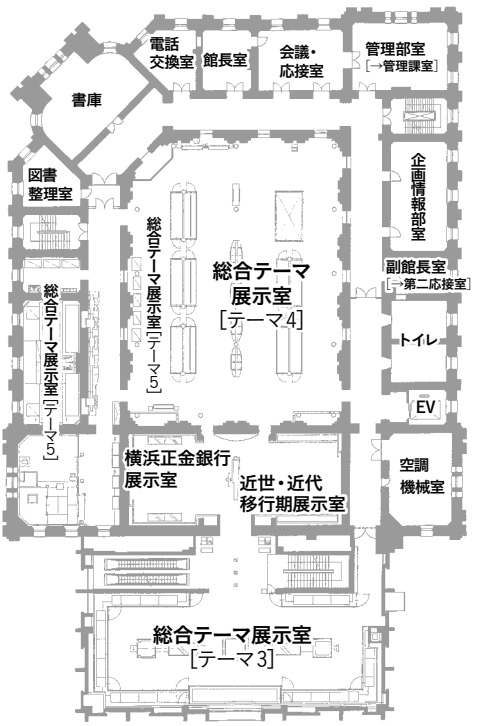


［銀］：東京銀行
［博］：博物館準備室

県立博物館開館時［1967］

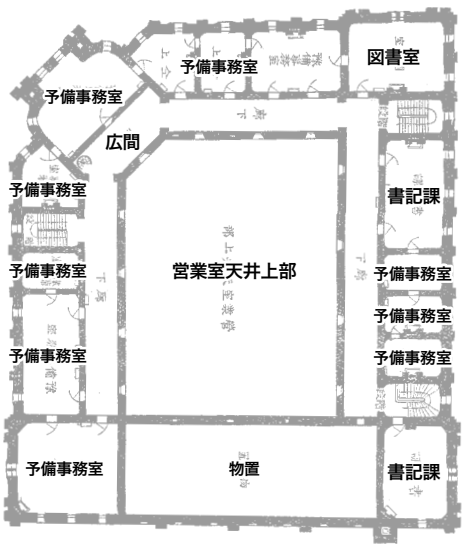


県立歴史博物館開館時［1995］

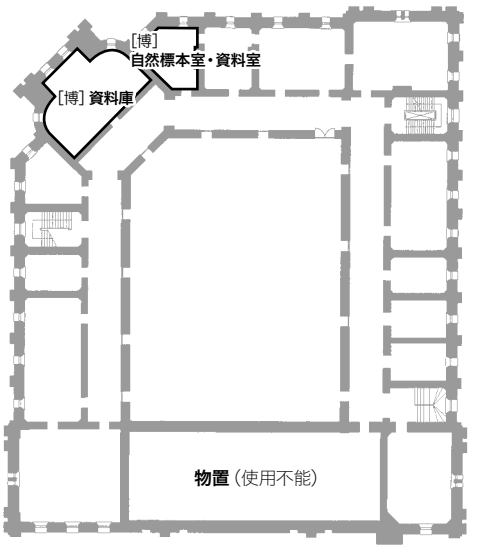


3階

横浜正金銀行竣工時［1904］

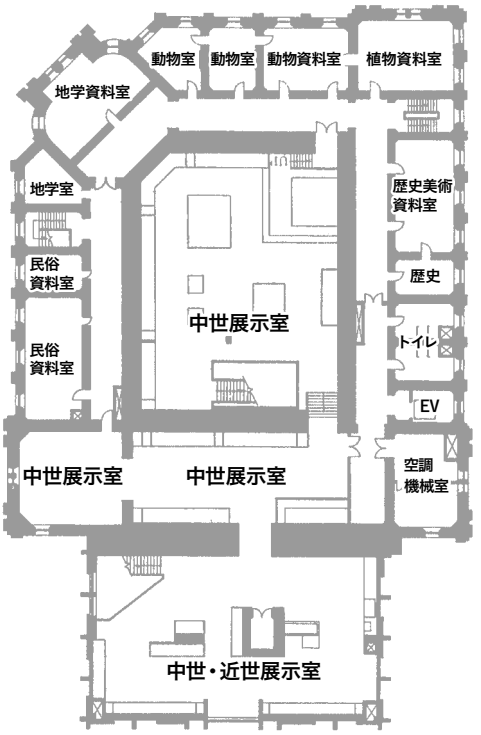


東京銀行・博物館準備事務室時［1964］

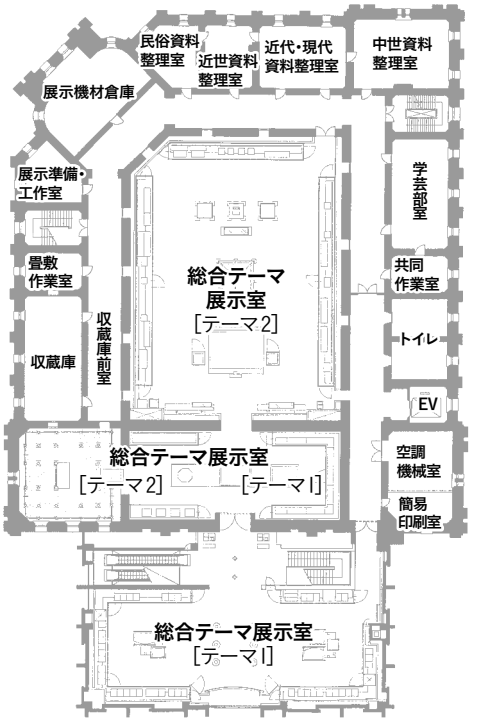


［銀］：東京銀行
［博］：博物館準備室

県立博物館開館時［1967］



県立歴史博物館開館時［1995］



謝辞

本書を刊行するにあたり、次の方々ならびに機関に格別のご協力を賜りました。
厚く御礼申し上げます。（敬称略、順不同）

河津美穂子
永島武晴
中田 英
逸見明代
吉村隆行

正友会
有限会社 大和興業
Trio Practice
馬車道十番館
馬車道商店街協同組合
八王子市郷土資料館
学校法人岩崎学園 横浜デジタルアーツ専門学校

神奈川県博を愛してきてくださった皆さま

神奈川県立博物館・神奈川県立歴史博物館
50 年のあゆみ

編集・発行　神奈川県立歴史博物館
〒 231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通 5-60
tel 045-201-0926　fax 045-201-7364

印刷日　2018 年 3 月 23 日

発行日　2018 年 3 月 31 日

印刷　半七写真印刷工業株式会社

開館 50 周年記念日を前に［2017.3.3］

休館中仮事務所（宇徳ビル 6 階）での最終日に［2018.2.16］

1967
2017